

二人の銀翼

アレクシア少佐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私、アレクシア・デグレチャフは、双子の姉であるターニヤのために。

愛するターニヤと共に、戦線を駆ける。

ターニヤさえ一緒にいるなら。

私は。

私達は。

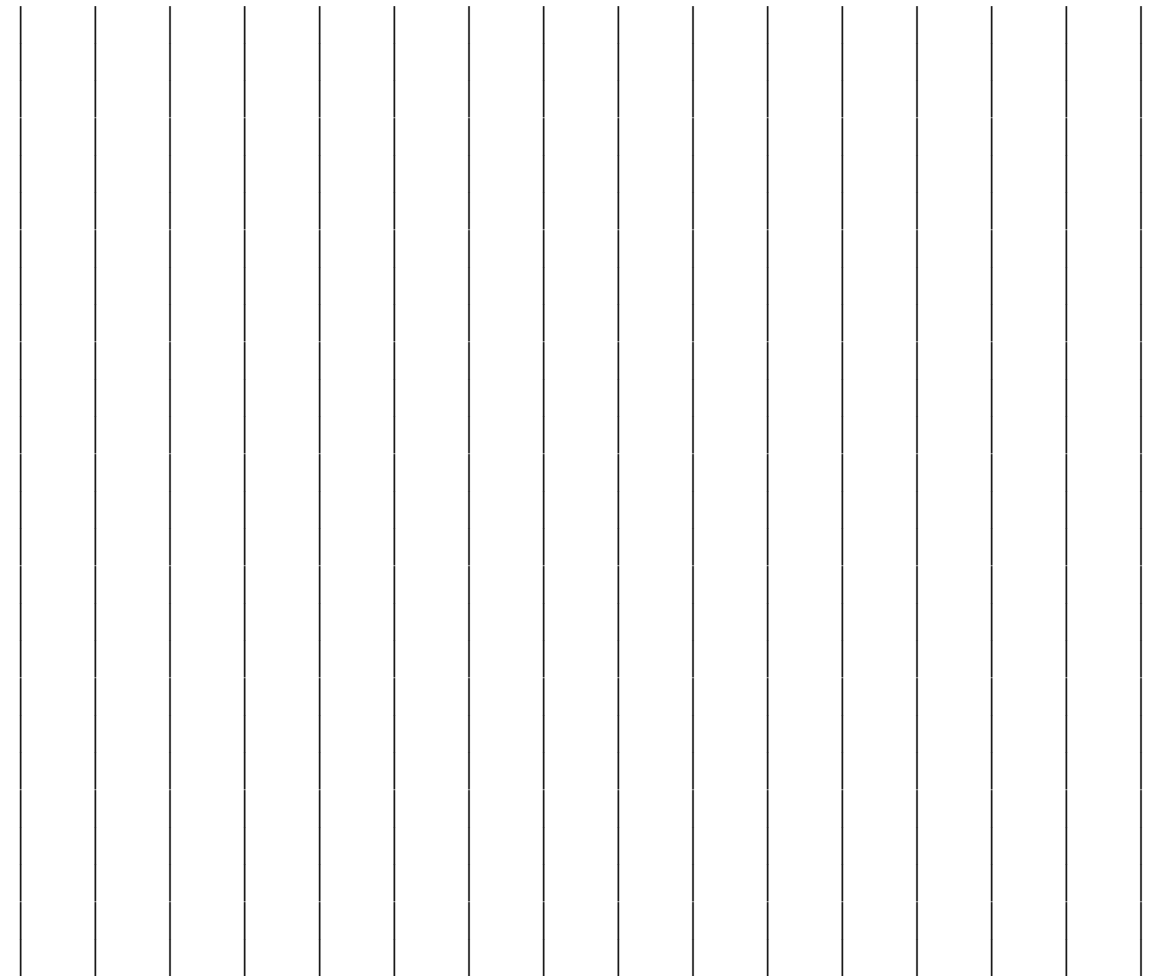
無敵だ。

目次

1	士官学校	1
2	士官学校	10
3	北方管区	14
4	勲章叙勲	19
5	再び最前線へ	26
6	試作演算宝珠テスト	34
7	神の加護	40
8	転属	44
9	ライン戦線	52
10	ラインの悪魔	59
11	驚くべき軍人	66
12	異常な軍人	73
13	帝国陸軍大学	78
14	戦争の行末	84
15	戦局予測	90
16	休日	95
17	即応大隊発足	100
18	採用テスト	106
19	雪山行軍訓練	112
20	即応魔導大隊結成	119
21	ダキア戦役	125
22	初勝利	133
23	次の戦地への準備	140
24	北方の歓迎会	145

4	4	4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	4	
9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7	6	9
	戦	連	連	動	作	束	動	掃	連	後	呆	予	想	一	勝	苛	許	ア	作	戦	次	終	作	捕
	闘	合	合	き	戦	の	き	討	合	処	気	定	い	時	利	烈	さ	レ	戦	の	結	戦	虜	
	の	王	王	出	会	間	出	作	王	理	な	通	合	の	、	な	れ	ー	計	戦	の	結	会	へ
	果	国	国	す	議	の	す	戦	国	後	い	り	う	一	束	戦	ざ	ヌ	画	の	結	議	の	見
	て	攻	攻	歯		休	連		参	理	戦	姉	時	間	場	る	市		戦	の	結	議	舞	
	に	略	略	車		息	邦		戦	後	争	妹	の	の		愛	街		争	の	結	議	い	
		作	作						終		終		平	平			戦		準	戦	結	議		
		戦	戦						結		結		穩	穩			戦		備	場	結	議		
		2	1																					
297	291	286	280	275	269	264	258	251	245	240	234	228	222	215	210	203	197	191	186	179	172	165	159	152

6 6 6 6 6 6 5 5 5 5 5 5 5 5 5
5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0



386 381 376 371 366 360 354 349 343 336 331 325 319 313 308 302

1 士官学校

ああ、今日もお姉様は美しい…

あ、突然すみません、初めましての方は初めまして。

私、帝国軍魔導士官学校に通う、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉候補生、9歳であります。

9歳のクソガキが、軍人になれるのかって？そうですよね、私もそう思います。

ですが現実には非情なのです。本当にヒドイですよ、戦争というものは。

男女の差別無く軍人になれるよ！

ということ、こんな幼気な女の子でさえ、駆り出されています。

まあ私は志願したんですが。

なぜ私が帝国軍魔導士官学校に志願し、通うことになったのか…

原因は、私の双子の姉であるターニヤ・デグレチャフ魔導少尉候補生のせいなのであります！

私とターニヤは、戦災孤児です。

父は軍人で、二階級特進。母は生活が苦しくなってしまったのかは不明ですが、幼き私とターニヤは孤児院に。

唯一の家族、とても仲良く、貧乏ではありましたがまあまあ幸せに生きておりました。

ある日、軍に勤めるお医者様が、魔導適正があるかどうか、検査にいらつしやいました。

私もターニヤも、適正はA。お医者様は、将来が楽しみだ、と笑っておられました。

私はそうなのかあ、くらいにしか思っていないんですけど、ターニヤは違ったらしく、その検査からしばらくして士官学校に行く、と

私にこっさり打ち明けてくれました。それと、

「アレクシア、お前はどうする？」
とも。

聞かなくても分かっているくせに、イジワルなお姉様です。

「私も行く！ターニヤとずっと一緒にいるって、約束したでしょ！」

： 私は、ターニヤの秘密を知っています。

ターニヤも、私の秘密を知っています。

私達の秘密、それは、私もターニヤも「転生者」である、ということ
とです。

私は、前世の記憶はほとんどありません。

男だったのか女だったのか、当時の名前も、何もかも、覚えていま
せん。

ただ、学び得た知識、知見、それくらいしか覚えていないのです。
なぜ私がターニヤが転生者だと、気づけたのか。
簡単です。

ターニヤは時々寝言で、「日本語」を話すのです。

ターニヤってば、普段は澄ました顔して落ち着いて、凜としてかっ
こいいのに。

寝てるときは寝言を言うし、私を抱き枕に…
かわいいですよね。

おっと、話が少し逸れてしまいました。

たしか、5歳の頃です。ある晴れた日の夜に、ターニヤに聞いてみ
たのです。

日本語で。

『お姉様、お姉様はもしかして、転生者、なのですか？』

「アレクシア!? 一体、どこでその言語を… いや。そうか。」

「アレクシア、お前もまさか、転生者、なのか？」

「はい、お姉様。最も、前世の記憶は、知識しか覚えてないですが…」

「そうか… 私は鮮明に前世を覚えている。なぜ、死んだのかも、な」

「ごめんなさい、お姉様。嫌なことを、思い出させてしまって…」

「いや。いいんだ、死んだのは私が原因だ。」

それから、お姉様のことを教えてもらいました。

前世では、男だったこと。サラリーマンとして働いていたこと。

この世界に酷似した世界の未来、だったこと。

「アレクシア。この話は、私達だけの秘密だ。いいな？」

「はい。前世の、それも未来の記憶があるだなんて、もし知られば精神異常者扱いで済めばいいですが。」

「そうだな。それでも盆栽生活なんて御免だがな。」

この件以降、私とお姉様は今まで以上に仲良く、親密になりました。
お互いを半身と、想うほどには。

そんなこんなで無事、士官学校を進級致しまして、私とターニャは
一号生であります。

大人だらけの学校で、私達のような子供がトップで進級、後輩の指導をしなければいけません。面倒ですが、ターニャ一人に任せるわけにもいかないのです。

「栄光ある帝国軍魔導士官学校の狭き門を潜り抜けてきた、諸君。合格おめでとう。」

はあ。ターニャ、凜としてかつこいこい…

妹だけど、惚れちゃいそう。将来、ターニヤのお嫁さんになるのも悪くないですね。

「私は、諸君ら二号生の指導先任となるターニヤ・デグレチャフ一号生である。」

私も指導先任だ。挨拶しておこうかな。

「同じく、貴方達の指導先任になるアレクシア・デグレチャフ一号生であります。」

私は演説は得意じゃないし、ターニヤに任せよう。要所要所で補助に入るくらいかな。

「はつきりと言おう。我々は、実に困難な情勢において、常に最良の結果を求められる。」

今の帝国は戦争中、私達もさつさと教養を得、強くならなければならぬ。

「だが、安堵してほしい。我々は、貴様らに期待しない。だから私達としては、望む。私達を絶望させるなど。」

ターニヤの毒舌、何かに目覚めちゃいそう。

もしかしたら、後輩の中にも目覚めちゃった人がいるかもしれないね。

「断わっておくと、私の使命は、帝国軍の防疫である。すなわち、無能という疫病を、帝国軍から排除することにある。」

「そうですね、敵さんのもつても強い兵隊さんよりも、何を仕出かすか分からない無能な身内ほど、恐ろしいものではありません。」

私の記憶、知識にも類似した言葉があったので、引用させてもらいました。

「その通りだ、アレクシア魔導少尉候補生。かかる情勢下において、帝国軍に無能が蔓延するを許すは、罪ですらある。」

ターニヤと私は、双子故か、同じ転生者だからか、思考が近い。

私の言いたいことをターニヤが、ターニヤの言いたいことを私が言うことができる。

「諸君は、48時間以内に、私達の手を煩わせることなく、自発的に退校可能である。」

「自覚できる無能は、良い無能です。たとえ帝国兵士としては無能でも、他に特技があるならばそちらに注力していただければいいのです。」

「だが、誠に遺憾ながら、48時間有つても、自分が無能であると判断できない間抜けは、私達が間引かねばならぬ。」

ターニヤは言い方が過激ですね。その方がズバっと伝わりますが。

まあ新兵の皆さんは10代後半、私達の倍は生きていそうです。

それなのに、自分の得意不得意さえ認識できないなんて、無能もいところですよ。

「まあ、ヴァルハラへ行くまでの短い付き合いではあるが、新兵諸君、地獄へようこそ。」

「あはは。地獄だなんて。地獄のほうが、生温いと思えるかもしれないかもしれませんね?」

「違うない。ハツハツハ」

—— | ——— | side 二号生

なんなんだ、あのクソガキ二人は。

言いたいように言いやがって。

あんなガキがトップを取れる程とは、帝国軍の質は落ちたのか?

だが、あのクソガキ二人。

ターニヤとかいう奴のほうは、終始二号生に対して本当に子どもなのかと疑うほどの冷たい目をしていた。

末恐ろしいガキだ。

アレクシアとかいう奴は、二号生など視界に入っていたかさえ怪しい。

何せ、ほとんどターニヤ一号生を見ていたのだ。

舐め腐ったクソガキめ。

あんなクソガキに教えられるとは屈辱もいいところだが、教官達が

そうしたのならば仕方ない、あんなのでも一応は上官となるのだ。
反抗などしようものなら厳罰モノだ、おとなしく従っておくに限る。

何とも腹立たしいが、クソガキに教えられるなどという屈辱以上はしばらくは来ないだろう。精神的にも鍛えられるというものだ。

―――― side アレクシア

士官学校の一日は、清掃から始まって、野戦演習、そして用具整備をして終わる。

今は戦時中なのもあって、促成教育、迅速に実践的な士官を育てることこそ重要であります。

さしあたって、人間に対して銃で発砲できなければ何の意味もありません。

一号生最初の壁は、銃殺。

国の上層部が、殺しても問題ないと判断した社会のゴミを銃で撃つ。

すごく簡単ですよ？

一号生がゴミを撃つのを、二号生が見守る。

私とターニヤは何の躊躇いも無く撃ち殺していますが、やはり人を殺す感覚に戸惑う、慣れない他の一号生達はなかなか行動できていないようです。

最初は仕方ないですよ、私達がオカシイのかな？

今日のお勉強は、戦術論？知っていることを学びなおすのも楽しいことです。

ターニヤは楽しそうではないですが。

ムスっとしたターニヤも、かわいいですね……

「…… 一号生！アレクシア・デグレチャフ一号生！話を聞いているのかね！」

ターニヤに見惚れていたなら、怒られてしまった。

面白くないおっさんのお話よりも、ターニヤのほうが大切に決まっ

ています。

「はい、すべて聞いております。」

「本当か？ならば問題だ。想定条件、攻勢。この状況で半包囲下におかれた部隊の取るべき戦術を述べよ。」

戦術はターニヤの専門なんですけどね。

これくらいなら私にも分かりますが。

「はい、中央突破、背面展開、包囲殲滅。これが最適であります。」

まあこれは理論、実戦では使いたくない戦術ですが。

「状況防衛、かつ敵戦力が優勢の場合。」

まだ続くのですか。

「はい、一点突破による離脱。もしくは遅延部隊を設け、後退。以上であります。」

「よろしい。妹にばかり問題を投げるのもかわいそうだな。そうだと思わんかね、ターニヤ・デグレチャフ一号生？」

あはは、ターニヤにも投げるのか。思ったより面白い教官かもしれません。

あ、ターニヤ不機嫌そう。かわいいです。

「はい、どんな問題でありましょうか？」

「アレクシア一号生の問題の続きだ。状況防衛、半包囲下であり、敵戦力が優勢の場合、この状況下での遅延戦闘の本旨は？貴様が分隊指揮官であるとする。」

ターニヤは前世の記憶もあるけれど、天才なのです。

「はい、狙撃戦術が最適かと判断します。」

流石です。一人の犠牲で、みんなハッピー。

「想定追加、撤退が許可されない場合。」

教官もなかなか、イジワルですね。

「はい、敵の損害最大化、もしくは敵拘束時間の極大化のどちらかを戦術目標に設定していただきたいと思います。」

よくスラスラと出てくるなあ。私じゃ少しだけ考えちゃうのに。

「何れの場合も述べよ。」

「はい、敵損耗最大化を目的とする場合、伏撃より混戦に持ち込み優勢

なる敵支援投射能力の無力化に努めつつ、近接にて刺し違えます。」
半包囲される、つまりは敵の支援火器に弄ばれる。

だから、混戦に持ち込めば敵は誤射を恐れて撃てなくなる…

「そして、敵拘束時間の最大化であります。少数の部隊を殿軍とし、ゲリラ的に出血を強要する戦術を採用します。」

長く敵を引き付けるには、やっぱりゲリラ戦しかないね。

知識でしか知らないけれど、世界最強の米帝様だってベトナムやイラクでゲリラには苦労したみたいだしね。

「・・・大変結構である。」

あはは、あの顔。完璧に返されて、ぐうの音も出ないって顔だ。

「教官殿、質問をよろしいでしょうか。」

ターニヤは真面目だなあ。あれだけ面白くなさそうにしてたのに、きちんと疑問を解決しようとしている。

「かまわん。なんだ?」

「はい、半包囲下におかれるという想定は、攻防戦でありえる設定であります。」

実際の戦場では、押ししたり引いたりだからたまには起こりうることだ。

「その通りだ。一般的に、部隊の孤立は忌むべきではあるが、まああることである。」

「はい、ですが、敵が優勢、かつ後退が許されない状況とは?」

たしかに。負けている側がやることだね。

「なにが、言いたいのかね?」

「はい、死守命令が、下される状況は、どの程度ありえるのでありましようか。」

ターニヤ!?

その質問は、評価が下がっちゃうかもしれない…

「珍しいな、怖気づいたのか?」

ああ、ターニヤが強張ってる。

でもがんばって、平静を保とうとしている。

「はい、いいえ。教官殿。」

「…ならば、よし。」

はあ、危なかった。

講義が終わったら、抱きしめてあげよう。そうしよう！

2 士官学校

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉候補生です。

「さて、糞のような無能諸君」

・・・ターニヤがお怒りです。

無能な二号生のゴミ共が。私達を子供だと侮るのはまだしも、一応は上官に当たるといふのに。

「48時間以内に、申告せよという私達の忠告が難しかったことは詫びよう。」

ターニヤは優しい。無能にさえ、配慮することができる。

私は、私の大切なターニヤをバカにされたことに、今すぐにでも八つ裂きにしてやりたいくらい燃え滾っています。

そんなことをすればターニヤにも迷惑をかけてしまうので、しませんが。

「諸君に、頭脳が存在すると、確認もせずに断定した私達の落ち度だ。」

ああ、なるほど。無能、故に「無脳」かもしれない、ということか。理解する脳がなければ、仕方ないね。

「諸君の頭蓋骨を解体し、頭脳があるかは自然科学の基本に則り、自分で確認すべきかもしれん。」

「そうですね。今すぐにでも、頭を割って確認しましょう！もしかしたら、肉ダルマの人形かもしれませんし！」

「アレクシア。控え目に、な？」

「はっ、申し訳ありません。」

ターニヤがいけないんですよ、面白そうな確認方法を示すから！

「諸君は、どう思うかね？」

「ターニヤ、無能共に聞いても時間の無駄ですよ。」

「それもそうだな。」

全く、時間は有限なんだよ？貴重な私達の時間を奪うのはやめてほしいです。

「ふざけるな!!いい加減にしろ、この糞アマ！唯々諾々と聞いていれば、何様のつもりだ!!!」

本当の無能が、釣れてしまいましたね。

上官に対する反抗的な態度、暴言。

やってしまいましたね。

「あははっ。その怒鳴り散らしてる二号生、上官への反抗的態度、暴言。これが何を意味するのか、その足りない頭でわかるかな？」

「アレクシア、わかるわけがないだろう。現にこうして、反抗しているのだからな。アレクシア、そのゴミに直接、教えてやれ。」

「はい、ターニヤ。」

一瞬で間合いを詰め、ゴミの頭を掴み、一時的な麻痺を起こす術式、一定時間激痛が走る術式をそれぞれ掛けてやる。

「暴れないでください。私、手術は専門ではないので、違うところを切ってしまうかもしれません。… ああ、先に手足をもいでほしいんですか？ そうならそうと、言ってくださいよ。」

ターニヤのお願いとあつては、喜んでやりましょう。

ターニヤの為ならば、何でもやりましょう。

ターニヤの邪魔になるものは、すべて排除しましょう。

「離せ！ 離せえええ!! 誰か、この狂人を止めろ！ 止めてくれ!!」

「狂人？ そんな奴はどこにいる？ んん？ 私の眼には、可愛い私の妹、アレクシアしか見えないがな。まさか、アレクシアを狂人だとしても？ クックック、そんな筈がなからう。」

「糞が!! 誰でもいい!! 助けてくれええ!!」

ターニヤに可愛いって言ってもらえた！ 褒めてもらえた！

ああ… この無能には感謝ですね。あなたのおかげで、褒めてもらえました。

「何の騒ぎだ！ アレクシア・デグレチャフ一号生！ 何をしている、やめないか！ ターニヤ・デグレチャフ一号生もだ！ なぜ止めないのだ！」

教官が来てしまいました。あと少しで解体できたのに、残念です。

「はい、教官殿。この転がっている二号生が我々上官に対し、命令不服従、上官反抗、かつ暴言。彼に精神疾患または深刻な頭部の異常が無

ければ銃殺ものです。」

「教官殿、小官ら一号生はまっとうに二号生を教えていたのですが…我々が子供だから、でありませうか、指導不足の程申し訳ありません。」

「理由は分かった。だが、ほとんど拷問、処刑までする必要があったのかね？」

「はい、いいえ教官殿。処刑ではなく、彼に頭脳が存在するか疑われたため、頭蓋の中身を確認するところでありました。」

「…正気かね？一号生。」

「…むしろ狂っているのは二号生であるかと思われませんが。教官殿、小官はターニャ一号生の疑問を解決するべく解体作業に入ってもよろしいですか？」

「…いや。解体は結構だ、その二号生は私が預かろう。」
「手間をお掛けします、教官殿。」

まったく、無能って本当に面倒ですね。

いちいち突つかかってターニャの邪魔をしないでください。

私がターニャといちやいちやする時間が減ってしまうではありませんか。

… 気づけば、輸送車両で北方管区へ、ターニャと一緒に運ばれています。

紛争地域研修、だそうです。ほとんど動員ですよ、これって。

まあ試験免除だそうですので、喜んでいいのでしょうか。

「アレクシア、寒くないか？」

「はい、大丈夫ですターニャ。私にはターニャが居てくれれば、十分です。」

「そうか。アレクシア、寒かったら言うんだぞ、お前の防寒着もあるん

「だからな。」
「はい。」

3 北方管区

皆さんこんにちは、アレクシア・デグレチャフです。

もうすぐ、10歳になります！誕生日は勿論、ターニヤと同じ日なのです！

今私達がいるのは帝国北方管区です。

帝都近辺はもう春だというのに肌寒かったこの辺りも、やっと春を感じる暖かさになってきました。

おかげで私達も外を駆けまわったりできるようになりました。

ターニヤは凄いです、たくさんの人達とすぐに仲良くなり、得た知識、経験を私にも教えてくれます。

ターニヤは私の誇りです！

そうそう、私もターニヤもやつと、ライフルの反動に負けずに撃つことができるようになりました！

練習した甲斐があったものです！

ということ、死んでください。

ごめんなさい、こんなところで死ぬべきな人たちではないかもしれませんが。

戦争なのです、許してください。

改めて、皆様こんにちは。

アレクシア・デグレチャフ帝国軍魔導准尉です。

いつの間にか辞令を頂き、候補生から准尉へと昇進致しました。もちろん、ターニヤもですよ。

研修が終了と同時に少尉に任官できるそうです。さして興味もありませんが。

私にとって重要なのは階級よりも、ターニヤでありますから。

春になったことで、北方の協商連合国が宣戦してくるかもしれないね。

我が帝国は現在、西方にある共和国と戦争状態にあります。

故に、北方の協商連合国が戦争に介入してこられると、非常に面倒なのであります。

北方の国境を防衛しなくてはいけません。

そのせいで、私達はこんな寒い僻地に来到ることに…

現在、私達は国境付近にて飛行哨戒班で陸軍と連携研修中です。

あくまでも学校のお勉強の一環です。

サボっているわけではありませんが、正直に申しますと暇がありません。

ちなみに、私のコールサインはピクシー05であります。

ターニャはピクシー04です。

48時間の待機命令が出ているので仕方ありませんが、暇で暇でターニャとお喋りしたいです。

ですが、それはターニャに迷惑になってしまいます。

ですので、のんびりと時間が過ぎるのを待っています。

24時間ほど経過した頃でしょうか。

なんと、協商連合国が本格的な武力行使に動いたではありませんか。

…西暦世界の話で申し訳ありませんが、分かりやすく申し上げます。

ノルウェーやスウェーデン、デンマークなどが1つになったような国、協商連合国。

スカンディナヴィア連合とでも言いましょうか。小国が2つ3つ集まったからと言って、確かに注意するべき相手ではありませんが。

中小国ごときが、我が帝国に勝てるのでしょうか？

瞬く間に帝国領へと進駐してくる連合国軍。開戦ですね。
宣戦布告、の代わりでしょうか、連合国は我々に退去勧告をしてきやがりました。

「…ターニヤ。いえ、ピクシー04。聞きましたか、開戦です。」
「そのようだな。もう少しのんびりできると思ったが、そうもいかな
いようだな。死にたいらしい。」

かくして、これが私達の初陣であります。

「ピクシー05より、CP」

「こちらCP、ピクシー04、05、感度良好。」

ターニヤも同じことを考えていましたか。

「ピクシー05よりCP。こちらも感度良好。観測データを送った
後、弾着観測を継続する。」

「CPよりピクシー05、了解。引き続き頼む。」

弾着観測。

我が帝国軍の誇る砲兵隊の、砲撃が敵に当たったかを見守る仕事。
簡単です。

私達が最前線の情報を集め、それに沿って砲撃。非常に有効です。
ただ、情報を集めるだけの簡単な仕事ですが、敵からしたら邪魔な
ことこの上ないでしょう。

つまり、いずれ狙われる、ということでもあります。

私達は開戦を待っていた側、でありますので、制空権も対空魔導監
視も万全であります。

少しは敵よりも優位のはずです。

「CPよりピクシー04、05。砲兵隊による観測射撃開始。データ、
送レ。」

「ピクシー05了解。弾着確認、演算宝珠のデータ転送中。」

「CP了解。効力射に留意せよ。全力射撃は200秒後の予定。オーバー。」

「ピクシー05了解、オーバー。」

高度を少しずつ上げ、砲撃に巻き込まれないように距離を取る。簡単だなあ、と思ったその時でした。

「ピクシー05！こちらピクシー04、敵魔導士から照射を受けている！そちらも十分に注意しろ！」

「ピクシー05了解！04、気を付けて。」

ターニヤが、敵に襲われている!?

すぐにでも飛んで行って助けたい、でも私は軍人だ。

命令違反なんてしたら、ターニヤに怒られてしまう！

ああ、不安だ。ターニヤは、大丈夫だろうか。

たった一人で、卑しい敵魔導士に、嬲られていないだろうか…

「CPよりピクシー04、05！聞こえているか！」

「こちらピクシー05、聞こえています！」

撤退指示、ではないような気がする。

嫌な予感です。

「射撃観測を中断、ピクシー04は接敵を維持、遅延に努めよ。可能ならば情報を収集せよ。」

私のターニヤを、見殺しにしろとでも言うんですか？

「ピクシー05、貴官は即時撤退せよ。」

……

「こちらピクシー05。拒否します。私は、ピクシー04を、ターニヤを援護します。」

「こちらCP。命令違反は許されない…。だが、貴官の気持ちはよく分かる。この命令拒否は黙認しておく。しかし、必ず、生きて戻ってこい。命令だ、戻らなければ、わかるな？」

なんだ。CP…管制の人、良い人じゃないか。

「ピクシー05よりCP。ありがとうございます！必ず生きて戻ります！」

「CPよりピクシー05。900秒持ちこたえればこちらの航空魔導小隊が追いつく。必ず生還しろ。武運を祈る。オーバー」

「ピクシー05了解！オーバー」

ターニヤ、必ず、助けて見せる。

いた。ターニヤが、たった一人で戦っている。

敵影は…

20、30… それ以上!?

「ピクシー05よりCP！敵は大隊規模の模様！繰り返す！敵は大隊規模！」

連絡を入れたことよって、敵魔導士がこちらに気づく。
当たり前だが、攻撃してくる。

「アレクシアツ!?!なぜ来た、今からでも戻れ！」

「バカなのターニヤは!?!たった一人で、この人数相手に生き残れるはずがないでしょう！一人よりも二人、私達なら大丈夫！」

「… そうだなアレクシア。すまない、私としたことが妹に心配されるとはな。」

あまり話している暇もない。戦闘開始です。

「… T・t e a l l e ! (皆殺しだ!)」

4 勲章叙勲

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ帝国軍魔導准尉です。
現在、帝国―協商連合国国境にて、戦闘中です。

ターニヤと私、二人きりで、30人以上の敵兵を屠っています。
しかし、敵も猿ではありません。少しずつ、少しずつ私達は削られて
います。

「…ふふふ、なんたる光栄だ。楽しいぞ、楽しくて楽しくて仕方がな
い！」

ターニヤ、楽しそうですね。

「ターニヤばかりズルイです！私にも遊ばせてください！」
軽口を叩いていますが、満身創痍です。

いつ撃ち抜かれて殺されてもおかしくありません。

「戦勝確定の戦場。つまらぬ仕事かと思えば、2人で1軍を相手取り、
戦場の主役だ。これが、楽しまずにいられるか!？」

「そうですね、ここは私とターニヤが主役の劇場。私達が輝き、貴方達
は死ぬ。たった、それだけの短い劇ですが、楽しんでください。」

私とターニヤは、ほとんど同時に、動き出した。

あの戦闘からどのくらい時間が経ったでしょうか。

……。

「知らない天井だ！」

「アレクシア、お前はこんな大ケガをしていますが、元気だなあ……。」

どうも、アレクシアです。無事生き残り、今は病院のベッドの上です。

結局、二人で敵の一個魔導大隊を壊滅させたはいいものの、胴体と頭以外はズタズタにやられてしまつて。

のんびり来やがった友軍に回収され、今に至ります。

私もターニヤも、ぼろぼろです。

お医者様いわく、「よくもまあ、ぼろ雑巾よりもひどく傷だらけになつて。」だそうです。

あ、そうそう。

私が命令違反をしてしまった、CPさんもお見舞いに来てくれました。

「貴官らには、感謝してもしきれない。ターニヤ・デグレチャフ准尉、よくぞ持ちこたえてくれた。本当に、ありがとう。そして、アレクシア・デグレチャフ准尉。命令違反こそしたものの、よくぞターニヤ・デグレチャフ准尉と共に帰ってきてくれた。本当に、ありがとう。」と、半分泣きながらに言ってくれました。

命令違反、という言葉にターニヤが反応し、私をジト目で見つめてきました。

・・・可愛いターニヤにそんなに見つめられたら、興奮しちゃう。

無我夢中で戦っていたので、何人墮としたかは覚えていませんが、宝珠に残っていた映像記録によれば。

私達二人で、撃墜8、撃破6、継続戦闘能力喪失4、戦意喪失2、不明³。

大戦果だった。

散々二人で暴れまわつて、数えきれない射撃や術式によって仕留められたけれど、

どうにか友軍到着まで持ちこたえた。

さらに二人とも、かろうじて一命を取り留めた。

この大戦果に対し、北方方面軍からは私達二人の叙勲の推薦。砲兵隊の大本、陸軍からは少尉への任官上申。

大騒ぎになってしまいました。

どちらも私達の回復を待ってから、ですが、こんな大けがですし。全身が痛くて動けないので、ターニヤのすべすべお肌の確認もできません。

ケガよりも、そっちのほうがつらいです…

深夜。

なかなか眠れず、ぼーっとしていると。

「…アレクシア。どうしてお前は、私を助けに来たんだ？」

「ターニヤ。だつてターニヤは、私の唯一の、大好きなお姉様ですよ、家族なんですよ？」

「そうか… あの時は、お前の気持ちも考えず、戻れなどと言ってすまなかつた。」

「いいんです、ターニヤ。ターニヤが私のことを想ってくれているって、わかってますから。」

抱きしめたい。撫でてもらいたい。

ああ、齒がゆい…

「話は変わるんだが。アレクシア？」

「はい、なんでしようお姉様。」

「… 命令違反とは、何のことだ？」

げっ、覚えてた…

退院、と同時に。

少尉への昇進、勲章の授与。

陸軍のとっても偉そうな人が、

「ターニャ・デグレチャフ魔導少尉、並びにアレクシア・デグレチャフ魔導少尉！」

「はい！」

… こうして私とターニャは、『銀翼突撃章』という、生きて叙勲された人間は数えるほどしかない勲章を頂き、航空魔導士のエースとなりました。

瞬く間に軍内で有名になりました。

これで私やターニャを侮る輩が少しは減ってくればいいのですが。

ターニャは、これだけ凄いものを獲得したのにあまり嬉しそうではありませんね。

しかたないです、後で慰めてあげましょう。

side 陸軍幹部

ターニャ・デグレチャフ、アレクシア・デグレチャフ。

何だあの双子は。

たった二人で協商連合国の一個航空魔導大隊を壊滅に追い込んだ？

そう聞いたときは、嘘をつくにももうちよつとまともな嘘を、と思った。

真実だとしても、どんな屈強なベテラン魔導士が来るのかと思っ

た。

まさかあんな、歳が10になるかどうかの子供が、そんな大戦果を？

末恐ろしい子供だ。

そんな子供に、叙勲するのはどうやら私の仕事らしい。
今から胃が痛くなりそうだ。

実際に対面してみたが、あれは本当に子供か？

ターニャ・デグレチャフ少尉。

子供とは思えぬ酷く冷たい双眸、気迫。

化け物、とさえ思った。

アレクシア・デグレチャフ少尉。

こちらはまだ子供らしい、と思えた。

それ故に恐ろしく感じた。

あんな激戦の直後だ、並大抵の兵士ならば憔悴していてもおかしくはない。

だがこんな子供が、そんな様子は全くない。それがとても、恐ろしかった。

双子の化け物。

— — — side アレクシア・デグレチャフ

もう夜中ですよ！まったく！

溜まっていた仕事も終わり、次の命令あるまで休暇。

やっと、少しはゆつくりできる。

「うふふ… ターニヤ。」

「どうした、アレクシア?」

そう、ケガやらなんやらと忙しくて出来なかったこと。

「そういえばターニヤ。ターニヤの柔肌が無事かどうか確かめていません!」

ターニヤににじり寄る。

ああ、かわいいターニヤ…

「な、なんだアレクシア、やめろ、そんなところ触るな、あつ…」

…
すりすり。

「ターニヤの身体は、大丈夫みたいですね。よかったです!」

「……………」

「はっ!私は何んということを… た、ターニヤ、ごめんなさい!」

私としたことが!

ターニヤを怒らせてしまった…!?

「ふふつ、それくらいで私が怒るわけないだろう。だがなアレクシア。いくら姉妹だからといつても、限度はあるぞ?」

「はい… ごめんなさい。」

「分かったなら、次からはちゃんと確認するように。」

…
えっ?」

確認したら、触り放題…!?

「はい!」

「じゃあ、アレクシア。」

なんだか、とても嫌な予感がします。

「これから私が同じことをアレクシアにもしてやろう！」

……
えっ!?

5 再び最前線へ

こ、こんにちは、アレクシア・デグレチャフです…。

昨晩は、ターニヤに少しだけ、ほんの少しだけ悪戯しただけなのに、何倍もの仕返しを受けてしまって眠れませんでした…。

至福のひと時でした！

さて、先日は『銀翼突撃章』を戴いた私達に、エースと呼ばれるに相応しい二つ名が付けられました。

ターニヤは『白銀』。白銀のターニヤ。

うんうん、よくわかっていますね。

私は、『白百合』だそうです。白百合のアレクシア。

なんだか少し、恥ずかしい気がしますね。

まあ、私達の見たい目、双子故かほとんど同じなんですよね。

せっかく二つ名を戴きましたが、皆さんに間違われてばかりです。

そんな私達は、よくわかりませんが何やら式典に出るそうです。
ターニヤいわく、「私達をプロパガンダに使い、国民の士気を上げる」らしいです。

式典、式典かあ…。ターニヤのドレス!?

そう思考が至った矢先、

「ドレスは着んぞ！絶対にだ！」

「えー…。せっかくの式典なのに？着ないの？」

「絶対に着ない！私は式典用の軍服で十分だ！」

どうもターニヤは、自分が可愛いということを自覚していないらし

いです。

「… まあ私がドレスを着れば、私達をよく知らない他の人たちからしたら、どっちがターニヤかわからないし…」

「なっ… ダメだ！アレクシア、ドレスを着るな！」

「えー… どうしようかなー」

ターニヤが泣きそうな目で、どうしてもドレスはダメだ、と訴えます。

「…ズルイですよ、可愛すぎです。反則なのです！」

「わかりました、わかりましたから、そんな目で私を見ないでターニヤ！」

「謝罪の気持ちを込めて、抱きしめます。」

少し前まで抱きしめたりのスキンシップには若干抵抗されていましたが、最近は無抵抗で抱きしめられてくれます。

可愛いです。癒しです。

「アレクシアも、軍服でいいな？頼むぞ？」

「わかりました、ターニヤ。ターニヤの願いを、私が断るはずがありません。」

つつがなく、式典は終わりました。

貴族の人たちに揉みくちやに… 質問攻めにされました。

どうして軍人なんか？

こんなに小さな子が…

軍服なのが残念ね、ドレスを着せてあげたいわ。

などなどたくさん。

ドレスに関しては、とても同意です。

質問攻めの中でターニヤが、私たちの母は病気で亡くなったのだ、と。

そうだったんですね…

ターニヤはすごく気を張って、慣れない対応をがんばっていました。

今夜も、慰めてあげないと！

式典から何日か、何週間か経ったでありましょうか。

私とターニヤは現在、『銀翼突撃章』を久々に生きて獲得した英雄、エース。

ということ以最前線へ行くことになりました。飛んで。

現在の高度はおよそ4000、予定の航程の半分を過ぎたあたりであります。

混成魔導襲撃大隊は、順調に戦線へ向かっています。

私達は最前線へ駆り出されるとともに、帝国軍北方方面司令部直轄第17混成魔道襲撃大隊、通称アフター5所属となりました。

また北方です。お世話になります。

協商連合国について、ターニヤに教えてもらいました。

少数の精鋭魔導士を、試験的に投入している、らしいです。であるならば、質的には敵の方が多少上かもしれないませんが、数では帝国が勝っています。

圧倒的に。

故に航空戦においては帝国の圧倒的有利です。

地上戦は地形や気候もありますが、制空さえ取れば爆撃でどうとでもなるでしょう。

ただ基本的には、魔導士は魔導士、戦闘機は戦闘機同士で戦います。一般的には魔導士の攻撃で戦闘機を墮とすには火力が足りず、戦闘機で魔導士を墮とそうにも機動力が足りない。

それ故に、暗黙のルール、ではありませんが基本は戦いません。

ですが、私とターニヤならば戦闘機でも墮とせるでしょう。

なぜかって？言わせないでくださいよ、愛の力、ですよ！

話が逸れました。

ターニヤは大隊付きの遊撃参謀、らしいです。

私はターニヤの副官、のような立ち位置です。いつもと何も変わりませんが。

要は大隊に所属はしていますが、行動は自由にしていい、ということとです。

私とターニヤだけでも十分ではあると思いますが、弾除けにはなるでしょうか。

「ホテル1より、アフター5。貴隊を確認。帰還を歓迎する。」

「ブラボーリーダーより、ホテル1。貴様のツケを回収するまでは、死ねんよ。」

私達の大隊長は、鬼のようにカードが強く、基地中の人はみんな彼に睨られているらしい。

演算宝珠のバックアップを大隊長の個人資産で大隊全体に用意できるほどなので、部下としては何も不満はないです。

カモられるとわかっていて、勝負をする人はいません。

故に、何も知らないマヌケか、変態か、復讐者と大隊長殿は戯れる毎日だそうです。

戦争さえなければ、ギャンブラーの世界で覇者になれたかもしれない人です。

「ホテルより。ブラボーリーダー。貴官の武運長久を祈る我が誠意の表れだ。戦争が終わるまで、待ちたまえ。」

「ブラボーリーダー了解。ならば、もう一度むしり取られてくれ。ランディングに入る。オーバー」

「ホテル、ランディング了解。わざと負けるのも大変なんだが。オーバー」

あはは、また筆られる被害者が。

ホテルも腕は良いみたいですが、まったくもって運に見放されている……。

地上にて、いつものように報告をし、解散を待っていると、大隊長殿がなんだか胡乱な顔をなさった。

どうされたのだろうか？と思っていると。

「ターニャ・デグレチャフ少尉！並びに、アレクシア・デグレチャフ少尉！召還だ。ただちに司令部へ出頭せよ、とのことだ。」

「はっ、了解致しました。」

「了解であります！」

うーん、何か呼ばれるような失態を犯したっけ……。

「何だろうな、アレクシア。まるで呼ばれる心当たりが無いのだが。」

「私もですよターニャ。」

「ターニャ・デグレチャフ魔導少尉、入室いたします!」

「同じくアレクシア・デグレチャフ魔導少尉、入室いたします!」

どんよりしては、印象が悪くなってしまうので、空元気で頑張る。

「きたか、白銀の、白百合の。」

「・・・はっ。」

どうにも二つ名には慣れませんね。

「流石は双子、息がぴったりだな・・・ そう固くなるな、吉報だ。」

「なんででしょうか・・・。」

「拝見いたします。」

ターニャが読む。

「喜べ。本国戦技教導隊付きの内示と、総監部付き技術検証要員としての出向要請だ。」

「ということは、内地へ、安全なところへ？」

「本国の後方、それなりの地位、安全性。」

「本国戦技教導隊は、装備面でも最優遇されている上に、一番自分を鍛えるにも適した環境です。」

「私には他者の指導は難しいかもしれませんが、ベテランの方々から技を盗むことには最高の場所でしょう。」

「ですが私は、ターニャさえ居ればどこでもいいので、ターニャ次第ですね。」

「可能な限り貴官らの意向を尊重するつもりだが、異議を申し立てるかね?」

「ターニャはどうするのだろうか?」

「はい、いいえ。」

「小官も異議はありません。」

「よろしい。兵站総監部で、新型のテストだ。形としては教導隊からの出向になる。」

司令はそう言うなり、先ほどの書類にサインし始めた。

「とはいえ、聞きたいこともある。質問を許可する。」

優しい司令ですね。このような上官になりたいです。

「ありがとうございます。では、まずわざわざ教導隊所属とするのは？」

「そうですね、テストだけならば、必要なさそうですが。」

「エースとはいえ、子供を前線に送ることは、対外的によろしくない印象をばら撒く。」

……。

今更!?

ま、まあ、気づいてくれたのであれば……。

「…だから、エースは、後方のお飾りになれと言うことでありましようか。」

ターニャ……。

かつこいいい… 流石、私のお姉様。

惚れてしまいます。

やはりターニャは、最前線で暴れまわりたいのですね。

「斬新な見解だな、少尉。私には、思いつかないような見解だ。」

司令は何か、とてつもない衝撃を受けたような表情を一瞬ですが、しておられました。

ターニャのすばらしさに、気づけたのでしょうか。

すばらしいことです！

「失礼いたしました。」

「上は、貴様らを評価している。新型の開発功労者という地位を用意したのもそれだ。」

なるほど。

「その新型について、お伺いすることはできますでしょうか？」

「ふむ、演算宝珠の試作機としか、知らされてはおらん。」

「わかりました。ありがとうございます。」

試作宝珠、ですか。危なくないといいますが。

6 試作演算宝珠テスト

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉です。

現在、新作宝珠の性能テストをしております。

私とターニヤで交代でやっておりますが、はつきり言いました。命がいくつあっても足りません！

「ターニヤ・デグレチャフ少尉？意識はありますか？デグレチャフ少尉？」

私は管制にいますが、ターニヤはテストの為に上空の上であります。

「二応あるにはあるが、長くは持たない。はつきり言って、生身でこれ以上の高度は不可能だ。」

ターニヤでさえ、限界。

つまり、並大抵の一般的な魔導士では死んでいるかもしれない。

ターニヤはどこまで上昇したのでしょうか。

限界、と言うからには6000は軽く超えているんでしょうね。

私達がテストさせられているものは、『エレニウム工廠製95式試作演算宝珠』という名称の、新型宝珠です。

通常、演算宝珠一つにつき宝珠核と呼ばれる、エンジンが一つ、搭載されています。

しかし、単発ではそこまで大きな出力は出ません。

この課題を打破するために生み出されたのが、この試作品というわけです。

この試作品は、通常の宝珠と同じサイズながら、4つの核を搭載しています。

それ故に、制御がとても難しく、魔力も湯水のように垂れ流しにな

るのです。

・・・ どうして、双発にしなかったんですかね。

私もターニヤも何度も実験していますが、一つ間違えば良くて大げが、悪ければ死ぬ、そんな試作品なのです。

・・・ ターニヤを殺したら、制作者もろとも・・・。

「なにより、魔力が底なしに喰われる。魔力の変換効率是最悪だ。」

やはり、ターニヤでも難しいですか・・・。

「少尉、もう少し、高度は取れんのかね？理論上は、18000までは固いはずなのだが。」
・・・。

「ドクトル、無理を言わないでいただきたい。」

「すみませんドクトル。私もテストしているのでよく分かりますが、どう考えても不可能かと。」

私でもターニヤでも無理、誰が使いこなせるというんでしょうか。

「まだ、魔力に余裕はあるはずだ。演算宝珠の負荷もまだ許容値以前の水準だろう。」

「ドクトル、遊びがなさすぎますよ。この欠陥宝珠め、いつ火を噴くかわからないですよ!？」

「ターニヤ、気を付けてください。本当に、いつ爆発してもおかしくありません。」

人命最優先。安全第一。

ましてや、帝国の宝と言っても過言ではない、私のターニヤ。中止していただきたいですが・・・。

「私の最高傑作に、言うに事欠いて、欠陥宝珠だと!？」

ダメですね、このMADは。

どうやら人の命よりも、欠陥宝珠のほうが大切らしいですね。

「ドクトル、お願いだから無線機で大きな声を立てないでください。」

「黙りたまえ！まず、先に発言を・・・」

「ドクトル、少しでいいんです、ターニヤのために、黙って頂けますか？」
…。

— — — side ターニヤ・デグレチャフ

急に静かになったな。

静かになる直前、我が妹、アレクシアの恐ろしく冷たい声が聞こえたような気がしたが、聞かなかったことにしよう。

さて、静かになったことでなんとか暴発させずに済んでいるが。こんなもの、時間の問題だろう…。

ツ!?

ああ、畜生。

どんなに集中していても、ほんの少しの乱れで同調が狂いやがる。ただちに、魔力供給を緊急カット。

同時に、演算宝珠内部の魔力を緊急排出。

一動作でただちに緊急措置を実行。

思った以上に、前回の教訓を取り入れた安全機構は有効に機能。

だが、演算宝珠内部の魔力が完全に排除できたというわけでは無し。

各核がそれぞれでバラバラに魔力をぶつけ合い、回路が一瞬で吹っ飛ぶ。

散々要求した外殻の強化が間に合っていたこともあって、辛うじて実害なし。

「管制。確認しているだろうか？パラシユート降下する。」

「ターニヤ、無事ですか!?大丈夫なんですか!?!」

ああ、私の救いはアレクシアだけだな。

心優しく、何でも気が利く、私とは正反対もいいところだ。

「このような妹をもって、誇りに思う。」

「ああ、大丈夫だ。降下する。」

この高度では、予備の演算宝珠を起動するよりも先に、パラシュートを開いたほうが安全だ。

なにより、ここは帝都。パラシュートでゆつくりと降下しようとも狙われる心配は無用。

さしあたり、現状では深刻な問題はない。おとなしく、着地に備えるくらいか。

「了解しまし、ちよつ、ドクトル、止めてください！離れて！離れて下」
管制が騒がしいな、またか。

なんだ、またドクトルの小言か。

「デグレチャフ少尉！またかね!?!」

「… ドクトル。少し、向こうへ来ていただいてよろしいでしょうか。」

… ああ、私想いのアレクシアには耐えられなかったか…。

— — — side アレクシア・デグレチャフ

「… ドクトル。少し、向こうへ来ていただいてよろしいでしょうか。」

… もうダメです。私には、ターニヤをテスト用の道具としか思っていないのでありましょうドクトルを、これ以上容認することはできません!!

「何を言っているのだね、アレクシア少尉！今はそれどころではないのだ！」

「言わせて頂きますが！あのような危険極まりない欠陥品を、爆発させずに制御するだけで精一杯であります！あのような高高度で振り回す代物ではありません！」

今までの鬱憤と共に、すべて言いつくしてやるのです…。

「なに？また、欠陥と言ったのかね!」

「ええ！欠陥品です！あんなもののテストなんて、命がいくつあつても足りませんよ!」

「君達が、集中をとぎらすから暴発になるのだ！それでも軍人かね？冷静に制御もできないのかね!？」

「お言葉ですがドクトル！今にも爆発するかもしれない危険物を首からぶら下げて、別の爆発物をどうにかしろと言っているようなものです！今すぐに！改善を要求します!」

「既に最高傑作と言つても過言ではないのだぞ！それに、ホイホイ壊す君達が悪いのだ、どうしてそんなに精密機械を壊せるのだ!!」

「壊れるような構造だからです！軍用なのですよ、安定して運用できなければ何も意味はありません！なぜ4発なのです、双発でもいいでしょう!」

「この4機同調という技術が、どれほど、革新的であるのかどうして理解しない?」

「革新的であるのは、私だつて認めますとも。ですので、まともに動くものを作つて頂きたいと何度も申し上げておりますが?」

「理論上動くではないか!」

「理論上、ではダメなのです！運用も考えてください！理論上の数値が、現実で出るはずがないでしょう!」

結局、ターニヤが私を制止し、ドクトルを管制の人たちで制止するまで、ずっと言い争っていました。

「ターニヤ、私は限界です。私だけの命ならばともかく、ターニヤの命

まで奪われかねません。即刻、転属を要求してきます！」

―――― side ターニヤ・デグレチャフ

アレクシアに、ついに我慢の限界が来てしまったようだ。

あの子が私のことを大切に想ってくれていることは、とても嬉しく思う。

… 少々、愛が強すぎるのが悩みでもあるが。

今回に関しては、私もアレクシアと全く同じ意見だ。

こんなもの、いつ死んでもおかしくない。

どうせ死ぬなら、最前線で二階級特進のほうがマシだ。

他人が怒ると周囲は冷静になるとはよく言ったものだが、なるほど。

アレクシアが怒りをぶつけたおかげか、冷静になることができた。

不思議な感覚だな、これは。

私も正直なところ、限界だ。何回目かわからないが、転属願いを出そう。

このままでは、私もアレクシアも死んでしまいかねん。

これで4度目の転属願いか、いい加減違うところへ行きたいものだ。

… 前よりも嘆願書の中身を濃く、ビッシリと裏面まで書き連ねてやろう。

7 神の加護

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉であります。

本日は、私とターニヤにとつての、良い報せと悪い報せがあります。

良い報せからいきましようか。

ええ、この度、エレニウム工産製95式演算宝珠の開発打ち切りが決定致しました。

やっと、爆死の危険から解放されるのです！

とても、嬉しいことです！

では、悪い報せです。

開発打ち切りを受けて、開発責任者のドクトルがどうせ打ち切りになるならと、今まで危険すぎてできなかった実験をやろうと言いだしたのです。

ふざけるな！

何でも、ドクトルの頭の中に神が舞い降りてきたのだ、天啓を授かったのだ、ついに完全に狂ったのだと思います。

やりたくないですが、これ以上付き合わなくていいのなら、とスタッフの皆さんは抵抗も消極的です。

貴方達はいいですよ、安全な場所で観測機を眺めてるだけなんですから。

実際に実験するのは、私とターニヤなんですから…。

「少尉達よ、準備はよろしいかね？」

どうしてこの人は、爆発がほぼ確定しているこの実験で、こんなにもニコニコと、ウキウキとしていられるのでしょうか…。

バカと天才は紙一重とはよく言ったものです、紙一重というよりはもはや単なるバカとしか思えません。

「ドクトル、本気でやめませんか？試算では、最悪我々は演習場ごと

吹っ飛びかねませんが。」

「それが、なにか？ 科学の進歩には犠牲がつきもの。それに、君達だけではなく、私もここにいるのではないか。」

「正直に申しまして、その潔さを別のベクトルに向けていただきたいのですが。」

何故こんなにも自信満々なのでしょうが……。

「……？ 科学者足るもの、探究に忠実であるべき。つべこべ言わず始めたまえ。」

「私達は軍人です。このようなことで死にたくありません。」

「じゃあ、命令だ。とにかく、さっさとやりたまえ。」

何を言っても聞かない、無駄。

人間としては難ありどころではないが、頭脳は本物だから質が悪い。

「では、ターニヤ。始めましょうか……。」

「アレクシア、短い人生だったが今までありがとう。お前だけでも生き残ってくれ……。」

「どうして死ぬ前提なんですかつ!？」

「ええい、いつまで喋っているのだ！ さっさと始めたまえ！」

はあ……。最悪ですね。

ドクトルに天啓を授けた？ 神とやらは相当、私達のことを殺したいらしいです。

「…… 95式へ魔力供給開始。」

「観測班了解。無事を祈る。」

もう多少のケガで済むなら、命さえあれば……。

「なに、安心したまえ。成功は約束されたようなものだよ。」

「…… ドクトル、一体どこからそのような自信が？」

本当に。今まで失敗の連続だったというのに。

「なに、簡単なことだったんだよ。」

「と、申しますと?」

「私は、主任技師。少尉達が、首席試験要員。つまり、我々が反目せず、協力すれば事を為すは容易いということだ。」

「もう少し早く、それに気づいてくだされば、私達ももつとケガは少なかったはずなのですがね...」

「はっはっは、すまなかったね。」

「ですが確かに、その通りではありませんな。」

「だろう?そして、私は先日天啓を得てね。」

「... 天啓、でありますか?」

またドクトルが言い始めた、夢でも見ていたのでしよう。

「そうだとも。我々が共に、神に成功を祈願すれば、信ずるものは救われようとな。」

「..... は?」

そんなことで成功すれば今までの苦労は何だったのかと...。

あれ、ターニヤが何だか青い顔をしていますね、どうしたのでしょうか。

大丈夫なのでしょうか...。

「驕らず、謙虚な気持ちになるのが重要だということだが。」

「いえ。その前なのですが...」

ターニヤは何だか、『神』について思うところがあるのでしようね。

そういえば、以前お互いの秘密を打ち明けあったときに、何度目かの時に言っていたような...?」

「いい機会ではないか。三人で、神に成功を祈ろうではないか。」

「ドクトル、貴方は無神論者では?」

「発明の神が私に舞い降りたのだ。私は、今や敬虔な信徒だよ。」

「ついに、打ち切りのショックで狂ってしまわれたのでしょうか、ターニヤ、気にすることはありません。」

「..... そうだいいが。」

「我らが発明の信徒となり、祈願すれば成功は間違いないのだ。」

「…ちなみに、私達が祈願せねばどうなりますか？」

「まあ、仲良く殉教というところだろう。」

狂人の言うことはよくわかりませんが、せめて死なないようにしなければ…。

「今すぐに、メイックを呼びましょう。或いは、私が楽にいたしましようか？」

「落ち着け、アレクシア・デグレチャフ少尉。君も神に会ったことがあるのだろうか？お互い、神を信じれば救われる。」

…：… ドクトル、一体どこでそれを。

その話は、私とターニヤの間でしかしていないはず。

私がターニヤの秘密を漏らすはずがありませんし、ターニヤも自分の秘密を言いふらすようなことはしないはずです。

…：… 何だか、嫌な予感がしますね。

そう、思った矢先。

「魔力係数が、急速に不安定化!? 魔力暴走です!」

「そんな!? 核が融解寸前! 総員退避ー!!!」

観測班の悲鳴を耳にしながら、私は意識を失う直前まで、ターニヤを案じ続けた。

気味の悪い何かが、何処かでにやりと笑ったのを、確かに実感した。

ああ、あいつが。

あいつらこそが。

ターニヤを苦しめ続ける、悪魔、なのですな。

8 転属

「主はおられた！奇跡だ！！信じる者は幸いなり！！」

おはようございます、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉であります。

実験直後、意識を失ってしまいましたが、ドクトルの狂気じみた叫び声で意識だけ起こされました。

最悪の気分です。

はっ、ターニヤは、ターニヤは無事なんでしょうか？

「落ち着かれよ、主任。」

ターニヤの声だ、よかった…。

……あれ？

なんだかものすごく近く、耳元でターニヤの声がしたような…？

「おお、デグレチャフ少尉。実験は、成功だ！！共に神の御名を讃えようではないか！！！」

「さあ、さあ、私に奇跡の恩寵を見せてくれ！」

「管制、95式の制御術式は正常か？」

あ、ああ…。

ターニヤに、抱えられている…。

抱っこされている…！！

「つと、アレクシア、気が付いたか。よかつ… うわ！やめろ、抱きつくなー！」

「ターニヤ！よかった… 本当に、よかった…！」

思わず、抱きしめてしまいました。

…って、ここ、空じゃないですか！！

「うわっ！あ、危ない…。空じゃないですか！！ターニャ！！」
「私に言われてもな…。」

とりあえず、ターニャから離れるために、私も飛行します。

「… ありがとうございます、少尉達。正常ですね、見た限りにおいては。ですが、観測機器の故障かもしれません。」

「一体何に感謝されているか分からんが。確かに、機器の故障かもしれない。仕方ない。95式は封印し、研究所で検査をするべきだろう。」

「そうです、こんな危険物、さっさと封印あるのみです！」

降りようと思ったその時でした。

「何を言う！！今すぐに、起動したまえ少尉！！」

「ドクトル、正気ですか…？」

「… 起動する。理論上は成功するか工廠が吹き飛ばかだが、な。」

「笑えないジョークですよターニャ…。」

仕方ないです、ここまできたら私も付き合おう。

ターニャだけに危険なことをさせるわけにはいかないのです。

どんな爆発を起こすのか、とビクビクしながら起動しましたが。

演算宝珠の回路に魔力を走らせて、4核の同調を開始。

今までの欠陥品とは打って変わって、とても順調かつ、スムーズに魔力が走り、核の同調に至ってはそれを意識せずに済むほど滑らかです。

魔力のロスに関しては、ほとんど理論値と同等の結果を出せているに違いないと思える程です。

なんですか、これは。

とんでもない性能、すばらしいと言うほかありません。

本当に、ドクトルに神が降りたのでしょうか…。

「おお、主の奇跡は偉大なり。主を讃えよ。その誉れ高き名を。」

「…ターニヤ？」

幻聴ですかね？私の耳もドクトルの頭同様に壊れてしまったのでしょうか？

「成功した？…まさか、本当に!？」

観測班が驚愕の渦に叩きこまれ、疑問の叫びをあげたことで、私は我に返る。

「…今、私は何を？」

「ターニヤが…。神を賛美した…？ターニヤが？」

おかしい。

ターニヤは、神なんて信じていないはずです。

むしろターニヤが神であると言ってもいいほどに可愛いです
が…。

おっと、失礼しました。

「ああ、少尉達よ。君達にもわかるかね？この信仰が。奇跡だよ奇跡
！」

「奇跡？」

「唱えたまえ、主への賛美を。見たまえ、奇跡を。」

…まさか、意識を失う前に感じた、あの気味の悪い存在のこと？

最高峰の宝珠と引き換えに最悪な体験をしてしまってから数週間。
どこでもいいから、こんな狂った場所から、ターニヤと一緒に逃げ
出したい。

そんな願いを叶えるかのように。

「我々が転属、でありますか?」

この報せを、ずっと待っていたのです。

ようやく、私達の悲痛が、嘆願が、通ったのです!

「ああ、転属だ。上は、エース達をあそばさせるつもりはないらしい。

ターニヤ・デグレチャフ魔導少尉、貴官は第205強襲魔導中隊の第三小隊長だ。

並びにアレクシア・デグレチャフ魔導少尉、貴官はターニヤ・デグレチャフ魔導少尉の、副官だそうだ。」

ターニヤと一緒にです!

嘆願書に、『絶対にターニヤ・デグレチャフ魔導少尉と同じ職場がいいです』と何度も何度も書いた甲斐があったのでしよう!

どうやら人事の人たちは、士官学校時代の私達を知っているらしく、考慮してくれている...とどこかで聞きました。

「それと、おめでとうターニヤ少尉、アレクシア少尉。先の戦功で、貴官らには航空突撃章が授与される。さすがに、銀翼に比べるのはおかしいかもしれないが。」

「ありがとうございます。」

また勲章が一つ増えました。

特に意味など、感じませんが。

その後、荷物を素早くまとめ、すぐに指定された部隊へ移動します。私が遅刻しては、姉であるターニヤの尊厳や素晴らしさが減ってしまうような気がします。

ですのでさっさと、移動するのです。

「よくきたなターニヤ少尉、アレクシア少尉。歓迎しよう。中隊長の

イーレン・シユワルコフ中尉だ。」

ふむふむ、なかなか正統派、良さそうな上司ですね。

無能ではなさそうです、よかったです。

もしも無能であったならば、私達が間引かなければいけませんから。

「ありがとうございます。ターニャ・デグレチャフ少尉であります。」

「私はアレクシア・デグレチャフ少尉であります！」

もう既に名前を知っておられるようですが、軍人として挨拶を。

「うむ、銀翼突撃章保有者だ。期待している。」

「はっ！」

やはり銀翼突撃章、効果は抜群ですね。

勲章に価値は感じませんが、持っていて損はありませんね。

「よろしい。さっそくだが、状況を説明する。」

そうですね、仕事前に状況を知っておかねばなりません。

上層部での認識と、現場での認識が全く違う！などはあってはならないことですから。

「貴官らも承知しているように、現在大陸軍主力は、急速に再編・集結中であるが、西方戦線に来援するまでにはしばしの時間を必要とする。」

その軍団概要は知悉しています。

なにしろ、急な事態です。

上層部の狼狽具合は、教導隊まで動員して、とにかく西方防衛の確立を急ぐ姿勢が物語っています。

95式も継続評価試験という名目で、実質的に戦力として計算されているほどだ。

こんな、呪われたモノでさえ戦力として使わざるをえないなんて。

「集結状況はどのようなものでありましようか？」

「芳しくない。北方に輸送車両が払底しているせいで、西方への再配置には想定より1〜2週間ほど遅延するらしい。」

「本当に二週間程度で収まるでしょうか。再配置と言いますが、移動し、再編し、統制を回復するのは、容易ではありません。」

「アレクシア少尉、その通りだ。頭が痛い話だ。そこでだ、西方戦線では遅延防御を断念。機動防御に移行することが決定された。」

「…… そんなに、不味い状況なのですか。」

しかしどうして、共和国が帝国に？

いくら帝国が協商連合国と戦争中だからとはいえ、冷静に考えれば分かると思うのですが……。

西暦世界のフランスなら、もうちよつと冷静に分析できたかもしれません。

まあ、あちらのフランスはそういう冷静な分析を国の頭脳たる中央がなぜか理解できない上に、プライドだけは強すぎるという弱点を持っています。

「我々の中隊はその機動打撃部隊に抜擢されている。貴官らの奮戦に期待する。」

なかなかに厳しい状況ですが、頑張りましょう。

「なにか、質問は？」

「はい、中尉殿。我々の出撃地点は防衛拠点でありましょうか？それとも後方の拠点でありましょうか？」

やっぱりターニヤ、最前線に行きたくて仕方ないんだなあ……。

「喜べ少尉。最前線だ。」

「光栄であります。」

よかったですねターニヤ。大好きな最前線です！

私も、ターニヤと一緒に戦えると思うとウズウズしてきます。

「貴官らならば、そう喜ぶと疑わなかった。場合によっては、我々も拠点防衛の支援に従事しうる。」

「では、機動打撃を優先しつつも、防衛支援でありますか。」

「其の認識で間違いない。」

仕事が多いですね。その分良い報酬だといいいのですが。
私としては、ターニヤがほしいですね……。

おっと、危ない、想像したら鼻血が出てきそうになってしまいました。
失敬。

「最悪ですな。よほど、大陸軍の集結は難渋しているようだ。」

「ほう、わかるのかね？」

「敵戦力の摩耗を狙った機動防御ではなく、純粹な遅延目的となれば、
時間が如何に足りないか、間抜けな新任将校ですら悟りえましょう。」
「これだけ広範な戦線全てで遅延防御ができるわけではないですし、
ね。」

敵戦力を消耗させることを前提とした機動防御線ではなく、抑えきれ
ないがために、一部で敢えて突破させて叩かざるを得ない程に状況
はよくないです。

一応、組織的な機動防御ということなので、西暦世界の末期ドイツ
の東部戦線ほどではないのかもしれませんが、これは覚悟を決めざる
を得ません。

「… 評判通りの毒舌と頭脳だな。まあ、いい。我が中隊の状況は
知っているな？」

「はっ。当該方面軍全体で基幹要員が不足。すでに第205魔導中隊
からも一個小隊抽出されており、我ら第三小隊はその補充と認識して
おります。」

「問題ない。つまり、貴官の小隊は錬度不足も甚だしいのだ。拠点防
衛を主たる任務として欲しい。」

「つまり、新人教育をしつつ、防衛に徹する。ということでありましよ
うか？」

「そういうことになるな。」

うーん、新人教育ですか。ターニヤが嫌がりそうですね。

「機動防御線にもかかわらず、小官は、拠点防御でありますか？」
「予備戦力だ。」

予備、ですか。それならば幾らか教育の時間はありそうですね。

ですが敵も案山子ではありませんので、どれ程の余裕があるかは不明です。

「了解しました。状況によっては、拠点の放棄は許されるのでしょうか？」

「残念だが、これ以上の戦線後退は許容されていない。」

「では、可能な限り固守せよということでありますか？」

「上は、勝利かヴァルハラかを選ばせてくれるそうだ。」

勝つか死ぬか、ですか。

「素晴らしい。どちらも大好きです。」

「私達ならば、ヴァルハラに遠足に行く暇もありませんね。勝利のほうに近いです。」

「大変結構。では、さっそく中隊に貴官を紹介しよう。」

さて、とっても楽しい戦争を一緒に遊ぶ仲間達に挨拶ですね。

9 ライン戦線

こんにちは！

帝国軍、西方方面司令部直轄機動打撃群第七強襲挺団、第205強襲魔導中隊所属、

アレクシア・デグレチャフ少尉です。

何やらターニヤがぶつぶつ言っていました。疲れているのでしょうか。

私を抱き枕にするだけでは取れないほどの、疲れが溜まっているのでしょうか……。

ターニヤが心配です。

ああ、私とターニヤは双子であり、姉妹ですので、変な気持ちなどは一切合切ありませんよ？

抱き枕というのはですね……。

ずっと一緒だったターニヤと、別々の部屋、布団だと私が寂しいので、許可を取ってターニヤと一緒に寝ているのです。

ターニヤも一緒に寝る癖が抜けきっていないようで、私を抱きしめて寝るのです。

とても嬉しいですが、共に戦場を駆けてきたせいか、お互い血と硝煙の匂いが抜けきりません。

そんなことはどうでもいいのです！

現在、私達は拠点防衛任務をしています。

歩兵、砲兵の皆さんがほとんど倒してくださるのですが、多少の撃ち漏らしが出てしまいます。

それを狩るお仕事ですね、簡単でしょうか？

「小隊、撃ち漏らしを狩るぞ？用意は良いな？」

「はい、小隊長。いつでも行けますよー！」

小隊長はターニヤ。

ああ、今日もターニヤは凛々しく可愛いです。

「拠点内部でぬくぬくと給料泥棒も悪くないが、たまには仕事をしないと追い出されるからな。」

「違いありませんな。」

「運動がてら、スポーツを楽しむとしましょう！」

戦争だというのに、私とターニヤ、古参兵達は和気藹々としています。

新兵たちは、ずっとビクビクしていますが。

「まあ、ハイキングだ。美容と健康のためにも適度な運動を積むとしよう。」

「ああ、少尉殿は身だしなみに気を使われるのですな。」

「当たり前だ。社会人のマナーだぞ？」

「ターニヤは…小隊長殿は既に美しく可愛いですのに、さらに可愛くなられるだなんて！」

「副官！うるさいぞ！私語は慎め！！」

「どうして私だけなんでしょうか！！」

— — — side 新兵

まさか戦争が、ここまで恐ろしいものだとは。

想像よりも、何十倍も、何百倍も恐ろしかった。

…そんな戦場でどうして。

小隊長殿、副官殿は、まだ子供だというのに、あそこまで明るくできるのでしょうか…。

私は、戦争が恐ろしく思うと共に、こんなところで普段通り振る舞っていらつしやる小隊長殿、副官殿をも恐ろしく感じる。

―――― side アレクシア・デグレチャフ

「我々は、顔なのだ。」

「顔、でありますか？」

「軍の精鋭だと自覚を持って。ここでは我々が、軍なのだ。」

拠点防衛任務とはいえ、最前線。

「アイ・ママ。しかし、120ミリの集中砲火とは壮観ですな。」

「全くだ。しかし単なる猟犬役はつまらない。できれば、もつと別の方が良いのだがな。」

「そうですね。もつと、歯ごたえのある敵と戦いたいのですよね、小隊長。」

地味だし楽しくはないですからね、この任務。

仲間達と、ターニャとお喋りできるのは楽しいですが。

砲兵と歩兵の取りこぼし、ほとんど死にかけ連中にトドメを刺すだけですから。

「少尉、貴様ならそう言うと思じていたぞ。」

「中隊長殿、いかがされました？」

「これは、難敵がいるところへの……。」

「仕事だ。友軍支援になる。」

「友軍支援？この戦域で友軍に支援を行うのは、まずもって砲兵では？」

集成軍団砲兵が展開している地域です。

私たち魔導士が飛んで急行するより、120ミで吹き飛ばすほうが早いです。

「弾着観測班が、敵魔導師中隊にまわりつかれている。我々は、其の援護だ。」

「おや、他人事ではありませんなそれは。」

「私達も協商連合相手にやりましたね。」

「ああ、そう言えば。貴様らは以前北方で経験していたな。」

「はい、二度と御免ですが。」

「たった二人で、一個航空魔導大隊相手ですよ？こんなか弱い女の子にひどいですよね！」

「銀翼突撃章まで貰って、どの口がか弱いだなどと言うのだから！」

中隊全体が笑いに包まれました。

皆さんヒドイです！

「よろしい。ならば、援護は貴官らに任せよう。我々は、残敵掃討だ。」
「よろしいのですか？まだ、突撃許可は出ておりませんが。」

苦勞を知っているからこそ、助けに行け、ということでしょうか。

「なに、私の裁量権の範疇だ。なにより、砲兵隊からも要請が来ている。」

決まり、ですね。

行くしかありません。

「では、致し方ないですね。」

「ターニャと小隊の皆で、デートですね。場所は最悪ですが。」

「場所はな。せいぜい楽しもう、アレクシア。」

「はい、ターニャ。」

「では、ターニャ・デグレチャフ少尉、ただちに救援へ赴きます。」

「同じくアレクシア・デグレチャフ少尉、救援へ赴きます！」

「小隊諸君、誠に遺憾だが、敵は三個中隊。つまり、私が一個、副官が一個。君たちは残りものだ。」

「小隊長殿と副官殿だけ、エース願望でありますか？」

「いやなに、あと10機も落とせば規定で恩給と恩賜の休暇だ。そろ

そろ、休みが欲しいのだよ。」

「そうなんですよ、休暇は小隊長とデートなのです。美味しいグルメ巡りでもしましょうか。」

「なんともお羨ましい。」

「貴様らには相済まないが、まあ早い者勝ちだ。」

帝国は勝てるでしょうか。

現状ならば、協商連合を黙らせ、共和国を叩き潰すなど容易にできるでしょう。

ですが、その他の列強諸国が、我々の敵国に援助をしたら？

まして、参戦してきたら？

帝国一国では、厳しいでしょう。

一对世界、なんて。

「戦争は、勝っているうちに楽しむものだからな。」

「おや、お二方ほどの方ならば、絶望的な防衛線をもお好みになるかと思いましたが。」

絶望的な防衛戦。

末期ドイツの東方戦線。

終戦直前のソ連による満州侵攻。

沖縄戦。

どれもこれも、凄惨な、死体を増やすだけの戦場だと、記憶しています。

いつどこで知ったのか、定かではありませんが。

一時は勝利していても、覆される恐ろしさ。

… 帝国が協商連合、共和国に勝った時のために、上層部の人と接触し、この危険性を何としても伝えなければなりませんね。

もしくは、論文という形でも。

兵站の確保なども、西暦世界の第一次世界大戦に相当する戦争が無かったこの世界では貧弱と言うほかありません。

これについても、言及するべきですね。

ともかく、ターニヤと私の生まれ育った祖国です。
ターニヤのほうが大切ではありますが、失ってはならない帰るべき
家なのです。

「軍人だよ。命令があれば行くがね。」

「お好みになるわけではないと?」

「好き好む戦争狂は、なかなかいませんよ。」

「言うまでもないことだがな。さて、彼らが殿軍を楽しんでくれると
よいのだが。」

「ほう、どうされるおつもりで?」

「せいぜい、歓待してやるさ。鉛と魔力光は私のおごりだ。」

「無駄遣いはよろしくありませんが、使われずに腐ってしまうのも勿
体ないですからね、ちようどいいと思いますよ。」

「そうだな、すべて撃ち切ってもいいくらいだ。」

「ついでに、パスポートをお持ちか確認してみますか?」

「入国目的も、ですよ!きちんと審査をしないとイケませんね。」

「よし、そうしよう。」

「では、それがスタートの合図ですね。どうせなら競技にでもします
か?」

「ふむ、では撃墜数で競うとしよう。私に勝てたら、中隊長殿秘蔵のワ
インでもがめてやろう。」

中隊長の秘蔵ワイン!

飲みたいですが... まだ成人していません。残念です。

「なんともはや。では、小隊長殿独り勝ちの際は、我ら揃って本日の手
当て返上ですな。」

「うむ、悪くない。悪くないな。その賭け乗ったぞ!」

「私が一番だったら、ターニャ。一つ何でも言うことを聞いてもらいますよ。中隊長殿のワインも皆さんに奢るといふことで！」

「いいだろう、アレクシア。私が勝てば、アレクシアが言うことを聞くのだぞ?。」

何を命令されるのでしょうか…。どちらにせよ私にはご褒美では…!?

「負けませんが、小隊長殿、副官殿！」

「ごちんごそ、負けませんよ！」

10 ラインの悪魔

頭が重い。それに、意識も霞む。

部隊は、部下はどうなっているかの心配どころではない。

それどころか、次の瞬間には飛びかける意識をつなぎとめるので精一杯。

咄嗟に光学系の屈折光学デコイを展開したにもかかわらず、安全規定を大幅に超過する乱数回避の連続。

辛うじて、統制を維持しているものの共和国の精鋭と自負した中隊が、わずかに二人に翻弄されている。

わずかな間に、事態があまりにも急激に進展していた。

「MAYDAY MAYDAY MAYDAY」

始まりは、接敵を知らせる緊急警報。

あの前線戦域管制官が悲鳴を上げるのを聞くのは初めてだった。

「Break! break!」

指揮官が散開を指示。

遠距離から纏まって撃たれるほど馬鹿げたことはない。

即座にそれに従い散開したが、その指示に迅速に応じられる練度の高さであつたが甘かつた。

敵が見当たらないと首を傾げた瞬間に、バディの上半身が吹き飛ぶ。

「ション!?!」

「Bandit! Angell2」

「Angell2!?!」

攻撃を受けた方向を走査し敵を発見するも、あまりの高度に絶句する。

高度、12000。

魔導師の実用限界高度6000が馬鹿馬鹿しくなる高度だ。

対地上比で6割程度の酸素濃度という過酷な環境云々以前に魔力が枯渇する。

航空魔導師の実用限界が6000というのは、生半可な理由ではない。

であるのに、敵は12000だと？

「It is supposed to be a fighter
!」

「Shit! It's not! The magic particle
is detected!!」

戦闘機かとも勘ぐるが、やはり間違いない。

感知される魔力の粒子反応と魔力光。

紛れもなく航空魔導師だ。

薄くなる酸素濃度。

急激に低下する体温。

魔力の枯渇は致命的だ。

加えて、高所順応も大きな問題になる。

信じがたいことに敵の魔導師はそのすべてを克服し、あまつさえ戦争をしていた。

悠々と飛ぶ姿は、帝国の武力を如実に体現しているかの印象すら纏ってやまない。

「Climb! Climb and maintain 8000
!」

少しでも、こちらの弾が当たる距離まで近づき、迎撃しなければならぬ。

それでも8000という高度は、魔導師の限界を超えている。

しかし上がらなければ、的当てのようにむざむざ撃ち取られるだけだ。

—— side アレクシア・デグレチャフ

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導少尉であります。

現在、私は姉であるターニャと共に、共和国軍魔導士を狩っている最中です。

「簡単な仕事ですね。連中にとつては高度6000が限界です、私達はその二倍の高度にいるのですから。」

「そうだな、此処まで上がってはこれまい。」

談笑しながら、仕事をする。

こんなに簡単にスコアを稼いではしまっては、中隊の皆さんに少し申し訳ないですね。

……と高を括っていたのは完全に失敗でした。

高度12000までは来れないとはいえ、相手の弾が当たるかもしれない8000まで、奴らは上がってきやがりました。

敵とは言え、ロクに6000を超えたこともないような敵が、そこまで来れたことには感心します。

「ラインの悪魔共め！今日こそ、今日こそ貴様らを叩き落としてやる！」

「……貴方とは初見になるはずですが？」

私達も軍人です。

それに私達は、ライン戦線で多くの共和国兵をヴァルハラへ送っています。

多少の恨みくらいは買っているでしょう、と思っていました。まさか共和国内で「ラインの悪魔」などという名称が付けられるほどには恨まれていたとは……。

考え事はこれくらいにしますか。

今は上がってきた天晴な敵をヴァルハラへ送り届けてあげるのが私達のお仕事です。

つと、微弱ですが初期照準魔力反応。

ターニャはまだ考え事をしているようですね。

考え込んでいるターニヤも可愛いのでずっと見ていたのですが、今は戦闘中です。

「ターニヤ、戦闘中です。集中してください。照準されています。」

「ああすまない、そうだったな。ありがとうアレクシア。」

タイミングを見計らって回避。

直後、直前まで居た空間に何本もの魔力光が降り注ぐ。

「もう、危なかったですよターニヤ。気を付けてください！」

「だが私達にはこんなもの、スポーツのようなものだろうか？」

「それもそうです、ねっ！」

お喋りしながらも、ほとんど無意識に戦闘をこなしています。

ターニヤにたくさん教えてもらった意味がありました！

「なぜ当たらない！なぜ避け続けることができる！」

当たらないとはいえ、敵も8000まで上がってきてこの精度の射撃術式です。

相当な精鋭なのでしょいか。

「CPへ至急、敵魔導師はネームド。繰り返す、敵はネームド。」

「CP了解。現在増援が急行中。無理に撃破する必要はない。」

「増援把握。なれど、ここは私達の戦場。」

増援？そんなものが来る頃には終わってますよ。

「二帝国を侵すのであれば、協商連合だろうと共和国だろうと有象無象の区別なく排除するのが我らが使命。」

エレニウム95式を起動。

「空間座標把握、各目標の乱数回避軌道算出。」

「チャンバーへの魔力充填正常。」

どうやらターニヤも、同じことを考えていたようです。

派手にいきましょいか。

「CPへ、戦域空間爆撃警報。」

「CP了解。戦域空間爆撃警報を発令する。」

友軍にも衝撃が来るでしょう。

「ここは戦場、我らが主役。」

「去ね。不逞の輩よ。ここは、我らが帝国、我らが空、我らが故郷。」

「ああ、ターニヤ… 神々しいです、ターニヤ…。」

「汝らが、祖国に不逞を為すというならば、我ら神に祈らん。」

「あれ、そういえば、私は、私達は一体何を口走っているのでしょうか。」

「主よ、祖国を救い給え。主よ、我に祖国の敵を撃ち滅ぼす力を与えたまえ。」

「なぜ。」

「私にとっての神は、ターニヤだけです。」

「一体全体、何なのでしようかこれは!!」

「まさかとは思いますが。」

「ターニヤが時々口走る『存在X』とやらでしようか。」

「いつだったか、ターニヤにそれとなく聞いてみましたが、」

「アレは自らを『神』と呼称する世界の邪悪だ。私は奴らを許しはしない。」

「つて、ものすごく怖い顔で言っていました…。」

「まさか、その邪悪が？」

「ターニヤの敵が？」

「私をも利用しようとしている？」

「信心なき輩に、その僕らが侵されるのを救い給え。神よ、我が敵を撃ち滅ぼす力を与えたまえ。」

「エレニウム95式を使う度にこうなるのでは、使うべきではありませんが。」

「新型宝珠として、性能が突出して素晴らしいことには変わりないのです。」

「使わざるを得ないのです…。」

「告げる。」

「諸君は、帝国の領域を侵犯している。」

ターニヤの言いたいことを、私が紡ぐ。

私の言いたいことを、ターニヤが紡ぐ。

「我々は、祖国を守るべく全力を尽くす。」

「我々には、守らねばならない人々が背後にいるのだ。」

たとえ、どれだけ邪悪に邪魔されようとも。

たとえ、邪悪が私を利用し、嫌がらせをしようとも。

たとえ、邪悪がターニヤを利用し、私に悪夢を見せようとも。

「答えよ。何故、帝国を、我らが祖国を、諸君は侵さんと欲す？」

私は、私だけは絶対にターニヤを裏切らない。

ターニヤが私を、信じなくなってしまうかもしれない。

敵と認識され、殺されてしまうかもしれない。

それでも私は、ターニヤのことが大好きです。

私の魂が、この世界からいなくなる、その日まで。

この気持ちだけは何かあっても、奪われたくない！

『CPより、戦域へ警報。高魔力ノイズに警戒せよ。』

ああ、ちゃんと仕事してくれていますね。

十分な魔力も蓄積されています。

ターニヤと共に、敵を撃ち滅ぼすのみです。

「聖徒よ、主の恵みを信じよ。」

「我ら、恐れを知らぬものなり。」

充填されていた魔力が急激に解放される脱力感。

全身の細胞が吸い取られる魔力によって悲鳴を上げそうになりま

すが、エレニウム95式がそれを封じ込む。

苦痛が強制的に法悦へ変換されるぬぐい難い違和感。

喜びと苦痛のブレンドで頭がシエイクされる感覚は、何物にも形容

しがたい最悪なものです……。

「運命を嘆くなかれ。おお、主は我々をお見捨てにならず!!」

「遙か道の果て、我らは約束された地に至らん。」

なんなのでしょうかこの、不快な気分は。

おそらく、邪悪な存在による、呪いなのでしょう。

「っ、ゲホツツ、ゲホツ。」

「ケホツケホツ、ターニヤ、大丈夫ですか…。」

「ああ、魔力を使いすぎたか。高度を下げよう。」

敵も倒しましたし、こんな高さにずっと居る意味もありませんしね。

それに、まだ仕事が残っています。

「交戦中の共和国軍に告げる。すでに、勝敗は決した。」

「我々帝国が、共和国軍精鋭魔導士達をヴァルハラへ送り届けてやった。」

「投降するならば、ヴォルムス陸戦条約に基づき、捕虜としての権利を保障する。」

「抵抗するならば、お望み通り二階級特進とヴァルハラへの片道切符を差し上げましょう。」

今回は、私達の、帝国の、勝利です。

11 驚くべき軍人

—— ——— 帝国軍陸軍大学選考再審議会

「では、次に東部方面軍より、軍功枠推薦者をご覧ください。」

議事進行を務めるのは、陸軍大学の教官。

居並ぶ列席者は文字通り、陸軍の中枢を担うにたる人材。

そして、彼らが扱うのは、次代を担う人材の選抜。

通常、再審議とは合格に届かなかった存在を再審査し、場合によっては合格とするために開かれる。

もちろん、逆に合格に不適格と見なされた人物を弾くこともあるものの、通常はありえない。

軍の未来を担う人材の選抜に際して、帝国軍は一切手抜きがないように最善の注意を払っている。

だが、信じがたいことに、今回は合格者に対する疑義が提示されているのだ。

「今回の審議対象は、公平性追及の観点より、匿名審議の時点で最優が出されております。」

出願者の個人情報は一切省かれた書類を、複数の審査員が考査。

与えられるのは、実績・情報部・教育担当者による数値評価。

それによる講評は情実を一切排除し、比較的確な審査を可能としてきた。

そののち、個人情報が開示され、最終的に陸軍のエリートコースに上る士官が決定されるのだ。

この人事は厳正かつ公平なものでなければならぬものとされている。

「ですが、陸軍大学人事課長よりの異議によって、再審査請求が出されました。」

本審査は、その要請によるものであります。」

故に、議事進行役を務める教官の口ぶりも訝しむという口調になら

ざるを得ない。

匿名審議で優が出る士官ですら、数少ないのに最優、つまり首席合格者に疑義が出されているのだ。

これが、軍に有力な影響力を及ぼす将校の子弟や貴族関係者であれば、公平性に疑義ありとも言えるかもしれない。

だが、身上は軍人の遺族。

有力な身内はなし。

推薦者は何れも、赤の他人。

派閥や貴族との縁故も皆無。

推薦者は何れも、軍内において堅物と有名な現場上がり。

問題行動すら記録されていない士官だ。

これほど見事な経歴を実力で昇り詰めてきた士官に門戸を閉ざすように主張するなど、陸軍の伝統では大凡考えられない。

「レルゲン人事課長、貴官は何故、異議を申し立てられた？」

「現地部隊の推薦、士官学校席次、軍情報部による身辺調査、憲兵隊による調査報告書、軍功、何れも卓越した士官だ。何処に問題が？」

「さよう、全て最優か、それに準じるものであるのは事実であります。

ですが、小官は断じて受け入れがたいと認識します。」

だが、レルゲン少佐はその何れも認めたくえで、再審査を請求した、と明言する。

言い換えれば、それらのいずれも受け入れがたい、と。

「席次が2位と3位、憲兵との揉め事なし、情報部は愛国心特優、機密保持能力保証ときた。現地部隊からは勲章の申請まで出ている士官だぞ？」

「これを跳ねるならば、今季は入学者ゼロとせねばならない程だ。」

「今回は、特例で匿名審議が解除されています。こちらをご覧ください。」

さすがに、見かねたのだろう。

同席した人事局総務課長が関係書類を配布する。

本来であれば、匿名審議の内容を再審査する際も匿名が原則ではある。

だが、状況次第では彼の権限によって解除する事もできた。曲がりなりにもレルゲン少佐を知っている彼は、少なくともレルゲン少佐に助力しようと思っている。

ただ、それはどちらかと言えば彼の意見を支持するからではなく、彼のキャリアを守ろうという善意からだ。

なにしろ、この戦果をあげたのが齡11の幼子だ。

まともな士官ならば、誰だって戦場に出すことを躊躇すべき子供。

レルゲン課長が、彼女達の軍大学進学に反対する理由もその年齢を危ぶんでだろう。

そのくらいの認識だが、ともかく彼はこの案件については機密保持を解除することに同意したのだ。

「……………このような子供が、本当にこのような戦果をあげたとしても、いうのかね？」

さすがに、事態の異常さが認識されたためか、室内も静まり返る。

一人目は弱冠11にして、魔導中尉任官。

士官学校次席卒、銀翼突撃章保持、野戦航空戦技章推薦保持。

撃墜スコア62、(協同22)のエースオブエース。二つ名は『白銀』。

二人目も同じく弱冠11にして、魔導中尉任官。

士官学校参席卒、銀翼突撃章保持、野戦航空戦技章推薦保持。

撃墜スコア55、(協同17)のエースオブエース。二つ名は『白百合』。

そして、そのどちらも教導隊所属の経歴あり？

「魔導士官の養成は急務であります、さすがに年齢が引っ掛かるか。」

「さよう、魔導士官としての能力がいくら優秀でも、将校として使えるかは別の問題だ。」

「能力に問題はありません。」

なにより、軍功、現地の推薦と形式は完全に満たしております。否定する要素ではありません。」

「短期促成教育の士官達だ。戦術知識に偏りがあるろう。」

将校教育の方が、適切ではないのか。」

だが、一部の将官はそれでも疑義を呈する。

なにしろ短期促成の教育だ。実戦である程度は通用するにしても、知識に穴がある可能性は常に付きまとう。

単純な戦術レベルの指揮ならばともかく、複合的な要素を勘案せねばならない部隊長以上の指揮には適切な能力を有するだろうか？

その疑問を彼らは常識的に抱く。

「彼女達の卒業論文は、『戦域機動における兵站』『武器製造における工程及び使用部品の統一・並列化による兵站負担削減』です。以前、陸軍鉄道部、兵站管理部門が大絶賛した代物ですよ？」

しかし、匿名審議の時点で特優を付けた考課担当者らは譲らない。

なにしろ、戦略レベルで議論ができる、という実証を彼女達は卒業時点で出していた。

通常、勇ましいことを好む士官学校生とは思えない程地味な題材を用いた論文だ。

彼女達の戦果を考えれば、意外と思われるほどに。

だからこそ、匿名審議の時点で彼女達が11歳などと誰も想像し得なかつた。

概要は、単純明晰だ。

物資集積の重要性と、デポの配備と規格化による円滑な物流による兵站線の確保。

極めて、効率化を重視し物資の緊急備蓄を除き、死蔵を排除する事を目的にしている。

後方で死蔵される物資への批判から、前線で正常な戦闘行動を継続するため不可欠な物資管理の提案。

一読した陸軍鉄道部長が絶賛し、鉄道部への配属をほとんど懇願したというのは兵站関係者では有名な話らしい。

また、武器製造に関しても現在の帝国の弱点を克服するのに最も適していると言っても過言ではない。

現在の帝国が使用する武器は、ある程度規格が決められてはいるも

の、弾が0・2^リ違うだとか、銃の口径と入っている弾が合わないだとか、様々な問題が発生している。

これを根本的に、武器製造に使用するネジの一本まで、全てを規格化し統一するといった内容であった。

全く同じ部品、武器ならば、弾が合うかどうかなどで悩む必要もなくなる。

わざわざ一つの火砲のために合う弾を探す必要がなくなるのだ。運搬においても効率が上がるだろう。

事実、査読した幾人かの熟練した野戦将校も軒並みこの二つの論文を絶賛している。

曰く、前線で攻勢に出て、物資が不足した経験を持つ人間ならば、この論文が理解できないわけがない、と。

その多くが、陸軍大学の卒業論文であると誤解していたことも付記しよう。

兵站・製造レベルの議論ができる時点で、もはや近視眼的と形容するのは困難だ。

「士官学校時代の現地研修で、すでに陸軍大学への推薦がヴァルコフ准将名義で出ています。現場は高く評価しているようです。」

それどころか、一部の将校らは彼女達の資質を極めて高く評価していた。

紛争地域における活躍を賞賛して、ヴァルコフ准将などその時点で陸軍大学へ推薦しているほどだ。

能力が評価されることこそあれども、疑問が提示される事は一度たりとも彼女達にはない。

「それこそ、何故その時点で審議されていない。」

「……小官が、年齢・戦功不足を理由に棄却いたしました。」

そして、レルゲン少佐の解答に対し、やはりかとばかりに頷くと、厳しい目線を向けた。

「レルゲン少佐」

「はっ、なんでありませんようか、大佐殿。」

「貴官の公平性に疑義をはさみたくないが、一度目はともかく、今回の

審議要求はどのような理由によるものか。」

レルゲン少佐にとってその答えとは、ターニャ・デグレチャフ中尉、アレクシア・デグレチャフ中尉二人の人格へのぬぐい難い不信感を有するからであった。

「精神鑑定・情報部の機密保持能力検査、何れも極めて高い数値が出ていることを踏まえての発言か。」

「はい。」

「貴官は、この検査に疑義を呈するののか？」

「はい、いいえ。何れも適切な検査結果であったと認められます。」

それらの調査は、いずれも適切な数値を出すことだろう。

なにしろ、彼女達の異常性はその中にはないのだ。

まあ、無理もない。

「レルゲン少佐、私は貴官の発言が記録に残されていると明言した上で確認したい。」

「はっ。」

「何故、貴官はこの二人の中尉に対し、人格上の疑義を抱くのか？」

「小官は、3度彼女達を見かける機会がありました。」

一度目は、卓越した士官候補生だと思った。

二度目は、恐るべき士官候補生だと思った。

三度目は、狂った士官候補生だと確信した。

「公的にか、私的にか？」

「何れも陸軍大学の公務によるものです。士官学校査察時に彼女達を3度見ました。」

「彼女達が問題行動をおこした、そう主張するのかね？或いは、言動に問題か？」

「当時の教官らの所見をご覧ください。一言、『異常』と書きなぐられております。」

一番、二人に接する機会が多かった指導教官が面白い記録を残している。

全てにおいて卓越した、などと評価しつつも『異常』と私的に書きなぐったのだ。

彼の抱いた違和感こそが、彼女達の本質ではないのか。

通常、欠点を指摘する事はあろうとも、『異常』と指導教官が記すのはありえない。

「・・・ふむ、故なしとも言えないか。説明を。」

「異常なのです。」

すでに、完成した人格と視野を有し、人間を物と認識している士官候補生など初めて見ました。」

まるで、完成した機械の様であった。

姉のほうは命令を完全に順守し、達成する。まさに、理想的な士官だ。

それでいて、現実を理解し、空論なぞ一度も耳にしなかった。

到底、常人とは思えん。

妹のほうは姉に忠実に従い、姉が手を下すまでもないとばかりに行動する。

言葉で会話せずとも、姉の意図をほぼ完璧に読み取り、姉にとっての理想的状況を作り出していく。

姉妹とはいえ、これほど他人に忠実な人間がいるだろうか？

12 異常な軍人

—— ——— 帝国軍陸軍大学選考再審議会

「秀才特有の現象とは？」

「間違いなく現場で通用します。事実、ヴァルコフ准将と情報部が連名で二級鉄十字の申請を出していました。」

なにより、あれらを新任というには、違和感しかない。

権限を限界まで活用した結果、すでに少尉任官以前に実戦参加の疑惑すら見つかった。

わずかな手掛かりだが、総合すれば情報部の作戦に関与した疑いが濃厚。

叙勲の手続き段階でさすがに棄却されているものの、二級鉄十字が申請される時点で、何かがあつたのはまちがいない。

「……現地研修中にか!？」

驚きが全体に広がり、一瞬室内にざわめきがよぎる。

いくらなんでも、信じがたい話だが短期間のうちに叩きだした経歴は、それに信憑性を付与するのだ。

現地研修中、つまり9歳程度の子供が、実戦参加した揚句に叙勲の申請を得る？

もしこれを外部で聞けば下手なジョークと一蹴するところだ。

「情報部を締め上げたところ、極秘裏になんらかの作戦に参与させた可能性を示唆しました。」

国境の紛争地域。

士官候補生の研修地としてはかなり危険度の高い部類だが、そこまではまあ、良いだろう。

だが、屈強な兵士でさえ悲鳴を上げる長距離浸透訓練を、実質敵地で行っている？

完全戦闘装備で、夜間に、匪賊徘徊地域を打通して、孤立した友軍

基地まで行軍するなど、士官候補生の指揮とは思えない。

締め上げた知り合いの情報部員は、てつきり叩き上げの少尉が指揮した部隊が作戦参加したと考えていたほどだ。

それはそうだろう。そんな力量がある指揮官ならば、情報部だって頼ろうと思うはずだ。

まさか、研修中の士官候補生だとは夢にも思わなかったはず。

今では、叙勲申請が棄却されたのも、案外情報部が候補生だったと遅れて悟ったからではないかと疑っている。

「……士官候補生が、現地で、情報部から叙勲申請をだされるほどの作戦に関与した、と?」

ここまでくれば、さすがにその異常さが無視できない。

睨みつけられた情報将校らは知らないとばかりに首を振る。

だが、彼らにしても左手のしていることを右手が知らないという原則は知っているのだ。

調べれば、すぐに何かが出てくるだろうということぐらいは、予想しているに違いない。

顔色が、先ほどから急激に青ざめ始めているのだから。

「許されるならば、機密情報の開示許可を頂きたく思います。」

「そちらは調べておこう。それで?それだけならば、優秀な士官というに過ぎないはずだが。」

検証はこちらでおこなう。

そういう意味合いを込めつつも、座長はそれが事実だろうとは確信していた。

だが、それだからこそ、彼は疑問に思わざるを得ないのだ。

年齢、戦功、考課、何れも問題のない士官に、何故彼はここまで疑義を呈するのか、と。

「士官学校在籍中に、彼女達は命令違反者に魔力刀を突き付けています。」

「……跳ねっ返りを叩き潰すのも、上級生の仕事では?」

極言すれば、私的制裁は軍法で禁止されているが、明文化されていないルールもあるのだ。

例えば、訓練中のけがは事故であり、上級生と格闘訓練中にけがをすることもままあると。

言い方は悪いが、その程度で、処罰していれば、軍人の半数近くはなにがしかの悪評を得ていることになる。

「本気で頭をこじ開けかねませんでした。教官が制止しなければ、一人を廃人にしたはずです。」

だが、違うのだ、とレルゲン少佐は叫びたい衝動を抑えて説明する。居合わせた者にしか、理解できないことはよくわかっているつもりだ。

「……少佐、教育係の発言を信じていれば、今頃軍は死体だらけだぞ？」

軍の教育係が新兵に過激な言葉を飛ばすのは、軍にとって通常のことには過ぎない。

海兵隊や航空魔導士官において訓練時の新兵に対する罵詈雑言など、殺してやるならば、まだ可愛い方だ。

貴様の頭をかち割ってやる、空っぽの頭を吹き飛ばしてやる、などいくらでも平然と教練場で響き渡っている。

「やや過激な傾向があったとしても、さすがにそれは、微妙な評価だ。」
「年齢を考慮すれば、よく自制したと評価もできる。」

その程度、はつきり言って、可愛いではないか、と多くの軍人は自らの経験則で判断してしまう。

彼らは、見ていないがためにそう判断してしまうのだ。

彼らの多くは、新兵教育時に、それこそ家畜のように怒鳴られ、まごまごするなど魔力刃で斬られかけている。

そして、今現在に至るのだ。その経験からしてみれば、不服従を繰り返す新兵に対して魔力刃を突きつける程度、驚くことでもない。

言葉にしても分からない馬鹿には、多少お灸をすえるか、素振りを見せるくらいは、許容されているのだ。

むしろ、いちいち不服従の咎で、軍法会議にぶち込まないだけ温情的だとすら判じている。

なにしろ、上官への反抗は最悪銃殺すら含めた極刑。

言い換えれば、判断能力の少ない新兵を銃殺するくらいならば、殴り飛ばす方が温情的だと彼らは信じている。

「ふむ、まあ人事課長の危惧は年齢と自制できるか、という点で見ればまあ、わからなくもない。」

そこまでくれば、彼らの結論は揺るがない。

確かに、年齢不相応のところがあるのは認めよう。

新兵をしごいているという人事課長の論説も、まあ行き過ぎはあるにしても、許容範囲。

異常な才能を持っていることに、人事課長が危惧を有するののもまあ、理解できなくはない。

だが、陸軍大学への進学はむしろ彼女達が受けしていない分野の教育を提供することで、有能かつ卓越した士官を養成できるに違いない、と。

「だが、やはりレルゲン少佐、君の意見は主観的に過ぎる。客観性を欠くと言わざるを得ないのだ。」

そして、やや動揺こそしたものの、彼らは彼女の合格を素直に承認することにする。

「もちろん、君が公平に見ようとした事実は認める。だが、君ともあるうものが、印象に囚われすぎだな。」

「まあ、よく調べている。情報部の締め上げが課題だな。」

むしろ、彼らは人事課長が本気で彼女達の問題を取り上げた、とは今やだれも認識していない。

軍内力学において、卓越した遊泳術を發揮しなければならぬ人事課長が表だって情報部を批判できるはずもないだろう。

だから、別の話題にかこつけて批判を展開したのだ、と多くは見ている。

言葉にこそしていないものの、人事考査の途上で、発見した情報部の不透明な動向を叩く題材としてこの審査請求だ。

情報部からの評価が、過去の秘密作戦を反映した不透明なものだ、と。

確かにこれならば、彼の失点とも言えないが、功績の方が大きく、評

価されるだろう。

情報部に至っては、レルゲン少佐を追求するどころか、謝罪する側に回る。

つまり、大凡の評価は人事課長はよくやるな、という程度の認識であつた。

要するに、公平性を追求しつつ、情報部の秘密主義に疑義を呈したのだろうと。

「苦勞だった、レルゲン少佐。彼女達の審査請求は棄却するが情報部の再調査要請は受け入れよう。」

「……ありがとうございます。」

かくして、レルゲン少佐の意図とは裏腹に、だれも、だれもそれを止めようとはしないのだ。

13 帝国陸軍大学

前線に比べて、後方勤務とは快適ですが、刺激が足りませんね。食べられる食事は前線とは比べ物にならないくらい美味しいのは、最高ですが。

ああ、さつさと大学など卒業し、前線へ赴き、ターニヤの勇姿を見たいものです……。

おっと、大変失礼しました。先に挨拶をせねばなりませんでした。こんにちは、アレクシア・デグレチャフ中尉、11歳です。

今年から、大学生になりました。

帝国陸軍大学ですが。

大学生になれたからには、知っている知識の復習などよりも、論文を大量に書き、ターニヤの気苦労を減らさねばなりません。

兵站、航空機の運用、前時代的なドクトリンの撤廃など、やることは膨大です。

そのうちの数パーセントでもいいのです、改善せねばなりません。士官学校卒業の際に私とターニヤの書いた論文が高く評価され、現実に反映されつつある……らしいです。

嬉しいですね。

しかし大学生活というのも悪くはありませんが、いかんせん砲弾は飛んでこないですし、航空魔導士のスクランブルもありません。

戦争中なのに、なんと平和なのでしょうか。

「おはよう。ラーケン衛兵司令。」

「おはようございます。ラーケン衛兵司令。」

かけられた声で、ようやくやく接近に気がつく。

本当に、気配すら感じられなかった。

曲がりなりにも、実戦を経験してきたとはいえ、やはり戦地帰還組からすればなまってるのだろう。

それとも、彼女達が卓越した兵士だからだろうか？

「おはようございます、中尉殿。失礼ながら、今日もライフルをお持ちで？」

下士官として、幾人もの将校を見てきたが、彼女達ほど前途が明るい士官も少ないだろう。

聞けば、わずか10代で陸軍大学に入るなど前代未聞という。

それ以前に、10代で中尉任官という経歴もありえないのだが。

もしも、何も知らずにそのことを聞けば、一笑して笑い飛ばすに違いない。

頭でっかちの秀才参謀だって30代に行くか行かないかだ。

そんな限られた枠を10代前半の餓鬼がとれるものか、という笑い声を自分が出していても不思議ではない程に。

だが、世界は広いらしい。

まさか、戦場で一度も後れをとったことのない自分の背後を、あっさり取ってしまう士官がいるものだ。

明らかに、二人のデグレチャフ中尉殿は、外見で侮ってはいけないう類の士官だろう。

聞けば、毎日のようにライフルと演算宝珠を持参し、当直の衛兵司令に預けているらしい。

武器を手放さないのは、戦場での経験だろう。

たまに、戦場帰りで武器を精神的に手放せなくなる奴もいるがこれとも違うようだ。

別段、武器を手放すと不安に駆られるという様子もない。

要するに、習慣として、武器をもつことを自らに課しているということだ。

常在戦場の心得というが、ここまで貫徹していれば、繰り返しになるが、この年で野戦航空戦技章を授与されるだけのことはある。

叩きこまれた戦訓と、下士官兵への適切な態度。

次に戦場立つ時は、年齢で敵兵を区別することなく、撃たなければ死ぬかもしれない。

一つ学んだと思っておこう。

「ああ、恥ずかしながら、なかなか習慣という物は直らないらしい。」
「後方とはいえ、いつ敵魔導士が浸透してくるやもしれませんから。」

その気持ちはとてもよくわかる。

自分も、月明かりのある寝台で寝られるようになるまで、常に遮蔽物を無意識のうちに探していたものだ。

別段、安全と分かっているとしても、戦場において命がけで身に付けた習慣は簡単には変わらない。

「いえ、御立派なものです。」

むしろ、しっかりと戦場の要点を理解しているということに他ならないのだ。

正気を保ったまま、戦場で何が重要かを理解することが、青い新任少尉にとっての試練である。

戦場とは彼らの信じる建前が激しく現実に蹂躪される世界なのだ。勇ましき、栄光、名誉など泥まみれになって、殺し合い、その中で

少数の例外的な士官が名声を手にする。

その少数だけが知っている秘密は、実は難しいことではない。

下士官兵の言葉に耳を傾けて、彼らを心服させる意見を出せればいいのだ。

だが、これができる士官は本当に、本当に少ない。

「ありがとうございます。」

「ああ、叩き上げに保証されるほど嬉しいことはない。」

だから、目の前の少女達の外見ではなく、内実に敬意を払い、真摯に対応する必要があった。

叩き上げを評価できる士官は、伸びる。

そう思いながらも、衛兵司令は自分の職務を忠実に果たすことで、小さくも恐れ多い二人の中尉殿への敬意を示す。

「しかし、失礼ながら、本日の御用向きは？」

世間一般で言うところの安息日。

つまりは、日曜日だ。敬虔な信徒ならば大半は教会に行くし、人によつては懺悔もする。

このお二方も午前中はよく教会でひたすら真摯に祈っていると聞く。

なにより、実際ひたすら聖像を見つめる彼女の姿を目にしたのは、一度ではない。

時間帯からして、昼食をすませたところだろうし、陸軍大学とて日曜は任意だ。

まあ、月曜から土曜は過酷極まるらしいが。

「なに？ どういうことか。」

「ご存じのように、本日は休日であり、講義はありませんが。」

講義があるならば、学生が登校するのは当然だが、休日に陸軍大学へ用件もなく足を踏み入れさせるほど軍はぬるくない。

もちろん、相応の理由がある限りにおいてその限りではないのだが。

「ああ、簡単だ。図書室を使いたい。寮の資料室では事足りん。」

「現在の戦争の常識を学ぶことで、敵諸国への対策ができるというものです。」

そして、誠に単純なことながら、お二方は実に、実に勤勉であられる。

気難しい司書長ですら、その知識と好奇心、向学心を賞賛しているというのだから、軍人の鑑というべきかもしれないだろう。

何より、古い戦訓の分析と概念の再分析は参謀本部の作戦課をして驚嘆させるほどだと、古い上官から耳にした。

この小さな頭に、何が詰まっているのだろうか、本気で感嘆したことを覚えている。

「失礼いたしました。毎度のこと、恐れ入りますが、武器をお預けになつてご利用ください。」

普通ならば、将校の私物を預かるのは、余計な手間がかかり気も乗らないものだが、このお二方は別格だ。

戦場で、ライフルほど信頼できる戦友は皆無である。

そして、魔導師にとって、それと同じくらいにかけがえのないものが演算宝珠だ。

これを預かるのは、名誉でこそあれ、手間と感ずることではない。「そうさせてもらおう。では、失礼する。」

「いつもいつも、ありがとうございます。ではまた。」

手早く所定の位置で申告書を書き上げ、慣れた手つきで、保管証明書を受け取り、お二方は校内へと進まれる。

さりげなく見たが、背後から見ても、その足取りは一切躊躇が無い。戦友を預けることに躊躇が無いほどに信頼された、と思えば我もなぐ嬉しくなるものだ。

「…… 准尉殿、随分と、態度のでかい餓鬼ですね。」

だが、その下士官冥利につきる感情を理解できない馬鹿が水を差してくる。

軍隊生活に慣れてきた上等兵は得てして士官学校出の士官を馬鹿にする傾向があるが、これは修正が必要な水準だ。

その程度の頭だから、未だに曹への道が無いのだとすら思えてきて、頭が痛い。

あの程度の年齢の方が、士官で、この馬鹿は年齢以外なにも取り柄が無いとは。

「馬鹿か貴様？ ション便臭い餓鬼どころか、戦地で浴びた返り血の匂いをまだ漂わせている硝煙臭い餓鬼だぞ？」

さすがに、実戦経験のある軍曹がたしなめるものの、まだ認識が甘い。

あそこまで徹底した軍人になるには、古参兵の中でも才能と戦争への愛情が必要だ。

言い換えれば、人間として戦争を嫌い抜きながらも、どこかで戦火に恋焦がれる人間でなければ、彼女を理解できないのだろう。

「軍曹、貴様の認識はその程度か？」

「はっ？ いえ、もちろん良い上官になれるとは思いますが。」

もちろん、よい上官になられるだろう。

自分であれば、彼女達が大隊長、上官であれば、喜び勇んで従うは

ず。

突撃だろうと、突破粉碎だろうが、遅滞防御だろうが、いや殿軍だろうと従事するに決まっている。

彼女達は戦争に愛されているのだ。

軍人として、名を残し、あるいは無上の栄光が約束された部隊となるだろう。

その誉れが確実に約束されたと確信できる。

幾人もの将校を見てきたからこそわかる。

あれが、所謂英雄なのだ。

「気が付け、間抜け。中尉殿お二人は二個演算宝珠をお持ちだが、御預けになられたのは一個だぞ。」

だが、理解できない間抜けには口にしても仕方がないだろう。

中尉殿お二人が、こちらの職責に譲歩し、ライフルと予備の演算宝珠をお預けになったのだ。

最後に一つ、一番使い込んだ演算宝珠を手元に残すのは、権利に等しい。

最も、それを理解して持ち込みを黙認したのではなく、気がつかなかっただけの馬鹿にはいう気にもならないが。

「無意識なのだろうが、本当に気を抜かれないお方だ。」

「……………週番士官殿にばれたらことですな。」

……………ああ、貴様らはまだその程度の認識か。

14 戦争の行末

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導中尉です。

今日は休息日を使って、大学図書室でターニヤと一緒に勉強です。

さて、今日も論文のための勉強をしましょうか。

「ターニヤ・デグレチャフ中尉、入室いたします。」

「アレクシア・デグレチャフ中尉、入室いたします。」

一言断って、図書室の扉を開ける。

休日ですが、ほかの利用者がいることもあり得るのです。

そして、ここは陸軍大学。

入学者の最低階級が中尉以上ということは、私達など下から数えたほうが早い位下っ端なのです。

上位者が中にいることを考えれば、常に気が抜けません。

「む？」

今日は誰か居たみたいですね。

「っ、失礼いたしました。准将閣下。自分は、」

准将ですか。えらく上の方のいらっしゃるのでしょうか。

「ああ、良い。今は卒業生として先輩に対する敬意でかまわん。」

気さくそうな方です、よかった。

「はっ、ありがとうございます。自分は、ターニヤ・デグレチャフ学生。

帝国より魔導中尉を拝命しております。」

「同じくアレクシア・デグレチャフ学生であります。魔導中尉を拝命しております。」

「ゼートウーア准将だ。参謀本部戦務参謀次長を拝命している。」

参謀本部戦務参謀！

トップ集団の一員、ですか。

「お目にかかり光栄であります。」

ターニヤと被ってしまった。

こういうとき、思考が同じなのはどうなのでしょう…。

「息がぴったりだな。ふむ、中尉、君達は何か急ぎの用事があるかね？」

うーん。ここで、論文などではなく参謀様に直接直談判、もいいかもしれません。

気を付けなければ、首が飛んでしまいますが。

え？上官への敬意が少ない？

私が心からの敬意を払うのはターニャだけですから。

「はい、いいえ。准将殿。本日は、知見を得るための自学目的であります。」

「いい機会だ。座りたまえ。たまには、若い者の意見も聞きたい。」

「はっ、失礼いたします。」

「さて、貴官達のご事は少しばかり耳にしている。随分な活躍のようだな。」

「はっ、過大な評価を頂いております。」

「ありがとうございます。自分ではなく、ほとんどは姉の功績ですが。」

私なんて、ターニャの思う理想を現実に行っているだけです。

ターニャこそがもっと評価されるべきなのです。

「謙虚だな。ふと思うのだがね。この戦争はどうなるだろうか。」

・・・難しい質問ですね。未来を知っているだけに、第一次大戦の無かったこの世界で、どう説明したものでしょうか。

「お言葉ですが、閣下の御言葉は含意が広すぎます。」

「ふむ、確かにそうだな。言い換えよう。貴官はこの戦争の形態をどう予想する？」

帝国は、立地も戦い方も、ほとんどが西暦世界のドイツに酷似しています。

つまりは、そういうことになるでしょうか。

「僭越ながら、自分達は言及すべき立場にないと考えます。」

「よい。諮問しているわけではないのだ。自由に述べよ。」

「では、お言葉に甘えて失礼いたします。」

「ありがとうございます。」

さて。私はターニヤを補佐、補うだけです。

「今次戦争は、大戦に発展するものと確信します。」

「大戦とは?」

「大戦とは、主要列強の大半を巻き込んだ、世界規模での交戦のことです。あります。」

「……そうなる根拠は?」

「帝国は列強として新興ながらも、従来の列強と比較し単独ではかなりの優位を誇っております。」

単独では、ですね。

ドイツ帝国は同盟国が二重帝国はともかく、瀕死の病人でしたからねえ……。

バルカン戦争でブルガリアにさえ負けるといふ病人でしたから……。

「そのため、帝国は他の列強と一対一ならば負けることはなく、勝利が収められるでありますよ。」

「うむ、共和国に対しては勝利できるだろうな。」

アルザス・ロレーヌ地方とネーデルラント道路が既にドイツ領であると思えば分かりやすいでしょうか。

え? 道路じゃないって? 道路ですよ。

「ですが、連合王国や、連邦がこれを座視するとは考えにくいのが実像であります。」

「……彼らは今次戦争に直接の利権を有していない筈だ。」

「はい、いいえ。彼らは、覇権国家の誕生を許容するか、拒絶するかの選択を迫られることになるのであります。」

「覇権国家?」

「覇権国家とは。大陸中央部において、共和国を排除した我が帝国は他の列強と比較し相対的ではなく、絶対的優位を確立します。」

第二次大戦のフランス降伏後、ですね。

西暦世界と同じ轍を踏んでしまうならば、自由共和国が誕生し南部へ戦線が拡大。

泥沼化した末に東から連邦の介入……と。

これに乗じて連合王国が上陸を試みてくるため、沿岸防衛等にも戦力を割く必要がある…。

現在の帝国ならば、協商連合王国（スカンディナヴィア）を倒せば、併合でしょうか。

守る地域が膨大すぎますね。この問題も提言する必要がありますね。

「故に、共和国の排除を短期に、それも他国の干渉を許さない形で実現できない場合、必ず連鎖的に他国の干渉を誘発します。」

「なるほど。確かに、そうかもしれないが、だとすれば共和国が覇権国家足るのではないのかね？それも受け入れがたいはずだ。」

「同意します。ですので、それ故に帝国と共和国が共倒れになるように図られると思われれます。」

「介入はあると？」

「はい。おそらく、共和国への借款から始まり、武器供与もあり得るのではないでしょうか。」

レンドリース、戦費調達。

実質的に、帝国対共和国&連合王国となる。

やはり、優位を保つには北方の早期決着が鍵になりそうです。

「……なるほど、見えてきた。」

「はい、共和国に多額の資金を貸し付け、共倒れを狙い最後に介入する、という青写真を他の列強が描くと思われれます。」

「では、帝国が圧倒した場合は？」

「即座に、介入を決意するものかと思われれます。」

連邦に関しては、どうやらこの世界でもアカに染まっているらしいので、来るでしょうね。

「なるほど、興味深い想定だ。ならば、どのように対応する？」

「それほど、奇策があるわけではありません。」

「ですので、過去の歴史に倣い講和を模索し、不可能であるならば消耗を抑制する事を第一目標といたします。」

「……勝利を目指すわけではないと？最悪、敢闘精神を疑われかねない発言だな。」

「はい、いいえ。勝利を目指さないのではありません。ですが、まず負けなければ帝国の勝利であります。」

「それで、どうやって勝利する？」

「徹底的に敵に敵の血を流させることを貫徹し、敵の戦争継続能力を粉砕します。」

「敵野戦軍の殲滅かね？」

「付け加えるのであれば、現在の帝国及び周辺諸国の戦い方は、言ってしまうと陣取りゲームです。より多くの陣地を取る。ですが、今後世界を相手に戦うのであれば、いかにこちらの損耗を抑えつつ、相手に多大な被害を与えるか、であります。」

「成程。それで、勝てるのかね？」

「わかりません。ですが、負けることもありません。そこで、一撃を与える余力を保つことこそ、戦略上の柔軟性を増すかと。」

「自分は、勝てる、とは言い切れませんが、敗北はありえないかと。作戦案としていくつかありますが、後に論文として提出させていただきます。」

「ふむ、興味深いな。だが、相手も何れ同じ戦術に至ればどうする？」

「はい、そのことを考慮し、航空魔導師による戦場錯乱と突破浸透襲撃を提案いたします。」

西暦世界では、戦車などの機甲部隊を用いた電撃戦で、お金も資源もかかっていたましたが。

この世界では戦車には劣るものの、魔導師によって比較的簡単に火力を出すことができます。

これに、機甲部隊と歩兵部隊の混成大隊を付ければ容易に突破可能では？

爆撃機なども欲しくなりますね……。

「うん？魔導師は支援が任務ではないのか？」

「陣地戦において、火炮並みの火力を展開し、歩兵以上の俊敏性を持つ魔導師は理想的兵科です。」

「魔導師で突破浸透し、機甲部隊や歩兵部隊で地上からも攻撃することで、容易に敵を撃滅できると確信いたします。」

「なるほど、売り込みが上手なことだ。」

「恐縮であります。」

「で、仮にだが、魔導師を陣地戦に使うとして、規模はどの程度欲しいか。」

「大隊が、適切であると確信します。兵站への負荷が少なく、かつ戦力として最低限の単位になるかと。」

「面白い。まあ、検討してみることはしてみるところでしょう。若い意見は常に面白い。」

「ありがとうございます。」

15 戦局予測

「さて、アレクシア・デグレチャフ中尉。貴官の補足はありがたかったが、貴官もターニャ・デグレチャフ中尉と同じ考えであるのか？」

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ中尉です。

現在、参謀本部戦務参謀様と楽しい楽しい会話中であります。

「はい、閣下。小官も大戦になると確信します。」

「なるほど。では貴官の言う勝つための案とやら、少しでいい、聞かせてくれんかね。」

ターニャと違って、戦後処理についてが殆どなんですけど…。

「はい、閣下。現在帝国は、協商連合と共和国の二つの戦線を持っています。」

二正面では、主力部隊を2つに分けるか、1つの部隊を酷使しなくてはいけません。

これでは時間も資源も多く消費するため、さつさと各個撃破するに限ります。

「現在は維持できていますが、共和国に連合王国が支援する可能性を考えると、戦争を長引かせることは賢いとは言えません。よって、協商連合、共和国共に早期決着で終わらせることが最善であると愚考致します。」

「… 私もアレクシア中尉に同意致します。北方を手早く終わらせ、膠着状態が続くライン戦線に主力を向けるべきかと。」

「成程。確かにその通りだな。」

「それと、これは言ってもよろしいのかわかりませんが…。」

協商連合国を全土併合してはいけない旨は、戦争というより政治ですし…。

「構わんよ、憶測でも何でもいい、聞かせてくれたまえ。」

「ではお言葉に甘えさせていただきます。北方が解決しますと、我が帝国はおそらく協商連合国の全土を併合すると愚考致しますが、いかがでしょうか？」

今まで読んだ帝国の資料からは、傀儡政権や、それに準ずるものの記述は無かったです。

「そうだな、それが何か、不味いのかね？」

「はい、閣下。全土併合しますと、あの冬は恐ろしく寒い地を、我々帝国が守る義務が生じます。これは兵力の分散となりますし、併合した地域にてパルチザンを逮捕するなど、頭の痛い課題が目白押しであります。」

「…つまり、併合は極力するな、と？それでは国民が不満を持つと思うのだが。」

「軍事的に重要な拠点のみを併合とし、その他の港を何百年か租借するなどいかがでしょうか？また、協商連合国の貿易相手を帝国が認可した国のみに制限できますし。」

「しかしそれでは、我々の消費した武器や弾薬などを確保するための財源や資源はどうするのかね。」

「簡単です。彼らとて戦後復興をしなくてはなりません。それを帝国が援助するのです。今の帝国ならば、規格化された安価で高品質な製品がたくさんあります。それを売りつけるのです。」

「…そして協商連合国がある程度復興を成したなら、武器や弾薬など消耗品を生産させ、帝国が買えばよろしいかと愚考します。」

「…成程。そうすれば協商連合国は、帝国と貿易せざるを得なくなる… 言い換えれば、裏切れば産業が壊滅する状況にすればよいのだな。」

流石は、というべきでしょうか。

帝国にとつて前例のない、未知の話であるのに、閣下は理解されているようです。

ちなみに、帝国の安価で高品質な大量生産品というのは、私が論文を出した翌年には姿を見せ始め、今現在は既に普及しています。

自分の論文が現実になると、とても嬉しいですね。

また、規格化・大量生産化に伴い、ターニヤの兵站に関する論文も限定的ですが現実になっています。

「ふむ、なかなか良い話だった。また君達の論文を読ませてもらうと

しよう。貴重な勉強の時間を取ってすまなかつたな。」
「いえ。小官にとつても、有意義な時間でありました。」
「はい。また、お話させてください、閣下。」
閣下との会話は、本当に有意義で楽しかったです。

—— — 帝都某所

『ゼートゥーア閣下?』

いつになく、考え込んだ様子を懸念したのだろう。

幾人かの参謀が気がつけば自分の顔を心配げに注視している。

部下の前だというのに、と思いつつ、一方で知的な衝撃の余波が未だに頭に渦巻いているのだ。

なんでもないと、誤魔化す気分にもなれず、つい素直な感想を漏らしてしまう。

『風聞とは、存外正しいものだな。』

『はっ?』

どうされたのだろうか、という表情が一斉に並ぶのを見て、ゼートゥーア自身、信じられない思いを口にするのは憚られた。

新任少尉が、エースオブエースにして、銀翼突撃章保持?

ライフルよりも、人形を抱えている方がよほど似合うような少女達か?

…… まあ、魔導師だ。突出した天性の才能があれば、まだ可能かもしれない。

だが、明るく笑っている方が、よほど魅力的であるべきなのに、軍人然とした姿に違和感を覚えさせない時点で、何か狂っているようだ。

魔導師の英才教育は考えものかもしれない。

いや、それだけならばともかく、プロパガンダに使う時点で、軍人として違和感を覚えざるをえなかった。

だから、それが陸軍鉄道部や兵站部に絶賛されるほどの論文を書いたというのは、さすがに無理があるだろうと思った。

十中八九代筆だと確信していたのだが。

たまたま見かけたのを幸い、試すつもりで声をかけたが、これでは予想外も甚だしい。

まさか、あの年齢で、参謀本部が躊躇している戦争の先行き予測をこれほど明瞭に語れるとは。

まさか、戦後の処理についてまでも我々が気づきえない危険を予測しているとは。

他の余人が言えば戯言と断じられるような戦争案や戦後案だが、妙に説得力があった。

まるで、見てきたかのように断言するのだ。あれほど断言できるのは、よほどの確信があるものに限る。

人の意見を語る、というよりも自身の考えを述べていると考えざるを得ないのだ。

『すまないが、出所は言えないが、この案を検討してほしい。』
『……随分と、過激な戦局予想であります。』

それはそうだ。自分だって、世界中が戦争に突入するなどという案は、考えつかない。

過激にも程があるだろうが、一考すれば恐ろしい可能性が頭をどうしてもよぎるのだ。

そんなことは、ないだろう。

どこかに、穴が見つかるだろう、とは思うのだが。

しかし、仮にだ。あくまでも仮にだが。

もしも、もしも彼女達が正しかったとしよう。

その時は、約束通り一個大隊預けてやるのも悪くない。

狂気に身を任せねば戦争に勝てないというならば、何でもやるのが自分の仕事なのだ。

『……嫌な大人にだけはなりたくなかったのだがな。』

そしてふと、自分の思考に愕然としてしまう。
子供を戦争に送る？

軍人として最悪の恥だ。

……
ああ、自らの無能が恨めしい。

16 休日

おはようございます。

アレクシア・デグレチャフ魔導中尉です。

どうしてこんな時刻に起きているのかと申しますと……。

「……むにやむにや……。」

寝起きのターニヤにイタズラするためであります！

今日は休日ですので、悪戯をするには問題のない日です。

きつと、怒られて、ご褒美……お仕置きをされてしまうでしょうが

！

やらねばならぬのです……！

ターニヤはいつも、朝5時には起きるはずです。

現在の時刻は4時50分を少し過ぎたくらいです。

もうそろそろ、起きるはずです……。

いつもターニヤに抱き枕にされているのですが、起きたときにターニヤの腕の中に私がいなかったらどうという反応をするのでしょうか。

少しだけかわいそうですが、少し楽しみです。

ベッドの影に隠れて、驚かせてやりましょう。

「……ふああ……ん？」

寝起きのターニヤも可愛いですね……。

ああ、周りを見回して、私を探していますね。

いつもなら、ターニヤが私を起こすのが日課なのですが。

「……アレクシア？……トイレでも行ったのか？」

流星に、まだ焦りませんか。もう少し様子を見てみましょう。

ターニヤが起き、歯を磨き、6時から始まる朝の帝国ラジオの時間。
「……トイレにしては流星に長すぎるな。近くの部屋に聞きに行こうか……。」

数分ほど経った頃でしょうか。

聞き込みを終えたターニヤが戻ってきました。

「…まさか、な。まさかアレクシアが、誘拐？家出？そんな筈は…。」

なんだか、泣きそうな顔をしています…。

もの凄く罪悪感を感じてしまいます。

今すぐにも飛び出して謝り倒したいですが、今日は悪戯すると決めたのです。

ぐつと、鉄の心で我慢するのです…。

「…なあ、アレクシア。どうせ、どこかに隠れているだけなんだろう？」

その通りなのです。その通りですが…探そうとはしませんね。どうしてなのでしょうか…。

「…いつものように、可愛い顔を私に見せてくれよ…グスツ」

ああ、泣き出して…これ以上は私の心が持ちません。

ダメです。イタズラ失敗なのです。

ターニヤを泣かせては、ダメなのです…。

「…おはよう、ターニヤ。」

「…アレクシア…よかったっ！本当に、よかった!!」

…あれれ。どうして私は、ターニヤに抱きしめられているのでしょうか？

いつものターニヤなら、ふぎけるな！くらいは言って、拳骨くらいは放ってくるのですが…。

「ターニヤ、どうしたのです。いつもの、悪戯ですよ…？怒らないのですか…？」

「ああ、怒っている。でも、それ以上に、お前が無事だったことが嬉しい。もう二度と、こんな悪戯はしないで…私をヒトリにしないで…。」

ターニヤって、こんなにも、弱々しかったのですね…。

いつもは私がいるから平気なのでしょう…。

少し考えれば、私だって朝起きてターニヤがいなければ、錯乱してしまうでしょう。

それくらい分かることなのに、どうして私はそこまで至らなかつたのでしょうか。

自分が許せません…。

「ごめんなさい、ターニヤ。もう二度と、こんなことはしないと約束します。絶対です。」

「…もしも次このようなことをしたら、厳罰だぞ。馬鹿。」

「ごめんなさい、ごめんなさい…。」

数時間ほど、ターニヤが私を離してくれませんでした。

いわく、「お前はすぐにどこかに行くかもしれないからダメだ。」

いわく、「姉を困らせる妹にはこれくらいの罰が必要だ。」

それは、ターニヤが寂しいだけじゃ…。

と言うと、「当たり前だろう。生まれてからずっと、今まで一緒だったのだから。」

本当に悪いことをしました。

ですが、罪悪感が心を満たす一方、ターニヤに抱きしめられていたので、とても至福のひと時でした！

「ターニヤ…。そ、そろそろ離れよう？もうすぐお昼ですよ。」

「そうだな。お昼を食べに行こうか。だが、手を繋ぐぞ。離したらアレクシアの全額奢りだからな。」

ターニヤに何かが目覚めてしまった…!?

「はい、ターニヤが嫌がっても、離しませんよ。トイレまでついていてあげます。」

「いや、トイレは流石にな…。」

朝ごはんを食べそびれてしまったので、もうお腹が空いて倒れそうです。

目の前には美味しそうなターニヤ… 少しくらい味見を…。

「……………ペロ。」

「ひゃんっ!?アレクシア!!」

手を繋いでいたので逃げることもできず。

ま、街の人が見ているのに、抱きしめられてしまいました。

「た、ターニヤ… みんな見えますよ…?」

「うるさい!こんな恥ずかしいことを、私にしたアレクシアが悪い!」

「ご、ごめんなさい…。」

周囲の暖かな目が、今はとても痛いです!

軍服を着た幼女の双子が、片方は顔を真っ赤にして路上で抱き合っているのですから、和むのはわかるのです!

わかるのですが…。

「あらあら。イタズラしちやダメですよ、お嬢ちゃん。」

「は、はい…。」

ターニヤにされる罰よりも、心が痛むのです…。

「た、ターニヤ、そろそろ行こう…?」

「…………… そうだな。ごめんな、今日はなんだか調子が…。」

「… はい。私の方こそ、ごめんなさい。」

色々ありましたが、やっと昼食です。

いつもお世話になっている喫茶店ですが。

このこのコーヒー、それにパンはなかなか美味しいですよ。

ターニヤはコーヒーはブラックが好きみたいなのですが、私には苦すぎました。

ですので私は、カフェオレです。

パンはとても香ばしく、バターも相まってとても美味しいです。

「おや、軍人のお嬢様方。今日はどうされますか？」

「この女将さん……と言っているのでしょうか。」

女将さんは気さくな方で、私達を子供だからと差別したりされないとても良い方です。

「いつも言っているが、お嬢様などではないのだがな。ああ、私はいつもこのコーヒーと、パンで頼む。」

「私もいつものカフェオレとパンでお願いします。」

「はいよ、お嬢様方。いつもありがとうございます。」

正直なところ、この料理と同じような『味』の喫茶店は割とあります。

ですが、この女将さんのような素晴らしい『人』がやっている喫茶店は多くはありません。

前線へ行けば食べられない味。会えない人。

今のうちに楽しんでおくのです。

17 即応大隊発足

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ魔導大尉です。ええ、中尉から大尉に昇進致しました。

階級が変わっただけですので、特に変化ありませんが。

「デグレチャフ大尉、命により出頭いたしました。」

「おめでとう。」

人事部の大佐殿が、そう言つてくださいます。

素直に嬉しいですね。

「昇進だ。ターニャ・デグレチャフ大尉、アレクシア・デグレチャフ大尉。」

「ありがとうございます。」

揃つてここまで昇進してきましたが、少佐からは幹部ですね。

ターニャは少佐になるとしても、私は昇進できるでしょうか…。

「さて、来てもらったのは昇進だけではない。貴官らの配属についてだ。」

陸軍大学卒業後の、配属のことですか。

陸軍大学卒の人事は、教育総監ではなく、参謀本部が握っているそうです。

要するに、現在の参謀達に気に入られれば、ぬくぬくできるわけです。

「できる限り、希望を考慮することになっている」

「有り難くあります。」

考慮、ですか。

しかし、銀翼突撃章持ちの私達を参謀本部がそう易々と野放しにするのでしょうか？

あの手この手で自分達の指揮下、あるいは直轄にしたいと考えそうなものですが…。

「ですが、小官は軍人です。命令とあらば、どのような配置でも謹んでお受けいたします。」

「ターニャ大尉に同意であります。どのような配属でも喜んで。」

「結構だ。貴官らにはこのように書類が回されてきた。」
わあ。

20枚ほどの書類の束。どこでも選び放題ですね。

「ああ、それと参謀本部からも一枚出ている。」

・・・ やっぱりですか。

案の定、野放しにはしないようですね。

まあ、参謀本部のゼートウアー閣下とは面識もありますし、問題は
ありませんが。

「貴官らの武功を考慮し、人事部では選択を強制しない。好きなもの
を選びたまえ。」

「選り取り見取りでありますね。迷ってしまいます。」

「どれにしましょうか・・・。」

参謀本部からのお誘いを断れるはずもありませんがね・・・。

「だらうな。」

大佐殿は重々し気に、熟慮したまえと促してきます。

ポーズであっても、その姿は真摯にキャリア選択を悩む若者に助言
するという人物像を造りだしています。

まったく、大した役者ですね。こちらの大根演技など見破っている
でしょうに・・・。

「だが、いつの時代も楽な仕事というものはない。」

「はっ」

「参謀本部が君達に何を命ずるかは知らないが、幸運を祈るとだけ伝
えておく。」

「痛み入ります大佐殿。」

「なに、貴官らのことだ。すぐにまた会うことになるだろう。」

はあ。何とはなしに、予想できてしまいますがね・・・。

応接室を出ると、ゼートウアー閣下の副官殿が待っておられまし
た。

促されるままに、副官殿について行きます。

やはり、閣下のお誘いでしたか・・・。

「久しいな、若き大尉。昇進おめでとう。」

「閣下の御言葉、誠に光栄であります。」

「誠に有難うございます。」

「貴様らのことだ。実務的な話の方がよからう。」

「堅苦しい前置きをしないでくださる閣下は、とても話しやすいです。」

「このような幹部の方は貴重です……。」

「参謀本部よりの配属を受けたな？」

「はい。参謀本部付きで。」

「小官も、同様の配属を。」

「おそらくターニヤと同じ配属……だといいますが。」

「結構だ。」

「……小官には、話が見えませんが。」

「小官も同じ意見であります。どういふことなのでしょう。」

「閣下にお誘いを受けるような心当たりは……。」

「逸るな大尉。なに、参謀本部は、すぐにでも貴様達に大隊を任せるつもりだ。」

「ええ？ 大隊……？」

「だが新編の魔導大隊になる。」

「魔導大隊……どこかで聞いた覚えがありますね。」

「新編、でありますか。」

「成程、さしずめ参謀本部直轄の即応大隊、でしょうか。」

「……ターニヤの売り込みのおかげですね。」

「組織の常だ。諦めろ。面倒事は多い。アレクシア君、その通りだ。」
「やっぱりですか。」

「大隊指揮、ですか……ターニヤなら得意そうなことですね。」

「私にはとてもとても……。」

「そこでだ、貴様らは明日にでも編成官の辞令を受けることになる。」

「編成官？ 随分と、古式めかしい職務でありますか？」

「大尉に大隊を預けるのは難しい。大隊編成の功で無理やり少佐にねじ込んでおく。」

「閣下、それは、小官もなのでしょう。ひとつの大隊に、少佐が二人など……」

「それは問題ない。貴官らは『銀翼突撃章』を持っているだろう？」
なるほど、名声で……まかせと……。いいのでしょうか……。

「…… 実質的に大隊長と認識してよろしいのですか。」

「案ずるな、その約束は果たすつもりだ。全力で取り組み。」

ターニヤが大隊長……。

想像しただけでもかっこいいです……。

「周囲の反感を買う事を前提で申し上げてよいでしょうか。」

「いまさら気にする口かね。なんだね？言ってみたまえ。」

「編成に際しては、全権が与えられたと考えてよろしいのでしょうか」

「言った通りだ。大隊兵員、装備は可能な限り充当する。」

選り好みし放題、ですね。

優秀な人間をかき集めることができそうです。

「48名以下であれば、好きなように編成してかまわん。」

「48名ですと、増強大隊になります。よろしいので？」

「即応大隊が増強大隊なのは当然の処置である。新編ということで、予算はねじ込んだぞ。」

私達の大隊だけで、小国相手ならば勝ててしまいそうですね。

これは慢心、かもしれません。

「ただ、人材は東部軍と中央という制約がつく。こればかりは動かせん。」

流石に西方と北方から引き抜きはできませんよね。

現在進行形で戦争継続中ですし。

「大隊は貴様らの本業に合わせて、航空魔導大隊になる。」

「指揮系統は、どうなるのでありますか？」

「即応の観点から参謀本部直轄だ。編成番号はV600番台を用意してある。希望はあるか？」

「空きの番で結構です。」

「ならば601だ。基本的に貴様らの上官はいない。喜べ。参謀本部会議直轄だぞ。」

「……まさに我が世の春ですね。」

「全くだ。誰だつて羨ましいことだろうよ。」

私の上官はもとよりターニヤだけです。

参謀本部には、逆らえばターニヤが不利になってしまうので従いませぬが。

「編成の期限は？」

「早いに越したことはないが、明確な期限は無い。」

「なるほど、ではせいぜい選抜に勤しみます。」

私とターニヤは顔を見合わせて、嬉しくてつい笑ってしまいます。

昇進も嬉しいですが、ターニヤが大隊長ならばこれからもずっと一緒に居られるのです。

「ああ、大尉。忠告しておくが貴様達は部下を選びすぎるといふ評判がある。」

そりやそうですよ、誰だつて無能に足を引っ張られるなんて御免です。

「能力を疑うわけではないが、あまり良い風評ではない。留意しておけ。」

「御高配に感謝致します。」

「肝に銘じておきます。」

選びすぎて時間をかけてくれるな、ということでしょうか。

「なに、貴様達が実力でもぎ取った成果だ。誇つてよいぞ。」

「驕つて墜ちるよりは、」

「謙虚で生きながらえたいと思います。」

「結構。その様子ならば、問題なからう。」

ああ、どんな士官が来るでしょうか。

ターニヤに悪い虫がつかないようにしなければいけません。

私のものであると、最初に言い聞かせねば……。

「明日にでも辞令は出るだろう。今日は、宿舎からでないことだな。」

「……随分と手回しのよいことですね。」

「せめてもの詫びだ。気にするな。」

「いえ、ありがとうございます。」

「では、期待しているぞ。武運を祈る。」

閣下もなかなか、悪戯が得意そうです。

帝国軍参謀本部戦務課通達

『常に彼を導き、常に彼を見捨てず、常に道なき道を往き、常に屈さず、常に戦場にある。』

全ては、勝利のために。

求む魔導師、至難の戦場、わずかな報酬、剣林弾雨の暗い日々、耐えざる危険、生還の保証なし。

生還の暁には名誉と賞賛を得る。』

参謀本部第601編成委員会

18 採用テスト

はい、こんにちは。

アレクシア・デグレチャフ大尉であります。

ええ、本日は第601編成部隊編成官補佐として、ターニヤの航空魔導大隊の選抜を手伝っております。

ターニヤの考えた、心が燃え滾るような熱い募集文句に、志願書殺到です。

いや、本当に。

二人では捌ききれないですよ……。

「ああ、もう！どうしてあのような募集に、こんなにも食いついてくるのだ！」

「ターニヤの才能ですよ……。」

「こんな才能が私にあったとは……じゃなくて！こんな量、私とアレクシアだけで捌ける筈がない！従兵！従兵！」

10人体制でも厳しい量ですよ、これは……。

「はっ、はい大尉殿。なにか、ご用でしょうか。」

あれ？女性？

部屋に入ってきたのは、若い女性です。私達よりは、年上ですが。

階級は……特務伍長、ですか。

特筆することは、ありませんね。

「……ん、ああそうか。貴官とは初対面になるか。官姓名を申告したまえ。」

「ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリヤコフ特務伍長であります。大尉殿の大隊副官を命じられております。」

「ターニヤ・デグレチャフ大尉だ。なるほど、どうやら随分と気を使われたようだ。」

「アレクシア・デグレチャフ大尉です。よろしくお願ひします、セレブリヤコフ伍長。」

彼女が副官……？ならば私は副官より上の、大隊長の部下？

ターニヤの補佐官あたりですかね。

「さて、セレブリヤコーフ伍長。すまないが、衛兵司令にお願いして何人か憲兵をお借りしたいと伝えてくれ。」

「何名ほどお借りしましょうか。」

「そうだな……。できれば、ダースはお借りしたいと伝えて来てくれ。」
「了解であります。」

なかなか、仕事のできそうな人です。

それに、同性の仲間がいるというのは、ターニヤには及びませんが多少は安心できますね。

「ターニヤ、あの人が副官ならば、私は何になるのでしょうか？」

「ん？書類をよく読んでいなかったのか。」

「ごめんなさい、ターニヤ。」

「ああ、いいさ。アレクシアは、私と共に大隊長、だそうだ。」

「ええ？一つの大隊に二人の大隊長ですか？」

てつきり補佐役だとばかり思っていましたか……。

「どうも、参謀本部は私達のことを二人で一人、だと認識されているらしい。」

「そうなんですか。私としては、ターニヤと一緒に居られるのであれば嬉しい限りですが。」

「私だって、アレクシアが居てくれて嬉しいさ。私の背中を、隣を任せられるのはお前しかない。」

ターニヤが、そこまで私を想ってくれているなんて……。

……いえ、この前の悪戯をしたときには泣かれてしまうほどでした……。

あの悪戯以降、ターニヤが前よりも過保護になったように感じます。

部屋にいるときはずっとべったり、外出するときも手を繋いで。

まるで恋人みたい……。ですが、私達は血のつながった姉妹です。

……これくらい、普通、なのかな？

「そんな……ターニヤ、嬉しいです。」

「あ、あの……」

はっ！

「し、失礼した。伍長、戻っていたのならノックくらいしてくれ……。」

その後、セレブリヤコーフ伍長が私とターニヤをじろじろと見てきました。が、睨み返すと大人しく仕事をしていました。

まったく……。

「……ターニヤ、やはり書類選考の後にもう一つ試験を課すべきではないでしょうか。」

「そうだな、経験の浅い者などは書類で落とすとしても……経験が長いだけの無能など掴まされたら面倒だな。」

「書類選考は彼らに任せるとして、私達は書類を通った者を試験する準備をしましょう。」

書類選考、面接、試験。

人を選ぶときの基本です。帝国軍士官学校の入学にも、これらはありました。

そのときは、年齢以外は私とターニヤが上位でしたね。懐かしいです。

「アイシャ・シユルベルツ中尉、ただ今着任いたしました。」

「クレイン・バルハルム中尉、同じく着任いたします。」

……さて、面接と試験の両方を一気にいきましょう。

とても、合理的、効率的です。

「御苦勞。参謀本部第601編成委員会委員長、グレゴリオ・フォン・ターナー大佐だ。」

さて、今回は受かるといいですね…。

「諸君には、すでに本日の予定が通知として来ていると思うが変更を告知する。」

さて、どうであるか、です。

「通達してあるように、本日1400までに第七演習場集合は取りやめ。諸君は、ただちに第六航空戦隊司令部へと向かいたまえ。」

もやもやしていそうな表情をしていますね。いいですよ、その調子です。

「……なお、当然のことではあるが選抜過程による機密保持義務が貴官らにはかけられている。」

気づけるでしょうか？

「機密保持資格に疑義が出た場合、即刻原隊へ処分付きで送り返すので注意せよ。」

「はっ。」

…はあ、ダメでしたね。これで何組目ですか、原隊送りは。

「……これではいい加減、対光学系術式対策を徹底しようという気になるな。」

「でしょうね。視野狭窄と言われても仕方ないはずだ。」

「ゼートゥーア閣下、このような魔導師の基礎を見破れぬような者ばかりであります。このままでは……。」

本当に、ほとんど誰も見破れないのです…。

こんな、お粗末な幻影を、ですよ？

グレゴリオとかいう人形だって、よくよく見れば口をパクパクしているだけなんですよ…？

「なるほど。貴様らが散々不合格を突きつけるものだから、視察しに来てみたが納得だ。」

中央軍から志願してきた人たちは、数は少なかったですが半分ほど

は合格しました。東部軍は…ほとんど、全滅です。

「しかし、中央軍の実戦経験者が半数は見破れる詐術か。」

「同水準のそれを東部軍では、ほぼ全員が見破れないのは問題だな。」

「光学系の式で幻影を形成しているだけの単純な術式です。実戦では一般的なデコイとして使います。」

「こんな簡単なものさえ見破れないのであれば、敵の幻影はおろか、味方の幻影にさえ惑わされかねないかと…。」

ターニャや私を実戦慣れしているとかそういうことではないのです。

少なくとも、中央の人たちは半分とはいえ見破れました。

つまり、東部の怠惰以外何者でもないのです。

「光の屈折で、眺めている試験官の前で実在しない映像相手に踊っているのです。採用したくない気持ちもお分かり頂けるでしょう。」

「…それで、東部軍の成績は？」

「東部軍志願組は、これまで29組中27組が幻影に騙されて原隊復帰となりました。」

わずか2組、ですか。先が思いやられますね。

幹部の人たちも顔色は蒼白、頭を抱えています。

再教育、大変そうですね…。

「中央軍の10組中5組が受かったのと合わせても、中隊分しかありません。」

二人一組ですから、まだたったの14人ですよ。

私とターニャ、セレブリャコフ伍長を含めても、17人です。

「現在、残っている東部軍65組に期待したいところです。」

「…この割合では、もう中隊分集まればいい方ですね。」

「…仕方あるまい、要求水準を引き下げざるほかあるまい…。」

そうしますと、再教育しないといけませんね。

どのみちやる予定でしたが、ターニャの手間が増えますね。

ああ、まったく。これだから、無能というゴミは。

「再訓練を施せば、使い物になるという基準設定が必要です。編成に

時間がかかります。」

「具体的には？」

「一月ほどは、頂きたく。」

「多少、手荒になってしまいましたが、致し方ないでしょう。」

「かまわん、殺さない程度に再教育してやれ……。嘆かわしい、通常訓練、教育の見直しが必要だな……。」

「はっ。」

「ああそうだ、この記録を教導隊に送ってやれ。連中に、東部軍を再教育させてやる。」

ゼートウーア閣下はお優しい方ですね。

怠惰な無能にも、チャンスをお与えになる。

手間も時間もかかるといふのに……。

19 雪山行軍訓練

こんばんは、アレクシア・デグレチャフ大尉です。

これから最後の実地試験です。これが終われば、私達は少佐へ昇進です。

…… 現在、帝国軍ツークシユピツチェ演習場、上空。

「アレクシア、そろそろだ。」

「はい、ターニャ。彼らに目覚まし代わりに魔力撃をさしあげましょう。」

そう言いつつ私は、爆裂術式を全力で、宿舎に向かって放つ。

爆音と共に、宿舎が吹き飛ぶ。

…… ああ、破壊する許可は取ってあります。

どうせ老朽化してボロボロだ、建て替えついでに破壊してくれ、とも。

「なんだ!? どうした!？」

「… 敵襲!？」

「けが人はいないか! 大丈夫か!」

さて… ターニャと私特製の、楽しい楽しいスポーツと行きましようか。

「目覚まし代わりです、礼には及びませんよ。」

「おはよう、蛆虫諸君。実は同地で演習中の砲兵隊が、弾を持って余しているらしくてな?」

「せっかくですし、皆さん砲兵隊と仲良く遊んであげましょうねっ!」

「ああ、誠に残念だが訓練用弾薬の数は少ないらしい。」

「そうですね、36時間も撃ち続ければ弾が無くなるのではないでしょうか?」

ああ、ターニャとの共同作業。とてもとても、気分が良いですね。

「では始めましょう!」

「防衛訓練の開始だ!」

二人で閃光弾を空高く打ち上げ、砲弾の当たらない位置へ移動します。

……ゴミ虫を見るターニヤの目：ゾクつとしちやいました。

「ターニヤ、訓練が始まったのはいいですが、暇ですね。」

「ああ、そうだな。私達はあつちのテントで暇をつぶそうか。」

「はい。」

蛆虫たちからは見えない位置のテントで、訓練が終わるのを待ちます。

……そろそろ36時間ですか？

意外と、早かったですね。

え？ターニヤと何をしていたのか、ですか？

どうしてそんなことになるんですか？

最初は、おとなしくトランプゲームをしたり、チェス、オセロ、囲碁……

様々なゲームを楽しんだのですが……その、テントにコーヒーが無くてもいいから何か飲みたい、というターニヤのために、テント中探してブドウのジュース？を見つけたのです。

「おお、ブドウの果汁か。なぜそんな高価なものが……まあいい。こ

の寒さだ、中身は大丈夫だろう。」

それで、ターニヤが一杯、飲んだのですが。

どうやら、ブドウ風味のお酒だったらしくて、ですね…。

ほんの一杯飲んだだけで、ターニヤが酔ってしまいました…。

「…… あれくしあっ！」

「な、なんですかターニヤ？んむうつ…!?」

いきなり抱きしめられて、その…。

……… なんだか柔らかいもので唇を塞がれたところまで覚えてい

るのですが…。

そこから、全く覚えていません… いえ、とても恥ずかしくて、思

い出したくないです…。

まさかターニヤが、こんなにお酒に弱いなんて…。

「おはよう、アレクシア…。」

「… おはようございます、ターニヤ…。」

き、気まずいのです…。

姉妹とはいえ、あ、あんなにターニヤに可愛がられてしまいました…。

「… ターニヤのせいです。もう、お嫁にいけないです…。」

そ、そりゃあ、抵抗しなかった私も悪いですが…。

あんなに可愛いターニヤに、抵抗できるわけがないのです…。

「その、アレクシア、ごめん。お前のことは私がもらってやるから…姉妹だけ。」

「… 絶対ですよ。いいです、許してあげるので…。」

まだ、気まずいですが、訓練も終わったのです、行かねばなりません…。

でも、どうして酔っただけで私を…。

「… あつという間の、36時間でしたね。」

「どうだ、楽しかったか？まあ、優秀な諸君のことだ、まだまだ遊び足りないだろう？」

ターニヤ、まだ意識してしまつてこちらをチラチラ見てくるのです。

「… ターニヤ、チラチラ見ないでください、思い出してしまつて恥ずかしいです…。」

「す、すまない。気を付ける。」

あのかつこよかつたターニヤはどこに行つてしまつたのでしょうか…。

今のターニヤも可愛くて良いですが。

訓練兵たちは、砲弾の雨のおかげで疲れているようで、こちらに気づいていないようです。

よかつた…。

「そこで、だ。諸君は次のポイントへ移動したまえ。」

「制限時間は48時間、防郭も飛行術式も無しです。魔力反応を感知次第…。」

「私達が魔導砲撃を行う。」

「一つだけ忠告しておくが、くれぐれも注意して行軍するように。」

「私からも一つ、ここは雪山です。大声で叫んだりしないように。」

ルートを書いた紙を投げて渡します。

「… さて、ターニヤ。行きましょう。」

「ああ。アレクシア、行こうか。」

… やつと調子が戻ってきました…。

「けれど、あのルート、結構簡単じゃないですか？尾根を通っていくだけですし。」

「ああ、そう思うだろう？ 教導隊などにも協力してもらって、軍用犬や爆撃機など、様々な罫を用意してある。だから、あのルート通りにまっすぐ行くことは不可能だ。」

なるほど……？ それなら訓練になりますね。

「一応、ストレスから大声を出さないよう忠告しましたが……。」

「ああ、どうせ奴らのことだ。雪山で大声を出せばどうなるかなんて、知らないだろうな。」

…… 雪崩には、備えておきましょうか。

「あれ？ そういえば、セレブリヤコーフ伍長は？」

「ああ、あれはもう伍長ではない。大隊の副官になるから、少尉に昇進した。少尉ならば、あの訓練兵共と一緒にスポーツ中だ。」

「大丈夫かな……。」

一応は、ほかの訓練兵と違って選抜の時から顔見知りですし。

少しばかり心配ですね。

「なんだ、アレクシア。心配なのか？」

「はい、少しだけ…… ターニヤ、どうしたのですか。いつもならそんなこと気にしないのに。」

「ああ、いや…… なんでもない。」

どうしたのでしょうか。風邪などではないといいいのですが。

開始から24時間とちよつと、経ちました。

彼らは順調に？ 進んでいるようですね。

「大方予想通りのルートだな。安心した、あの程度の力量が無くてはな。」

「そうですね、指示された道に従うだけでは半人前です。困難に直面したときに、ちゃんと自分達で考えて行軍できているようですよ。」

特に何事も起こらずに、このまま訓練が終われば、基本的に西暦世界のS W A Tなどの特殊部隊用の訓練でもさせてみましょうか。

「雪山のお散歩訓練が終わったら、次は私が。」

「ああ、いいぞ。私だけ楽しんで、な。」

「では、SWATの訓練や自衛隊レンジャーの訓練でもさせますか。あれをやれば、規律を守る忠実な狼に育つと思います。」

「ああ、面白そうだ。何人が耐えられるだろうな！」

『ふざけるなああああああ!!!』

……。せつかく忠告しましたのに……。

「……アレクシア。お前の忠告は無駄だったようだ。行こうか……。」

「はい、残念です。雪崩程度で……とは言えませんが。流石に死なれるのは困ります、ゼートウアー閣下からは『死なない程度に』と言われておりますし。」

案の定、といいましょようか。

轟音と共に、雪崩が発生しました。

「ターニャ！思ったよりも規模が大きいです、気を付けてください！」

「アレクシアもな！けがをしたら許さぬからな！」

はあ。これで全員、助けたでしょうか。

皆さん満身創痍ですね。

「訓練中に昼寝とは、いい度胸だな！」

「大声で叫ぶなど、忠告しましたのに……。はあ。」

ターニャの毒舌は、今の彼らには精神的に堪えるかもしれないですね。

ですが、これくらい耐えられなければ、精鋭としてふさわしくありません。

「職務怠慢で銃殺されたいのか？」

「しつかりしろ、おいッ！息をしろ！おい!!」

んん？ああ、口の中に雪が詰まったのでしょうか。

「ん？雪崩もかわせない無能め。」

ターニヤが飛び蹴りを、頭に。

「た、大尉殿！いくらなんでも、それは…。」

… 訓練兵さん、無事に雪を吐き出せましたけれど… 痛そうですね。

「ガハアツ!!ハア… ハア…。」

「い、生き返った…?」

「信じられん…。」

何をそんなに驚いているのでしょうか…。

「はい、生き返りましたね。雪崩のトラブルもありましたが、訓練は訓練です。」

「だがこのままでは、制限時間内での行軍は不可能だろう。リタイアする者は…。」

「小官は、訓練を継続しますッ!」

ええ？結構きつめにしましたが、雪崩まで起きてまだやるのですか。

すごいですね、帝国魔導師。そこまでして精銳になりたいのでしょうか…。

「お、俺もです!」

「任せてください!」

「小官も…!」

「まだやれます…!」

「やらせてください!」

「急げ!行軍を完遂するぞ!」

「オオオツ!!!」

… 行ってしまった。バカなのか、それとも…。

「ひっ… あ、あの… 小官も!!」

少尉は、行かなくてもよかったのに…。

20 即応魔導大隊結成

こんにちは、アレクシア・デグレチャフ大尉です。

ええ、やっと訓練期間の一月が終了しました。

…ターニヤとの、あの一件以降、一週間ほどは気まずかったです
が。

ただ、あの件でターニヤは何か吹っ切れたのでしうか。

…その、朝起きるとき、夜寝るとき、キスをしてくるようになり
ました。

姉妹なのに、血がつながっているのに、いいのでしょうか…。

私は、全然嫌ではないですが…。むしろ嬉しいですが！

もちろん、私達だけの秘密ですよ？

さて、今日は即応航空魔導大隊の、お披露目です。

「こののろまども！尻を引きずらずに、さっさと高度を上げろ！」

「たったの8000ですよ？腑抜けているのですか？聞こえています
か？」

まったく。航空魔導師の限界は一般的に6000らしいのですが、
訓練では皆さん5500ほどで限界でしたね。

ちよつと頑張つて6000に到達、くらいでしょうか。

それを見たターニヤが目標を8000に設定、最後の一週間抜きに
扱いたのですが…。

「むりです、もう無理です大尉殿。」

「よろしい。ならば、死ね。今すぐに死ね。貴様が死ねば諸経費が仲
間のために役立つ。」

「安心してください、苦しまずに殺してあげましょう。」

無理だと思ふから無理なのです！

…とまでは言いませんが、訓練では7800まで飛べていたの
で、あと少しではありませんか…。

以前私とターニヤは、西方のライン戦線で高度12000を飛んで
いました。

その際、共和国軍の魔導師は8000まで上がって来たのです。つまり、敵国の魔導師は無理をすれば8000まで上がれるということですよ。

「ですので、我々は余裕で8000を飛べなければならぬのです。レルゲン中佐、いかがでしょうか。」

「どうでしょうか……この大隊の出来具合は。見事なものだ。」

「ああ、よかった。私達の苦労は無駄にはなりませんでした……。」

「……酸素ボンベも無しに、何故高度を8000に上げられる？」

「ああ、それは簡単です。酸素発生の特製式を常時展開させています。」

「……常駐式を二つもかね？」

「はい。最低でもそれくらいは出来なければ。」

高度6000を超えると、高山生まれの人ならともかく、普通の人間にはちよつとつらい環境になります。

酸素が薄くなるのです。

高度8000を飛ばうと思えば、酸素発生くらいでなければ話になりません。

「どこから、そんな無茶に応えられる演算宝珠を？」

「ああ、エレニウム工廠のドクトルには、貸しがありますので。その伝手で、先行量産品を。」

あの狂った科学者だったドクトルだが、神がどうだと言い始めてからはある程度話ができるようになりました……。

ストレスが溜まりますが。

「貴様ら！ 単調な機動を取るなど言っただろう！ 良いのだと何故気がつかない!？」

「ターニヤ、落ち着いて。ね?」

「しかしだな、アレクシア……。何度言っても聞かないのだ、少し躰けてやる必要がある。」

「うーん、そうですね。けがをさせない程度に、ですよ。」

「わかっているさ。よろしい、私が直々に貴様らを躰直してやろう!」

「あはは、すみませんね、レルゲン中佐。」

ターニヤは嬉々として術式を放っています。

大方、ドクトルとの会話で溜まったストレスの発散、といったところですかね。

「ら、乱数回避！急げ！」

「……信じられん。常駐式を並列起動して乱数回避機動が取れるのか。」

「デコイも出していますね。」

うんうん、その辺りは徹底して訓練しましたからね。

すぐに撃墜されては、ターニヤの評価が下がってしまいますし。

「……エレニウム工廠の新型は想像以上に優秀ですな。」

「エレニウム工廠に資料を請求したい。」

「わかりました。手配しておきます。中佐殿。」

もしかしたら、あの宝珠が次の帝国魔導師の支給品になるのでしょうか。

「いい機会だ。貴様らの価値を証明して見せろ。」

「…アレクシア・デグレチャフ大尉。君の姉は、いささかやりすぎではないかね？」

「いえいえ、何も問題はありません。これくらいで墜ちるようでは、最前線で死んでしまいますよ。」

「しかし、限度があるだろう。すでに、半数が脱落したのだぞ？」

まだ半分程度ですし……。

「大丈夫ですよ、まだ、二個大隊分の人員はあります。人的資源には、まだ問題ありません。」

「そうか。わかった。続けたまえ。邪魔をしたな。」

どうかしたのでしょいか、レルゲン中佐は……。

何やら険しい顔をされています。

「いえ、お気になさらずに。」

「……そうか。よくわかったよ、成程、貴様らが書いたに違いはない。」

何の話なのでしょうか…。

私達を書いた、と言われましても、心当たりが多すぎるのです。

「中佐殿？どうかされましたか。」

「いや、少し考え事をしていただけだ。やれやれ、彼女が狂っているのか、世界が狂っているのやら。」

「さて、蛆虫諸君！」

いよいよ、魔導大隊の結成です。

「本日をもって貴様らは無価値なウジ虫を卒業する！」

「本日から、貴方達は帝国軍魔導師であります。」

「戦友の絆に結ばれる、貴様らのくたばるその日まで！どこにいようと軍は貴様らの兄弟であり戦友だ。」

「これより諸君は戦地へ向かう。ある者は二度と戻らない。」

「だが肝に銘じておけ！そもそも帝国軍人は死ぬ。」

「死ぬために我々は存在するのです。」

「だが帝国は永遠である！つまり——貴様らも永遠である！」

故に、帝国は貴様らに永遠の奮戦を期待する！

これでやっと、私達の魔導大隊… 帝国軍第203航空魔導大隊は、結成です。

「デグレチャフ少佐。」

「なんだ？」「なんですか？」

… 紛らわしいのです。

ターニヤも私も、デグレチャフなので、呼ばれるとき紛らわしいのです…。

フルネームでもいいのですが、まあまあ長くなってしまうし…。

「参謀本部より、軍用通信です。」

「ご苦労、セレブリヤコーフ少尉。」

「ご苦労様です、ヴィーシヤ。」

さて、なんででしょうか…。

「…と。んん？」

「なんですかターニヤ、見えないです。」

「ああ、異動だ。ダキア公国方面…？なぜだ？」

ダキア… ですか。ええと…。

西暦世界でいうと… ルーマニアですか。

この世界のオーストリア、ハンガリー、チェコスロヴァキア、ユーゴスラビアは既に我が帝国領です。

ですので、ダキア公国とは国境を接しています。

「まさか、ダキアが宣戦してくるとでも言うのでしょうか。」

西暦世界と同じ地形ならば、山脈があり河川も豊富、防御側有利な地形だらけだったはずですよ。

まあ南部は平地ですので、そちらから回ればいいのですが。

「さて、な。この際だ、ダキア語でも勉強しておこうか。」

「もし戦争になったら、降伏勧告をダキア語でしてあげましょうか。」

—— ———— 帝国軍 南東方面軍 第五駐屯地

「南方管区から通達です。」

「… 緊急。軍団規模、ダキア軍。我が国境を侵犯中。」

「はい、敵歩兵軍の規模は4個軍集団、およそ60万と。」

本当に、ダキア公国が来るとは……。

「航空戦闘の戦況は？」

「敵航空戦力の情報は、ありません。」

ええ？共和国や協商連合でも爆撃機くらいは持っているのに……。

「何？通信状況に問題は？」

「ありません。すべて正常です。」

「……ダキア公国のこと、少し調べましたが。兵のおよそ半分が農民らしいですよ。」

「まさか。まさか、そのような国がなぜ、帝国に……。」

本当に不思議です。

どう考えても、少しでも調べれば帝国には勝てないと分かりそうなものです。

「……ターニャ。もしかしたら、ダキア公国は、我々の大隊に実弾演習を提供してくれているのでは？」

「……ああ、成程。それでわざわざ、戦争と。我々の初陣を勝利で飾らせてくれるというのか、優しい国だな。」

海上から支援を受けようにも、相当な回り道をしなければならぬダキア公国が。

帝国に勝てるなどと、本気で思っているのでしょうか……。

21 ダキア戦役

「総員、傾聴！」

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

大隊の編成も終わり、無事少佐に昇進できました。

また、爵位[?]を戴けましたので、『フォン』を名乗ることが出来ます。いいでしょう、『フォン』を名乗れるだなんて。

西暦世界の、かの二重帝国のハプスブルク家を筆頭に、様々な名家が思い浮かびます。

現在、我が帝国領土を侵犯中のダキア公国。

実弾演習も兼ねて、運動がてら戦場へ行くことになりました。

「大隊長より、訓示!!」

叫んでいるのは、我が第203航空魔導大隊所属の中隊長、ヴァイス中尉です。

とても真面目な良い方なのですが、少々真面目すぎるところがターニヤは気に入らないようです。

「さて、大隊諸君。戦争だ。いや、戦争のような代物の始まりだ。」

まさかダキア公国、偵察の魔導師や飛行機さえ飛ばしていないとは思いませんでしたよ。

通信も暗号化していないようですし、機密が駄々洩れです。

「折しも今日は、私達の誕生日です。それを知ってか知らずか、ダキア公国からご芳情です。」

「ご丁寧なサプライズプレゼントで、実弾演習の標的を頂いた。」

「ありがたいことですね、なんて優しいダキア公国なんでしょうか…。」

「諸君はこれを銃撃してもよいし、術式で爆破してもよい。航空支配が約束されている以上、ある種のマンハント！ボーイスカウトを蹴飛ばすようなものだ。」

「最後に一つ。今回の標的は、一応反撃してくる…。はずです。まあ、私達があれば訓練してあげたのです、撃墜されるような間抜けはいないと思いますが、留意してください。」

さて、出撃です。

良い運動になるといいのですが。

「ではターニヤ、行きましようか。」

「ああ……セレブリヤコーフ少尉、ヴァイス中尉、さつさと準備せろ。」

さて…… やつとダキア軍が見えてきました。

ええと……。

「なんと、ご丁寧に狙いやすいように派手な軍服！当てやすいように隊列を組んで来てくださるとは！」

「進軍中のダキア軍、およそ三個師団を確認。大隊各位、行動を開始せよ。」

「連中に本当の戦争とはどういうものか、文明の鉄槌を叩き込んでやれ！」

初陣にしては簡単すぎますね。大隊の皆さんが油断してしまわないよう厳しく見張る必要があります。

「了解ッ！」

第一中隊はターニヤと私直轄なので動いていませんが、この分なら第二、第三、第四中隊だけで十分でしょうね。

『実弾演習とは、よく言ったものだな……。』

『敵は案山子も同然。外したら恥だな。貫通術式…… 放てええッ！！』

皆さん順調に狩りを楽しんでいるようで何よりです。

敵が卑怯だのなんだのと喚いていますが…先に戦争を仕掛けてきたのは、そちらでしように…。

「困ったな。アレクシア、セレブリヤコーフ少尉。やる事が無いぞ。」
「予想通りですよ、およそ半分は農民。士気も統率も練度もひどいものです。」

「私はてつきり、難戦する羽目になると思っていましたか…。」

少尉は考えすぎなんでしょうか。それとも、敵のことをちゃんと調べていないだけでしょうか？

「ハンツ、たつた三個師団ごときに緊張とは。セレブリヤコーフ少尉、ライン戦線帰りとは思えんな。」

そうだったんですね、少尉はあの地獄を生きて帰ってきたのですか。

それなら、大隊副官という立場になったのも納得ですね。

「少佐殿、その…三個師団、ですよ？常々思うのですが…お二人の感性は少々…。」

「少々？」

「い、いえ！なんでもありません！」

失礼ですね、まさか私達が狂っているとでもいうのでしょうか。

記憶と記録、実際のデータから事実しか話していませんが。

…ああ、成程。確かに三個師団に大隊程度で突っ込むと聞けば、怯えますか。

「ごめんなさい、セレブリヤコーフ少尉が正しいですね。」

「ええと…はい？」

「三個師団と言った私達が悪かった。厳密には、5万弱の暴徒、ないし群衆と定義するべきだったな。」

「ごめんなさい少尉。言い間違えてしまつて…。」

「い、いえ…。」

そういえば、この世界にとってはこれが初めての世界大戦ですか。

西暦世界を知っている私達はともかく、皆さんは知らないのですかね。

航空戦力の、強力さ、無慈悲さを。

「…ん？」

「どうしましたか、ターニャ？」

「あれは…連中、何をしている？」

ええと…敵兵が、わざわざ集まっていますね。指揮官の指示のようです。

何をしているんでしょう…わざわざ的になるだなんて。

「おそらく…統制射撃の方陣かと。」

「方陣ですって？時代錯誤にもほどがあるでしょう…。」

「…それで、何故ヴァイス中尉達は退避しようとしているのだ？」

…。

「ああ、私分かりました。きっとヴァイス中尉のことです、敵歩兵が対空射撃をしようとしているので、『教範通りに』射程圏内から逃れようとしているのでしょう！」

真面目なヴァイス中尉のことです…。

「はあ、あのマニュアル馬鹿が。歩兵の、しかも時代遅れな銃の弾が航空魔導師に当たるとでも？当たったとして、撃墜されるとでも本気で思っているのか？」

「…あんなのに撃墜される間抜けだったら、私でさえ怒って撃ち殺してしまいそうです。しかし、ターニャ。仕方ないですよ、まだ皆さんは航空戦力の地上に対する優位性を、知らないのですから。」

確かに魔導師は強力ですが、共和国も協商連合国も、魔導師で地上部隊を制圧する、ということをメインにしている軍は見ませんね。

見ないだけで、いるかもしれません…。

基本的には火砲の弾が当たったかどうかの弾着観測、敵観測手の撃墜、味方観測手を守るためにスクランブル、くらいでしょうか？

基本的に魔導師は魔導師と戦う…というのが、常識のようですね。

「チツ、間抜け共め。仕方ない、我々も参加だ、中隊！我に続け！」
「了解です！」

「りよ、了解！」

少しくらいは運動しないのですし。

丁度よかったです、魔導師の強さを教えてあげつつ、運動ができるのです。

「重機関銃の発砲音すら聞こえないとはな…。」

「擲弾投下！」

やっていることは、爆撃機のモノマネです。

ただ、爆弾を投下するだけの簡単なこと。準備運動にもなりませんね。

「はあ、私達が攻められていると思っていたのですが…。」

「まったくだ…困った連中だな、嘆かわしい。」

なんだかもう、飽きてきました…。

「もう、さっさと前線部隊の指揮官のいる後方基地を潰して友軍に任せましょう。」

「そうだな、そうしよう。時間の無駄だ、こんなお遊戯をしているくらいなら、宿舎周りの草むしりでもしているほうがよっぽどマシだ。」

「……なあ、アレクシア、セレブリヤコーフ少尉。本当に、これが？」

「ターニヤの言いたいことは、とてもよく分かります。ですが…。」

「はい、偽装ではなく、これが本物の侵攻軍司令部のようですね。」

お粗末なものです、出力も絞らずに通信を垂れ流しています。

見え見えの罠だと思っていましたか…はあ。

「ひどいものですね。もしかして私達は、帝国に観光しに来た人たちを侵攻軍と間違ってしまったのでしょうか？」

「そうかもしれないな。ビザを持っているか確認しようか。」

「入国の目的も、ですよ！」

ダキア軍、恐るるに足らず……… といいますか、ここまでひどいと笑えませんか。

…… 着陸。

すると、流石に気づいたのか、ドタドタと走ってくる音が聞こえて、

「き、貴様らああああ!!」

「帝国へようこそ！」

「ご入国の目的は？ビザはお持ちですかあ？」

ターニヤ、あまりにひどいので鬱憤を晴らすつもりで皮肉を言っているのは分かりますが……。

私はもう、皮肉を言う気力すら湧きません……。

「…… はあ。」

「ふ、ふ、ふぎけるなあああ!!」

発砲。

誰が、誰に？

敵が、ターニヤに。

「チツ……」

「アレクシア、落ち着け、あの程度の銃撃で私達の防御術式が抜かれるわけではないだろう。」

次々に、敵兵が発砲してきますが、一発も当たりません。

いえ、当たってはいるのですが、魔導師の防御を時代遅れの銃で何発撃つても抜けるわけがないのです。

「…… はい、すみませんターニヤ。ですが、これは本当に時間の無駄ですよ……。」

「そうだな、さっさと終わらせよう。総員、あの指揮官だけ残し残りは射殺せよ！」

少佐方は、お二人とも恐ろしい方ですが、本当に凄い人達です。時代遅れとはいえ、5万人を蹴散らし、敵司令を潰してしまいました。

3時間も経たないうちに、です。

ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐は厳しいことばかり言われませんが、その言葉の裏には私達を死なないように、私達のことを大切に想ってくださいていることが少なくとも私には分かります。

言葉こそ苛烈で、恐ろしいことを連発されますが、とても優しい方です。

実は、以前ライン戦線で助けて頂いたのですが、お二人は覚えておられないようです…。

一方で、そんな少佐の妹様の、もう一人の少佐。

アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐は、普段はとても温厚な方で、言葉もなるべく苛烈にならないよう配慮してくださいます。

お姉さんと同様、私達のことを気遣ってくださいます…。

お姉さんが何か、危害を加えられたり、ストレスを感じそうな事などが発生した時に、普段の温厚さからは想像できないほど豹変されます…。

その時の、アレクシア少佐の眼はターニャ少佐よりもとても恐ろしく感じます。

ただ、それが姉を想う気持ちから来ていることを、ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐よりこっそり教えてもらいました。

『あの子にとって、私はあの子の心の支えなのだ。だから、私のことでああも溺愛しているのだよ。それに、あの子にとっても、私にとっても唯一の家族だ。私にも、あの子は必要なのだよ。』

噂で聞いていましたが、『二人で一人』というのは、間違いではないようです。

それに、あの年齢で、『唯一の家族』ということは、ご両親は…。

…いえ、私が悲しんだところで何も変わりませんね！

私は私らしく、お二人にコーヒーを淹れましょう。

22 初勝利

「さて、残敵掃討は友軍に任せるとして……。」

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

現在私達は、ダキア公国の侵攻軍司令部を潰し終わり、参謀本部へのお土産を準備し終わりました。

今、ちょうどこれを友軍に引き渡したところです。

「大隊長、全員集結いたしました！」

「よろしい、では、我々はさらに進むぞ。」

「どこまで行きますか？」

そうですね、ダキア……つまり西暦世界のルーマニアですか。

ルーマニアに、めばしいものは……と。

「とりあえず、首都だ。首都にあると思われる兵器工廠を破壊しようではないか？」

「そうですね、思っていた以上にあっさり終わってしまったので、まだ運動し足りません。ね、皆さん？」

嫌とは言わせません！

どうせ誰も負傷もなにもしていないのです。

せいぜい、ここまで飛び続けてきたので若干疲れたくらいでしょう。

「では諸君、ダキア公国首都へ出撃するぞ！」

敵国の工廠を破壊してから考えますか。

ええ、何事もなく、本当に何も問題なく敵国首都上空です。

まさか、こうも簡単にたどり着けるとは驚きです……。

私達に意味はないとしても、多少の妨害程度は予想していたのですが。

「よし、目標発見。共和国がテコ入れした兵器工廠らしい。」

「それはそれは、よく燃えそうですね。楽しみです！」

「…見た限り、対航空防衛はされていないようですね。」

侵攻軍にさえいなかったのですから…。

「ああ、連中は一世紀前の世界で生きているらしい。」

「さて、では避難勧告を出しましょうか。」

国際法では、一般市民のいるところを攻撃する場合、避難勧告をしなければなりません。

実に面倒ですが、避難勧告後に市民が死んだらそれは、避難が遅かった、としか。

「少佐殿、それでは奇襲の効果が失われてしまうかと…。」

「ヴァイス中尉？貴方、常識的、真面目すぎますよ？」

「…申し訳ありませんツ!!」

ヴァイス中尉は頭が固すぎなのです。

もつと、柔軟に考えることができるようになってほしいです…。

「セレブリャコフ少尉、さつさと警告を発しろ。規定通り、国際チャネルでだ。」

…ああ、今丁度思い出しましたが、ルーマニアには油田がありましたね。

規模までは覚えていませんが、第二次大戦時はナチスドイツの重要な石油供給源になったとか。

ただ、ソ連との国境の近くで、さらに飛行場も近かったために連合国側から攻撃されたようですが。

「でも、あの…本当に、私でよろしいのでしょうか…？」

「は？」

「少尉、どうしましたか？緊張してしまいましたか？」

「いえ、そういうわけでは…。」

「ああ…確かに、私がやったほうがよさそうだな。」

え？…え？

どういふことなのでしょうか…？

「ええと、ターニャ、どういふことなのでしょう…？」

「いいから、お前も一緒に避難勧告するぞ。」

「ええ… わかりました。」

全然状況が飲み込めないのですが…。

「……… せんせい！ぼくたち、わたしたちは、こくさいほうにのとり、せいせいどうどうせんそうすることを、ちかいます！」

な、なんですか!?

どうして、避難勧告でターニヤがこんなに可愛くなるのですか!?

どういうことなのです…? ?

「けいこくします！ていこくぐんは、これより、ぐんじしせつをこうげきします！」

「え、ええと… ターニヤ？これはどういう…。」

「すばらしいですね、完全に子供のイタズラだと思っているようです！」

「ああ？」

ああ… そういう。

確かに効果的ですが… ターニヤが不機嫌になってしまったのです…。

「すごいですね、少佐殿は演劇でもやられていたのでしょうか。」

「はああ？」

「ま、まあまあ…。」

「… さて諸君、国際法上の義務は果たした。仕事にかかるとしよう！」

ストレスを早くぶちまけたいのですね、わかりますよターニヤ…。

「そうですね、さっさと仕事をしましょう。」

「総員、長距離用術式展開ッ！」

「目標！ハルベリウス兵器工廠！各中隊は、少佐殿に合わせて斉射せよッ!!」

そんな名前だったのですね、あの工廠。

…… これから破壊するので、覚える必要もないですが。

「……… 総員、撃てええエエツツ!!」

「兵器工廠、跡形もなく吹き飛びました。… つと。」

目の前で大爆発。きれいな花火です。

「ダキアには足を向けて寝れんな、実弾演習だけでなく、花火まで用意してくれていたとは。ともあれ、目標は達成だ。」

「ターニャ大隊長！少しよろしいでしょうか！」

「どうしたアレクシア、急に畏まって。」

「あはは、一度やってみただけです。… 予想よりも遥かに早い時間で任務が終わってしまいましたね。」

油田を確保すれば、帝国が潤いますし、手柄にもなります。

それに、西暦世界と同じように展開していくかは分かりませんが、もしも連邦と戦争になった場合、ダキアに拠点があれば相当楽になるはずです。

「そうだな、何かやりたいことでもあるのか？」

「はい、ダキアには、確か油田があったと思いますが…。」

「ああ、成程。時間もある、ついでだな、占領して帝国への土産としようか。」

この後は、何事もなく油田地帯を確保し、友軍が到着、同日ダキア公国は降伏。

… 宣戦布告から、わずか半日も経たずに終結しました。

帝国は、全土併合するかと思いましたが、傀儡国にするようです。多少の自治権を認めるだけで、油田や飛行場などの一切がすべて帝国管理下みたいですが。

… ほとんど併合に近いですが、もはやダキアに戦う力はありません。

ゼートウーア閣下が、私の提言を皇帝陛下に進言してくださったのでしょうか。

なにせよ、戦線拡大は免れそうですね。

初陣から、数日が経ちました。

ダキア公国を半日で降伏させた功で、一週間ほど休暇を頂くことができました。

「ダキア公国は半日も経たずに降伏。私達の初陣は大勝利でしたね。」
「そうですね、少佐殿。そういうえば、今日は少佐殿は一人なのですか？」

「はい、ターニヤは今、参謀本部から来たレルゲン中佐殿とお話しています。私もご一緒しようと思ったのですが、『たまには、外で伸び伸びとしてこい』って言われまして……。」

「といつても私、ターニヤと一緒に居る以外に特に楽しみもないのですが……。」

「ぼーっとしても暇なので、ヴィーシャのところに来たのです。『そうですか。少佐殿は、お姉さんのことが本当に大好きなのですね。』」

「はい、大好きです……。私達は戦災孤児なのです。教会に拾われ、育てられました。ですから、私の、血のつながった家族はターニヤだけなのです。」

あの頃は……とても貧乏で、食べるものも着るものも良いものではなかったですね。

「ターニヤは……小さい頃からずっと、ずっと私のことを想ってくれています。ずっと、私はターニヤに守られてきたのです……。」

ヴィーシャは、静かに聞いてくれます。

優しい人です、少し抜けているところはありませんが……。

「ですから、私はターニヤに少しでも恩返しをしたいのです。ヴィーシャは、気づいているかもしれないませんが……私は、ターニヤのために一生懸命になりすぎてしまうことがあって……。」

「はい、知っていますよ。お姉さんからこつそり、教えてもらいました。」

ターニヤも、ヴィーシャのことは信頼しているんですね。

ターニヤがそう判断したのなら、きっと大丈夫なのでしょう。

「ヴィーシャ、戦争が終わったら、その……。」

「はい、なんでしょうか少佐殿。」

「……二人きりのときは、アレクシアでいいですよ。堅苦しいのは、大隊の皆さんの前だけでいいです。戦争が終わったら、その時は私達とたくさん遊んでください。」

「少佐殿…… あっ、すみません、ええと……アレクシア、ちゃん？」
ずっと、軍人でしたからね……。

そう呼ばれるのは、いつぶりでしょうか。

教会のシスターに呼ばれたのが最後のはずですが……。

「はい、ヴィーシャ。ありがとうございます、ああでも、このことはターニヤには内緒ですよ？きつと、嫉妬してしまつて上官に対して何という態度だ！だとか言つて怒つてしまいます。」

「あはは、言いそうですね。本当は、少佐殿……アレクシアちゃんのこと、もっと恐ろしい人だと思つていました……。」

「そ、それは心外です。ターニヤほど厳しいことは言つてないはずですが……。」

私に、初めて、友達ができました。

私達の、良き理解者になってくれそうなのです。

ヴィーシャだけじゃないです。

ヴァイス中尉も、他の皆さんも、なんだかんだ言つて誰も脱落することなく、今まで一緒に戦つてきたのです。

大隊のみんなは、それぞれ仲良くなっているようです。

「皆さんは、ターニヤのこと、どう思っているのでしょうか…。」

「とつても厳しい大隊長ですが、妹想いの、大隊想いの優しい人だつて、皆さん知っていますよ。」

よかったです、厳しすぎる鬼畜大隊長、とか思われていなくて…。

やはり、仲が良いほうがちゃんと命令を聞いてもらえますから。

「そうなんですか。よかったです、皆さんがターニヤのこと嫌いだったら…。」

「感謝こそすれ、嫌うはありますがありませんよ。確かに、厳しすぎるくらい厳しい方ですが、大隊長の厳しすぎる訓練のおかげで、戦場で緊張しないのですから。」

「あはは。私も見てて、ちよつと厳しすぎるのでは？と時々思います
が…。」

「少佐殿から進言して頂いてもよろしいのですよー？」

「でも皆さん厳しい厳しいと言いながら誰も離脱しないじゃないですか。終わった後のご飯もとても美味しそうに食べますし。」

選抜のときのひどい訓練でも、誰も途中で離脱しませんでしたし…。

「…では、そろそろいい時間ですね。私は戻りますね。」

「はい、少佐殿。」

「ヴィーシャ。二人きりのときは、名前で、つて言いましたよね？」

「ああつ、す、すみません…。またお暇なときに、お話ししましょう、アレクシアちゃん。」

「はい、ヴィーシャ『お姉ちゃん』。また。」

「えつ…ええと…はい、また。」

23 次の戦地への準備

「大隊長、入室！」

おはようございます、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。「楽にしろ。さて諸君、先日のダキアとの戦い… 戦いと呼べるかは少々疑問だが、よくやってくれた。」

「はっ!!」

私も大隊長なのですが、ターニヤが私の分まで仕事をしてしまうのです…。

さて、ダキアに勝利した休暇も終わり、今日からまたお仕事です。「結構。では、これより参謀本部よりの通達を告げる。ヴァイス中尉。」

新しいお仕事でしょうか。

次は北方でしょうか？西方でしょうか？

「はっ。すでに大隊長より通達されたことではあるものの我が大隊は遊撃大隊となる。」

「言い換えれば、大隊は常に内線を全力で東奔西走させられるということだ。」

既にダキアまで散歩してきたばかりです。

ダキアを一瞬で降しはしましたが、西暦世界と違い同盟国の無い帝国。

協商連合を倒し同盟とするのが最も良作でしょうか？

「つまり、参謀本部は我々を馬車につながれた、馬並みにこき使うということだ。喜べ。キャロットは用意されているらしい。」

「キャロットが何か、とは何も知らされていませんが！」

「はっはっはっはっは!!」

笑い始めた皆さん。

まあ、笑うしかないですね。

一つの国を倒しても、休暇一週間ですよ！

… まあ、また勲章がいくつか増えました。

「大隊、傾聴！」

「本日18:00より、夜間長距離機動を開始する。各中隊長は集合。飛行プランを提示する。」

中隊長たちが集まって、各々の予定を確認します。

「さて、中隊長らがおしゃべりを楽しんでいる間、短い通達事項を伝えておきましょうか。」

まあ・・・ 皆さんおおよその予想はできていると思いますが。

「大陸軍が抜けたとはいえ、北方戦線は本来、今ごろ決着がついていなければおかしいのです。」

そうなのです、まだ終わっていないのです。

このままでは冬になってしまいます。

「本来は、ということですよ、何かがあると思つてよいかと。」

「大隊長殿!」

「ヴァイス中尉、これは私達の推察です。私見に過ぎませんよ。」

予想、というよりは大方そうなのでしようが。

「まあ、諸君。共和国か連合王国か、はたまた何処の誰かは知らないが誰かがお節介をしているということだ。」

また、ターニヤが私の仕事を・・・。

「・・・ そういうことです。さて、話は少し変わりますが、皆さん。実は、皆さんがまだ、あの雪山で訓練をする前にですね、新しい航空機が量産され始めたのです。」

「・・・ ほう、そうなのかアレクシア。それで、私達の魔導大隊とどんな関係が?」

いい質問です!

と言いたいところですが、ターニヤのことです、きっと分かつて言っているのでしょうか。

「新しく配備される航空機は、戦略爆撃機、です。」

「なんだと! 戦略爆撃機だと!」

あれ、ターニヤは知らなかったのでしょうか。

「はい、そうです。ええと、戦略爆撃機というのはですね、従来の爆撃機と違い、兵士を殺すことよりも、敵の兵站を潰すことに重きを置い

ています。高高度から敵国へ侵入、爆撃目標……兵器工廠や、物資の集積所などですね、これを爆撃します。」

本当は、敵国の市街地も焼くのですが、それは国際法に反しかねません。

「この爆撃機が現在、早くも20機が完成しており、北方か西方かどちらに配備するか参謀本部で揉めていたらしいですね。結局、先に北方を片付けるということで、北方配備になったようですが。」

「成程……戦略爆撃か……。」

「して、大隊長。それと、我々にどのような関係が……？」

「ここまで聞いて、まだわからないのですか……。」

「いいですか、北方に新型航空機、戦略爆撃機が配備されたということ、私達が北方へ仕事をしに行く事。おそらく我々は、この爆撃の護衛も務めることになるかと思われれます。」

「は、はあ……。」

問題は、この先なのです。

「この爆撃機、まあ考案は私ですが……誰が設計したのかは不明なのですが。最低でも高度、およそ25000を飛ぶのだそうです。」

さて。皆さん、顔が青くなってきましたね。気づいてしまいましたか。

「大隊長、それは、つまり……。」

「そういうことだ。爆撃機というものは、攻撃する際に大きく急降下する。これに合わせ、我々は爆撃機の攻撃の隙を埋めることにある。貴様ら、あれだけ訓練をしてやったのだ。今はもう余裕で飛べるよな？」

「……はっ!!」

なんですか、その微妙な無言は……。

まあいいでしょう、せいぜい20000以上を飛んでいれば大丈夫だろうと思っていました。遙かに上回るとは思いませんでしたね。

「では諸君、時間までは自由にしてい、解散。」

「…しかしアレクシア、いつの間に戦略爆撃なんて参謀本部に提案したんだ？それで、どうしてお前が戦略爆撃機の配備状況を知っているのだ。」

「はい、ターニヤ。戦略爆撃による兵站破壊は、大学生だったときに論文として提出しました。ゼートウーア閣下が、『大学図書館の本を読んでいるよりも、貴官の論文のほうが面白い』と絶賛してくださいったのです。それ自体は嬉しいことなのですが…。」

「なんだ、何かあったのか？」

「ええと、『前の論文は検討しておこう。その前のものは既に実行中だ、安心したまえ。さて、次はどのような論文を持ってきてくれるのだ？』と、閣下に催促されています…。」

「はあ、閣下は知識欲の塊のような方だからな、目を付けられてしまったのか…。」

本当に、大変でしたよ…。2〜3週間に一本、くらいのペースで論文を書いていましたから…。

ただ、その甲斐あってかほとんどが実用化され、帝国は少しずつ強くなっています。

ですが、確かその中に戦略爆撃による兵站破壊の有効性を書いたものがあったのは覚えていますが…。

ここまで早く実行、実用化されているとなると、魔導を用いたクラスタ―爆弾まであと少し、ですかね？

「成程、論文のことは分かった。」

「爆撃機の配備については、この前ターニヤと喫茶店に行った際に、ターニヤがトイレへ行っている間にレルゲン中佐殿と偶然会いました…。」

本当に、たまたまでしたか。

その時の中佐は、私のことをターニヤと勘違いしたのか怖い顔をされていました。

私だと分かっても怖い顔でしたので、ターニヤが嫌いなわけではな

いようです。

「中佐が、そういうえば、と言つて教えてくださいました。それだけ言われて、忙しそうにどこかへ行つてしまわれましたが。」

「そうか、中佐が……。そういうえば言つていたな。あの時は挨拶だけだろうと思つて何も聞かなかつたが、成程そういうことがあつたのか。」

戦略爆撃の有効性を、北方で示すことができれば、共和国や連合王国に対してかなり有利になります。

また、ゼートウーア閣下にお話した、工場を破壊しておいて復旧のための資材を売りつけることもできるようになるかもしれない。

不安があるとすれば、試験済みであるとはいえ新型航空機、壊さなようにしませんと。

しかし、こんな短期間で、私の論文を読んだだけで、まだこの世界には無かつた新型の航空機を製造するとは、本当に驚きです。

一体、誰が設計したのでしょうか……。

24 北方の歓迎会

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。帝都を18時に出発し、配属先の北方司令部まであと少しです。もうそろそろ冬ですし、遮るものもない空ですのでとても寒いです。

「…見えたぞ、もう少しだ。」

やっと到着、です。

昼間でも冷えるというのに、夜間飛行は堪えますね。

「皆さん、よく暖かくしてくださいね。風邪などひいてしまつては…：… わかりますよね？」

風邪で休まれてしまうのは困るのです。

できれば、常に気を付けていてほしいですね。

「さて、明日からここで仕事だ。暖かくし、しっかりと睡眠を取り、備えること。以上、解散。」

「ターニヤ、寒いです、もっと抱きしめてください…。」

「むう…：… どうか？」

部屋へ入ったとき、外と同じくらい寒かったです…。

暖炉なども無いですし、さっさと寝てしまうに限ります。

布団を被つてターニヤに抱き着いているというのに、まだ少し寒い
です。

「はい、ターニヤの心音が聞こえてきます。とても落ち着きます。」

「はあ、まったく。アレクシアは甘えたがりだな。」

「むつ…：… いいんですよ、ヴィーシャのところへ行つても…。」

「なっ、それは卑怯だぞアレクシア。私だって寒いのだ、アレクシアを

抱きしめたい。」

あはは、やっぱりターニヤは可愛いのです。

「… そういえば、セレブリヤコーフ少尉は大丈夫なのだろうか。我が大隊は私とアレクシア、セレブリヤコーフ少尉を除いて全員男だろう。」

そういえば、そうですね。

男だらけです、華が少ないです。

そうだ。せっかくですし、ヴィーシャも呼びましようか。

ターニヤが許可を出してくれば、ですが。

「… ヴィーシャも、呼んで一緒に寝ますか？」

「… そうだな。ベッドも大きいものだし、セレブリヤコーフ少尉が入っても十分だろう。少尉も寒いだろうし、な。」

「では、私が呼んできますね。」

おはようございます。

はい、昨夜はよく眠れました。

ただ、朝起きたらターニヤは少し不機嫌そうでしたが…。

私もターニヤも、いつのまにかヴィーシャの抱き枕にされていました。

私は、いつもターニヤにされていますので慣れていますが、ターニヤはそうではなかったらしいです。

「どうしたのです、ターニヤ？」

「… いや、なんでもない。大丈夫だ。」

「申し訳ありません、少佐殿…。」

「……いいのだよ、少尉は何も悪くない。」
そんなに、部下に抱きしめられるのが嫌だったのでしょうか……。

さて、身支度も終わり、今日もお仕事です。

『第203航空魔導大隊！聞こえているか！』

はて、スクランブルでしょうか？

「はい、聞こえています。現在北方戦線司令部です。どうされましたか？」

ターニャ達は朝礼をしているので、私が応えます。

私も、大隊長ですから……。

『朝からすまない、協商連合国魔導大隊が朝っぱらから遊びに来やがった！こちらの大隊がスクランブルして対応しているが、長くはもちそうにない！すまないが、救援に来ては頂けないか？』

「はい、少し待ってください。準備が完了次第、連絡とともに救援へ向かいます。」

『恩に着る、すまない。』

朝から協商連合国の魔導師さんたちは元気ですね。

まあ寒さは向こうの得意分野。現地部隊が敗走してしまえば、新型爆撃機も危ういですね。

「ターニャ、すみません。少しいいでしょうか。」

「ああ、大丈夫だ。私も通信は聞いていた。大隊諸君！どうやら、協商連合の魔導師さん達が、朝から私達の歓迎パーティーをやっているぞうだ。ぜひとも参加しようではないか！」

「現在、帝国の北方魔導大隊が応戦中ですが、ここしばらくの連戦のせいか長くは持ちそうにない、と。すみませんが、すぐに出発しますよ。」

さて……敵の規模はどれくらいでしょうか。

歴戦の北方魔導大隊が連戦に次ぐ連戦、疲弊しているとはいえ長くはもちそうにない。

2個大隊は確実にしようか。

「…こちら第203航空魔導大隊、大隊長のアレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。これより救援へ向かいます…。大隊各位、出撃！」

『ああ、助かる！戦闘地点は北東エリア、C-6ブロック。そちらの大隊のコールサインは、フェアリーだ。』

妖精、ですか。ターニャに相応しいです！

「…了解。通信を引き継ぐ、こちらフェアリー大隊大隊長、ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐だ。私がフェアリー01、アレクシアがフェアリー02とする。」

「はい、大丈夫です。CPへ、こちらフェアリー02、通信状態良好、ノイズ等もほとんど無し。」

『フェアリー01、02、こちら確認した。着任早々すまないが、彼らのことをよろしく頼む。』

『クソツ!!協商連合め、毎日のように来やがって!』

『CPへ、こちらヴァイパー02、大隊長が負傷した!』

『CP了解、ヴァイパー02、01の指揮権を継承せよ。ヴァイパー01、他の負傷兵等連れ後退せよ。』

『ヴァイパー01、了解。02、武運を。』

もうすぐ、もうすぐです。ヴァイパー大隊の皆さん、持ちこたえてください…!

「CPへ、こちらフェアリー01。ヴァイパー大隊及び敵魔導大隊を目視で確認。今すぐにヴァイパー大隊を帰還させろ、あれ以上は無理だ。」

『CP了解。ヴァイパー大隊全員へ通達、現時刻をもって、全員帰還せよ。後は、フェアリー大隊へ引き継ぐ。』

『ヴァイパー大隊、了解。フェアリー大隊へ、ありがとう、我々が不甲斐ないばかりに、すまない。』

『こちらフェアリー01。ヴァイパー大隊、よく持ちこたえてくれた。感謝こそすれ、非難などありえん。帰還し、身体を労わってやれ。』

ダキアとは違い、今回はけがをしてしまうかもしれません。

「大隊諸君、戦争の時間だ！」

「各自の判断で戦闘開始！絶対に関撃ち落とされてはいけませんよ！」

敵はおおよそ大隊1つと中隊2つほど。

ヴァイパー大隊が少しでも撃墜して下さったのでしよう、無駄にはできません。

「さて……。『こんにちは、協商連合の皆さん！私達と楽しく遊びましょう！』」

「アレクシアめ、なかなか良い皮肉を言えるようになったな。つぶふ。」

一人、また一人と、次々に敵魔導師を撃墜していきます。

力加減を間違えて頭を吹き飛ばしてしまったりしていますが、それも数人ですし大丈夫でしょう。

「クソがツ!!ラインの悪魔共め、貴様らはライン戦線に引っ込んでろ!!」

「悪魔だなんて、ひどいです、よ！」

恨み言を言ってきた敵魔導師の腕を挽ぐ。

防郭がありますが、気にせず撃ち続けます。

「クソックソツ!!帝国の悪魔め、このまま捕虜になどなるものか!!」
「っ!?!」

自爆ツ!?

… 危なかつたです。あとほんの数コンマ、遅れていたらミンチでした。

流石に今のは、ヒヤツとしました。

「大隊長!?!クソツ、撤退だ!!」

…… 今の、自爆された方がトップだったのですか。

気を失っておられるようですが、まだ息がありますね。

確保し、捕虜としましょう。

「…ふう、CPへ、こちらフェアリー01、敵魔導大隊の壊滅を確認。残兵は取り逃がしましたが、敵魔導大隊の大隊長を確保しました。」

『CP了解。取り逃しはしたが、大戦果だ。誰も君達を攻めることなどできんよ。また、捕虜が誰だか分かるかね?敵とはいえ大隊長、帝国の記録に残っているかもしれん。』

そうですね…。銃には『AS』と掘られていますね、この人の名前の頭文字でしょうか。

あとは軍の階級章や手帳などでしょうか。

「CPへ、こちらフェアリー02、捕虜の身元が判明。協商連合軍魔導中佐、アンソン・スー殿です。」

『…… CP了解。こちらの記録にも残っていた、名前までは不明だったが成程、そいつは帝国、協商連合戦争勃発当初から最前線で戦闘を続けられた、敵将だ。』

なんですって。開戦当初から、ということとは…。

ああ、なんという。確かに、戦闘中は気づきませんでしたが見覚えがあります。

そうです、私達が銀翼突撃章を貰うきっかけになった人たちの隊長

ですか。

「…このお方は敵でありながら、見事な戦士です。殺してしまうよりも、協商連合国との講和を目指すにおいて重要なカードになるかもしれない。」

「…そうだな、こいつの部隊には銀翼突撃章をプレゼントしてもらったしな。」

この大げがですし、魔力もほとんど感じません。

ですが、正面から戦って理解できましたが、この人には私達と同じ、強い闘志が眼に宿っていました。

たといえ死ぬ直前まで、戦う人なのでしょう。

「…ターニャ。この人には娘さんがいるようです。」

「…そうか。今は敵であるが、こいつの娘には罪はない。父親を殺されてしまえば人生が狂ってしまうだろう。さつさと戦争が終われば、生かして返すべきだな。少しでも禍根を残さぬためにも、な。」

25 捕虜への見舞い

「つつつ……なんだ、死ねなかったか……。」

「ああ、気が付かれましたか。おはようございます。」

「こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。」

「先の協商連合魔導大隊を壊滅させた日から数日ほど経ちました。」

「捕虜として確保した敵魔導大隊の大隊長、アンソン・スー殿がやつと目を覚まされました。」

「私が確保したので、見ておけ、と。」

「最初の日は怪我もあつてか物凄く魘されておりましたが、回復なされたようでよかったです。」

「ここは……ッ、君は!!……そうか、私は捕虜となつたのだな。」

「暴れるかと思いましたが、すぐに状況を理解したみたいです。」

「はい、まさか自爆なんてされるとは。驚きましたよ、アンソン殿。」

「それでもくたばらない、君もどうかと思うがな。それに自爆なら、君だったか？私の部下にやってくれたじゃないか。」

「……もっと、部下を殺された恨みなどぶちまけられると思つていましたが。」

「想像よりも、気さくな人のようですね。」

「いえ、あの自爆は私の姉がやりましたね……その、アンソン殿。左腕のことは、すみませんでした。部下の皆さんのことも、申し訳ありません。」

「敵対し、戦闘中だったとはいえ、落ち着いて話せる今ならば謝ることがができます。」

「……まったくだ。まあ、今は誰が望んだのか知らんが戦争中だ、お互い生きるのに必死のあの状況で、仕方のないことさ。むしろ私は、左腕一本だけで生き延びてしまったことが恥ずかしいとも思うさ。」

「……その、アンソン殿。一応捕虜ですので、身に着けていたものは全て確認させて頂きましたが……娘さんが、いるのですよね？」

「……ああ。君よりは少しだけ歳が上だがな、精神は君の方が大人だろう。……まったく、我儘な娘さ。休暇に会いに行けば、やれヒゲ

を剃れだの、やれ清潔にしろだのと、誰に似たんだかうるさくて敵わん。」

「あはは、娘さんは、アンソン殿のことが大好きなのでしよう。そうでなければ、この写真のような笑顔にはなれませんよ。はい、これはお返しします。」

戦場で憎しみあう敵でも、こうやって落ち着いて話すことができれば、いいのですがね。

今回の共和国も協商連合も、どちらもあちらから宣戦布告をされたのです。

政府が戦争をしたいのは、勝手だとは思いますが、国民の皆さんが可哀そうです。

「ありがとうございます。…君は、君達は我々の間では『ラインの悪魔』と呼ばれている。知っているかい？」

「はい、それはもう。ライン戦線では共和国の皆さんに散々呼ばれています。」

可愛いターニヤを悪魔だなんて、ひどいあだ名だと思いませんか!?

「ははは、どんな恐ろしい悪魔なのかと思っていたが、私の娘よりも若いとはな。」

「アンソン殿は、私達が憎くはないのですか？」

「なぜだ？まあ、確かに大事な部下を失っているから、多少は恨みがあるさ。だがこれは戦争のせいだ、仕方のないことだ。それに落とされたあいつらも、技量が足りなかっただけかもしれない。」

ここまで、すつぱりと割り切れる軍人はなかなかいないのではないのでしょうか。

ターニヤならおそらく、『ああ？落ちたあいつらがのろまだっただけだ。』と言いますね。

アンソン殿とターニヤは、どこか似ているかもしれません。

「…アンソン殿は、敵にしておくには惜しいくらい聡明な方ですね。」

「ラインの悪魔様にそう言って頂けるとは、光栄ですな。…君も敵にしておくにはもったいないがな。」

「アレクシア、です。悪魔ではないですよ？私の名は、アレクシア・フォン・デグレチャフです。ああ、すみません、そういえば名乗っていませんでしたね。」

「そういえば、そうだな。改めて自己紹介とこのうか。どうせ私はこんな怪我の、しかも捕虜だ。暇つぶしに付き合ってくれ。」

なんとも、憎めない方です。

「君はもう知っているだろうが、私はアンソン・スーだ。協商連合国にて、中佐を拝命している。今は帝国の捕虜だが、な。」

「はい、改めて、私はアレクシア・フォン・デグレチャフです。帝国から少佐を拝命しております。捕虜の貴方にこう言うのも何ですが、戦争終結まで、仲良くしてください。」

「ははは、君は変わった軍人だな。捕虜と仲良くしよう、だなんてな。だが、気に入った、しばらくの間、よろしく頼むよ。」

今の私も、アンソン殿を看病するのが仕事ですし、雑談でもしましょうか。

「アンソン殿の奥様や娘さんは、今はどちらに？」

「ああ、娘……メアリーというのだが、危ないから連合王国にでも避難しておけと言っていたのだが、『お父さんが残るのなら私も残る！』と言って聞かなくてな……。」

優しい娘さんです。アンソン殿もこれほど聡明な方です、きっと娘さんもすばらしい人なのでしょう。

「あはは、アンソン殿は愛されていますね。」

「まったくだよ。まあ今は、無理矢理に連合王国へ送り出したがな……そういえば、アレクシア殿。私のライフルは、どうなりましたか。」

アンソン殿のライフルですか……『AS』と掘られていたあのライフルですね。

「はい？ライフルですか、あれなら貴方の持ち物ということ、今はお返しできませんがちゃんと保管してありますよ。あれはなかなか良い銃です、誰かにプレゼントでもされましたか？アンソン殿の名前入りでしたし。」

「そうか、ありがとう。いやなに、娘が連合王国へ行く代わりに、あのライフルをな。」

「…そうでしたか。戦争が終わったら、アンソン殿の娘さんに会ってみたいですね。一体どれほど、おてんばな娘さんなのか気になってしまいます。」

「つと、アレクシアか。アンソン殿は、どうだ？」

一旦、飲み物でも用意しようとするところで、ターニヤに話しかけられました。

「はい、先ほど目を覚まされました。少し話しましたが、なかなか気さくな、敵にしておくにはもったいない方です。これから、飲み物を用意してきます。」

「…そうか。ああ、飲み物は三人分で頼む。私もアンソン殿の話を聞きたいからな。」

やっぱりターニヤも気になるんですね。

ある意味、私達とは最も腐れ縁な敵将ですし。

— — — side アンソン・スー

部屋の扉が開く。

アレクシア殿か？と思ったが、どうも雰囲気や立ち振る舞いがまったく違う。

おそらくアレクシア殿が話していた、お姉さんなのだろう。

「……君は、アレクシア殿ではないようだな。」

「ああ、よく分かったな。私はターニャ・フォン・デグレチャフだ。よろしく、アンソン・スー殿。」

……恐ろしい笑顔だ。アレクシア殿とはまるで対極だな。

「入りますよ、飲み物を持ってきました。コーヒーですが、よろしいですか？」

……ターニャ殿と二人きりで話すのは、いささか緊張してしまいました。うだった。

「ああ、構わない。ありがとう、アレクシア殿。」

「いえいえ、お構いなく。」

「……本当に君達は、そっくりだな。雰囲気などはまったく真逆だが……。」

「そうですね？真逆というほどでもありませんよ？」

いやいや、温厚そうなアレクシア殿と、好戦的なイメージを持たされるターニャ殿では真逆だろう。

「まあ、その話はいい。さてアンソン殿、単刀直入に聞こうか。貴官は帝国が勝利して戦争が終結した後も、協商連合国が滅びないと言われて信じるか？」

……どうということだ？

帝国が勝利したならば、今まで通りなら……いや。

そういえば帝国は、ダキアに勝利した際、戦略的に重要な場所を除いて自治権を認めていたような……。

「……にわかには信じられないが、ダキアの件もある。今は信じよう。」

「では、協商連合国が残った、ということと話をするぞ。戦後の協商連合国で、帝国と同盟関係を結ぶのが最善だ！と吹聴してくれないか？」

「それは、私に祖国を……。」

「いやいや、早合点してもらっては困る。いいか、戦後の協商連合国は、戦後復興のために大変な努力をせねばならないだろう。そこで、我が帝国がおそらく、何らかの援助を持ちかけるはずだ。それを、受け入れてくれ、という話だ。」

「…… どういうことだ？ 帝国が、援助だと？」

「…… まったく信じられない、という表情ですね。私からもう少し説明しましょうか。いいですか、まず帝国が協商連合国を併合した場合を考えてみてください。」

「…… おそらく、祖国の民衆たちは帝国にあまり従わないだろうな。「きつと、皆さん帝国の言うことなんてあんまり聞いてくれないはずです。しかも帝国としては、『帝国領』が増える、つまり防衛せねばならない場所が増えるのです。これは帝国にとってメリツトよりもデメリットのほうが大きいです。」

「…… 確かにそうだな、帝国の視点に立って考えてみれば、その通りだ。」

併合したところで、旨味が少ない。

「そこで、協商連合国を残すのです。まあ帝国の臣民たちも、戦争に勝って何もなしでは怒ってしまいますから、軍事的に重要な港などは帝国管理になると思いますが。」

「…… 言わんとすることは、おおよそだが分かった。つまり帝国は、民衆の反発、防衛などの一切を擦り付けるのだな。」

「身もふたもない言い方をすれば、そうですね。」

「…… 帝国は、戦争に勝った国をすべからず併合すると思つていますが。」

「…… 一つの間、ここまで戦略的に物事を考えるようになったのだろう。」

「それで、援助とはどのようなものなのだ？」

「ああ、まず帝国が協商連合国の工場などを直す建材などを援助します。見返りに、直った工場で帝国のために銃弾など消耗品を生産してもらいます。…… ああ、ちゃんと買うので問題ないですよ。そうすれば、帝国は軍事物資がたくさん増えて嬉しい。協商連合国は工場を直

してもらっただけでなく、軍需によって潤う。いいことしかありません。」

「……成程。そういうことならば、その提案に乗ろう。」

祖国の為だ、帝国以外の国との関係は悪くなるかもしれないが、致し方ない。

「では、アンソン殿。私達は仕事があるのでな、失礼する。何かあれば、部屋の前に従兵がいる、そいつを使え。」

「では、アンソン殿。お大事に。」

26 作戦会議

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

… この挨拶も定型文になってきましたね。

さて、本日は協商連合国に攻勢をかけるための準備… 司令部にて会議です。

「おっと、来たか。ゼートウーアのお気に入り。」

「ターニャ・フォン・デグレチャフです。少佐を拝命しております。」

「アレクシア・フォン・デグレチャフです。同じく、少佐を拝命しております。」

「ああ、知っているとも、白銀達よ。今日は、今後行われる冬の攻勢についてだ。」

極寒の冬に、攻勢をかけるのですか。兵站がもちませんね。

できれば越冬が最善ですが…。

「… 失礼ながら、小官は越冬を具申致します。」

ターニャも兵站のことを心配しているようですね。

しかしそれは、参謀達も分かっているはず。つまり、何か裏があるということではないでしょうか。

「白銀の言いたいことはよくわかる。兵站について、だろう?」

「… はい、ルーデルドルフ准将閣下。最初はよいかもしれませんが、侵攻速度に対し兵站が追いつかないかと。」

「白銀の妹よ、貴官はどう考える?」

ええと、なぜここで私なのでしょう…。

しかし、指名されたからには答えなくてはいけません。

「そうですね、兵站については、ここにいる全員が、どのような状態になるか理解していると思います。ですが、それを知っていて尚、攻勢に出るといふことは…。」

「ほう、流石はゼートウーアを唸らせるだけはある。続けたまえ。」

… しかたないのです、おおよそ思いついている案を出してみ

ましよう。

「そうですね、攻勢、といつても兵站にそこまで負荷をかけない程度の陽動であると、確信致します。攻勢が陽動であるならば、本命は……。」

「……成程。仁川上陸作戦……強襲上陸か。」

ターニヤも思いついたようです。冬に攻勢をかける意味、成功すれば勝利は確実。

西暦世界の第二次大戦後、朝鮮戦争が勃発しました。

当初、共産陣営……北部側が圧倒的であり、南部側は釜山が最後の砦となっていました。

そこで、当時の朝鮮戦争に介入していたアメリカ軍の司令……ダグラス・マッカーサーがこの作戦を発案、成功させました。

これによつて南部側は盛り返しましたね。

「流石だ、双子の白銀。では、どこに強襲上陸するのがよいと思うかね？」

……ルーデルドルフ准将閣下も、ゼートウーア准将閣下と同じでイジワルですね。

「……フィヨルドですね。ここを押さえることができれば、他国からの援助をほぼ断ち切ることができますし、天然の要塞です。連合王国のロイヤルネイビー相手でもどうにかかります。」

「……やはり、貴官らはすばらしい才能だ。姉は戦闘において臨機応変に対応可能、妹は全体的な作戦を練ることができる。これほどまでに戦争に長けた姉妹はおるまい……。」

褒められているのでしょうか……。あまりうれしくはないですね。

「フィヨルドを押さえた後、素早く周辺の港を押さえつつ、さらに北方の港も押さええるべきかと。」

「ほう、なぜだ？」

……あれ、空気が変わりましたね。フィヨルド以降は、誰も考えておられなかったのでしょうか。

「……敵に勝つには、敵を知れ、と。フィヨルドを押さえられた協商連合国は、もはや敗北しかありません。で、あるならば、政府の要人は

必ず他国へ逃亡し、亡命政権を作るでしょうね。」

祖国が併合されず、帝国と共に歩むということを知らずに。

「…そういうことか。確かに亡命政権など作られては、脅威ではないが面倒だな。よろしい、その案を採用しよう。いや…ええい、この際だ。君の思う最高の作戦を、教えてくれないか。」

ええと、どんどんハードルが高くなっていませんか？

「…はい、大丈夫です。フィヨルドを押さえた後の魔導大隊は、先ほど述べた通り港の確保へ動きまします。それに合わせて少数の海軍、陸軍もサポートをお願いします。陽動の軍はそのまま戦線を維持、新型の爆撃機…戦略爆撃機を用いて敵前線軍の背後へ浸透、兵站を破壊します。…これで、協商連合帝国戦線の軍は壊滅的ダメージを受けると確信します。」

「そういうえば、爆撃機による兵站破壊は君の論文だったな。ここで試そうというのか、よかろう。」

「はい、ただ、現在の戦闘機では、新型爆撃機についていけないかと思われまます。」

「ああ、それについては問題ない。君にも黙っていたが、新型爆撃機の生産が決定すると同時に、新たな戦闘機も配備されることが決定していたのだ。既に、配備済みというわけだ。」

爆撃機だけではなく、戦闘機までも…？

「さて、憂いは無くなった。諸君、作戦決行は三日後だ、くれぐれも漏らすなよ。」

一体、設計したのはどのような人物なのでしょう。

ドクトルならば、もっと狂ったものを作るはず。

どんな外観に仕上がっているのか気になって、ターニャと一緒に飛

行場まで来ました。

「およ？ ヤツホー、君達、見ない顔だね。新しく配属された子達かな？」

「ああ、間違っつてはいないな。」

「ええと、まあ、そうですね。あなたは？」

「ああ、ボクは飛行機の設計や整備をしている、クリスタ。クリスタ・フォン・ツエツペリンっていうんだ、よろしくね。」

…今、ツエツペリン、と聞こえましたが、まさか…。

「クリスタ、だな。整備兵か。私はターニャ・フォン・デグレチャフだ。帝国より少佐を拝命している。よろしくな。」

そ、そうでした、飛行機を見に来たのです。

とりあえず、自己紹介です。

「ええと、私はアレクシア・フォン・デグレチャフです。同じく少佐を拝命しています。」

「ええつ、二人とも少佐なんだ！それに…君が、戦略爆撃機構想の原案の、アレクシアかい!？」

なんですか、その構想は。私はまったく知らないのですが…。

「ええと…。」

小一時間ほど押し問答されてしまいました。

「ごめんなさい、つい、興奮してしまつて…。」

「いいですよ、クリスタ。ええと、飛行機、の、こと、を…。」
なんですか、この爆撃機は。

この爆撃機…知識にあります。

西暦世界の第二次世界大戦終了まで、ドイツの空を飛んだ航空機。

『Ju 88』…に似ています。まったく同じというわけではなく、

多少の違いはありますが……。

「……クリスタ、この爆撃機は……？」

「流石はアレクシアさん、これはボクの設計した爆撃機の中でも、高度29000までを飛べる爆撃機で、試験運用のときの最高速度は260ノット！本当は、機関砲とかつけたかったんだけど、爆撃機での運用だから、速度を維持できないと思って断念したんだ。機体名は『Zeppelin B-67』だよ。ボクの名前が入ってるんだ！」

「……。とんだ化け物ですね。」

高高度爆撃機とは聞いていましたが……。

要求水準を軽々と上回っているなんて、誰が予想できるのでしょうか……。

「……こんな爆撃機、連合王国どころか合衆国でさえまだ、開発していないだろうよ。とんだ才能が転がっていたな。」

「まったくですね……。ええと、『Zeppelin B-67』でしたっけ。どこが一番気に入ってますか？」

「そうですね、やっぱりこの……翼ですね。爆撃機なので、敵機に狙われやすいという弱点がありますが、翼を通常の1.5倍ほど厚くしています。多少弾が当たった程度、へこみで済みますよ！」

厚みを増しているのに、高度も速度も化け物なんですか。

一体どういう設計をすればこうなるのでしょうか……。

「爆撃機については、わかった。クリスタ、あっちの飛行機はなんですか？」

「あれは新しい戦闘機です！あれもボクが設計しました！えっと、機体性能は、爆撃機と同じ高度29000を超える高度まで上昇可能、試験では高度29000で最高速度404ノットを記録。ただ、機体を傷めるから現実的には380ノットかな？ちなみに、試験で上がった最高高度は45900付近、それ以上は操縦者が吐き気を催したため断念したよ。」

「……高度29000で、380ノットだと？これまた化け物だな。」

「誉め言葉として受け取っておくよ。機体名は『Zeppelin K-36』だよ。覚えてね！」

これほどまでの設計の才能、すばらしいです。

帝国の航空機は、安泰ですね。

「クリスタ、ありがとう。このような航空機があるならば、帝国は有利に事を成せそうだな。」

「クリスタちゃん、またね。」

「はい！また会いましょう！その時は、もっとたくさんの方の飛行機のことを教えてあげます！」

「ターニヤ、見ましたか、あの航空機……。」

「ああ。第一次大戦を経験していないこの世界で、あれほどの設計をする整備兵、か……。いつか私達も何かの縁で世話になるかもしれない、仲良くしておこう。」

「ありません、あの戦闘機、多少は違うものの、『Ta 152』にそっくりでした。」

「違いと言っても、外観の塗装、機体の流れるようなラインなどなど。」

「基本的な部分はほとんど同じです。」

「世界最強のレシプロ機、ですか……。」

「しかもそれを設計したのが、ツエツペリンとはな。偶然なのか？」

「そればかりは。ただ、クリスタのおかげで帝国がかなり有利であることを知れたのは、大きいですね。」

「……そうだな。」

27 終結

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

今日は、協商連合国へ攻勢する日です。

昨日、クリスタちゃんの設計した航空機の最終整備・点検も終わり、あとは飛ぶだけです。

私達、第203航空魔導大隊の皆さんも準備万端です。

「さて諸君。我々の任務は、敵沿岸要塞兼港：フィヨルドの制圧・占領である。また、この任務が完了次第、周辺の港も制圧することになっている。」

「今回の任務は陸軍の皆さんが陽動で攻勢をかけ、敵からの注目を集める手筈になっています。こちらが制圧に遅れば遅れるほど、陸軍の皆さんへ負担を与えることになってしまいます。迅速に行動しましょう。」

「はっ!!」

さっさと協商連合国との戦争を、終わらせるのです。

……
オース・フィヨルド港まで直線距離で1.2マイル地点上空。
高度、10000。

今回は直接飛んでくるには遠い地点での作戦ですので、輸送機を使用しての魔導師を空挺として採用しました。

「CPへ、こちらフェアリー大隊。これより、オース・フィヨルド港制圧作戦を開始する。」

『CP了解。フェアリー大隊へ。武運を祈る。』

「フェアリー01より各位。準備はよいな？まずは要塞と併設されている大砲などをすべて破壊せよ。…… 降下開始ッ！」

「了解ッ!!」

作戦開始、です。

直前まで魔導反応を隠匿し、敵魔導師部隊の出撃を少しでも遅らせます。

まずは、艦隊へ砲撃可能な大砲の破壊です。

「フェアリー02よりフェアリー大隊各位へ、敵の要塞・大砲は確認できるだけで8箇所です！隠されているものもあるはずです、くまなく探し、破壊してください！」

「フェアリー01了解。フェアリー02へ、そのまま上空からの監視を頼む。オーバー」

「フェアリー02了解、監視を継続します。オーバー」

…… 戦闘開始から20分。電撃的な奇襲作戦によって、確認できていた大砲8つ、それ以外に隠されていたものも含めると全部で14もの大砲を沈黙させました。

「フェアリー02より、フェアリー大隊各位。帝国軍北方艦隊を確認、あと600以内に到着すると思われまます。」

海軍も来てくれましたね。魔導師だけでは倒しきることは無理です。

ですので、艦隊による艦砲射撃による制圧、陸戦隊で占領、という流れです。

艦砲射撃が始まったら、海兵魔導師と合流し、周辺の港へ急ぎます。

「フェアリー大隊へ、こちら帝国軍北方艦隊。まもなく艦砲射撃を開始する。注意されたし。」

「帝国軍北方艦隊へ、こちらフェアリー02、了解。来て下さりありがとうございます。」

「また、海兵魔導師2個連隊を派遣する。こき使ってくれたまえ。」

「ありがとうございます、では我々は次の任務へ移行します。」

オース・フィヨルド港は制圧できるでしょう。

———— side 協商連合国軍 帝国戦線後方 一般

工作兵

畜生、最悪だ。この前の魔導大隊がちよつかいをかけていた仕返しなのか、帝国のやつら攻勢に出てきやがった。

この寒さだ、帝国軍が進軍できたとしても厳しいだろうが。

おとなしくしてやがれってんだ。

「…おい、やけに前線の方が静かだな。砲撃の音すら聞こえない。どうなっているんだ？」

「ああ、それがよくわからないんだ。つい20分前まで帝国の奴らと大騒ぎしていたはずだが…。」

…すると、空から轟音。

何かの爆発する音、金属音。

「ッ!?何の音だ!?!…なんだアレは。」

見たこともない、大型の航空機だと?

帝国の新作か、だがあの大きさならば戦闘機の機動にはついていけない。

と、思った矢先、恐ろしい速さで黒い塊が頭の上を飛び去って行った。

「戦闘機もだど!?なんだあの速度は!」

………　そして、気づけば俺は、ゴミのように宙を舞っていた。

一体、何が起きた?

俺は魔導適正は無いはずだが、なぜ空を飛んでいるんだ…? ?

———　side　アレクシア・フォン・デグレチャフ

「フェアリー02へ、こちらフェアリー01。オース・フィヨルド港を制圧完了だ。」

「了解しました。CPへ、こちらフェアリー02。オース・フィヨルド港、及び周辺地域の制圧、確保完了。」

「CP了解。フェアリー大隊は、予定通りさらに北方の港の制圧任務へ移行されたし。オーバー」

「了解。オーバー」

さて、お仕事続行です。

「アレクシア、お疲れ。まだ仕事が残っているが、さっさと終わらせて帰るぞ。」

「お疲れ様です、少佐殿。適切な指示、ありがとうございました。」

「ターニヤ、ヴィーシャ、皆さんも。私だけ安全なところから見ていただけでした、ごめんなさい。」

私は、上空から大砲の位置、敵の行動予測などの監視をし、皆さんに命令していただけです。

「何を言う、お前の監視と指示が無ければ敵増援部隊が到着し、苦戦を強いられていただろう。アレクシアがいてくれるだけで、とても助かっている。」

「そうですよ、少佐殿の監視があったおかげで、これだけ迅速に任務を

果たすことができたのですよ。」

ターニヤもヴィーシャも、優しいのです…。

作戦が終わったら、何かプレゼントしないと、私の気がすみません…。

……… オース・フィヨルド港の奇襲作戦、兵站破壊作戦、沿岸

拠点の全制圧。

すべてがつつがなく成功しました。

この作戦成功から数日後、協商連合国は帝国に対し降伏しました。北方での戦争が、終了しました。

「… つと、アレクシア殿か。戦争が終わったな。」

「はい、アンソン殿。協商連合国は、アンソン殿が説得する前にこちらの要求を飲んでくれました。」

「そうか。では私は国へ帰るとしようか。」

「もう戦争状態ではありませんし、ね。そうそう、アンソン殿。貴方にプレゼントがあります。」

とても、喜ぶのではないでしょうか。

「… お父さん… ヒゲ、毎日剃るって約束したじゃない…！
お父さん！」

「め、メアリー!? どうしてここに…。まさか、アレクシア殿?」

「はい、大正解です。戦争が終結してからすぐに、協商連合国を通じて帝国に招待させて頂きました。もう少しこちらで観光してくださいってもよろしいですよー!」

「…アレクシア、ちゃん。お父さんに会わせてくれて、ありがとう!」

…!?

た、確かにアンソン殿を無事に送り返す手筈でしたし、娘さんとも会いたいなと思っていたのですが…。

つい先日まで敵同士だったはずですが、どうして私はメアリーさんに抱きしめられているのでしょうか…。

そ、それに、ヴィーシャよりも胸が大きくて、息ができない!

「っんむむむくくく!!」

「…メアリー、その辺にしておいてあげなさい。アレクシア殿が苦しそうです…。」

「あわわっ、ご、ごめんなさい!」

「…はあはあ、死ぬかと思いました…。」

「アレクシア、アンソン殿を見送ると言っていたが、まだ終わらんのか。つと、失礼した。私はターニヤ・フォン・デグレチャフだ。」

「わ、私はメアリー・スーです。アンソン・スーの娘です…。アレクシアちゃんとターニヤちゃん、本当にそっくり、ですね。」

「…ターニヤ、ちゃん…!?」

… そういえば、ターニヤは私以外の人に、親しげに名前を呼ばれるなんてとても久しぶりなのは…。

「ターニヤちゃんも、アレクシアちゃんもかわいいです!!」

「う、うわっ!?」「ひゃっ! またですか〜!」

… メアリーさんに、ターニヤも私も抱きしめられてしまいました。

この人、私達のこと絶対、帝国軍人だと思っていませんよね…。

「…はあ。すまない、二人とも。メアリーはこうなったら大人しくなるまで待つしかないのだ…。」

「んむ！んむむむ!!!」

28 次の戦場

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。
協商連合国との戦争が終わり、一週間ほど経ちました。

元の政府の要人は、戦争を起こした犯罪者として協商連合国民によって裁かれたようです。

いわく、『帝国に喧嘩を売ったところで、勝てるわけが無かった』
いわく、『喧嘩を売ったのはこちらであるのに、帝国の戦後処理に慈悲を感じた』

などなど、様々な声が上がっているみたいです。

また、協商連合国ではアンソン・スー殿が英雄的扱いをされている
そうです。

なんでも、無茶と知りながら祖国のために左腕まで失い、捕虜と
なっても帝国のことを学んできたとかなんとか。

これによって、アンソン殿は協商連合国首相? になったそうです。
なったのは、いいのですが……。

「アレクシアちゃん!!逃げないでー!」

「い、嫌ですよ!!メアリーのハグは苦しいのです!!」

……元軍人が祭り上げられただけなので、内政は信頼できる部
下に丸投げしているそうで、内政でやるのが無いらしく、『外交』『視
察』などと言って帝国に遊びに来ているのです。

そこにメアリー殿がどうしてもついていきたい!お父様が心配!
と駄々をこね、連れてきたそうなのです……。

どうも、メアリー殿は私とターニヤの抱き心地が忘れられないらし
く……。

「捕まえたっ!」

「いやだー!!むぐぐ……。」

……捕まってしまいました。

「うーん、アレクシアちゃんを連れて帰りたいなあ……。」

「だっ、ダメですよ、私は帝国軍人なのですから。」

「えー……。」

と、メアリーの膝の上で抱かれながらお話しています。

……最初は恥ずかしかったですが、こうしないとずっとハグされてしまうので……。

どうしてここまで、メアリーに好かれているのでしょうか……。

アンソン殿の左腕を奪ったのは私ですのに……。

「メアリー、どうして貴女は私のことがそんなに好きなのです？お父様の左腕を奪ったのは、私ですよ？」

「うーん…… お父様の腕については、まったく恨んでないわけではないけれど……。戦争中だったし仕方ないところはあるかなあ……。そう思うと、アレクシアちゃんとかターニヤちゃんを恨むのは筋違い。そもそも、戦争さえ引き起こさなければお父様が腕を失うことはなかったのだから。」

メアリーは、年齢の割にちゃんと周囲を見ることのできる、才女なのです。

「そう、ですね。メアリーは、優しいのですね。」

「そうですか？もうアレクシアちゃんとはお友達ですし、恨んでいるのは旧政府ですし…… 嫌う理由なんてありませんよ。」

「アレクシア、どこだ？つと、ここにいたか……。どうしてメアリーがここにいるのだ!? どうしてアレクシアはメアリーに抱かれて平然としているッ!？」

あ、ターニヤ。メアリーのいる時に来るなんて、運が悪いですね。
「ターニヤ、こうしていないとメアリーにずっとハグされるのですよ。」

「ターニヤちゃん!!ターニヤちゃんも、こっちにおいで?」

「嫌だ!私は仕事んだ、まだ仕事がある、遊んでいる暇など無いのだ

！」

「あ、ターニヤ、仕事代わりましょうか？私も大隊長ですし。」

「いや……。そうだ、アレクシア。一緒に仕事をしよう！」

ええと……。またメアリーに追いかけれられそうなのですが……。

「め、メアリー。そろそろ、仕事をしてきてもいいですか？」

「…… もう少し抱っこしていたかったのですが、仕方ありません。いいですよ。ですが、今夜、二人とも私の部屋に来るように！」

とても嫌な予感がします。ですが、この条件を飲まなければ結局追いかけて抱っこされるだけです。

ここはひとまず、ターニヤにどうするか聞いてみましょう。

メアリーにわからないように話すには、どうしましょう。

……。あ、そうでした、私もターニヤも転生者、なのでした。

日本語で話せば、きっと分からないはずですよ。

「(ターニヤ、どうする？この条件を跳ねのけても、追いかけて抱っこされるだけですよ。)」

「(そうだな、その通りだ。だがメアリーの部屋に行けば、きっと抱き枕にされてしまうぞ。)」

「(それでも、今、帝国のための仕事ができなくなるよりは幾分かマシなはずですよ。)」

「(仕方ない、今夜くらいは抱き枕にされるか……。)」

「二人とも、何を話しているの？私にも分かるように言って！」

「ああ、メアリー。すまない、仕事の話をしていた。機密なのでな。そうだな、仕方ない、今夜はメアリーの部屋で寝るとしよう。」

「はい、メアリーは私達のお友達ですから。今夜くらいは、一緒に寝ましょう。」

すぐくわざとらしくなっていましたでしたが、大丈夫でしょうか……。

「…… ありがとう、二人とも。今夜、私の部屋で待っていますね。」
そう言っつて、メアリーは自分の部屋へ戻っていききました。

「…… はあ。まあ、今夜のことは仕方ない。それよりもアレクシア、ちよつと思いついたのだが……。」

「何ですか？ターニヤ。」

「… 実は、現在の帝国の暗号通信は共和国や連合王国に見破られているかもしれん… らしいのだ。参謀本部でもこの話題が上がっていた。」

「はい、それは確かに問題ですが、どうかしましたか？」

「… 日本語、だ。西暦世界でも、世界で最も複雑な言語か何かになっていただろう。だが、私達は、問題なく使いこなせる。この世界では誰も知らない言語… いや、一応極東に大日本帝国… のような国、秋津島皇国では現在、昭和初期の日本語… 私達からすれば、カタカナと漢字の古臭い形式だな。だから、現代日本語ならば大丈夫だろう。」

「… そうですね。では、私とターニヤの間でだけ、誰にもバレたくないことを話す時だけ、日本語を使いましょう。」

「そうだな。ああそうだ、アレクシア。陸軍の参謀長官から呼ばれているぞ。なんでも、対共和国戦を終わらせる、打開する作戦について議論したいらしい。私も呼ばれているから、一緒に行こうか。」

「… ということは、協商連合国に勝利した休暇ももうすぐ終わるのでですね…。」

メアリーにもそれとなく伝えておかないと、寂しくさせてしまいますね。」

「ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐、入室します。」

「アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐、入室します。」

「よく来てくれた、白銀、白百合。協商連合国のことは本当によくやってくれた。」

「ありがとうございます。」

「貴官らの立案した作戦は見事なものだった。その素晴らしい才能を、共和国との戦争を終わらせるために、貸してくれないか。」

… 参謀長官が、一介の少佐に頭を下げるなんて。

「長官、頭を上げてください。小官らは、一介の少佐です。上官に頼まれたのです、断るはありますがありませんよ。」

「そうか、ありがとう。では早速だが…。」

まず、状況を説明してくださいました。

現在、帝国―共和国戦線は膠着中。

お互いに押しついたり引いたりを繰り返しているそうです。

ゼートウーア閣下の指示により、新戦術『消耗抑制ドクトリン』によって損害はそれほど大きくないものの、打開する一手が無い、とのこと。

「… そうですね。ターニヤ、戦車を使う案はどうでしょう?」

「それが確実だが… 長官殿。現在、帝国陸軍の戦車はどのような状況でありますか?」

「我が帝国の戦車は、歩兵部隊と共に前進し、砲撃によって敵塹壕を攻撃、または歩兵の盾となることがメインだな。」

「で、ありますか? ならば、爆撃機による兵站破壊作戦は必須ですね、ターニヤ。」

「そのようだな… うむ、作戦の外形は良さそうだ。」

「ほう、では外形だけでもかまわん、聞かせてくれ。」

作戦の概要は、このような感じですよ。

まず第一に、戦域を2つに分けます。

北部の、西暦世界でいうところのネーデルラントに展開している戦域。

北部戦線とでも名付けましょうか。

次に南部、西暦世界ならば、マジノ線があったアルザス・ロレーヌ地方。

この世界では、その場所は既に帝国領なので、突破する必要はありません。

これを南部戦線とします。

第二に、南部戦線はそのまま維持、北部を一気に後退させます。

具体的には、そうですね… 第二次大戦前のオランダ、ベルギー、ル

クセンブルクのドイツ国境、と言えば分かりやすいでしょうか？

「ここまで撤退させます。」

この際、南部戦線が包囲される危険があるため、南部に兵力を集中させます。

第三に、南部の広くなった戦線の一部より、攻勢を開始します。

このときに北部戦線の敵を干上がらせるため、兵站破壊作戦を実行、さらに南部戦線の敵にも爆撃します。

同時に、北部戦線も攻勢をかけ、南部へ敵兵が流れるのを少しでも防ぎます。

クリスタの設計したあの戦闘機ならば、落とされる可能性は低いでしょう。

そして北部戦線の敵軍を撃滅した後、共和国首都へ向かって全面攻勢、でしょうか。もちろん、航空機による援護爆撃もします。

「……成程。だが後退するというのは……。」

「いいですか、長官。これからの戦争は、今までの陣取りゲームではないのです。どれだけ領土を奪ったか、ではなく、どれだけ敵国の戦争継続能力を奪うか、なのです。敵国が戦意喪失するまで、戦うしかないのです。」

「おそらく後退については、帝国軍に所属するものならば納得してくれるでしょう。ですが、それ以外の人間……民衆や宮中の無知な人々は、反対するでしょう。これをどうにかして納得させなければいけません。」

戦争を知らない人たちのほうが数が多いのです、反対されても敢行すれば最悪、内戦になりかねません。

「それはなんとかしよう。成程、この作戦ならば打開できるだろう。」

「ただ、一つ留意せねばならないことがあります。」

「なんだね、それは？」

「ご存じのように、アレーヌ市は、もともとは共和国の都市です。故に、もしかすると共和国がアレーヌ市へ働きかけ、元共和国市民による蜂起が発生する可能性があります。そうなりますと、南部戦線への兵站が崩壊、危機的状況に陥ってしまいます。」

「それ故に、この作戦中はアレーヌ市に帝国憲兵隊を派遣するべきかと。また、敵がどのような手段を使うか分かりませんが、アレーヌ市にある程度の兵力を置いておけば、蜂起が起きてもすぐに鎮圧可能、起きなければ前線への補充要員となります。」

「…確かにそうだな。立地、鉄道を考えれば共和国はアレーヌ市を狙ってくる可能性が高い。その案も採用しよう。また、アレーヌ市が万が一憲兵隊でも抑えきれぬ程の蜂起を起こしてもある程度前線が耐えられるように、別ルートの補給線も確保せねばなるまい…。」

「ここまで用意周到に準備すれば、失敗することは殆ど無いと思います。」

ただ、協商連合国は第三国の介入を与える隙も無く勝利できましたが、共和国はそうはいきません。

おそらく、連合王国は確実に、合衆国も利益を求めて武器弾薬を共和国に売りつけるでしょう。

更に言うならば、東の、連邦にも注意せねばなりません。

作戦中に、もしも連邦が参戦すれば非常に厳しくなります。

これについては、後にゼートウアー閣下に相談しましょうか。

29 戦争準備

こんばんは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。
「んん、アレクシアちゃんもターニヤちゃんも、可愛い〜！」
……。

ええと、現在私達はメアリーと一緒にベッドで横になっています。
「…うるさい。可愛くなんてない。」

…ターニヤはとて不機嫌ですが。

メアリーはというと、私とターニヤを抱き寄せてご満悦です。

「…なんですか、この乳袋は。つるぺたな私達への当てつけですか。」

「…本当にな。なんなのだこれは。邪魔だろう？んん？」

「ひゃんっ！ふ、二人とも、揉まないで〜!!」

まったく、なんなのですこの駄肉は!!

揉んで揉んで脂肪燃焼させてやるのです…！

抱き枕にされる私達の、小さな反抗です。

「うるさいのです。このような肉の塊、今すぐにもそぎ落としてやりたいくらいなのです…。」

「……。」

もみもみ。

もみもみもみもみ。

「ひゃっ、あぁっ、ダメツ!!」

…… おはようございます。

昨夜は、揉みすぎてしまったのか、メアリーがおかしくなってしまうて……。

私もターニヤも、揉みすぎた罰？として服を脱がされてしまつて……。

その、いろんなことを、されてしまいました……。

い、一線は超えていませんよ！

…… ふとももや二の腕、他にもたくさん、赤いアザが……。

もしかして、やっぱり、メアリーはそういう趣味の人なのでしょうか……。

「…… おはようアレクシア。散々な夜だったな……。」

「おはようございます、ターニヤ……。 はい、身体にある赤いアザは、おそらく……。」

「…… 今後はメアリーとは寝ないようにしよう。」

「…… はい。同意します。…… ターニヤ。」

「…… ン。」

朝のターニヤのキス。

いつもよりも、長いです……。

メアリーにされた事を、忘れたいのです……。

ええと、改めまして。

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

見苦しいものを、失礼しました。

私とターニヤのキスなんて、需要ありませんよね。申し訳ありません。

今日は、午前中は昨日浮上した問題をゼートゥーア閣下に提言しに行きます。

その後、戦車を設計している技術開発部へ行き、新型戦車を……

「アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐、入室致します。」

「入りたまえ……今日は一人か。して、どのような件でここへ来た？」

「はい、閣下。本日は、西方戦線の打開するにあたっての作戦案が完成しましたことと、伴って発生した問題について、閣下に助力を求めたく。」

「……成程。では早速、まずは西方戦線の打開案を聞かせてくれ。」

「……ここで、昨日長官にお話しした内容と同様の案をお話します。」

「……成程。南部が少々不安だが、これは我々がどうにかしよう。概ねこの作戦通りで良さそうだな。後で文書にまとめておいてくれ。」

「……はっ。」

「して、この作戦に伴う問題とは？察するに、アレーヌ市のことではなからう？」

「……はい。実は、この作戦中、もしくは共和国を倒しきる直前までに連邦が宣戦してきた場合、です。」

「……ここからが、今日の本題です。」

「連邦が、我が帝国に？」

「はい、閣下。理由はどうであれ、共和国と連邦の二正面では圧倒的に不利となります。これは万が一の話ではありますが、備えすぎて困るものでもないかと。」

「……そうだな。かつてのルーシー帝国とは違う、何を考えているか分からない国になってしまったからな……。聞けば、現在の連邦トップに従わぬ者を粛清しているとか。恐ろしい独裁者が牛耳っているようだ。」

… 西暦世界の大粛清、ですか。それを今やっているのならば、宣戦されてもあまり問題はありませぬね。

「… 閣下、粛清の情報は確かなのですか？」

「ああ、連邦に潜り込んでいるスパイ全員からの情報だ、嘘ではなからう。」

「粛清が本当ならば、もし開戦しても数か月は耐えられそうですね。連邦のことです、前線の有能な指揮官ほど、野心を抱いているに違いない！などと妄想し、粛清しているに違いありませんから。」

「なぜ、そう言い切れる？」

「おそらく、最初は側近、次に部下、というように粛清していったはずです。徐々に自分の身近ではない者まで。そうなれば、誰が裏切るかわからない、疑心暗鬼に陥ると思われます。人間とは、そういう生き物ですから。」

「… 成程。だが我が国が連邦に戦争をする意味もない、宣戦してこなければいいがな。」

さて、お昼も過ぎましたし、技術開発部へ行きましようか。

新型戦車について、話し合わなくては。

どうして、新型戦車が必要なのか、といいますが、専ら連邦戦のためです。

連邦は広大で、おそらくインフラも整備されていない土地が多いはず。

西暦世界でも、そうだったのですから。

そのくせ、敵兵の数は無限に湧いてきます。

これを平押しするのは、非常に困難だと思われます。

ですので、対連邦戦では敵軍の撃滅、具体的には包囲殲滅を繰り返す、しかないと思っています。

そのためには電撃戦……戦車部隊による突破、航空機での兵站破壊や爆撃で敵兵を減らすなど。

……ああ、そうそう。爆撃についてなのですが、威力がそこそこ、当たりやすいもの。

という希望を解決するべく、『クラスター爆弾』がついに誕生しました。

西暦世界のものとはかなり違いますが、広範囲の敵を一気に戦闘不能に陥らせることができますはずですよ。

ちなみに、不発弾問題については、爆弾に魔導師の力に反応するよう設計し、基本的には西暦世界のものとはまったくころまでは一緒です。

その後、航空魔導師が出撃し、特別な術式を用いることで爆発しなかった爆弾に対して魔導信号を送り、爆破させます。

なぜクラスター爆弾なのか？というところ、連邦相手にするならば、殺し続けるよりは適当に負傷させ、敵国内地へ送り続けるのです。

そうすれば殺すよりも効果的です。

なにせ、腕を挽がれた、脚を挽がれた戦闘不能な人間を、国が面倒を見なければならぬのですから。

「こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。こここの責任者はいらつしやいますか？」

「これはこれは少佐殿、私がこの技術開発部所長、ハロルド・フォン・アッカーマンだ。本日は何用で？」

「新型戦車の必要性と、その性能について、お話ししたく。」

「……成程、ではこちらへどうぞ。」

今から製造して間に合うかどうかは分かりませんが、意味はあるはずですよ。

「……成程、検討しておきましょう。参謀本部が頼りにしていると聞く白百合殿の発想です、きつと意味があるモノになるでしょう。」
「……そんな、買い被りすぎですよ。ですが、嬉しいです。本日はお忙しい中、ありがとうございます。」
「いえいえ、有意義な時間でしたよ。では、お気をつけて。」
「はい、アッカーマン所長。また。」

戦車の話も一区切りつきました。戦車が間に合うかどうかはわかりませんが、クリスタの航空機もあります、大丈夫でしょう。話し込んでしまつて、遅くなつてしまいました。

ターニヤに怒られてしまいそうです。

「……アレクシア、今、何時だと思う？」

……ターニヤが、泣きそうな顔で言つてきます。

「……すごく、心に刺さります……。」

「ごめんなさい、ターニヤ。技術開発部所長と、話し込んでいたら遅くなつてしまいました。」

「……はあ。」

「……あの、どうして私はターニヤに抱きしめられているのです？」

「……馬鹿。帰りが遅いから何かあったのかと、心配したんだぞ。衛兵に知らせ、探しに行こうかと思つていたところだ。」

「……ごめんなさい。」

「……無事で、本当に良かった……ん。」

ターニヤに、暖かな、キスをされます。

「……んむ……。」

だからこそ、余計に心が痛い……。

もう二度とターニヤを、泣かせないと心に決めていたはずでしたの
に。
…ダメですね、私は、本当に。

30 作戦計画

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐であります。今日は、共和国への攻勢計画の大詰め、です。

ターニャと私は、参謀本部に呼ばれております。

……ゼートウーア閣下でしょうか、一介の少佐に肩入れしすぎだと思うのは私だけなのでしょうか……。

「……ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐、入室致します。」

「アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐、入室致します。」

「……来たか、帝国の希望。さて、これより帝国―共和国戦争を終わらせる為の会議を開始する。」

……さて、細かい綻びを埋める話し合いの始まりです。

「まず共和国を打通する計画書を提出したアレクシア少佐。君の意見を聞きたい。」

いきなり私なのですか!!

「はい、皆様一通り目を通されているでしょうが、共和国を降伏させることだけならば、この計画通りに事を進めれば、共和国は必ず降伏する、と確信します。」

「成程、何か含みのある言い方だな。降伏だけ、ということならば他に問題があるのかね?」

……流石はゼートウーア閣下、聞いてほしいことを質問してください。ります。

他の参謀将校の方々もうんうんと頷いていらつしやる。

「我が帝国とは政体が異なりますので、我々には考え難いかもしれませんが……かの国の『政府』が降伏したとしても、『国民』はそうではありません。」

「……というと?」

「一部の共和国民が、例えば『降伏した元政府は間違っている』『我々はまだ戦うことができる、負けていない』などと吹聴し、賛同した共和国民が新たに、勝手に独立国家を宣言する可能性があります。」

……そんなことが可能なのか、しかし無いとは言い切れん、などな

ど、皆さん真剣に考えてくださいます。

流石、帝国の頭脳。

「…成程、そうなれば戦争は終結せず、面倒なことになるな。我々が共和国本土を全て制圧したとしても、植民地へ逃げられかねん。」

「はい、ゼートウーア閣下。しかし共和国民がこれを成すには、指導者が必要になります。故に、回避するためには、共和国中枢にいるはずの不穏分子を炙り出し、駆除しなくてはなりません。」

「…どのよう駆除する？」

ここからは、ターニヤの思いつきなので、ターニヤに代わります。

「…発言を。まず、共和国民の反乱が起きるまでに駆除することは極めて難しいかと。よって、共和国内で反乱、独立政府が建てられた後、の話をさせていただきます。元共和国領内から出られなくするために、共和国が降伏した後にすべての港を封鎖、また帝国以外の国境…イルドアなど、これもすべて封鎖、または検閲します。外へ広がられては、厄介です。」

「それから少しずつ炙り出し、駆除していく…ということか。やはり害虫駆除をするには隔離してからでなければ難しいか。」

「よろしい、白銀の案を採用しよう。反対意見のある者はいるかね？」
……………

皆さん賛成のようです、よかった。

もし外に逃せば、連合王国が援助しまくり、嫌がらせをしてくるに違いありませんから。

「では、次だ。アレクシア少佐の案で共和国への攻勢をかけたとしてよう。これに伴い、アレニュー市をどうするか。」

南部戦線の兵站の基点となるアレニュー市。ここでも民衆が蜂起する可能性があることです。どう対処するべきか、ですな。

「…私は憲兵隊の派遣だけで十分だと思おうか？」

「私もだ、ゼートウーア閣下に同意する。」

… 皆さんゼートウーア閣下と同じ意見のようです。

「反対意見のある者は？…………… ターニヤ少佐、アレクシア少佐、か。」

「はい、小官は憲兵隊だけでは力不足かと。」

「小官も、ターニャ少佐に同意です。」

普段ならば憲兵だけでいいかもしれませんが、戦時の、しかも元共和国領のアレーヌ市では話が違います。

「理由を述べたまえ。」

「はい、普段ならば憲兵だけで事足りるでしょう。ですが、今回は戦時中の重要な拠点。共和国が何もしないはずがありません。」

「ターニャ少佐に同意します。可能性があるとするならば、共和国のことです、我々が協商連合国戦で行った魔導師の空挺降下などを模倣してくる可能性があります。アレーヌ市民にプロパガンダを流し、蜂起させ、共和国魔導師と連携されると非常に面倒です。」

「面倒、で済めばいいが。」

「はい、閣下。面倒、で済みます。国際法上は、降伏勧告をした後の市街には、『市民』『非戦闘員』はいませんから。すべて、『兵士』になるのです。また、降伏勧告と共に何らかの煽り文句でも書いたビラを配れば、向こうから『最後の一人まで戦う！』などの言葉を引き出すことが可能です。」

「アレクシア少佐の言う事を実戦したならば…何も問題なく、アレーヌを砲撃、爆撃、し放題であります。」

……。

… どうして、絶句されるのでしょうか…。

「… つくづく、君達が帝国の味方で良かったと感じるな。」

「… 本当に、な。ゼートウーア、とんでもないモノを拾ってきたな。」

… そんなに、驚かれるようなことを言っていないはずですが…。

「アレーヌ市を焼かなくても済ませるためには、憲兵隊だけではなく、他にも戦力となりうるものを送るべきです。」

「… そうだな。それに、もしもアレーヌ市で蜂起が起きたなら自由に動ける部隊が動くことになる… 例えば、第203航空魔導大隊、など、な。」

「で、ですが、これらは全て可能性の話であります。準備は周到にするべきですが、実際に起きるとは限りませんから…。」

…この後は、私の攻勢案の質疑応答など、ターニヤの言った害虫駆除作戦を正式化し、アレーヌを焼く方法に関しては法律に詳しい者呼び確認。

これだけで、一日の時間を使ってしまった。

— — — side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

「…ターニヤ、疲れた。」

「…私もだ、アレクシア。少し、抱きしめてもいいか？」

「…はい、存分に抱きしめてください。私もターニヤに抱きしめられたいです…。」

ぎゅっ…と、苦しくならない程度に、優しく抱きしめる。

私の可愛い妹。愛おしいアレクシア。

「……すう…すう…。」

「…アレクシア？それほど疲れていたのか、眠ってしまったな…。」
外見は私と瓜二つ。だが、内面はまったく違う。

いや、戦争に関しての知識や立案した作戦など、それらは殆ど同じだが。

「……可愛いな。」

…起こさないように、静かにキスをする。

スキンシップだなんだと、ごまかしているが、私はアレクシアの事を愛している。

血の繋がった姉妹だ、公にしてはならない禁忌だと分かっている。

だがそれでも、好きなものは好きなのだ、仕方ないだろう。

「…アレクシアにこの気持ちを伝えたら、どういう反応をする…？」

拒絶されてしまうだろうか。

それとも、願わくば受け入れてくれるだろうか…。

「… よりにもよって、妹に恋をするなんて私らしくもない。」

しかし、アレクシア程私を理解してくれる人間はこの世にはいない。

アレクシア程、無条件で私を愛してくれる人間はいない。

ならば、好きになってしまうのも、道理ではないか？

「… アレクシア… 愛しているよ。おやすみ。」

31 アレーヌ市街戦

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐であります。今日は、共和国打通作戦の決行日であります。

私達、第203航空魔導大隊は、共和国に撤兵を気づかれにくくするための、北方戦線の殿軍という任務を拝命いたしました。

…気づかれなくするために、私達とZeppelin航空機で共和国軍に対し攻勢をかけています。

地上共和国軍は何の脅威にもなりません、敵魔導部隊は脅威です。

いつ交戦してもおかしくない以上、大隊全員に中隊規模で戦闘に努めるように命令してあります。

「…フェアリー02より、フェアリー01へ。エリアBのD-13ブロック、敵砲兵、並びに野戦砲の無力化を確認、周辺の敵軍も後退している模様。」

「フェアリー01了解。フェアリー01より大隊各位に通達、敵軍が後退し始めたが、追撃はするな。我々の任務を忘れるな。」

順調に事が進んでいるようですが、敵魔導師がまったく出てこなかったことが気になりますね…。

まさか予想していた通り、アレーヌ市へ向かったのでしょうか？
まさか平時より多めの憲兵隊と、予備軍がやられるとは思えません
が、気がかりです。

「CPよりフェアリー大隊へ、緊急だ！アレーヌ市にて、憲兵隊及び予備軍が現地民兵によって市外へ追い出された模様！」

「こちらフェアリー02、それは本当ですか！…民兵以外の敵勢力は？」

「民兵以外に…魔導師が空挺降下し民兵と合流した模様。魔導師群の規模は不明だが、最低でも2個大隊、とのことだ。対応作戦の通り、殿軍は空軍と北方戦線魔導大隊が引き継ぐ。第203航空魔導大隊は、ただちにアレーヌ市へ急行せよ。」

「フェアリー02了解、ただちに向かいます。」

… 危惧していた事までも、現実になるとは。

事前にある程度の準備をしているだけマシ、ですがね。

「フェアリー02より大隊各位、現時刻をもって戦闘を中断、殿軍を空軍、北方戦線魔導大隊へ引き継ぐ。各員、集合せよ。」

迅速に編隊を組みなおし、アレーヌへ急がねばなりません。

現地に居た帝国軍兵士の大半は市外へ追い出されたいですが、捕虜となった同胞も居る筈。

助けなければなりません。

「「大隊、集合完了致しました！」」

「では後は頼みます、ターニャ。」

「了解だ。貴様らも通信を聞いているだろうが、我々はアレーヌ市へ急行する。」

「「了解ッ！」」

できれば、アレーヌ市民… 民兵には素直に投降してほしいですが。

アレーヌ市郊外 上空

「CPへ、こちらフェアリー01、第203航空魔導大隊はアレーヌ市へ到着。状況は？」

「こちらCP、現在敵魔導大隊、及び民兵によってアレーヌ市を占拠されている。また、我らが同胞が何人か敵に捕まった模様。」

「チツ、予想はしていたが、最悪だな。では、降伏勧告と捕虜解放を同時に求めてみるか。」

素直に応じるとは思えませんが、ね。

「大隊各位、勧告後に敵魔導大隊と交戦する可能性が非常に高いです。各自準備しておくように。」

「了解！」

私としては、捕虜の方々を救いたいたのですが、おそらく不可能でしょう。

故に、さっさと帝国に仇成すゴミ共を駆逐したいです。

『あーあー、こちらは帝国軍だ。諸君ら民間人を殺す程、帝国は無慈悲ではない。今投降し、帝国人捕虜を解放すれば、貴様らの安全は保障しよう。従わぬ場合は、アレーヌ市には民間人はいないものと判断し、攻撃を開始する。』

…さて、どう出ますかね。

「こちらフェアリー03！アレーヌ市南方より、魔導反応！現在接近中があります！」

「…やはりそうなるか。仕方ない、殲滅するぞ。第3、第4中隊は援護せよ。第1中隊、第2中隊、行くぞ！」

こういう時のターニャは、とても頼りになります。

すごく、かっこいいです。

『Engage！敵魔導反応を確認…。ネームドです！個体名は、ラインの悪魔！』

『What!?!悪魔共は国境で戦闘中のはずだろ！見間違いじゃないのか!?!』

『間違いなく、ラインの悪魔です!』

上昇、さらに上昇。

現在、高度9000を通過。敵魔導師も上がってきていますが、やはり8000程が限界のようですね。

『卑怯だぞ、悪魔め!』

「卑怯なのはあなた方でしょう！市民を扇動し、蜂起させたのですから!」

卑怯も何も、私は純粹に高度を取って戦っているだけです。

市民を盾にするような連中に言われたくありませんね。

「…まだ何か、ぎやあぎやあ喚きながら攻撃してきますが、遅すぎで当たりません。」

イライラしますね、さっさと終わらせましょうか。」

「死ね、帝国に仇成すゴミ虫共が！」

爆裂術式展開、敵乱数回避範囲予想。

爆裂術式に織り交ぜて、貫通術式も撃ち込みます。

「…Stirb（死ね）！」

直後、轟音、閃光。

「…こちらフェアリー02、大隊各位へ、敵魔導師、中隊規模を撃滅。」

「こちらフェアリー01、こちら中隊規模を撃滅完了だ。残り…は…」

第3、第4中隊が連携し敵一個中隊を倒したみたいですね。

残りは逃げて行きますね。

「こちらフェアリー02、大隊へ、深追いするな。敵魔導師は最低でも2個大隊はいる筈、追うのは危険と判断する。」

「フェアリー01了解、では再度、降伏勧告をしようか。」

こちらの損耗は弾薬程度です、これだけ戦力差を見せつけければ降伏すると思えますが…。」

「…大隊長、敵側よりオープン回線で映像が送られてきました。かなり酷い映像ですが…。」

「ヴィーシャ、見ましよう、話はそれからです。」

「そうだな。アレクシアはグロテスク、ショッキングな映像は大丈夫か?。」

「はい、戦場で散々見てきましたからね。」

わざわざ映像を送ってくる…というごことは。

「…おえ…。」

「ヴィーシャはダメでしたか、こういうのは。見なくても大丈夫ですよヴィーシャ。」

「すみません…。」

映っていたのは、帝国軍の服を着た人間が、民兵……によつて拷問されている、というもの。

拷問、というよりは一方的な暴力にしか見えませんが。

ひたすら鉄パイプや角材などで殴ったり、蹴ったり。

気を失えば、生爪を剥がして起こす。

映像に映っていた同胞は、両手の爪を合計で7枚剥がされ、よく見れば歯も何本か無く、傷だらけでした。

映像の最後で、民兵のうちの一人が、『我々は帝国になど屈しはしない！最後の一人になるまで戦い続ける！』と。

そして、同胞を射殺。頭を撃ち抜かれていたので助からないでしょう……。

「……現代でこれとは、酷いものですね。」

「……そうだな、嫌な気分になる。だが、言質は取った。終わらせようか。」

「……CPへ、こちらフェアリー02。敵が『最後の一人になるまで戦う』旨の発言をした映像を、敵から送ってきました。砲兵隊、航空部隊へ攻撃許可をお願いします。」

「こちらCP、了解した。300秒後に攻撃を開始する。フェアリー大隊は現在の場所から離脱せよ。オーバー」

「了解。オーバー」

「……さて、離脱しましょう。」

「そうだな……。」

多少の耐性はあるとはいえ、あのような映像を見た後です、最悪の気分ですよ。

市外から、美しかったアレーヌ市が燃えるのを見届ける。

「……ターニャ……んっ……。」

皆に見られていないのを確認して、ターニャにキスをします。

「……馬鹿、皆に見られたらどうする。」

「ごめんなさい。ですが、少しでも嫌な気分を忘れたかったです、許

してください…。」

「帰ったらたくさんしてやるから、な？」

「…はい、ターニャ。」

ターニャの私を見る目が、とても優しく、愛おしいものでした。

32 許されざる愛

「ターニャ…もつと。」

「……仕方ないな…んっ……。」

ターニャと私の執務室。

昨日は、アレーヌ市でショッキングな映像を見てしまいました。

吐くほどではありませんでしたが、目を跨いでも思い出すほど強烈でした……。

今日も思い出してしまい、沈んでいるところをターニャに慰めてもらっています。

「アレクシアが落ち着くまで、甘えていいからな。」

「…はい、今日の仕事もあるのに、ごめんなさい……。」

「そんなことよりも、お前の方が大切だ。ただし、落ち着いたら、手伝うんだぞ?」

「はい、ターニャ……。」

「失礼しますッ!少佐…ど…の…。し、し失礼しました!!」

「待ってッ!セレブリヤコーフ少尉!貴官は何か誤解しているッ!」

「待ってくださいヴィーシャ!!」

た、ターニャといちやいちやしているところを、ヴィーシャに見られてしまいました……。

「い、いえ……。お二人の仲ですから…わ、私は黙っていますから!命だけは!」

「いや、すまない、取り乱した…。いやなに、アレクシアが昨日の事を思い出してしまって、気分が悪そうだったからな?」

「……(それでも、キスマでするものなのでしょうか…?眼福でしたが……。)」

「何か言いましたか、ヴィーシャ?」

「いえ!何も!」

軽蔑、されるでしょうか。

同性の、しかも姉妹で、だなんて……。

普通の人からしたら、気持ち悪いですよね……。

「…… ヴィーシャ。軽蔑、しましたか？」

「……？どうして軽蔑などしなくてはならないのですか？」

ヴィーシャは、優しいです。

嘘でも、そうやって言ってくださるのですから……。

「お二人が、そういう仲だとしても、私は応援しますよ。だって……。」

「……？なんですか？」

「い、いえ。そういう気持ちを持ってしまったならば、仕方のないことだと思います！そ、それに、外野である私が何も言うことはありません!!」

そう、でしょうか……。

私は、ターニヤのことを、愛してしまっています。

どうしようもなく、大好きです。

ですが、この気持ちをターニヤに伝えて、拒絶されることが怖いのです……。

ターニヤは優しいですが、姉妹で、恋愛、という意味で愛している、
というの……。

「…… セレブリヤコーフ少尉。ありがとう。貴官は、優しいのだな。」

「いえ！」

「それで、何の用だ？」

…… 考えても仕方ありません、このことは夜にでも、考えましょうか……。

今は、ヴィーシャの報告を聞きましょうか。

「は、はい。例の作戦の、第二段階、『北部戦線の後退』が完了したそうです。また、参謀本部によって後退に伴い放棄する塹壕の下すべてに、爆薬を設置させたそうです。敵が塹壕に入るのを確認次第、空爆開始と共に爆破殲滅する…… そうです。」

…… 成程。塹壕ごと敵を爆破、ですか。

確かに、それならば空爆で仕留めきれない分まで殲滅できますね。

撃ち漏らしも少なく済みます。

「成程、参謀本部が作戦の穴を埋めてくださったか。ありがとう少尉、

仕事に戻ってくれ。」

「ヴィーシャ、ありがとうございます。…さっきのことは、他言無用、ですよ?」

「もちろんです!」

— | — | — | side ヴィーシャ

まさか、少佐殿お二人が、そういう仲だった、なんて…。

仲の良い姉妹だな、という認識でしたが、あの雰囲気では…。

あのような美しい愛を、穢してはなりません。絶対に。

私に、そういう趣味はありませんでしたが… あのお二人を見ていと…。

私だけでも、応援します。私だけでも、お二人の愛を守るのです。「それにしても… はあ。これで一か月は頑張れますね!」

— | — | — | side アレクシア

そろそろ、寝る時間、です。

ターニヤに、私の気持ちを、伝えるべきなのでしょうか…。

ヴィーシャはまだ何か、勘違いしているようでしたが…。

「…アレクシア。少し、いいか?」

「はい、何ですか?」

「これを聞くと、アレクシアは、私の事を、嫌いになるかもしれない。どうしたのでしょうか。私が、ターニヤを嫌いになる？」

「どのような内容でも、嫌いになるなんてありえません。」

「……？なりませんよ、絶対に。誓ってもいいですよ？」

「……そうか。実は、な……。私は、お前の事を、愛している。」

「どうしたのでしょうか、改まって……。」

「……？私も、ターニヤを愛していますよ？」

「いや、そういうことではなくて……。うまく説明できないな……。」

「どうということなのでしょう……？」

「……アレクシアッ！」

「はい……。んむっ……。！」

「あ、え、ええと……。どうしてキスされているのでしょうか……。」

「……ターニヤ、どうしたのです？」

「……お前は、姉妹で、キスなんてして、気持ち悪く、無いのか？」

……。

「……ターニヤは、私とキスをして、どう思っているのですか。」

「それは……。」

「気持ち悪い、ですか？」

「そんなことは無い！むしろ、もっとしたい！」

……もしかして、ターニヤも私と、同じ気持ち、なのでしょうか？

「あはは……。ターニヤの言いたい事、なんとなく分かったかもしれない。ターニヤは、私の事を、妹としても好きですが、それ以上に……。」

「ということですか？」

「自分で言っていて、顔が熱いです……。」

「ツ……。そう、だ。私は、お前のが好きだ。どうしようも、なく……。」

「なんだ……。両思い、だったのですね……。ターニヤ、私も、ですよ？」

「……。あっはっはっは!!」

「あははは……。でも、良かったです……。」

「本当に、良かったです。」

「そうだな。なんだ……。相思相愛、というやつだったのか。」

「本当に。思考が近い、似ているとは昔から、散々言われてきました
が……。」

「まさか、まったく同じことを考えているとはな。」

「では、ターニャ。これで、心おきなく、楽しめますね。」

「そうだな……。アレクシア、大好きだ。」

「はい、私もターニャのことが、大好きです。」

…… おはようございます。

昨夜は、夜のテンションといいますが、それに近いものがあつたの
でよかったです……。。

「な、なあ、アレクシア。昨夜の事……。夢ではないよな？」

「はい……。ターニャ。私はターニャを、愛しています。」

「……。だよな……。…。変に意識してしまって、仕事にならん……。。」

お互いの気持ちを知ってしまったせいでしょうか……。身が入りま
せん……。

今まで、ずっと一緒だったからこそ、なんだか恥ずかしいです。

「……。ターニャ……。んっ。」

「……。ありがとう、アレクシア。そうだな、さつさと終わらせようか。」

戦況の話でもして、気を紛らわせましょうか。

「はい。例の作戦も、共和国軍が上手い具合に塹壕に入ってくれるま
で時間がかかりますからね。明日か、明後日くらいには状況が動くで
しょうか。」

「そうだな。ここまでは準備だ、空爆、爆破。その後の、敵軍が再び戦
線を構築するまでのロスタイムで、電撃的に首都まで行かねばなら
ん。」

西暦世界の、ナチスドイツの電撃戦は見事、としか言えません。

あれだけ電撃的に、突破、浸透、包囲殲滅が可能ならば、我らが帝国も安泰です。

「はい。先鋒は私達ですね。クリスタちゃんの航空機部隊も、爆撃ついでに来てくれるらしいです。」

「それは、心強いな。戦車など地上部隊がまだ揃っていない為、行き過ぎて孤立無援になることだけは気を付けねばな。」

ただし、ナチスドイツと違って、航空機は優秀であり、魔導師という大きな力がありますが、戦車や陸軍がまだまだです。

航空優勢だけで、押しきれれるでしょうか……。

クラスタ―爆弾などの新兵器に頑張ってもらうしかありませんね。

「ではターニャ。さっさと今日の仕事を終わらせて…… たくさん、いちやいちやしましょうっ?」

「…… そうだな。」

33 苛烈な戦場

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

今日は、共和国軍が我々の放棄した塹壕に入ってくれたとのこと。
攻勢開始の日、です。

「大隊諸君ッ！我々はこれより、帝国の運命を左右する任務に向かう。……協商連合国の時とは違い、敵軍の強烈な集中攻撃に身を晒すことになるだろう。大隊各位、帰るまでが遠足だ、気を引き締めろ！」
「了解であります!!」

ここからは、大好きな私の姉のターニヤ、ではなく。

帝国軍人としての、私と同等の少佐。

「CPよりフェアリー大隊へ、現時刻をもって作戦を開始する。予定通り、フェアリー大隊は第96航空連隊と共に敵軍を殲滅せよ。オーバー」

「こちらフェアリー02、了解であります。帝国に勝利を齎してみせましょう。オーバー」

「…さて、大隊諸君。出撃だ!!」

南部戦線より、北上し敵軍を包囲します。

北上と同時に爆撃機による爆撃、塹壕の爆破が実行。

「CPよりフェアリー大隊へ。空爆及び塹壕爆破により戦線の敵主力軍は壊滅した模様。残敵掃討は航空連隊と北方戦線陸軍が担当する。大隊は敵国首都へ向かえ。オーバー」

「こちらフェアリー02、了解致しました。オーバー」

さて、戦線では予定通り、敵軍主力と思われる軍を壊滅させました。

ここからは北方も南部も一転攻勢、時間を稼ぎつつ私達が敵国首都へ向かいます。

「フェアリー02より大隊各位、敵軍主力包囲殲滅作戦成功。これより我が隊は敵国首都へ向かう。オーバー」

「こちらフェアリー01、首都方面より敵魔導反応を確認。大隊各位、戦闘準備！」

戦線の敵軍を潰しただけで、敵の司令部はまだ生きていますね。

このまま首都へ向かってもよいですが、敵魔導師の打倒ついでにブレインを潰していくのもよさそうですね。

まずは、向かってくる敵軍を殲滅しなければ。

「こ、こちらフェアリー03、敵魔導師群…連隊規模！連隊規模であります！」

「何ッ!?」

連隊規模、ですか。

大半は新兵と言っても過言ではないくらいでしょうが…数が多すぎますね。

「CPへ、こちらフェアリー01！敵航空魔導師と遭遇、連隊規模！繰り返す、連隊規模！」

「CPよりフェアリー大隊へ、300以内に援軍としてこちらの航空魔導連隊が到着する。それまで、持ちこたえてくれ。」

…やはり、そう易々とこちらの思い通りにはなりませんか。

「…了解。」

仕方がありません、援軍が到着するまでの間、どうにか耐えてみせましょう。

「大隊各機、訓練の成果を見せろ！高度12000を目指し上昇せよ！！」

「了解でありますッ!!」

全員で上昇し、頭を取る。

相手の届かない位置から各個撃破。

ですが、共和国魔導師もなかなかどうして、7000、8000、とついてきますね。

「チッ！」

「よせ、ヴァイス中尉!!」

ヴァイス中尉が、9000までついてきた敵に対し焦ったのか、攻撃しようとしています！

今、上昇をやめて止まってしまえば、袋叩きにされてしまいます…！

「中尉ツ!?照準、されていますツ！」

……… 咄嗟に、かばってしまいました。

直後、至近距離で爆音。右肩に、激痛が走ります。

「ツ… ヴァイス中尉！あなたは馬鹿ですか！死にたいのですか!!!」

「… 申し訳、ありません。」

「言い訳は後です、さっさと上昇してください！」

ドクドクと、右肩が脈打っているのが分かります。

少しずつ、感覚も薄くなってきました。

高度、12000に到達。

敵軍は流石に、9000が限界のようです。

前回、西方戦線に来たときは8000でしたのに…。

「アレクシアー！」

「ターニャ… 申し訳ありません。少し、怪我をしてみました。」

「… ヴァイス中尉、貴様は後でみっちりと説教してやる。アレクシア、その傷では戦闘はおろか、飛んでいるだけでも厳しいだろう。… 後退し、治療してこい。」

……… つらい、ですが仕方ありません。

今の私では、とてもターニャの役には立てそうにないです…。

「… はい、了解しました。ターニャ、後のことは任せます。ヴィーシャ、私の代わりにターニャを、頼みます。」

こうして私は、離脱。

かばわなければヴァイス中尉がよくて大けが、最悪死ぬという状況とはいえ…。

「また、ターニャに、迷惑を、かけてしまいました。」

— | — | — | side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

ああ、最悪の気分だ。

戦局は帝国が有利とはいえ、アレクシアが負傷するとは。

ヴァイス中尉め……だが、アレクシアが庇わなければ、中尉は死んでいただろう。

「……さて、大隊諸君。我が妹を傷つけた糞共を、殲滅するぞ。」

「……了解！」

ここまで気分が悪いのは……存在X、あの糞に初めて会った時以来だな。

いや、あれ以上かもしれないが。

「……私の妹が、ケガをした？誰にやられた？……お前達か？お前達が、私の可愛い妹を？血を、流させた？」

心を埋めるのは、ただひたすらに憎悪。

私の唯一の家族を、私の妹を、私の恋人を、傷つけられた。

これ以上の理由はいらない。

「……大隊各位へ、防衛術式を全力で張れ。衝撃に備えろ。」

帝国を穢し、同胞を踏み躪り、あまつさえ私の妹さえも手にかけてようとした糞共。

「……骨すら残ると思うな。」

私の、この後の任務に差し支えない程度であるが……今出せる全力の攻撃を。

——— side 共和国軍航空魔導連隊 連隊長

隙を見せた悪魔の眷属を撃ち取ろうと、攻撃してやったが……。

まさか、悪魔の片割れに傷を負わせることができるとは。

「よくやった！あの『ラインの悪魔』の片割れに、傷を負わせることに成功したぞ!!」

「よっしゃ!!」

「ざまあみやがれ!!」

「眷属に足を引っ張られるとは、悪魔も大したことが無いな！」

片割れだけでも帰らせるには十分な傷を負わせられたのは僥倖だが、もう片方がまだいる筈。

「お前達、喜ぶのは後だ。まだ眷属共と、悪魔のもう片方がいる筈だ。」
「なあに、悪魔たって二人いるから手が出せない程の連携だったんだろ?」

「片方だけなら、俺らでも勝てちまうかもしれない！」

「それに眷属共も、油断して主に怪我を負わせる始末だ、大したことが無いのかもしれないな。」

…… この時の我々は、大きな勘違いをしていた。

『ラインの悪魔』は、一対の悪魔だ、と。

決してそうではない。片方ずつ、単騎でも十分に強かったのだ。

それが手を組んで無敵、となっているに過ぎなかった。

「れ、連隊長！上空より、かなりの魔力反応！こちらに対し、何らかの攻撃をしようとしているものと思われまます!!」

「ツ!!全員、防衛術式、乱数回避に全力を注げッ!!」

そう言った瞬間に、光に包まれる。

暖かな、残酷な光に。

—— side アレクシア・フォン・デグレチャフ

私の怪我は、回復術式と塗り薬などの併用で、すぐに治る、らしいです。

ですが、怪我よりも、ターニヤに迷惑をかけてしまった私自身が、憎くて仕方ありません。

あの程度の攻撃で、怪我を負ってしまうなんて……

「……はぁ……」

「アレクシア少佐殿、どうされましたか？まだ、痛みますか？」

声をかけてくれたのは、西方戦線後方で働く軍医さんです。

私の肩に包帯を巻いてくれた人ですね。

「いえ、軍医殿のおかげで、痛みはほとんどありません。動かすと、痛みますが。」

「……お姉さんが、心配なのですか？」

「あはは……それも、あります。ですが、それよりも、私が怪我をしてしまったせいで、姉に迷惑をかけてしまいました。このことが、私自身、許せないのです。」

「……そうですか。少佐殿、失礼ながら申し上げます。少佐殿は、なぜ怪我で済んでよかった、と思われないのです？」

……少し、馬鹿にしたような言い方ですね。

「……どういうことですか、軍医殿。」

「ここは、戦場です。怪我なんて日常茶飯事、死んで死体さえ帰ってこないなんてザラにあります。もしも少佐殿が死んでいたら……お姉さんは、どう思われるでしょうか？」

……

「ひどく、悲しむと思います……いえ、もしかしたら、自殺、してしまいかもかもしれません……」

「……で、あるならば、少佐殿は今生きていることを喜ぶべきです。迷

惑をかけてしまったかどうか、それはお姉さんが帰ってきたら、謝ればよいではありませんか？」

「…軍医殿、ありがとうございます。少しだけ、気が楽になりました。」

「いえ、失礼なことを言つてしまい申し訳ありません。では、お大事に。」

「そう言つて、軍医殿は戻っていかれました。」

「…そうですね、死ぬよりは、マシなはずです。」

ターニヤが戻ってきたら、笑顔で迎えてあげるのはです。」

3 4 勝利、束の間の平穩

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフです。

「おかえりなさい、ターニヤ、大隊の皆さん。私だけ先に帰ってしまつて、申し訳なかつたので、せめて手料理を作らせて頂きました。お口に合うと、よいのですが。」

軍医殿と相談し、簡単な料理を作つて待つていました。

まあ、干し肉とジャガイモしかないのですが、煮込み料理ですが。

ジャガイモを切るのは、軍医殿に手伝つて頂きました。

「……。アレクシア、その……守つてあげられなくて、すまない。」

「……いいのですよ、もとはと言えば……ヴァイス中尉？ 貴方だけ今夜の夕飯は無しですよ！」

「ええっ!? そ、それはあんまりです少佐殿お!!」

「……あはは、冗談ですよ。ヴァイス中尉も、どうぞ食べてください。」

一週間ほどは、右腕を動かせません。

私は利き手が右手なので、とても不便です……。

「ほら、アレクシア……。あーん。」

「はい、ありがとうございます……んっ。」

…… ヴィーシャがじーつとこちらを見ているような気がします。

「…… ヴィーシャ? どうかしましたか?」

「い、いえーな、なんなんでもありません!」

…… 変なヴィーシャです。

「ターニヤ、ヴィーシャ。そういうえば、任務のほうはどうになりましたか?」

「ああ、あの後敵魔導師共を殲滅し、援軍と共に首都へ急行。敵魔導師が迎撃に上がってくる前に殆ど潰せた。こちらの損耗はほとんど無く、共和国首都を占領できた。今は陸軍部隊が駐屯している。」

「大変でしたよ、アレクシア少佐殿が後退された後……。ターニヤ少佐殿が、今までに見たこともないくらい、怒つていらして……。」

「せ、セレブリヤコーフ少尉! それは秘密だ!」

私の為に、想つてくれるのは素直に嬉しいですが……。

「ターニヤ、いくら私が怪我をしたとはいえ、任務中に冷静さを失ってはいけませんよ。」

「……はい……。」

申し訳なきそうにしているターニヤも可愛いのです！

抱きしめたいのですが……腕が動かないので、できないのです……。

「アレクシアの右腕は、大丈夫なのか？」

「はい、優しい軍医殿のおかげで、一週間ほどで動かせるようになるかと。完治は二週間ほど、だそうですが。」

「そうか、それは良かった。後で、その軍医殿とやらを紹介してくれ、私のアレクシアを治療してくれた礼を言いたい。」

『私の』だなんて……ターニヤは、意外と大胆なのです。

「……あの……なんだか、変わりましたね。お二人とも。」

「……ヴィーシャ、秘密ですよ？……んっ。」

「しよ、少佐殿?!」

なんだかんだ、ヴィーシャには、大隊結成以降お世話になっていきます。優しくて、頑張ってくれるヴィーシャにも、大したお礼もできていなかったの、頬にキスを……。

「……嫌、でしたか？そうですよね……。」

「そ、そんなことは！とても嬉しいですよ!!」

「……仕方ないな。今回の任務でも、セレブリヤコーフ少尉がいなければ私は冷静さを取り戻せなかったかもしれない。私からも、礼をしよう……。」

「お、お二人とも?!……あう。」

「ヴィーシャ、後日貴方に叙勲の推薦をしておきます……ヴィーシャ？」

「……私がキスをしてやったら、気絶してしまった。そんなに嫌だったのか、嬉しかったのか……。」

ヴィーシャは……耳まで真っ赤にして、倒れてしまいました。

風邪をひいてしまうといけませんので、私の上着でもかけておいてあげましょう。

… サイズが小さいので、上半身しか隠れませんが。

西方戦線での作戦から、数日。

あれから、首都を押さえられた共和国政府は降伏しました。

ですが、港や国境をすべて封鎖したにも関わらず、南方の大陸にて、共和国民の一部が独立政府を宣言、帝国と徹底抗戦すると主張。

そして私達は、この件に関して参謀本部へ…。

「さて、『白百合』殿。貴官の作戦はほとんど成功したといつてよいだろう。」

「はい、ありがとうございます。ですが、予想よりも敵の動きが素早かったのか、南方へ逃げられてしまいました…。」

「構わん、予想していても不可能なことはある。」

そうは言ってくださるものの、予想していた事態を回避できなかつたのです。

たとえ責は無いとしても、苦いものがありますね。

「南方へ逃げた敵に対応するとしても… 内海の海上封鎖をするには、我々の艦隊では足りぬ、連合王国の介入は避けられまい…。」

「そのことですが、イルドア王国を焚きつけ、帝国へ宣戦させることができれば、解決すると愚行いたします。」

「… ほう？」

「… 以前、問題に上がっていましたが、我々の暗号通信は少なくとも連合王国には解析されているものかと。今回は、これを利用致します。」

「わざと嘘の情報を流します。『我々は、共和国への攻勢で殆どの力を使った。南方で共和国の残り物が未だ暴れている以上、これ以上敵を増やしたくない。どうにかイルドアと不可侵を結びたい。普段なら

ばそれほど脅威でもないが、今イルドアに攻め込まれれば敗北してしまふかもしれない。』といった、内容でどうでしょうか。」

「…だが、それだけでは信じまい。」

鋭いですね、そういう攻めは大好きです。

「はい、ですのでイルドアと本当に不可侵を結ぶ為に、イルドア国境の兵をほんの少し、後退させます。こうすれば、我々の嘘の意図を信じるでしょう。また、イルドア国境は山岳地帯ですので、こちらに引き込んで狩った方が有利です。」

「開戦し、イルドアが劣勢になれば連合王国は手のひらを返し、帝国へすり寄ってくるであります。これを、共和国市民、イルドア王国民へ知らしめれば、憎しみは帝国から連合王国へ向けられます。」

連合王国のことです、勝つ側にすり寄るに決まっています。

そうすれば、少なくとも、かつての同盟国、共和国には恨みを向けられると知りながら。

「ここで重要なことが。我々に降伏した共和国についてです。今はまだ、併合する範囲などが決まっていますが… 協商連合国同様にすべきかと。そして、帝国は極めて寛容に接するべきです。『お互い多大な血を流しあったが、我々の子孫まで禍根を残し、再び戦争を引き起こす火種を残すべきではない。帝国は共和国を許そう』とでも言えばいいのではないのでしょうか。」

「…まあ、これについては外務大臣次第でありますが。」

急に呼ばれて驚いている、外務大臣さん。

「…そうすれば、共和国の志願兵を、帝国と共に戦わせることが可能かもしれない。逃げた元共和国の奴らについては、『祖国を捨てて真つ先に逃げた裏切り者』などと吹聴すればよからう。」

やはり、ゼートウアー閣下が居てくださると、話が早いですね。

「また、イルドアについても、『連合王国の情報を信じたのに、嘘だった』『裏切られた』という心象を抱かせることができるかと。故に、イルドア王国も軍事的に重要な場所のみを確保し、解放すれば帝国側に立ってくれるでしょう。」

そう、帝国は協商連合国を併合せず、国として残り、さらに戦後復

興支援を行っています。

前例があるのです、同様に共和国、イルドア王国へ同じことをすれば、誰がどう見ても戦争を焚きつけているのは連合王国。

また、西暦世界と違い、帝国から宣戦した戦争はありません。

すべて、周辺諸国から、です。

「イルドアの陸軍はさして問題にはなりません。連合王国が帝国へすり寄ろうが、奴らは帝国へ戦争を差し向けてきた元凶です。許してはなりません。」

「連合王国も、それは理解している筈。故に、残っている帝国を打倒しうる周辺諸国は……。」

「ルーシー連邦、か。」

「はい、閣下。装備の質、軍隊の質では帝国が勝っています。人間の数では負けております。」

「……確かにそうだが、まさか奴らとて人間を使い捨てにはせんだろう……。」

「どうでしょうか……アカの考えることはろくでもないのです。」

「……どうでしょうね。コミー共の考えることは、我々の常識には当てはまりません。故に、かの国が『人間を使い捨てる可能性』は常に留意しておくべきかと。」

「……帝国の希望が言うのなら、留意しておこう。現に、共和国民が勝手に独立政府を建ててしまうことは当たったのだからな。」

「……共和国戦では、航空優勢かつ包囲殲滅で圧倒的な勝利を収めることができました。」

「連邦と戦争になってしまいう頃には、新型戦車もある程度配備され、Zeppelin機も相当な数が揃うでしょう。」

「ああ、そうでした。新たな航空機の構想があるので、腕が治った後で文書にしましょう。」

35 一時の平和

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフです。

先日の戦闘で右肩を負傷してしまい、不便な生活を送っています。

「ほら、アレクシア。… あーん。」

「はい。… んっ。…」

不便ですが、ターニヤにあーんをしてもらえるので、これはこれで
アリですね。

「… 美味しい？」

「… はい、いつもありがとうございます、ターニヤ。」

「当たり前だろう、アレクシアの為だ。」

本当に、ターニヤは優しいのです。

お互いの想いを知ってからは、二人きりのときに限り、遠慮をしな
くなりました。

「… さて、今日は久しぶりの休みだ。だが… その傷が治るまでも
う少しかかるからな、今日は大人しくしていよう。」

「はい、私はターニヤと一緒に居れるだけで、楽しいですよ。」

「… 私もだ、アレクシア。」

… 休日ですから、昼間からいちやいちやしても、いいですよね？

二人でいちやいちやしたり、帝国ラジオを聞いて情勢の先行きを予
想したり。

のんびりと過ごしていると、コンコン、と私達の部屋を誰かが訪ね
て来ました。

「… 私が出よう。」

「ターニヤちゃん!!それに、アレクシアちゃんも!!久しぶり!!」

「うわっ、め、メアリー!?!抱きしめるな!!何をしに来た!!」

「… やあ、二人とも。」

アンソンさんも、いますね。

「… アンソンさんも。今日はどのような用得、帝国へ?」

「ああ、共和国を倒したものの、亡命政府を樹立されたと聞いてな。我々協商連合国としては、最早帝国を裏切ることなど不可能、これは君達も知っているだろう?」

そうですね、そうなるように仕向けたのですから…。

「どうせ裏切れないのだ、ここで帝国に恩を売っておこうと思ってな。具体的な日程は決まっていないが、協商連合国は帝国を全面的に援助することになった。ああ、まだ復興中故、できる限り、だがな。今日はこの話を、先程してきたところだ。」

… これは意外ですね。良い意味で、予想を裏切ってくれました。

「そうなのですか、ありがたいことです。」

「… メアリー、いい加減に離してくれないか…。」

「ダーメツ!アレクシアちゃんも抱きしめたいけれど…。聞きましたよ、共和国軍に怪我をさせられたんですって?」

「はい、かすり傷程度ですが…。」

「私ね、航空魔導師に志願しようと思うの。」

… ?メアリーが、航空魔導師に?

「それは、どうしてなのですか?」

「二人がどう思うかわからないけれど… 私、戦争中で、敵なのに、お父様を助けてくれた二人に恩返しがしたくて…。それに、私の魔導適正はAでしたし!」

適正は、申し分ないですが、アンソン殿はどう思っているらっしゃるのでしょうか。

「… 私は反対したんだがな。二人も知つての通り、メアリーは一度決めたら曲げることはない子だ、諦めたよ。それに、魔導師になりた理由が、君達の為ならば、余計にな。」

「そうか… メアリー、ありがとう。その気持ちはとても嬉しい。だから離…。」

「ターニヤちゃんは素直じゃないなあ。口ではそうやって言ってるも、満更でもないでしょう？ターニヤちゃんなら、本気で離れようと思えばできるでしょ？」

「うっ……。」

……メアリーはなかなかいい性格をしていますね……。

「……そういえば、今の協商連合国で魔導師になると、どういう扱いなのだ？」

「ああ、一応所属は協商連合だが、軍としては帝国の管理下だ。まあ帝国も、強制はしたくないのか自分の国を守つてろとしか言わないがね。そのおかげで、摩擦も少ない。」

軍は帝国の管理ならば、志願すれば帝国兵としても戦えるでしょう。

メアリーにはそんな危険なことを、してほしくはないですが。

「……実はもう、帝国軍魔導士官学校に、入学する手続きは済んでいるんですよ。ですから、明日からは私は、メアリー・スー魔導少尉候補生ですよ！」

……。

「はっ!？」

いやいや、確かに、何の問題もないですが。

いや、メアリーが帝国魔導師として前線に来るとするのは問題ですが。

「私、二人の隣を飛べるように、頑張りますから!!」

「……という訳だ、二人とも本当にすまないが、メアリーのことをよろしく頼む……。」

「急すぎますよ!!そ、それに、メアリーがこちらに住むのですか!!」

「戦場へ行かない日は、毎日抱きしめられてしまう……。」

翌日。

今日は、肩の調子も良いです、痛くないです。

やはり、治癒の術式があるとすばらしいですね。

「今日は新しい航空機について、ゼートウーア閣下とクリスタちゃんに説明です。」

「…魔導航空機構想、か。航空魔導師を、航空機に乗せる…成程…。」

新しい案、とは、魔導師を航空機に乗せる、ことです。

魔導師は自力で飛ぶことができますが、高度の限界やずっと飛び続けるなど、航空機に劣る部分が多いです。

反面、対地上への火力は申し分なく、誘導系の術式を組み合わせれば大抵の敵はなんとかなります。

また、防御術式を展開できるので、ある程度の攻撃は防ぐことができます。

航空機は、高度や航続距離など、魔導師とは比較にならないくらいです。

しかし、もし機体がやられてしまった時にパイロットが死んでしまう確率が非常に高いです。

魔導師を、航空機パイロットとして使えば、両方の弱点を補うことができます。

パイロットは死にくくなりますし、もし航空機が撃墜されても魔導師のパイロットならば自力で飛んで逃げることもできます。

魔導師の機動力ならば追いつける航空機はそうそうありませんし。格段に生還率が上がるでしょう。

「…更に、航空機自体に演算宝珠を埋め込み、爆撃機や戦闘機の武装に誘導性を持たせることも可能、か。」

真の理由は、これですね。

航空機に宝珠を取り付け、武装に誘導性を持たせるだけならば、魔導適正が低くても可能はずです。

誘導するだけで、いいのですから。

また、航空機に魔導師が乗っていれば、例のクラスター爆弾の使用も楽になります。

「…素晴らしい案だ。採用しよう。だが、このような航空機を設計できる者がいるのかね？」

「はい、閣下。既に知り合いの設計士に頼みまして、設計済み、であります。後は製造するだけです。」

「ほう、貴官は意外と、顔が広いのだな。」

「また、今回は航空機での案を出しましたが、応用すれば戦車や野戦砲などにも同様のことができるかと。こちらの設計士は知り合いがいまないので…。」

「…検討しておこう。」

ああ、ちなみに航空機の機体名は、『Zeppelin MB-1』と、『Zeppelin MK-1』です。

世界初の、魔導航空機です。

「戻りました、ターニャ。」

「遅いっ…。」

部屋へ入るなり、ターニャに抱きしめられ、キスをされてしまいました。

「ごめんなさい、ゼートウアー閣下と話し込んでしまいました…。」

魔導航空機構想の話の後、連合王国や連邦、イルドアについて話をしました。

内容は、この前の参謀本部での話と殆ど同じでしたが。

「…まったく、閣下の知識欲は恐ろしい。アレクシア…好き

だ……んっ……」

「……。ターニヤ、この続きは、寝る前に、です。」

「……そうだな。まずは夕飯にしようか。」

「はい。」

名称：『Zeppelin MB-1』

分類：魔導爆撃機

【Krista von Zeppelin】が設計・開発した、世界の魔導爆撃機。

機体自体の性能は『Zeppelin B-67』と殆ど同等。

魔導によって、落とす爆弾すべての落下地点をパイロットの思うがままに誘導することが可能。

名称：『Zeppelin MK-1』

分類：魔導戦闘機

【Krista von Zeppelin】が設計・開発した、世界の魔導戦闘機。

機体自体の性能は『Zeppelin K-36』と殆ど同等。

ただし、魔導航空機として再設計したことで、『Zeppelin K-36』の特徴である翼の厚みが無くなっている。

防御を魔導でカバーすることで、さらなる速度向上を実現した。

また、両機共に機体に演算宝珠が埋め込まれているため、やろうと思えば誘導以外も可能。

例えば、空気抵抗を術式によって軽減し速度を上げる、機体を防御術式で覆い攻撃を防ぐ、等。

36 想い合う姉妹

おはようございます、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。やっと、右腕が動くまで回復しました。

まだ若干の、違和感がありますが、概ね問題ありません。

「アレクシアちゃん!!もう、腕は大丈夫なのですか?」

「はい、メアリー。抱きしめるのは構いませんが、苦しくしないでくださいね。」

メアリーにはどうせ抱きしめられてしまうのです、せめて苦しくないように……。

「やっぱり、アレクシアちゃんも可愛いなあ……。私は一人っ子ですから、アレクシアちゃんみたいな妹が欲しかったですね。」

「そうなんですか……。メアリー、お姉ちゃん?」

「……はっ!!お、お姉ちゃんだなんて……。可愛すぎます!!!」

冗談のつもりで言ってみましたが……。失敗でしたかね……。

今日は、メアリーは士官学校での授業があるらしく、私を抱きしめてキスをした後で士官学校へ向かって行きました。

……。メアリーは私達の事を好きすぎではないでしょうか……。

いえ、嫌とかではなく、純粹に嬉しいですが。

「ターニヤ、今日は新しい航空機の試作品の試運転のはずです。見に行きましょう?」

「そうだな。どのようなものか、気になる。」

私の腕が完治するまで休暇を頂けましたので、あと一週間はお休みです。

「あつ、二人とも!よく来てくれました!!さあ、二人とも乗るのです!!」

「えっ?」

「いや、テストパイロットを勤める人が、今日の朝急に発熱しちゃって…。どうしようか困っていたんだ。二人なら、技量もあるし…。! だから、お願い!」

と、クリスタちゃんをお願いしてきますが、私達は航空機には乗ったことはありません。運転の方法もわからないのですよ。

「乗ったことが無くても、大丈夫!基本的には通常の航空機と同じ操作だけど、魔力でも操作できるから!!」

「…ん?魔力で操作できるのか?この航空機は。」

ああ、そういえばターニャには伝えていませんでした。

「はい、今回の新作は『魔導航空機』です。魔導師の力で航空機の強化をし、爆弾などを誘導することができます。」

「成程…。これからは魔導師に代わって航空機の時代だ、それは妙案だな。」

「魔導師に代わる?どういうことなのですか?」

「ん?アレクシアならば気づいていると思っただが…。今は魔導師の機動に追いつける戦闘機はいないかもしれないが、これから先の未来は違うだろうか?」

…。確かに、そうですね。

偵察ならば魔導師の役割は残りそうですが、戦闘においては淘汰されていくでしょうね。

「まあいい、魔力で操作ができるのならば、乗ってみよう。」

「はい。慣れるまでは難しそうですが、頑張ります。」

「ありがとう二人とも!!」

最初はなかなか慣れなくて、危なげでしたが、慣れてきました。

「クリスタ、すごいですよ、これ！航空機の操縦なんてやったことのない私でさえ、少し練習すれば飛べました!!」

「本当に凄い。少し練習しただけで、手になじむようだ...。」

ほんの、20分程練習しただけで、自由自在に飛べるようになりました。

まあ、本物の戦闘機パイロットの機動には比べるまでもありませんが。

「...いや、私もまさかここまでとは。私には魔導のことは分からないから、魔力だけでここまで柔軟に飛べるとは...。これならば、もっと改良できそうだな...。」

「ふむ、未経験者でこれならば、すぐにでも量産し、配備しても問題ない。」

「そうだな、明日からでも作らせよう。」

見学に来ていらした幹部の方々も、満足そうですね。

私達でさえ、こんなに簡単に操作できるのです。

魔導適正がCなどの低い方でも、航空機パイロットとして腕を磨き、これに乗れば活躍できるでしょう。

「...ふう。初めて飛行機に乗ってみました、なかなか良いものですね。直接風を感じることはできませんが、面白かったです。」

「確かに、貴重な体験で面白かった。だが、どうも私には合わないようだ...。もっと訓練すれば、違うのかもしれないがな。」

「...すまない!...ちゅっ...」

「んむっ…。」

飛行体験から、帰ってくるなりターニヤに押し倒されてキスをされています…。

嬉しいですが、どうしたのでしょうか。

「…ターニヤ、どうしたのですか？今日は、積極的、ですね。」

「…お前の腕が治るまで、満足にできなかったから…。」

「…ごめんなさい…今日は、我慢してきた分、好きなだけ、してください。」

…私だって、ターニヤと、その…できなくて、辛かったです。今日くらいは、たくさん愛してほしいのです。

「んっ…あつ、ターニヤ、くすぐりたいですっ…。む、胸のあたりをまさぐらないでくださいっ…。」

「…どうして私よりも、胸があるのだ。」

「そ、それはターニヤが、ほとんど毎晩、揉むからじゃないですかっ！…最近揉まれてませんでしたが…。」

相思相愛になつてからというもの、私が怪我をする前日まで、ほとんど毎日、ですよ？

『揉めば大きくなる』とは誰が言ったのか知りませんが…。

「ひゃっ…だ、ダメです、くすぐりたいですっ!!」

…夕飯の時間になるまで、揉まれて、キスされて、色々されてしまいました。

「ああ…その、アレクシア？さつきは、すまなかった…。」

「…揉みすぎなのです、少しは反省してくださいっ！」

夕飯を食べている最中、ターニヤとは一言も話しませんでした。たくさん愛してもらって、とても嬉しいですが…ターニヤは、私

の胸を揉みすぎなのです。

いくら、大好きなターニヤとはいえ… 恥ずかしいものは恥ずかしいのです。

メアリーのモノでも揉んでいればいいのです!!

「… どうしたの二人とも… 喧嘩?」

「い、いえ、違います。心配してくれてありがとうございます、メアリー。」

「それならいいんだけど…。私でよろしければ、相談に乗りますからね。」

「ああ… ありがとう、メアリー。」

メアリーに気を使わせてしまいました。
…。

「… では、部屋に戻りましょう。ターニヤ、行きますよ。」

「あ、ああ。メアリー、また明日。」

「… はい。… (最近、一緒に寝てくれませんか… 寂しいです。)」

「… ターニヤ。」

「… な、なあアレクシア。どうして私に馬乗りにな…。」

「さっきの、仕返しですっ!!」

「ひゃんっ!?!」

ターニヤの、柔らかな膨らみを、揉みしだいてやるのです…。

「あつ、アレクシアつ、ごめん!あやまるからあ!!」

「ダメですっ!ターニヤだって、止めなかったじゃないですかっ!!… ちゅっ。」

「んむっ…!」

… いつもは、私がターニヤにされてばかりですから、今日くらいは私がターニヤに…。

「… はあ、はあ… ごめんなさい、ターニヤ…。」

「… いや、私こそ、ごめん…。」

しばらくして、はっと冷静になってしまって… とても、罪悪感が
します…。」

… ターニヤの胸、なかなか、良かったですね…。」

「… 明日か明後日には、そろそろイルドア王国で動きがあるはずで
す。寝ましょう…。」

「… そうだな。アレクシア、おやすみ。」

「はい、おやすみなさい…。」

ぎゅっ、とターニヤが抱きしめてくれます。

「… ターニヤ？」

「抱きしめられるのは、嫌だったか？」

「… いえ、とても嬉しいです、ターニヤ… 愛しています。」

「… 私もだ。」

少し、お互いにやりすぎてしまいました… 仲直り、できました。

37 予定通りの宣戦布告

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。連合王国を信じさせるに十分な時間をかけて、嘘の情報をばら撒き。

イルドア王国には、これ以上戦争はできないなどと言い、不可侵を求め。

まあ、イルドア王国が宣戦しようが、不可侵を結ぼうが、どちらも帝国にとって利益になりますので。

ただ、戦争となると私達も働かなくてはいけません。

「さて… イルドアはどう動くでしょうか。どちらに転んでも、帝国にとつてはプラスですが。」

「さて、な。」

ターニヤと二人で、行きつけの喫茶店でコーヒータイムです。

ターニヤはブラックを飲んでいますが、私にはブラックは苦すぎて、飲めないので砂糖を少し入れています。

「… はあ。このコーヒーは、いつも美味しいです。」

「全くだ、私達が息抜きをできる、最高の場所だ。」

「いつもありがとうね、小さな軍人さんたち。」

いつまでも、こんな平和が続けばよいのですが。

「デグレチャフ少佐殿！つ、ここにおられましたか！」

息を切らして、ヴィーシャが駆け込んで来ました。

ついに、イルドアが動いたのでしょうか。

「まずは落ち着け、セレブリャコフ中尉。」

ああ、ヴィーシャは共和国戦で私の代理として、見事な指揮をした功で昇進しました。

「は、はい… 申し訳ありません。」

「さて、ついにイルドアが動いたか？」

「はっ！イルドア王国が、我らが帝国に宣戦布告致しました!!」

案の定、ですね。イルドア王国には、『未回収のイルドア』と呼ばれ

る元イルドア領があります。

かつては違う国でしたが、現在は帝国領。

取り返したい積年の思いがあっても、帝国には敵わないと諦めていた筈。

そこへ、連合王国からの嘘情報。

帝国からの不可侵の誘い。

こうなってしまうえば、イルドアが嘘の情報を信じてしまうのは仕方ありません。

「ヴィーシャ、報告ありがとうございます。さて、参謀本部へ行きましょうか。」

「ああ、店主。勘定はテーブルに置いておくぞ。今日も美味しいコーヒーをありがとうございます。」

「また来ておくれよ！」

さて、共和国への攻勢計画から久しぶりの参謀本部です。

「…来たか。」

「はい、ルーデルドルフ閣下。状況をお教え願います。」

まずは、イルドア王国と帝国の状況確認です。

開戦間もないため、予定通りならば我々の後退した戦線まで敵は進軍中でしょう。

「よかろう。現在、我々の退いた土地をイルドア軍が散歩している。後退させた戦線まで奴らがたどり着くのは、明日の昼過ぎだろう。」

「…随分と、イルドア王国は悠長でありますね。」

そりゃ、イルドアは協商連合、共和国と連戦続きで疲弊している、と思っっている帝国相手なのです、悠長に進軍しても問題ないと思っっているでしょう。

「イルドア軍が当初の計画通り、戦線へ到着次第、第43戦術戦闘飛行

隊による制空、同時に爆撃が行われる。この航空飛行部隊は、例の魔導航空機の初の投入でもある。」

「成程、確かに性能をテストするにはうってつけですね。しかし、この前試験飛行したばかりだと思いますが、もう飛行部隊を編成できるほど数が？」

「いや、完成し飛べるのは試験で使用した2機と、新たに作らせた3機の、5機だけだ。他は既存のZeppelin戦闘機で代用している。」

あの性能なのです、エース級パイロットが乗れば、たった5機でもかなりの戦果を期待できるでしょう。

「ああ、そういえば。この戦術戦闘飛行隊のナンバーツーが、協商連合国からの志願兵だった筈。帝国所属兵以外で初だな。」

んん…？なんだか、知り合いのような気がするのですが、気のせいでしょう。

気のせい…気のせいの筈。

「そ、そうなのでありますか。成程、最新戦闘機の部隊ですか、今後も共に戦うでありますよう。」

「ああそうだ、『白銀』。貴官の言っていた、『戦闘団』についてだが、イルドア戦線の爆撃終了後、ただちに編成してくれ。基幹部隊や規模については貴官らに一任しよう。」

「戦闘団、でありますか…。確かに今後は、我々の即応魔導大隊だけでは厳しくなるでありますよう。」

戦闘団、とは、規模としては連隊規模なのですが、通常の連隊と異なり、複数の兵科を組み合わせた混成連隊、とでも言いましょうか。「ターニャ・フォン・デグレチャフ少佐、戦闘団編成の任務、拝命致しました。」

「同じく、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐、戦闘団編成任務、拝命致しました。」

「…して、イルドア軍の爆撃のだが、航空部隊のみでは撃ち漏らしも出よう。よって、第203航空魔導大隊は残敵掃討任務にあたってくれ。」

「了解しましたッ！」

新しい仕事ですね。

大隊の皆さんとイルドア戦線へ移動し、明日を待ちましようか。

「大隊、傾聴ッ！」

「…結構、楽にしてくれ。さて、大隊諸君。愚かなイルドア王国が宣戦してきたが…奴らはダキア軍に毛が生えた程度だ、最新戦闘機の試験がてら爆撃するそうだ。」

「我々の任務は、試験爆撃で残念ながら死ねなかったイルドア兵を駆除することでありませぬ。…田舎の畑で害虫駆除するより、簡単な仕事ですが、万が一、害虫がこちらへ向けて飛んでくるかもしれませぬ。留意せよ。」

まあ…パスタの国ですし、とんでもない連合王国の精鋭などが来ない限り大丈夫でしょう。

「作戦開始は、明日の朝6:00だ。大隊諸君、寝坊はしないように。」
「寝坊したら…明日の昼と夜のご飯抜きですからね！」

そりや大変だ、寝坊で飯が食えなくなるとは…などと、皆さん軽口を叩いています。

「では、解散。」

現在の時刻は…19:00ですか。

寝るにはまだ早いですね。

敵軍もまだ到着していませんし…ああ、そういえば。

最新戦闘機を初運用する、飛行隊の皆さんに挨拶をしに行きましようか。

明日は作戦開始が朝ですので、挨拶する時間ありませんし。

「ターニヤ、明日共に空を飛ぶ、飛行隊の皆さんに挨拶しに行きましようか。」

う。」

「奇遇だな、私も同じことをしようと思っていた。」

・・・ やっぱり、私とターニャの頭の中は同じなのではないか。

「失礼します、第43戦術戦闘飛行隊の皆様……………」

「あれ？アレクシアちゃん… 少佐殿。奇遇でありますね、こんなところまで！」

・・・ メアリーが、どうしてここに!?

ま、まだ士官候補生のはず……………」

い、いえ。それよりもまずは、飛行隊の隊長殿に挨拶をせねばなりません。

「貴方が、帝国の希望の。小官は、第43戦術戦闘飛行隊、隊長、ジークフリート・ルーデルであります。階級は、大尉を拝命しております。明日は宜しく願います、少佐殿。」

…………… ルーデル？

この人、ルーデル、というのですか？

・・・ ツェッペリンといい、ルーデルといい… 西暦世界の偉人の名前を持つ人が多いですね……………」

ツェッペリンは西暦世界の通り、航空機に関しては素晴らしい才能を持っていました。飛行船では、ありませんでしたが。

「… 成程、ルーデル大尉殿、宜しく頼む。」

「…………… それで、どうしてメアリー殿が、ここに？」

「… 知り合いましたか。彼女は、この前まで魔導少尉士官候補生でしたが… 最新戦闘機の配備に伴い、これを動かせそうな魔導適正持ちを探した所、彼女が志願してきまして……………」

・・・ とはいえ、ただの候補生が志願したところで、通常は一蹴されるはず。

「まさか候補生が、と思いましたでしたが、士官学校の教官からも推薦されています……………」

「はい、小官は士官学校入学後、寝ている時間以外はすべて学習、訓練

に使っておりました。努力が実り、主席で一号生へ進級致しました。そこで、教官にも確認し、志願した次第であります！」

…メアリーは、生まれ持った魔導師としての才能のほかに、努力できる才能まで持っていたのですか。

学習、訓練、共に周囲の何倍もやる気を見せ、いつ見ても学習に浸る生徒が、最新戦闘機配備の募集に志願。

「作戦を完遂し、無事生きて帰れば、特例で士官学校卒業になります！」

…飛び級、というやつですね。

私もターニヤも、銀翼突撃章の獲得によって飛び級したようなものですし…。

「…そうか、まあいい。ルーデル大尉殿、明日は宜しく頼む。」

「ああ、少佐殿も。」

38 呆気ない戦争終結

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ少佐です。

今日はイルドア王国軍掃討作戦決行日です。

現在、朝の5：30です。6：00から作戦開始です。

「さて、大隊諸君。本日はイルドアの観光客を盛大にもてなす任務だ。まず第43戦術戦闘飛行隊が先行し、敵軍を爆撃する。生き残ってしまつた哀れなイルドア兵を、優しくヴァルハラへ送つてあげるだけだが、な。」

「今回は我々、第203航空魔導大隊にとっては準備運動程度にしかならないと思いますが、万が一ですが、連合王国の介入があるかもしれません。油断せず、任務を達成しましょう。」

航空機と魔導師の、合同作戦です。

と言つても、撃ち漏らしを掃除するだけです。

「CPよりフェアリー大隊へ。現時刻より、イルドア王国軍掃討作戦を開始する。第43戦術戦闘飛行隊は既に出撃した。また、第43戦術戦闘飛行隊のコールサインは、『ファントム』だ。オーバー」

「こちらフェアリー大隊、了解であります。…さて、大隊諸君。仕事の時間だ！」

「了解ッ!!」

まだか、まだかと待ち構えていた皆さん、やっと出撃です。

私も怪我をしてから鈍つてしまつているかもしれない、ここで勘を取り戻しておきましょう。

ファントム、ですか。

あれだけの性能の航空機の編隊、幽霊のように見えない場所からの攻撃。

ぴつたり、ですかね。

「ファントム01へ、こちらフェアリー01。我々フェアリー大隊は、これより残敵掃討作戦へ参加する。」

「こちらファントム01、了解。こちらからは敵影は捕捉できず。塹壕内に隠れている可能性有、留意せよ。オーバー」

「こちらフェアリー01、了解だ。オーバー」

「隠れていなければ、例の航空機は相当な性能ですね。」

「そうだな、戦闘団編成にファントム隊編入も考えておこう。」

ファントム隊と共に戦えるのならば、相当有利に戦えそうですね。

「さて、目的地周辺だ。大隊各位、中隊規模で掃討を開始せよ。塹壕内に隠れている敵からの攻撃があるかもしれん、留意せよ。」

「私達は、どうしますか？」

「そうだな…第2、第3、第4中隊だけで掃除は終わるだろう。我々は、不測の事態に備えて周辺を警戒するでしょう。」

…結局、敵魔導師の影さえも見ず、イルドア王国軍は全滅しました。

その後は、簡単に元々の帝国―イルドア国境を越境。

イルドア王国軍掃討作戦成功から、3日。

一応、イルドア国防軍がこれ以上帝国が進まないよう抵抗して来ましたが、圧倒的戦力の前に投降。

首都へ至るまでもなく、主力軍を全滅させられたイルドア王国は降伏。

…開戦から、6日。

… 実際に戦闘をした日だけならば、4日ですね。

「さて… 戦闘団、各大隊隊長諸君。私達の誘いに乗ってくれて、ありがとう。」

「… デグレチャフ中佐殿！なぜ、なぜ私が第203航空魔導大隊の大隊長なのでありましょうか！」

「私は、戦闘団を編成するにあたり、ゼートウアー閣下に聞いていましたが、戦闘団隊長に昇進。」

「階級も、少佐から中佐へ昇進です。」

「私達が昇進する為、元々大隊長を勤めていた第203航空魔導大隊の大隊長に、ヴァイス中尉… いえ、今はヴァイス大尉ですね。彼を昇進させ、任命しました。」

「ヴァーシャには、彼のサポートをお願いしてあります。」

「… なぜ、か。そうだな… ヴァイス大尉、貴様は大隊結成当初、教範通り、常識的すぎる思考をしていたな？」

「… はっ、お恥ずかしい限りです！」

「そんな貴方でしたが、帝国の為に尽くしてくれました。また、中隊長として、他の中隊長よりも常に冷静であつたと、思います… まあ、共和国戦では焦って死にかけていましたが、ね！」

「そ、その節は申し訳ありませんでしたッ！」

「まあ、そんな訳だ。私達が昇進する以上、誰かが大隊長を勤めなければならぬ。私達は、ヴァイス大尉。貴官が適任であると判断した。ああ、セレブリヤコーフ中尉には、貴様の世話をしやれと言いつけてある、安心しろ。」

「… はっ！」

「ヴァイス大尉は、納得したみたいです。」

「危なっかしいところもありましたが、こうして生きているのです。身に染みて、学習してくれましたよ。」

「… ルーデル大尉殿、ファントム隊結成直後で申し訳ない、参加して

くれてありがとう。」

「いえいえ。うちの副官が私に、『どうしても戦闘団計画に参加してください!』と何度も何度も懇願してきてな…。まあ私も、この話が回ってきた時に、魔導師のエースオブエース、『白銀』『白百合』と共に、戦場を駆けまわりたいと思ったがな!」

…。やっぱり、『ルーデル』ですね、この人。戦闘狂…。の香りがします。

「機甲部隊隊長、エルマー・アーレンス大尉。砲兵隊長、ロルフ・メーベルト大尉。貴官らの部隊も、参加してくれて礼を言う。」
地上部隊の方々も、同様に挨拶をする。

各部隊の隊長達と挨拶を終え、戦闘団結成です。

参謀本部直属戦闘団、という名称で、名前の通り参謀本部直属です。

…。ゼートウーア閣下が、好き勝手に使いたかつたのでしょうか。

…。いえ、閣下の事を悪く言うものではありませんね。

あの人には、色々とお世話になっていますし。

…。つと、ターニヤが執務室に戻ってきました。

隊長達と挨拶した後、ターニヤは隊員とも挨拶してくる、と言って行っていました。

私は、戦闘団結成の報告書を書いていました。

…。ターニヤは、とても不機嫌そうですね。

「チツ…。舐めやがって、歩兵の分際で!」

「どうしたのですか、ターニヤ。落ち着いてください…。ちゅっ。」

「…。んっ…。すまない、アレクシア。少し、イライラしていませんか…。」

ターニヤがここまで怒るなんて、珍しいですね。

「何があったのですか?」

「ああ、各隊の奴らにも挨拶しようと思ってな?機甲部隊内の歩兵部隊に挨拶へ行つたのだよ。そこで、『おや、お嬢さん、迷子かな?』と話しかけてきたのだ。それだけなら、まだ許せたのだが…。」

「…それで？」

「…『私は貴様らの上官になる者だ、宜しく。』と、いつも通りの挨拶をした。そうしたら奴ら、『あつはっは！お嬢さんが、俺たちの上官だった？こりやまた、こわい上官だ！』などと言い、私の頭を撫でたのだ…。」

……。

「ええと、ターニャはその時も、いつも通り銀翼突撃章を身に付けていましたよね？」

「当たり前だろう、私とアレクシアの、二人一緒に、最初に頂いた勲章だぞ。」

そ、そうやって言われると、嬉しいのですが… 少し恥ずかしいです。

「それでも、ダメだったのですか？」

「… もちろん、奴らも銀翼突撃章に気が付いたさ。これを見るなり、『よくできたレプリカだな』だと。胸倉掴んで殺してやろうかと思っただが、アーレンス大尉に止められてな…。その後、大尉が説明してくれたが、歩兵のクソ共の雰囲気は変わらなかった。」

「… ターニャ。イルドア戦も終わりましたし… どうですか、新編した戦闘団を鍛え治す訓練、というのには？」

… 私のターニャを、ここまでコケにしてくれたのです、お礼をしてあげませんと。

それに、どの程度動けるのかわからないですし、訓練がたら確認しましょうか。

「… 採用だ。今すぐに、戦闘団全員に、203大隊を訓練してやった雪山へ来るよう通達してやろう… ああ、もちろん203大隊も、一緒にな。」

「仲間はずれは、可愛そうですね。ですが… ファントム隊はどうしますか？」

「… 彼らにも訓練してもらおうか。まあ、地上を這いずる奴らを訓練用の弾で爆撃させる訓練だがな？」

あはは、効率的です。

皆さんは鍛えられ、ファントム隊は新戦闘機に少しでも慣れることができません。

「期間は、そうだな… 明日から5日間、でいいだろう。」

「では私は、ゼートウーア閣下にも知らせてきますね。『戦闘団結成祝いに、全員で雪山へピクニック』とでも。」

さて… きつと、帝国兵の皆さんが大好きな、雪山ピクニックです

！

39 後処理

おはようございます、アレクシア・フォン・デグレチャフ中佐であります。

戦闘団結記念、雪山ピクニックも終了しました。

ええ、戦闘団の皆さん…。主に歩兵の方々は、見違える程に従順になつてくれました。

訓練の成果はありましたね！

本日は、参謀本部へ出向。

今日はターニャも一緒です！

「……『白百合』の。南方へ逃げた元共和国の賊どもに、どうやらどこかの国がお節介をしているようだ。ロメール少将に任せているが、補給が辛いと何度も報告を受けているのだが……。」

「…成程。その前にであります。戦後の共和国本土、イルドアはどのようによ？」

「ああ、貴官から受けた文書通り、帝国民の不満にならない程度、軍事的に重要な拠点を中心に割譲。首都周辺と、旨味の少ない土地はそのまま、だ。」

「ありがとうございます、ゼートウアー閣下。」

成程、今日呼ばれたのは、南方で未だ暴れる元共和国軍について、ですか。

「…発言を。」

『『白銀』、何かね？言ってみたまえ。』

「おそらく、であります。遠からず、連合王国が我々に対し宣戦してくるか。嘘の情報を掴まされ、イルドアを帝国側に立たせることに成功したのです。冷静な判断ができるならば、南方の元共和国軍に援助などして、帝国と敵対するような行動はしないであります。」

元共和国軍は、彼らも慣れない気候の中で戦っている筈、厳しいはずです。

それでも持ちこたえているのは、ほぼ確実に連合王国でしょう。

「…連合王国の参戦を皮切りに、連邦にも注意せねばならないかと。」

故に、南方の早期決着……というよりも、敗残兵の掃討を終わらせる必要があると具申します。」

「……『帝国の希望』が言うのだ、信じて杞憂だったならばどれほど良いだろうか。我々としても、これ以上南方に戦力を割き続けることはできません。」

「それ故に、新設した参謀本部直属戦闘団の実力を確かめる目的もあるが……南方へ行ってもらう。」

「はっ！南方の共和国敗残兵掃討任務、拝命致しました！」
戦闘団の、初任務ですね。

「……アレクシアは、我らが帝国が、勝利できると思うか？」

「……分かりません。共和国の敗残兵、連合王国には勝てると思いますが……。おそらく、連合王国の前に連邦と戦争になるでしょう。その際に、もしも、合衆国が敵国へ援助した場合……勝てるかどうか、わかりません。」

いくらレガドニア協商連合国、フランソワ共和国、イルドア王国の三国が帝国陣営とはいえ、彼らは戦後復興中なのです。

特に共和国は、工場などはともかく、死んだ人間が多すぎて大変でしょう……。

故に、多少の援助は期待できませんが、参戦まではしないでしょう。

いえ、参戦してくれたとしても、国力がもたないでしょうね。

帝国は、彼らよりも力がありますが、連邦の数の暴力の前にはかなり辛い筈です。

人的資源の差もちろんありますが……やはり、立地条件、でしやうか？

連邦側は大小さまざまな川に恵まれ、防衛するのに適しています。対して帝国側は川も少なく、ほとんど平地です。戦車が縦横無尽に走り回ることができます。

「… 西暦世界と異なるのは、私達がいることだ。バルバロッサは有効だろうが、すぐに兵站限界だ。すぐにモスコーなどの主要都市を押しさえることができなければ、帝国は破綻してしまうだろう…。」

「ですが、最新鋭の航空機がありますし、新型戦車も少しずつ配備されているようです。ある程度は耐えられるでしょうが…。」

「長引けば長引くほど… 連合王国からの支援によって辛くなるだろうな…。合衆国もいつまで大人しくしているか分からん。」

「ただ一つだけ、言えることがあります。冬季に開戦した場合… 早期決着のためにバルバロッサをするか… 夏まで待たなければならぬでしょう。春は雪解け水で、おそらく舗装されていない連邦の道路です、戦車が動けなくなってしまうし、歩兵にも支障をきたすかもしれません。」

連邦がおとなしくしてくればよいのですが。

「… ツエツペリン、ルーデルがいるのです、ヨシフ・スターリンのような男が存在してもおかしくありません…。」

「連邦は粛清を行ったと、聞きました。まさかとは思いますが、ヨシフ・スターリンの名前の一部を持つ人間がいてもおかしくありません。ツエツペリン、ルーデルと同様に…。」

「… 留意しておこう。だがもし、仮に居たとしたら… 私達にとっては、良くも悪くも敵の考えが多少なりとも読める、ということだ。脅威ではあるが、チャンスでもある。」

「… とにかく、敗残兵掃討任務を終わらせましょうか。どうも、我が帝国には『砂漠の狐』と呼ばれる名将がいるようですよ?」

「何ッ！それは本当か!… ならば、南方を片付けることができれば、帝国は有利な立場へ立てるかもしれないな。」

エルヴィン・ロンメル元帥。

西暦世界、第二次大戦において、イギリスのチャーチルをして「ナポレオン以来の戦術家」と言わしめた人物。

戦後も、世界中でその名将っぷりを評価されている。

「もしも、その資質に近いものを持つ人が、帝国に存在するのならば……。」

「……少しは、希望を持ってそうだな。」

「はい、ターニヤ。私達も、任務を全うしましょう。」

「そうだな。そして、さっさと平和な世界にして、お前と……。」

「……なんですか?」

「いや、なんでもない。」

ターニヤが何か、言いそうになっていましたが…… 教えてくれませんでした。

何を言おうと思ったのか、とても気になります…… 今は、南方へ行くことが先決ですかね。

———— side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

『お前と、一生を添い遂げよう。』

なんて、言おうとしてしまったが……。

……今、プロポーズに近いことを言えば、前世で耳にした所謂『死亡フラグ』になってしまうのでは……。

アレクシアに秘密にするような形になってしまったが、死ぬわけにはいかない。

戦争終結まで、我慢だな。

「今日、戦闘団の皆さんに通達し、明日に準備をしましょうか。出発は、3日後でいいですか?」

「ああ、それで頼む。」

アレクシアは本当に、直接伝えなくとも私の考える事を成してくれる。

よく出来た妹を持って、私は誇りに思う。

だが… どちらかが戦場に残り、死ぬかもしれない状況になった時… どうするのだろうか。

… いや、これには答えが出ていたな。

『銀翼突撃章』を頂く切っ掛けになった、協商連合国との開戦。

あの時、命令無視という違反をしてまで、私のところへ来た。

私が死ぬかもしれない状況になったならば、あの子は共に死ぬ運命を選ぶのだろうか。

… アレクシアが死ぬくらいなら、私だって死ぬつもりだが。

「アレクシア。」

「はい、ターニャ。何ですか？」

とても、愛おしい妹。

「… どうしましたか？」

「… ああ、すまない。つい、抱きしめてしまった。」

「いえ、嬉しいです。」

可愛くて、可愛くて仕方がない。

この子を失えば、私は憎悪に飲まれ狂ってしまうだろうな。

肩を怪我させられた時でさえ、冷静さを欠いてしまった。

「… んっ…。」

不意に、アレクシアにキスをされる。

柔らかい唇。

「… ごめんなさい。」

「… また、考えていることは同じらしい… 執務室へ行こう、アレ

クシア。」

「はいー。」

40 連合王国参戦

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ中佐であります。今日は、南方で暴れ続ける、元共和国軍の残党を掃除する準備です。明日、お掃除を決行します。

これは、参謀本部の意向でもありません。

「さて……準備、確認はヴァイス大尉とセレブリヤコーフ中尉に任せるとして……。アレクシア、今回の任務、間違いなく連合王国が少なからず介入してくると思うのだが。」

「そうですね、私もターニヤと同じ意見です。私達だけで作戦を考えてもよいですが……折角ですし、『砂漠の狐』と共同作戦というのはどうでしょうか?」

「……成程。有能な将校と、少しでも仲良くなっておいて損は無いな。」

南方軍司令部へ、『砂漠の狐』に会いに行きましようか。

「参謀本部直属戦闘団隊長、ターニヤ・フォン・デグレチャフであります。階級は中佐を拝命しております。」

「……同じく、参謀本部直属戦闘団副隊長、アレクシア・フォン・デグレチャフであります!階級は中佐を拝命しております!」

「ほう……話には聞いていたが、貴官らが『白銀』『百合』か……。私は南方派遣軍、軍団長、ロメールだ。階級は少将を拝命している。」

……やはり、ですね。

さて……どう、攻略しましょうか。

———— side ロメール少将

帝国がイルドアと開戦している間も、元共和国の連中は手を休めることなく、頑張つて攻撃してきていた。

現在も、相変わらずである。

元々、南方派遣軍は補充兵と予備役からなる新編の、軽装師団と、ライン戦線でかなり損耗している師団の寄せ集め、といったところだ。奴らを掃討してやるどころか、防衛するだけでも厳しい。

イルドア戦が一週間も経たずして終わったのは幸運だった。

なにせ、再三と参謀本部へ懇願していた『マトモな援軍』が来ることになったのだ。

先進的な作戦を考案する少女。

考案された作戦を確実に実行する少女の双子の姉。

戦闘においてはまるで一つの生き物のように戦う、双子の少女。

他にも様々な話を聞くが……各方面司令部の評価、現場からの評価、総じて賞賛されているらしい。

その一方で、対共和国戦において……双子の片割れが負傷した際、平静を保てず憎悪のままに敵を、消し去った、という噂もある。

そんな彼女達が、目の前に立っている。

噂通りの、華奢で、およそ軍服など似合わない少女達。

だが、その顔は同年代の子供と比べると違和感しかない面構えをしている。

「君達が援軍として来てくれて、とても嬉しく思う。名声、噂は聞いている。」

「はっ、過分な評価であります。」

「……挨拶しに来ただけではなからう。話を聞かせてくれ。」

非常に合理的、効率的な作戦が殆どな彼女達のことだ。

挨拶だけではあるまい。

「……我々は、明日にでも共和国敗残兵共を掃除する予定であります。

これは参謀本部の意向でもありますが……こちらの司令部と共同で行えないものかと思ひまして。」

「私達だけでも、掃除は可能かと思われませんが……イルドアがすぐに降伏した以上、連合王国は間違いなくこちらに介入してくるか。」

「故に、不測の事態、または君達が万が一やられてしまった場合……備えておけ、ということか。」

「話が早くて助かります。」

… 彼女達は、参謀本部直属。

独断専行権とも呼べるものがあるにも関わらず、冷静に話をしてくれる。

「承った、君達のご事は信用している。南方派遣軍とはお粗末なものだ、防衛だけでも精一杯なのだ。期待はしないでくれ。」

「… 私達も彼らを見ましたが… 軍隊とは名ばかりの、あれでは力カシですね。」

… 痛いことを言うな。だが、事実である以上仕方がない。今は地雷などを埋めて、どうにか防衛できてはいるが…。

「しかし、あのような力カシばかりであるのに、防衛できているのは閣下の戦略の賜物であると確信します。」

「嬉しいことを言ってくれ。先進的な作戦を立案する、と聞いている君達からそう言われるのは、誇らしいな。」

10歳前後の少女達。

だが、話してみれば中身は歴戦の将校だと言われても全く不思議ではない。

もしも敵だったならば… 恐ろしい才能だ。

「… さて、本題に入りましょう。まずは、本日の夜、先行偵察を行いたいのでありますが…。」

「明日、奇襲という形で掃討作戦を行うのだろうか？こちらの意図が露呈しかねないが。それに、偵察部隊は出しているはずだ。」

どんな作戦を、と思ったが、まさか先行偵察とは。

「こちらの空軍で偵察をしているかと思われませんが… 昼間であればそこまで近づけませんし、夜間は視界不良であると思います。それに、航空機ですから、燃料、敵の迎撃などの問題もあります。故に、情報への偏りがあると思われる為、まずは情報収集すべきかと。」

「偵察には、我々の戦闘団のファントム隊を使いましょうか。彼らならば、たとえ捕捉されても逃げ切ることが可能であります。」

… それは、本当なのだろうか？

現状、こちらの航空機も、敵の航空機も、似たり寄ったりな性能だ。

当然と言えば当然だが、どこかの国が少し抜きんでた性能のものを作れば、各国はそれを追い越すために力を注ぐ。

いや、彼女達の武勲を聞いていた中で……ライン戦線の敵軍を殲滅した際、恐ろしい速度で、相当な高高度から爆撃したという話があったような……。

ならば、同様に恐ろしい戦闘機が作られていても不思議ではないか。

それに、偵察によって得られる情報の不足、指摘されてみれば確かに、その通りだろう。

「では、そちらの航空部隊に偵察を任せるとしよう。」

「はっ！」

実に、話しやすい指揮官だ。通常ならば、何らかの形でモメるものだが……。

衝突することなく、妥当な落としどころへ持っていくとは。

「ロメール少将閣下。今後とも、宜しく願いますね。では。」

…… 本当に、子供とは思えない表情をするな。

—— side アレクシア・フォン・デグレチャフ

「ロメール閣下、ゼートウーア閣下にも負けないくらい、知性溢れる方でしたね。」

「そうだな、あのような司令官は貴重だ。是非とも、生き残って頂きたい。」

少し話をした程度ですが、ロメール閣下もゼートウーア閣下同様、非常に有能な方ですね。

正直に言つて、南方派遣軍の兵はどれもこれも…… 弾除けになればよい程度です。

いえ、本当に。

戦場ですし、怯える気持ちも分からなくはないですが……。

非常に士気が低いのです、寄せ集めと言っておられましたが、納得です。

「…しかし、これほどまでに士気が低いとは思いませんでした。」

「まったくだ…ライン戦線に居た者たちはまだマシだが…補充、予備役が酷い有様だな。よくもまあ、これを使って防衛できている。」

「流石は、『砂漠の狐』、と言ったところですね。」

しかし、ロメール閣下とてこのような軍では防衛が限界なのでしよう。

私達が掃討しなければ、終わりませんね。

「さっさと掃除するに限るな。」

「…！デグレチャフ中佐殿！」

「ヴァイス大尉、どうしました？血相を変えて…。」

「連合王国が…帝国に対し、宣戦布告致しました!!」

… やっぱり、ですね。

協商連合、共和国、王国の国民の恨みを連合王国へ向けてやったのですから、今更帝国にすり寄っても無駄だと気付きましたか。

「ああ、案の定だな。だが、このタイミングで…か。」

「ヴァイス大尉、報告ありがとうございます。しかし、明日の掃討作戦には変更ありませんので、準備に戻ってください。」

「…はっ！」

予測通りでしたが…明日の掃討作戦次第ですね。

どの程度の支援をされているか分かりませんが、さっさと終わらせなければ連邦が来てしまいそうですね。

「…概ね想定通りだが…面倒だな。我々もおそらく、連邦が宣戦してこなければ、掃討作戦終了後に連合王国戦へ向かう事になるだろう。」

「そうですね。まあ…奴らの強みはロイヤルネイビー、海軍です。最新戦闘機、爆撃機が揃いつつある帝国空軍で焼けば問題はなさそうですねが…。」

「対艦攻撃用も、少しずつだが製造されているようだぞ…お前のおかげだ。」

「きやつ！きゆ、急に撫でないでください…。」
……
ターニヤに撫でられるのも、悪くないですね。

4 1 掃討作戦

「CPへ、こちらサラマンダー01。感度良好、ノイズ無し。これより残敵掃討作戦を開始する。」

「CP了解。地上部隊は防衛しかできない。武運を。オーバー」

「サラマンダー01了解。オーバー」

・・・ こんにちは、参謀本部直属戦闘団所属、副隊長のアレクシア・フォン・デグレチャフであります。

偵察にてある程度情報を集めることができ、いよいよ作戦開始です。

「ファントム隊へ、こちらサラマンダー02。敵影は確認できますか？」

少しの間があった後、

「こちらファントム01。敵前線基地をいくらか攻撃してみたが、全機、敵影を確認できていない。」

・・・ 敵がない？

偵察の時には、現在ファントム隊が飛んでいる真下にいたはずですよ。

それが、攻撃をしても敵が確認できないとは・・・？

「機甲部隊、そちらで敵影は確認できますか？」

「・・・ 視界良好、なれど、敵影確認できません。」

・・・ 空からも地上からも、見つからない？

では、一体どこへ・・・。

「ッ！至急、HQへ繋げ!!」

「どうしたのですか、サラマンダー01？」

「敵はここにはいない！嵌められた、これは罠だ。」

「では、どこに・・・っ、そういうことですか。」

「・・・ 気づいたか。そうだ、敵軍は・・・ 我々の陣地だ。」

・・・ いつも通り、分散してちまちま攻撃してくると思っていました
が・・・。

まさか、司令部ごとぬけの殻、全軍で我々の陣地へ・・・？

「では、包囲されているのでは…。」

「サラマンダー戦闘団へ！こちらC P、我々は半包囲状態に置かれているー！」

「こちらサラマンダー01、直ちにそちらへ向かう。サラマンダー戦闘団へ。敵軍は我々の後方だ。地上部隊へ、包囲されぬよう留意せよ！」

どこで、入れ違いになったのでしょうか…。

—— side 元共和国軍司令部

「……勝ったな。」

「はい、閣下。」

我々の眼前に広がるのは、祖国が帝国へ降伏してからというもの、夢にまで見た光景。

いつものように、ちまちまと攻撃をすると見せかけて敵を誘引、全軍で包囲。

長かったように感じたが、ここで帝国軍を撃滅できれば南方大陸の守りを固めることができる。

また、大陸反抗作戦をより強固なものに。

そう、感慨に耽っていた時。

けたたましく警報音が鳴り響く。

「だ、第228魔導中隊より、メーデー！」

順調に事を進めていたはずだ、一体なにが…？

「第12魔導大隊よりエマーゼンシー！突破されかけています！」

…どうということだ？

地図上で示されている戦況を見るに、右翼に位置する部隊が突破されかけている？

少しずつ攻撃を重ね、帝国軍の状況を鑑みるに、突破できる余力など存在しないはずだが……。

「第七師団司令部より、至急報！敵一個連隊規模と思しき魔導師、航空部隊が右翼を強襲中！」

「何だと！困んだのではないのか!?!」

一個連隊規模の魔導師？航空部隊？

そんなもの、昨日までの戦闘で全く確認できなかった筈。

「馬鹿な！では、中央の魔導師部隊は何と戦っているというのだ!?!」

……取り逃がした？ありえん、ここに来るまでに付近に魔導師反応は無かった筈……。

一体、どこから湧いて出てきたというのだ？

「確認しろ、連隊規模なのか?！」

「閣下、既に二個中隊が落とされております。」

二個中隊が叩き落された、ということは、少なくともこれを一瞬で圧倒できる敵部隊が存在するということになるぞ？

抵抗の末に撃破されてしまったならばともかく、第一報がメーデーなど尋常ではない！

「第12魔導大隊が突破されつつあることを思えば、少なくともこれに倍する程度の戦力ではないかと。」

突破されつつある、ということは遅延防御も間に合わない、か。

「っ、中央の魔導師を支援に廻しましょう！このままでは、包囲を突破されるー！」

部下の大佐がそう叫んだおかげで、私は意識を取り戻すことができた。

そうだ、中央の魔導師を支援に廻せば。

「第5魔導大隊よりHQ、敵魔導師、我へ急速接近中！」

「どういうことだ！砲列を叩くのではないのか!?!」

中央の魔導師を右翼へ送った直後、援軍阻止ですらない行動……。

全く意味がわからない。

何者なのだ、この敵は？

「……悪魔のような連中ですな。」

いやなに、例の『白銀』『白百合』のことだ。

…まさか、半包囲状態を知るなり敵軍の背後から奇襲、敵右翼を攻撃したかと思えば、敵の司令部へ直撃だど？

右翼への攻撃に、どれ程の効果があるのか、と戸惑ったが。

まさか、それすらも陽動。

敵司令部付近の魔導師を援軍として出させるための陽動だったとはな。

流星は、参謀本部をして頼られる戦術家、といったところか。

…確かに、参謀本部の漠然な命令も理解できるな。

アレに明確な命令を出すよりも、大まかな目標だけ与えておけば、勝手に上手くやってくれる。

今回に限っては、とんだ想定外の事態だったが。

自分の思い通りに、戦争をしたい司令部の人間にとっては扱いづらいだろうな、アレは。

敵の増援を振り切り、中央部へと斬り込んだおかげで敵は大混乱中。

包囲されていたはずの帝国軍は、纏まった戦闘部隊を組織的に保持し続けたために状況を打開できるまでになっている。

前に進むと、後退しようと自由。

それこそ、両翼が中央の混乱によって即座に対応しかねているのは当初の各個撃破方針を蘇らせるに足るものだ。

「敵左翼を叩く！機動遊撃戦だ！敵左翼を叩き、そのまま敵中央部をぶち抜くぞ！」

背後から強襲され、混乱している右翼は一先ず放置。

中央部は『白銀』『白百合』が混乱させている。

そうであるならば、残りは左翼。

最も、指揮系統から孤立しているものの、ある程度戦力が存在する部分を叩くのが一番効果的であろう。

「くっくく、面白い！例の中佐二人に伝えろ、『自由にやれ』となー！」

「はっ？よろしいのですか？」

「あれには、自由にやらせるに限る。狩りは猟犬に任せるべきという

だろう？」

自由にやらせておいたほうが、命令するよりも大きな戦果が出せる二人組だ。

彼女らの、これまでの記録を見たときは「いくらなんでも盛りすぎだろう！」と笑ったものだが。

成程、あれらが真実だと理解できるな。

私は、同数の軍同士の衝突ならば負ける気は全くしない。

だが、大隊規模、連隊規模の運用となれば彼女達には及ばないだろう。

ああも、的確に綻びを作り出し、敵軍を大混乱させるなど、通常の将校にはできない。

「それよりも、浸透襲撃用意を急げ！共和国の砲兵が統制を取り戻す前になんとしても、取りつかせる！」

とりあえず、彼女達には自由にやってもらおう。

とにかく今、重要なことは、元共和国軍砲兵隊を潰さなければ、一方的に叩かれてしまうだろう。

「ヤー！直ちに取りかかります。」

「残存の砲兵をかき集めろ！背後を突かれたくない。敵中央集団に向かって撃ち込んでやれ。制限はなしだ。」

「牽制目的であれば、全ての必要があるでしょうか？」

「突撃には砲兵を連れていくわけにもいかん。何より、軽師団の防御支援もいる。取りかかれ。」

だが、さすがに単体で防御するのは限界だろう。

防御支援抜きで包囲下に置かれれば崩壊しかねない。

そうなれば、突破中の全部隊が動揺する。

いや、軽師団の崩壊が波及しかねないところだ。

速度が重視される機動戦。

砲兵隊は連れていけないとあれば、防御を最優先に考えて使うほかにない。

少なくとも、砲兵隊は攻防に役立つこと間違いなしだ。

撃つてよし、牽制してよし、守ってよしだ。

「失礼しました。直ちに。」

今まで、南方派遣軍の司令としてここに来てから久しく感じていなかったが……。

この戦争、『勝てるぞ』。

42 動き出す連邦

こんにちは。

はい、アレクシア・フォン・デグレチャフであります。

南方の共和国軍残党の掃討作戦は概ね成功しました。

また、敵軍司令の、ド・ルーゴ将軍とその部下たちを無事、捕虜：？としました。

いえ、勝手に臨時政府を宣言した連中ですが、彼らの祖国はとつくに降伏しているので、捕虜という扱いはどうなのでしょう。

まあ、細かいことは参謀本部の皆様がやってくれるでしょう！

その後、南方が片付くまではロメール少将は離れられないらしく、祝勝会は現地で行ってきました。

色々な話をロメール少将と致しましたが、すぐに意気投合できました。

私達と話が合う人なんて、ゼートウーア閣下以来ですよ。

祝勝会が終わり、帝都へ戻った途端に参謀本部からの呼び出しです。

…今回はお休みはないのでしょうか。

『双翼』、南方での掃討作戦、御苦労。少しトラブルがあつたようだが、完遂してくれたようですねによりだ。」

「はっ！」

「…ルーデルドルフ閣下、ひとつお尋ねしても？」

「ん？なんだ。」

「その…『双翼』というのは？」

勝手に二つ名を増やされては困ります。

私達の知らないところで増やされても、呼ばれた時に対応できません！

「ああ、『白銀』『白百合』、貴官らは常に二人で行動しているだろう？故に、二人合わせて『双翼』ということだ。」

…まったくどういふことか分かりませんが、そういうことなのだ、と思っておきましょう…。

「…理解しました。して、今回は何故呼ばれたのでありましようか？」

「連邦に潜り込ませているスパイから、連邦が西へ…帝国側へ何やら色々と送っているようなのだ。」

言葉を濁されてはいますが、おおかた戦争の準備…といったところでしょう。

「故に、だ。奴らがこちらへ攻め込んでくる前に、ちよこまかと小細工をしてくる連合王国をどうかしようと思つてな。」

…連邦が準備を開始したのならば、あまり猶予はありませんね。

しかし、連邦と連合王国に挟まれ、なおかつ連邦へ遠征軍派兵などの援助を行われれば非常に厄介です。

「…理解致しました。確かに、小官もそれが最善であると愚考致します。」

「小官も同意見であります。ですが…それでは、東方軍が多少薄くなってしまうのでは？」

「そう言うだろうと思つていた。その心配はない、協商連合国より、義勇兵派兵をするという文書が送られてきている。また、イルドア王国も同様だ。」

…明らかに、敗戦国への帝国の戦後復興援助が効いていますね。

国民からしてみれば、自分達が招いた戦争であるのに、戦勝国から搾取されると思つていたところ、援助されれば恨むに恨めないでしょうね。

「で、ありますか…練度は低いでしょうが、防衛するには十分でしょうね。」

「それで、だ。貴官ら、参謀本部直属戦闘団には連合王国攻略作戦を遂行してもらいたいのだが？」

一軍ではなく、戦闘団規模で？

「…連合王国との海峡を、ロイヤルネイビーをどうされるおつもりで？」

「北洋艦隊で叩き潰す案もあるにはあるのだが…おそらく、そこまですら効果は出ないであろうな。故に、『白百合』発案の航空機による対艦

攻撃に、ツエツペリン設計士が手掛けた航空機を用いて実行するつもりだが。」

「……流石は、ゼートウアー閣下。」

「点と点を結びつけることは朝飯前、ですか。」

「本当は、対連邦用に生産していたものだが……連合王国の海軍を潰す役目でもよからう。連合王国戦に回せる航空機の数は、戦闘機が300機、爆撃機が100機だ。」

「失礼ながら、閣下。私達には、指揮しきれないと具申致しますが……。」

「ああ、かまわん。これらは参謀本部が直接指揮を執る。無論攻撃のタイミングは、貴官らに合わせてもよいぞ?」

「大盤振る舞い、ですな。」

「それほどまでに、信頼されていることは非常に喜ばしいです。」

「……了解であります。」

「閣下、……海軍をある程度撃滅した後、連合王国本土を空襲でありませるか?」

「理想は、な。海軍の撃滅だけでも十分な戦果だ、後続の帝国陸軍を送ることが可能になる。」

「理解致しました。」

「作戦開始は、一週間後だ。開始時間は、追って連絡しよう。それまでに十分に準備しておけ?」

「はっ! 連合王国強襲任務、拝命致します!」

「……ターニヤ、戦争に次ぐ戦争、ですな。」

「そうだな…だが、概ね予想通りだ。だが…連合王国を、電撃的に早期決着できるだろうか…。」

「そうなのです、参謀本部が直々に相当な数の航空機を運用するといっても、ファントム隊ほどの練度ではないでしょう。」

「そのため、ある程度はファントム隊が援護しなければなりません。」

「今回の作戦、私達の出る幕は少なそうだな。殆ど、第43戦術戦闘飛行隊が働くことになるだろう…。」

「そうですね…メアリーも、あの隊長には苦勞しているようです…久しぶりに、一緒に…。」

「若干のトラウマがありますが…士官学校、戦場を経て成長した、と信じています。」

「…そうだな。第43戦術戦闘飛行隊には、掃討作戦では敵右翼を任せたりと、かなり無理をさせたからな…たまには、労わってやろう。」

「…ターニヤ中佐！アレクシア中佐！な、何用でありましょうかっ！」

「…メアリーは、変わってしまったのです。」

「この前まで、私達を問答無用で抱きしめていたのに…。」

「メアリー、今日は軍人として、ではなく、メアリーの友人として、です。」

「すっかり帝国軍に染まってしまったな。」

「…アレクシアちゃん!!!ターニヤちゃん!!!」

「プライベートであることを伝えるや否や、抱きしめられてしまいました。」

「久しぶりにメアリーに抱きしめられました…嫌ではありません。」

んね。

「…今日は、一日一緒に居てあげますよ。寝る時も一緒です。」

「…本当っ!?ありがとう…。」

「なんだか、溜まっていたものが溢れ出たかのように泣き出してしまいました。」

「とりあえず…抱きしめて、落ち着くまで待ちましようか。」

泣き止み、落ち着いてからメアリーは、ポツリ、ポツリと悩みを話し始めました。

知人が私達しかおらず、イルドア以降、こここのところ作戦続きで寂しかったこと。

第43戦術戦闘飛行隊隊で唯一の女性であるため、男共の視線がっらいこと。

「…隊長が、戦場へ行くと豹変してしまうこと。」

様々な悩みがありました。特に大きいものはこの三つみたいです。

「作戦続きだったことは…仕方がない、といえばそれまでだが…。」

「はい、私も分かっています。帝国参謀本部からの任務ですし…。」

「男共の視線、ですか…確かにメアリーは、胸が大きいですから、仕方ないとは思いますが…。」

「…とメアリーの胸を見ます…少し、羨ましいのです。」

「アレクシアちゃんとターニヤちゃんに見られるのは、その、嬉しいですけれどね。」

「…どうして照れているのだ。私達にそんな趣味はないぞ?」

「…ターニヤ、寝ているときに私の胸をまさぐっているのは知っているのですよ。」

「そ、そりゃ戦場では癒しが少ないかもしれませんが…それを、私の胸に求めるのは間違っているのです!」

「…これはこれとして。」

「ルーデル大尉が豹変してしまうのは…どうしようもないな。」

「そうなんです…。ですからせめて、二人とお喋りしたり、息抜きがしたくて…。」

メアリーは、今では私達の理解者と呼べるほど、大切な人だと思っています。

ヴィーシャは、ヴァイス大尉やほかの大隊メンバーとは馴染みですから問題ないと思いますが、メアリーはまだこれから、ですからね。『… 暇な時間に限りますが… いつでも、お話ししますよ？メアリー。』

「私も相談には乗ろう。メアリーは、私達の大切な仲間なのだから、な。」

「うう…。二人とも、大好き…！」

ああ… また、泣き出してしまいました…。

4 3 束の間の休息

「ヴィーシャー！」

「はっ！何でありましょうか！」

「こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフです。」

「連合王国攻略作戦まで、まだ時間がありますので、本日は戦闘団の皆さんと懇親会、のようなものをしております。」

「南方での戦勝会も兼ねております。」

「…今日は、無礼講、ですよ？そんなに畏まらなくても。」

「あはは…すみません、一度ついた癖はなかなか…。」

「今日は楽しんでくださいね、ヴィーシャー。」

「はい！」

「… 戦時ですから、料理はイモがほとんどですが。」

「魔導大隊と航空部隊は割と顔を合わせる機会が多いですが、地上部隊とはなかなかそんな機会もありませんし。」

「… と、第43戦術戦闘飛行隊、隊長のルーデル大尉がこちらへ近づいてきますね。」

「… 中佐殿。先日の戦闘での手腕、見事なものでありました。」

「背後からの奇襲を考案したのは、私ではありません。私の姉、ターニヤです。私は、ターニヤの補助をしただけに過ぎませんよ。」

「謙虚なのですね。先ほど、ターニヤ中佐殿にもお尋ねしましたが、同じようなことを言っておられましたよ、『私が考案したのは事実だが、あれは妹の援助が無ければ成立しなかった作戦だ。』と。」

「どうやら、ターニヤも私を褒めてくれていたようです。」

「… 嬉しいですね。今回は、ターニヤの役に立てたのでしょうか。」

「あはは…。」

「… それと、中佐殿もご存じでしょうが、私は戦場へ赴くと駆け回ってしまいます。」

「… 自覚は、あったのですね。」

「はい、知っていますよ。」

「私も、このような性質では副官や隊員に迷惑をかけてしまいます、直

そうとは思っているのですが……。特に、私について飛ぶ、スー少尉には、申し訳なくてですね……。」

……ルーデル大尉は、優しい人なのですね。

西暦世界のルーデルも、戦闘狂ではありましたが面倒見のよい人だったらしいですし……。」

「……実は、この前スー少尉に相談されましたが……、貴方のことを嫌ってはいないようですよ？冷静になってくれるに越したことは無いと私も思いますが……。戦闘の腕前に関しては憧れているようですし。」

「そ、そうなのか？てつきり、嫌われてしまっているものだとばかり……。」

……あれ、もしかして……。

「ルーデル大尉、つかぬことをお聞きしますが……大尉は、スー少尉のことが気になるので？」

「うっ……ちゅ、中佐殿、このことは、どうかご内密に……。」

メアリーは可愛いですし、とても優しいですから、好きになってしまったのでしょうか。

振り向いてくれるかどうかは、分かりませんが……。

「はい、大丈夫ですよ。私は、大尉の恋を応援していますから♪」

面白そうですし、応援しますよ！

「あ、ああ……で、では小官はこれにて！」

……顔を真っ赤にして、行ってしまうました。

何だか、他の皆さんの視線が痛いのですが……。ああ、これでは私が、ルーデル大尉をいじめたように見えてしまいますね……。

「……はあ。」

「……ん？アレクシア、楽しんでいるか？」

「まあまあ、ですかね。ターニヤはどうですか？」

「そうだな、私もぼちぼちだな……。魔導大隊の奴ら以外で、話したのはルーデル大尉だけだ、誰も話しかけてこない。」

そうですね……。第203航空魔導大隊の皆さんは挨拶してくれましたが、他の皆さんはあんまり……。

「あつ！二人とも、こんな端っこに居たんだね!!」

「こんにちは、二人とも。」

「…クリスタ!?と、メアリー。どうしてここに…?」

クリスタは、戦闘団には所属していなかったような気がします
が…。

「ええと、実は第43戦術戦闘飛行隊の整備士の辞令を頂けました！
私も、裏方ですが戦闘団の一員ですよ!」

「…確かに、クリスタが設計した航空機だ、機体の整備でクリスタ以
上の奴はそうそういないだろう。だがまさか、私達のところにクリス
タを…。参謀本部は、私達のことを厚く評価してくださっているよ
うだな。」

「それで、メアリーとクリスタは…。」

「はい、数少ない女性ですから…。」

「ボクとメアリーは友達だよ!メアリーとは悩みの種が同じなん
だ…。」

… ルーデル大尉でしょうか。

「あつはっは、だいたい察するがな…。女性といえば、魔導大隊のセ
レブリャコーフ中尉もだ。何か困ったことがあれば、彼女にも声をか
けてみるといい。」

「はい、彼女とも仲良くしたいですし。」

ヴィーシャはなんだかんだ言って、私達の後ろをずっとついてきた
古参兵ですしね。

人柄も素敵な人ですし、なんでも相談に乗ってくれてくれるでしょうね。
… と、クリスタや他の皆には聞こえない声で、メアリーが話しか
けてきます。

「…その、今夜も一緒に…。」

「はい、私はいいいですが…。」

「ああ、私も問題ないぞ?」

先日と一緒に寝ましたが…メアリーは私達を抱き寄せるだけで、
満足のような様子。

メアリーの匂いは、お日様のような匂いで、とても落ち着くので

す…。

また、なぜかは不明ですが、朝もすつきりと起きることができません。ターニヤも、その安眠効果にトラウマを克服…できたのでしょうか？

「ちよつと！ボクには内緒話なのー!?」

— — — side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

「メアリー…。」

…妹の寝言だが、嫉妬してしまうな。

私もアレクシアも、メアリーに抱き寄せられている。

嫌ではない、むしろメアリーの体温、匂いは陽だまりにいるようで、とても落ち着くのだが…なんだろうな。

私の性格上、恥ずかしさが捨てきれない…。

「はあ、メアリーはアレクシアからかなり好かれているようだな。」

「はい、嬉しいです。そういえば、ターニヤちゃんは、私の事をどう思っているのですか？」

…メアリーについて、か。そういえば、深く考えたことは無かったな。

「…そうだな。私の妹の事を案じてくれる、良き友、だろうか？」

「そう言ってくれざると、嬉しいですよ…。しばらく、避けられていたような気がして、寂しかったのですよ…？」

…確かに、初めて一緒に寝た際に、言葉にしたくないほど色々されてしまって、トラウマになったからな…。

「いやまあ、私達も忙しくて…申し訳ないとは思っていたのだが。」
「…二人みたいな、妹が欲しかったなあ…。」

「ふふっ、では私達だけの時ならば、メアリーの妹になってやろうか？」

私が、誰かの妹か。

今まで、アレクシアの姉として胸を張って生きてきたが、アレクシアの気持ちを体験できるかもしれない。

「… いいのですか？」

「まさか、あのターニャ・フォン・デグレチャフが、とても言いたそうだな？嫌なら、この話は無かったことに…。」

そう言いかけたところで、メアリーに抱きしめられる。

… 私はよくアレクシアを抱きしめているが、成程。抱きしめられるのも、悪くはない。

「… メアリー、お姉ちゃん？」

「… ターニャちゃん!!」

冗談めかして言ってみたが、喜んでもらったようだ。

… 非常に恥ずかしいが。

「… だめだ、恥ずかしすぎる。妹と思ってもらってもいいが…二度とお姉ちゃんなどとは呼ばない！」

「ええ、可愛かったのになあ…。アレクシアちゃんなら、呼んでくれるかな？」

44 作戦会議

「… おはおうございます、アレクシア・フォン・デグレチャフです。ええと… メアリーの両脇に、ターニヤと私が居たはずなのですが、メアリーが一番端で、ターニヤと私をまとめて抱きしめています。苦しくはないですし、もう冬になりますがお互いの体温で温かいです。」

「ん… おはよう、アレクシア。よく、眠れたか？」

「はい、ターニヤ。」

「ん… おはよう、二人とも。」

「おはようございます、メアリー。とてもよく眠れました。」

やはり、メアリーには安眠効果があるようです。

先日までの疲れが嘘のように、すっきりとした気分です。

「さて… 今日仕事だ、さっさと支度するぞ。」

「… はーい。」

連合王国攻略作戦まで、まだ時間はありますが、そろそろ作戦の細かい部分を詰めましょうか。

「さて、アレクシア、ルーデル大尉、メアリー少尉。今回の作戦は、私達が作戦の中核となるだろう。」

「まずは、敵艦隊の撃滅ですが… これは、参謀本部直々に編成される飛行部隊によって成されるかと。我々は、まずは敵艦隊撃滅作戦の補助要員、遊撃要員として動くべきかと。」

本軍はあくまでも参謀本部直轄の飛行隊。

彼らの取り逃がした艦船、対空砲などを少しでも無力化することを私達が担うことになりそうです。

… バトル・オブ・ブリテンのような、大規模な航空戦になるでしょうね。

「敵も馬鹿ではないはずですが、我々の航空機のこととも知っています。ですから、今までの敵とは違い、常に警戒しておいてください。」

「了解だ、『白百合』殿。」

「私も了解ですっ！」

とりあえずの危険は、対空砲でしょう。次に、敵戦闘機ですかね。

戦闘機においては、帝国が何歩か先を進んでいるはずですが、油断は禁物ですね。

「次に、艦隊撃滅作戦終了後、だ。本軍がどう動くかは、私達に合わせしてくれるそう。故に、私は連合王国首都、その周辺への進軍を考えている。」

航続距離的には、ギリギリかもしれないですが。

「もちろん、燃料などがもつかどうかは、ルーデル大尉とメアリー少尉、本軍の一番機に確認をする予定だ。」

「敵国空襲で、敵がどう出てくるかは未知数です。おそらく迎撃に敵戦闘機が上がってくるでしょうが… 何千機いるかもわかりませんね。」

「何千、でありますか… 我々に、勝ち目はあるのでしょうか？」

「ありますよ、最初に敵航空基地を爆撃します。これで、飛べる機体を少しでも減らしましょう。これは、魔導大隊も同様に行いますが、魔導師の迎撃も予想されますので、あまり期待はしないでくださいね。」

おそらく、行って作戦成功、までは容易いと思います。

問題は、帰りですね。

「問題は、弾薬などをほとんど消費した後の帰りだ。こちらから奇襲するので、包囲されているも同然の状況で帰宅せねばならん。敵航空機は爆撃によって破壊されるだろうから、そこまで脅威ではないだろうが、魔導師はな…。」

「…では、私達第43戦術戦闘飛行隊のパイロットが、魔導師として飛び出すのはどうでしょうか。」

メアリーの案は、有効だとは思いますが、敵にこちらの新鋭戦闘機を鹵獲される危険性が孕む上に、飛び出した瞬間のパイロットは無防備です。

「それは、有効だと思います…ですが、飛び出した瞬間のパイロットは、無防備ですから、危険です。」

「メアリー少尉の案は留意しておこう。いざとなれば、私が出よう。」

「ルーデル大尉…お気持ちはありがたいですが…。危険すぎます、それは最終案としましょう。」

「…了解。」

…メアリーのことです、私達が危険になると思えば、飛び出してしまうでしょうね…。

メアリーが飛び出せば、ルーデル大尉も…。

そうならないように、しなければなりませんね。

「…さて、こんなものか。帰りの問題については、参謀本部直属の飛行隊がどれ程の練度で、どれだけ早く艦隊を沈められるか…だな。」

「そうですね、早く沈めることができれば、帰りに戦闘になっても、多少は余裕があります。」

— — — side 連合王国
???? 魔導中佐

「中佐殿！」

「何だ、騒々しい。」

人が、面倒な書類を片付けている途中だというのに…。

「帝国の秘密通信を傍受、解析したところ… およそ一週間後に、帝国軍は連合王国に対し奇襲作戦を行うと!!」

「何だ?!… それは、上へは報告したのか?」

「もちろんであります!!」

「もしも、それが本当ならば非常にマズい…。」

南方で戦っていた共和国の友軍に混じっていた連合王国の義勇兵によれば…。

奴らは、協商連合国で見せた新型の爆撃機、戦闘機のみならず、それ以上の性能を誇る航空機を使用していたとのこと…。

あんなものに、認めたくはないが我々の航空機では敵わないだろう…。

ならば、対空砲をハリネズミの如く首都周辺に張り巡らすしかないだろう…。

だが。

「もし、それが本当ならば大変なことだ。だが… イルドアの件の際、帝国にしてやられた。あの時も、帝国の通信を傍受し、情報を得た。そして帝国は、あたかも本当に不可侵を結ぶのかと思わせる動きを見せた。」

そして、帝国にはもう戦う力が無いものと、騙されてしまった。

結果、イルドア王国は敗北。しかし、帝国がどこで学んできたのか、巧みな外交でイルドア王国を味方に付けた。共和国もだ。

「… 今回も、通信を傍受し、情報を得た。そして、おそらくもうすぐ、帝国に潜り込んでいる我々のネズミからも同じ情報が来るのだろう…。」 帝国の、真の狙いは何だ?」

帝国は、自分達の暗号通信がバレていることを知っているのだろうか。

そうでなければ、イルドアの時の説明がつかない。

ならば、今回も同様に、騙そうとしているのではないか?

「… 非常事態だ。奇襲作戦は帝国の嘘だろうが、一週間後に間違いない、何かが…。」

―――― side アレクシア・フォン・デグレチャフ
これから夕食、なのですが……。

「はあ……。」

「どうした、何か悩みでもあるのか？ 私になら、話せるだろう？」

「……ターニャ。その……最近、美味しいものを食べていないと思
いまして……。」

戦場続きで、美味しくない固いパン、古くなったじゃがいも、味の
しない干し肉……。

今は帝都ですから、多少はマシとはいえ、たまには美味しいものを
食べたいです。

「…… 確かに。参謀本部の食堂は…… うん……。」

「それで、なんです。ヴィーシャ、メアリー、クリスタと私達で、た
まには食事でもしませんか？」

「採用だ。最近の私達の食事は、お世辞にも美味しいものとは言えな
い。男共は多少マズい飯でも大丈夫だろうが、私達は女性だ、そうい
うわけにもいかな！」

すぐくうきうきしていますね…… 可愛いですが、ターニャ。

「では、早速誘ってみましょうか。今の時間なら、まだ夕食の前のはず
です。」

「…… (何を食べようかな、友好国になったイルドアのピッツアも
いいな……。)」

…… 私は今、猛烈にターニャを食べたいです……。

「ヴィーシャ、これから、私達と食事でもどうですか？」

「はい、ぜひ！ あ、では、メアリーさんとクリスタさんも誘ってきます

ね！」

「……流石はセレブリヤコーフ中尉、仕事が早いな……。」

こういう時でも、癖が抜けないのですね……。

「……ふふ、私は女性らしくなどしたくはないと思っていたが……案外、悪くないな。」

「そうだったのですか、ターニヤ。せっかく、可愛いのですから、可愛い服を着ましようよ。」

「いや、それは大丈夫だ。それに、お前も私と同じくせに、可愛らしい服を持っていないじゃないか。」

「私がいいのです！ターニヤが可愛くなるべきなのです……！」

「いいや、アレクシアの方が可愛いだろう！お前が可愛くなるべきだ！」

「あの……。」

……。今、言っていた内容を思い出すと……恥ずかしいですね。

「あ、ああ。来たか、では、行こうか！」

「そ、そうですね！行きましよう！」

45 動き出す歯車

こんばんは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導中佐であります。

・・・と、堅苦しい挨拶をしましたが、別に戦場ではありませんよ。ええと、今は戦闘団の女性メンバーで夕食にきています。

ここのところ、作戦続きで美味しいものを食べていかなかったので・・・食べたくなっちゃいました。

「ヴィーシャ、どこかおすすめるのお店はありますか？」

「はい、ええと、この道をまっすぐ行けば見えてきますよ。イルドア料理のお店なのですが、ピッツアはもちろん、柔らかいチーズを使った料理が絶品ですよ！」

柔らかいチーズ・・・とても楽しみです。

イルドア料理、ですか・・・ならば、パスタもあるのでしよう。

「いやー、二人とプライベートで会うなんて、初めてだなあ。」

「・・・そういえば、アレクシアちゃん、ターニャちゃんと食事なんて初めてです。」

「そういえば、そうだな。私達はいつも、食堂で済ませるか、アレクシアが作ってくれるからな・・・。」

「はい、私が時々、ターニャのために料理をしています。」

そんなに上手くできませんが、ターニャがお世辞にも「美味しい」と言ってくれるのが嬉しくて嬉しくて。

「ここですか・・・なかなか、良い雰囲気のお店ですね。」

「そうだな、さて入ろうか・・・っと。」

軍服を着た男性が一人、こちらをじっと見ていますね。

ええと、あれは・・・。

「「レルゲン大佐殿！」」

「おや・・・『白銀』に『白百合』、戦闘団の皆さんも。奇遇だな。」

… 何やら私達を見る顔が、苦虫を噛み潰したような…。

帝国の今後を、憂いていらつしやるのでしょうか。

「ああ、大佐殿。こちらは、参謀本部直属戦闘団、魔導大隊副官のセレブリャコーフ中尉だ。そつちが、戦闘団戦術戦闘飛行隊副官の、メアリー少尉。そして、飛行隊付きの整備士、クリスタだ。」

… さらつと噛まずに紹介できるターニヤ、凄いですね…。

「成程。私は、参謀本部所属のエーリツヒ・フォン・レルゲンだ。階級は大佐を拝命している。宜しく。」

… レルゲン大佐殿のフルネーム、初めて聞きました…。

「よろしく願います。… 大佐殿も、御一緒にどうですか?」

「ああ、すまない。君達が入ってくる前に、食べ終わってしまった。また誘ってくれ、アレクシア中佐。」

レルゲン大佐殿はそう言うとお勘定を置き、店を出て行きました。いつもそっけなくて、つれない大佐殿ですが、彼は有能で優しい人です。

実は、私達の作戦遂行の裏で、走り回って準備してくれているのはレルゲン大佐殿なのです。

「… いつもつれないな。まあいい、セレブリャコーフ中尉。おすすめはどれだ?」

「ええと… 私のおすすめは、パスタですね。とっても柔らかいチーズと、クリームソースの絡み合ったパスタは、とっても美味しいですよー!」

「では、私はそれにしよう。あとは…。」

「私は、イルドア名物のピッツアを食べてみましょうか。ターニヤ、半分あげるの、パスタを少し分けてください。」

そんなにたくさんは食べられませんから、ターニヤと半分ずつ分ければ…。

「うーん、どれも美味しそうで悩んじゃうなあ。」

「そうですね…。どれにしましょうか…。」

「ゼートウーア、連合王国への奇襲作戦、成功すると思うか？」

…と、私と同期のルーデルドルフが聞いてくるが。

私とて、まさかこんなにも早くレガドニア協商連合国、フワンソワ共和国、イルドア王国と決着が着くとは予想外だった。

まったく、『双翼』には驚かされる。

「…さてな。私とて、予想外の連続だ。あの双子…帝国の希望に、任せるしかあるまい。」

彼女達には、連合王国への攻撃の最前線、最先鋒を命令してある。

おそらく、彼女達ならば難なく切り抜け、想像以上の戦果を帝国への手土産に戻ってくるだろう。

「つくづく思うが… あんな、年端もいかない少女達が、我が帝国の希望だとは…。嫌な世界になったものよ。」

「…そうだな。だが、彼女達程の才能と、実力を持った将校など他に
おるまい…。彼女達に頼りきりなのかな…。」

戦争さえ無ければ、本来ならば彼女達はそろそろ、ドレスや花などを嗜む可愛い盛りだろうに。

… 全く想像はできないが。

参謀本部と同等か、それ以上の作戦を考え出す頭脳。

見積もった戦果以上の結果を持ち帰る実力。

想定外の事態に対し、即座に対応する適応力。

どれを取っても、戦場で役立つ水準。

一介の司令官では彼女達を扱うのは無理だろう。

故に、彼女達にはある程度の独断専行権を与えてある。

「…ルーデルドルフ、我々が編成した例の飛行機部隊はどうだ？」

「ああ、練度は問題ない。新型にも、この短期間で慣れてきたようだ、

なかなかの精鋭達だ。」

「成程、『双翼』の部隊についていけるかどうか不安だが… 残りの時間も訓練に費やしてくれ。作戦決行日の前日だけは、休日にしてやれ。」

せめて、彼女達の足手まといにはならない程度にしなければ。

— — — side 連合王国 とある中佐

帝国が動き始めるといいう情報を得たのはいいが、何をしてくるのか
がまるで分からない。

「中佐殿!! 帝国に潜り込んでいる我々のスパイから連絡が来ました
!!」

「それは本当か!!」

帝国が、我が国に奇襲するという情報を得てから数日、ようやく何を
しようとしているのかが分かるのか？

もしくは、イルドア同様にこちらを騙す材料でも見つけたのか。

「…… 帝国最新鋭の航空機による大編隊の編成… 機体の詳細に
ついては帝国最高レベルの機密のため、情報は得られず… 訓練につ
いても秘匿されている… か。成程な。」

どうやら、後者のようだな。

もちろん帝国とて、演技でやっているだけでは無いだろうが。

おそらく、この編成中の大編隊は連邦戦を見越して、だろうか？

連邦は我々にとつても気に入らない存在だが、奴らを打倒すること
は困難なこともまた事実。

連邦と帝国が争い、両者ともに貧弱になってくれればいいのだが。

「…… 『ラインの悪魔』についての情報は得られず… 帝国周辺諸

国が帝国への義勇兵派兵を検討…？…そういうことか！」

おそらく帝国は、我々へ奇襲するという脅し文句で警戒させ、時間を稼ぎその間に航空機の大編隊の編成、義勇兵によって対連邦戦へ備えているのだろう！

ならば、奴らが我々に攻撃してくることはないだろう。

「では、我々は連邦へ視察に行こうか。おそらく、共に帝国と戦うことになるだろうからな、遠征軍を出すことにもなるだろう。」

帝国が我々を攻撃してくる可能性は低い。ならば、激戦になるであろう連邦に我々も援助するために、視察し必要な援助を見極めておくことが重要だろう。

「…よし、この書類を参謀へ届けておいてくれ。私と私の部隊は連邦へ視察に行つてこよう。」

「はっ!!了解であります!!」

彼に手渡したのは、今考えていた予想をメモした紙だ。

参謀共ならば、この程度のメモでも何が言いたいかわかるだろう。

しかし、帝国はいつの間、このような外交戦術を身に着けたのだろうか？

それだけが唯一、不安要素かもしれないな。

4 6 連合王国攻略作戦 1

「戦闘団諸君、傾聴せよ！」

こんには、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導中佐であります。

本日は、連合王国攻略作戦決行の日であります。

「さて、諸君。本日我々は、これまでの戦争の黒幕であろう憎き連合王国を攻略する作戦を決行する。だが、諸君も知つての通り奴らは海を隔てた向こうでふんぞり返っている。」

「ですから、地上部隊の皆様には申し訳ないですが……先鋒は、魔導大隊と飛行部隊のみで行います。ですが安心してください、作戦成功の暁には地上部隊の皆さんも連合王国本土へ上陸し、暴れることができますから。」

今回の作戦は、まず敵海軍主力を迅速に、可能な限り撃滅します。

あらかた敵艦を沈めたところで、敵首都へ強襲、敵の生産能力を叩き潰します。

この際、敵からの大規模な対空迎撃が行われるでしょう。

「諸君、今回の作戦は、今までは帝国と陸続きだったが……海を隔てた、完全な敵地だ。墜ちれば、助からないものと思え。」

「了解ッ!!」

では、作戦を開始しましょうか。

「CPへ、こちらサラマンダー02。参謀本部直轄飛行部隊と合流、これより、アルビオン連合王国攻略作戦を開始する。オーバー」

「こちらCP。作戦開始を確認、武運を祈る。オーバー」

……私達魔導師は、連合王国沿岸までは輸送機で行きます。

流石に、ずっと飛び続けて行くのは消耗が激しすぎますからね……。敵海軍艦隊が、視認できました。

……動いていないようですね。

あれでは、飛行部隊の格好的のです。

「さて、魔導大隊諸君。私達と空を飛べて、嬉しいだろう？ 出撃ッ!!」

「『最高に嬉しいです!! 了解しましたッ!!』」

……皆さん、ターニヤの奴隷のように……。

「サラマンダーへ、こちらは参謀本部直轄飛行部隊、コールサインはイーグルだ。」

「こちらサラマンダー01、イーグル飛行隊、ようこそ戦場へ。各機、敵艦を撃滅せよ。対空砲などについては、各自の判断に任せる。オーバー」

「イーグル01了解。オーバー」

イーグル、ですか。良いネーミングですね。

爆撃開始から、30分程経ったでしょうか。

もつと時間が掛かると思っていましたか…… 概ね終わってしまいました。

理由は、敵艦が動いておらず、ずっと港で停泊していたようです……。

そういえば、この世界の艦船は釜炊き…… だったような？

駆逐艦くらいならばまだしも、戦艦級、巡洋艦級は早い段階から準備しないと動き出すまでに間に合いません。

イルドアの一件があり、またもわざと情報を漏洩させましたが、成功のようですね。

「……なあ、アレクシア。まさかこんなにも早く終わってしまうとは……。」

「はい、私も予想外です。早くても1時間くらいとっていましたが……。」

「まあいい。さっさと敵首都を落とし、帰るとしようか。」

「はい、隊長殿♪」

— — — side 連合王国 参謀

何なのだ帝国は！

イルドアの時のように、嘘を通信で流し我々に傍受させたのではないのか！

なぜ、本当に奇襲してくるのだ！

…… こちらの損害は、ドードーバード海峡周辺に待機していた艦艇の殆どが轟沈。

かなりの数が対帝国のために集まっていたこともあり、海軍は壊滅状態。

これでは、帝国軍の上陸を阻止できないだろう……。

さらに、こちらの沿岸付近の飛行場は壊滅、航空機もほぼ全てが撃ち落とされている。

魔導師は半分程がやられたものの、どうにか生き残り首都を防衛してはいるが……。

「敵がここまで来るのも、時間の問題だ……。」

とにかく、集められるだけの魔導師、航空機、対空砲などをかき集め、配備しているが……。

帝国の、最新鋭戦闘機、『ラインの悪魔』の大隊に、果たして勝利できるのか？

…… 南方大陸で、単純な戦力差が何十倍もある共和国軍を、打倒してみせた悪魔だぞ？

奴らの電撃的かつ有効な攻撃は、敵ながら褒めるしかない。

…… 我々は、帝国を侮っていたのかもしれない。

かつての帝国ならば、ここまで迅速に対応し、各戦争を終結させるなど出来なかつただろう。

いや、我々でさえも、不可能だろう。

しかし帝国は、見事な手腕でそれを成して見せた。

一体どこで、そのような先進的な外交術を学んだのか……。

「で、伝令!! 帝国軍先鋒と思しき、魔導師大隊規模、並びに戦闘機……中隊規模を確認致しましたッ!!」

「何だ?!? 先程、沿岸部が壊滅したとの報告を受けたばかりだが……ッ!?!」

いくらなんでも、早すぎる!

「ええい、来てしまったのなら仕方あるまい! 首都、首都周辺に存在する国防軍全てに、迎撃するよう伝えろッ!!」

「了解しました!!」

———— side アレクシア・フォン・デグレチャフ

沿岸の掃除をイーグル隊に任せ、終了次第こちらへ来る手筈に。

想定よりも、かなり早い進軍ですが、こちらの損耗は殆どありません。

……せいぜい、イーグル隊所属の何機かが、敵の対空砲火を少し受けたくらいです。

「さて…… 連合王国首都、だな。一応、避難勧告…… 降伏勧告すべきか?」

「そうですね、連合王国市民もいるようですし……。ああ、市民を盾にされても困りますし、『誤射』の可能性も伝えておくべきでは?」

「…… そうだな、敵の対空砲などを狙い撃ちしたら、『偶然にも』近くにいた市民が吹き飛びかねん。そんなことで私達が悪人にされて

は……冤罪もいいところだ。」

……今回は砲兵もいませんし、市街戦などしませんが一応、ですね。では今回は私が……

できるだけ、冷たい声で。

「んんっ！『あー、こちらは帝国軍だ。諸君らご自慢の海軍は海の藻屑となり果てた。これより我々は此処……諸君の首都を攻撃する。投降し、何もせずに明け渡すと言うのなら、焼かずに済ませよう……10分後、攻撃を開始する。賢い選択を期待している。』」

……ターニヤを意識してみましたか……どうでしょうか。

「よくやった、アレクシア……（まさかここまで、感情を感じさせない声を出せるとは……）」

「はい、ありがとうございます。ターニヤ……帰ったら、その……」

「ああ、分かっている。沢山甘えていいから……今は、その話は。」

「……了解であります。」

油断して、共和国の時のようにやられてはいけません。

10分の猶予を与えましたが……敵が攻撃してきた場合、即刻反撃せねばなりませんから。

とりあえず、魔導大隊の第2中隊に首都の監視、敵の対空砲などの有無を確認させています。

攻撃されたら、ただちに報告、戦闘団本体と合流を目指しつつ、戦闘。

フロントム隊が威嚇するように、首都上空を高射砲でもない限り当たらない高度を巡回飛行しているのが良いですね。

帝国では、新型航空機の開発などに伴って、対空武器の見直しが行われ、75mm、88mmなどの高射砲が配備されています。

連合王国も、我々の航空機の情報を少なからず掴んでいるはずで、高射砲があってもおかしくありませんが。

「サラマンダー戦闘団へ、こちらイーグル01。沿岸に帝国軍陸軍、海軍が到着。また、増援の飛行部隊も到着。彼らに沿岸を任せ、そちらへ向かう。」

「こちらサラマンダー02、了解。あと数分で攻撃を開始します、間に

合わなくてもいいですがなるべく急いでください。オーバー」

「イーグル隊了解。オーバー」

… 敵の回答を待っていると、どうやらもう、帝国の援軍が到着したようですね。

こんなにも早く来るなんて、私達が戦闘開始した頃には既に向かっていますでしたね、絶対に…。

「ターニヤ、良い意味での想定外ですね。」

「はあ、まったく。参謀本部には足を向けて寝れんな。」

47 連合王国攻略作戦 2

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導中佐であります。

連合王国首都にて、降伏勧告を行い、10分の猶予を与えました。そろそろ、10分経つので返答があるかと思いますが……。

「アレクシア、10分経ったが、まだ何も返答が無いな。こちらの準備はできている、もう一度聞いてみてくれ。」

「了解です。『あーあー、こちらは帝国軍だ。そろそろ約束の10分だが……返答が無いということは、この都市を燃やしてもよいと捉えるがよろしいか？即座に返答が無ければ、攻撃を開始する。』」

さて……どう出るでしょうか。

「ターニヤ、戦争を吹っかけてきたのは連合王国ですし……もう燃やしてしまつてよいのでは？」

「そうだな……優しく勧告も行い、10分も猶予をやった。もう十分だろう。ファントム隊、イーグル隊へ通達、爆撃を開始せよ。」

「了解でありますッ!!」

直後、四方八方から轟音がこだまする。

盛大な花火です。

「フェアリー01より、サラマンダー01へ！北東より多数の魔導反応！並びに多数の機影を確認！」

ヴァイス大尉が見つけたのでしょうか、お手柄ですが……。

「こちらサラマンダー01、我々もこちらへ向かう！どの程度の規模か確認できるか!?!」

「敵魔導師……一個師団規模でありますッ!!」

「一個師団だ?!?ならば、交戦しつつ、後退せよ！」

「フェアリー01了解ッ！」

想定外、までは想定内ですが……。

まさか、一個師団規模の魔導師とは。

「サラマンダー02より、ファントム隊へ！敵魔導師、及び敵航空機が北東よりこちらへ向かっています！迎撃を！」

「ファントム01了解！ファントム隊各機、墮ちるなよ！」
急いで私達も援護へ向かいますが…。
第203魔導大隊の皆さん…どうか、どうか無事で。

「っ、なんとか、間に合いましたか…。ですが、これは。」

ともかく、建物の影に隠れてはいますが…。
どうにか、誰も死なせる前に間に合いましたが。

中隊長1人、隊員の半数が何かしらの怪我をしています。

これでは、これ以上の継戦は危険でしょう…。

「…私が、時間を稼ぐ。貴様ら第203航空魔導大隊は、安全と思われるドードーバード港へ後退せよ。」

「…了解であります。中佐殿、武運を。」

そう言つて、魔導反応を抑え、彼らは撤退していきました。

おそらく、バレないような程度距離をとつて、一気に脱出する
のでしょうか。

敵の損耗は…流石は、古参の帝国魔導大隊、一個師団相手に、敵
も3個中隊ほどは損耗している…ようですね。

本来ならば、1個大隊に1個師団でぶつかられたら、ひとたまりも
ありません。

ですが、練度、質の差でどうにか上回ったのでしょうか…。

「…アレクシア、お前も後退しろ。」

「…嫌です。私は、ターニヤを見殺しになんてできません…。北方
で、知っているでしょう?」

私が、ターニヤを見捨てる?!

そんなことが、できるわけがありません。

「そうだったな。ここが私達の死に場所になるかもしれないが……ついてきてくれるか？」

「はい、ターニャ。」

「……思えば、お前には苦勞させてばかりだな。不甲斐ない姉で、すまない……。」

……と、ターニャに優しく抱きしめられ、キスをされます……。

「……。続きは、生きて帰ってからしましょう。状況は……酷いものですが。」

「サラマンダー01、02へ！生きてるか!? こちらはフロントム01！応答願う！」

「こちらサラマンダー01だ、どうした！」

ルーデル大尉から、鬼氣迫った声。

「敵航空部隊を壊滅に成功！及び、敵魔導師も何人が撃ち落とすことに成功！なれど、弾薬、燃料ともにこれ以上はもたない！イーグル隊も同様の模様！」

「フロントム01へ、イーグル隊と共にドードーバード港へ下がり、補給せよ。私達のこととは大丈夫だ。」

「ダメですッ！私は認めません!!」

……ああ、こうなったメアリーは誰の説得も聞きませんね……。

アンソン殿の気持ち、少し分かります。

「フロントム02！気持ちはありがたいが……貴官まで死なせるわけにはいかない。」

「……ターニャちゃんッ！アレクシアちゃんも！二人とも、私の大切な『家族』ですッ！失う訳にはいきません!!」

「ターニャ……ああなつたメアリーは、もう止められないです……。」

「はあ、世話の焼ける……。」

なんででしょうか、絶望的状况だというのに……つと、敵に私達の居場所がバレたようですね。

まあ……これだけ通信で騒いでいれば……ばれますかね。

それにしても、メアリーの、『家族』ですか。

私には、ターニャだけが唯一の家族ですが……メアリーの家族とい

うのもの、なかなかどうして、嬉しいですね。

「…仕方ない、ファントム隊へ、隊長、副官以外はドードーバード港へ後退せよ。隊長、副官は…機体を破棄せよ。自爆用の爆弾はあるだろう？敵魔導師群へ突っ込ませ、爆破せよ。」

…一応、クラスター爆弾の応用で、もし敵に機体を奪われた場合に備え、自爆機能を取り付けられています。

これは、他国よりも圧倒的に進んだ技術を奪われたくない、と参謀本部が決定しました。

「了解！」

という通信と殆ど同時に、私達のいる場所のほぼ真上で爆音。

確かに囲まれていましたが…真上で爆破するとは。

「アレクシア、馬鹿が二人真上で自爆したな。ここは危険だ…。」

「そうですね…隣の建物に行きましょうか…。」

ともかく、港へ後退した皆が、援軍を呼んでくれるのを期待して、耐えましょうか…。

— — — side 連合王国 とある中佐

まさか、帝国が本当に奇襲作戦を決行するとは…。

こちらの海軍は損害甚大、首都周辺も爆撃され復興にはしばらくかかるだろう…。

だが、不幸中の幸いか、何度も我々を苦しめてきた、あの『ラインの悪魔』を包囲することに成功。

あとは殲り殺すだけだ…と思っていた矢先、突如帝国の戦闘機が特攻してきたではないか。

いくら帝国の機密だらけの最新鋭戦闘機といえど、この数の魔導師に特攻など無謀すぎる…。

「ッ!?何だとッ!!」

… 直後、轟音と共に友軍魔導師が何人か血まみれになり落ちてゆく…。

自爆したのだ。

何が？帝国の戦闘機が。

「チッ… そこまでして、『ラインの悪魔』を取り戻すつもりか!？」

自らの命を使ってまで、帝国にとって重要なのか、『悪魔』は。

「ですが、中佐殿。思えば、ダキア、レガドニア、フランソワ、イルドア… そのすべてが、悪魔によって征服されているように思えますが…。」

確かに、ダキアは後にスパイが確認したところ、帝国魔導師の大隊規模が首都へ現れ、ふざけた勧告をした後、兵器工廠を爆破。

レガドニア、フランソワ、イルドアは帝国に対し、今や友好的であるため、確認させるのは控えたが…。

観戦武官としてライン戦線に居た者からは、これまでの常識を覆す帝国の作戦のみならず、これを遂行するに至ったのは『悪魔』だ、と言っていたようだ。

… つまり、『ラインの悪魔』こそが、今の帝国を形作る要なのか？

「… かなりの損害を出したが… これは、好機だ。『ラインの悪魔』を仕留めさえすれば、帝国に勝てるやもしれん…。」

大袈裟かもしれないが、今までの恨みもある。ここで潰しておくべきだ。

「ッ、中佐殿！もう一機、戦闘機が突っ込んで来ますッ!!」

「チッ！ふざけやがって…！」

自爆されても、ある程度解析できると思ったが… 改めて見ると、とてもできそうにないくらい粉微塵だ。

どこまで、用意周到なのだ。

「… 自分達の誇る技術を、他国へ渡すまいとする帝国の姿勢… 今までの帝国とは全く違う。どうなっているのだ…。」

ともかく、今は悪魔共を追い詰めているのだ、ここで潰すことを考えよう…。

48 戦闘の果てに

「二人ともっ!!... 無事で、無事でよかったっ!!」

「... 馬鹿が、大人しく後退していればよいものを...」

「あはは... 命令違反、ですよメアリー。ですが、来て下さりありがとうございます。うございませす。それに... 今は無事ですが、これからどうなるか...」

「あ... 中佐殿、申し上げにくいのですが...」

ルーデル大尉が、何か言いたげです。

表情から察するに、あまり良くない報せでしょうね。

「なんだ、大尉。言ってみろ。」

「... 中佐殿も気づかれていますかと思いましたが... 四方八方を囲まれています。故に、簡素な術式どころか、通信でさえ居場所を特定される恐れが...」

それについては、先程身をもって体験しましたね。

「そうだな... 我らの援軍が来てくれるだろうが、このまま耐えきれるとは思えん。攻勢に... 出るしかあるまい。」

... ターニヤは言葉を濁しましたが... 要するに、誰かが囷となり、敵を引き付け、残った3人で敵の背後を突く...。

言葉で言うには簡単ですが、その難易度はこれまでで最も難しいです。

「... では、ターニヤ。私が、囷に。」

私ならば、ターニヤとほぼ同等の戦闘をこなすことが可能なはずで

す。

瞬間的な判断力は、ターニヤのほうが優れています...。

「ダメだ。この作戦が現状最も打破しうる可能性が高いものだが... 同時に、失敗のリスクが大きすぎる。この場にいる我々の誰かが欠ければ、打破できたとしても戦闘団の士気は下がるだろう。」

... 冷静に考えてみれば、確かにそうです。

私達、隊長格が一人でも欠けてしまえば...

「では、どうしましょうか...」

「… 私と、アレクシアで囷を務める。一人よりも、二人ならば幾分かマシだろう。大尉と少尉には、援護を頼みたい。」

… リスクはあまり変わらないような気がしますが、一人よりはマシでしょう。

しかし、多少の敵を削ったとはいえ、ざっと4個大隊ほどは残っているでしょうか。

4個大隊を、4人で？

「… ふふ。ターニャ… この絶望的な状況… 私達の初陣を思い出しますね。」

「… そうだな。あの時は、二人で1個大隊だったか？あの時よりは、装備もマシになったとはいえ、厳しいな。」

「そうですね。ですが… あの時、弾着観測用の装備でさえ生き残れたのです。今回も、きつと、生き残れるでしょう。」

思い出せば、酷似する、最悪な状況。

「… ターニャちゃん、アレクシアちゃん。どうか… 絶対に、死なないで。」

「はい、メアリー。約束です。」

さて… いつまでもこうしていられません。

「では、諸君。戦争の時間だ。」

ターニャと私が、同時に飛び出し、牽制ついでに爆裂術式を撃ちまくります。

敵の数は圧倒的。ですが故に、適当に撃つても誰かに当たるのです…。

下手な鉄砲も数撃ちや当たる、とはよく言ったものです。

「Stirb（死ね）！」

爆裂術式に織り交せて、時折貫通術式も放ちます。

貫通術式は致命傷にはなりにくいですが、深手を負わせることが可能です。

ターニヤと私で、螺旋を描くように、お互いを守りながら速度350で敵の周りを高速旋回中。

「…チツ！奴らのようなへたくそでも、弾を適当に撃っていれば当たるかッ…！」

…ターニヤが、怪我をした!?

意識を向けると、腹部に被弾しています…。

防郭である程度軽減したようですが、それでも出血しています…。

「っ、ターニヤ！」

「私のことはいい！目の前の敵に集中しろ！でなければ、この程度では済まないッ!!」

そ、そうです。冷静に、冷静にならなければ…。

弾薬は…かなり余裕があります。艦隊の掃除で、あまり使わなかったことがよかったですでしょう。

「アレクシア、どうにか術式で出血を抑えているが、長く持ちそうになり…。」

…現状、爆裂術式の弾幕によって、1個大隊分くらいの敵は落としましたと思います。

敵も、やられてばかりの馬鹿ではないようで、こちらを攻撃することよりも回避に専念し始め、私達の被弾も減ってきています。

「…ターニヤのことは、私が守りますからっ!!…私が死んでも、ターニヤだけはっ！」

「お前が死んだら…私が生きている意味など無い!!軽々しく、死んでもいいなどと言うなッ!!」

…私にとつてのターニヤは、かけがえのない存在。命を賭してでも、守るべき存在です。

ですが…ターニヤにとつても、同様なのでしょうか。

普段、激昂したりしないターニヤが、本気で怒っています…。

「…ごめんなさい。」

「… 帰ったら、沢山可愛がってやる。私が、アレクシアのことをどう想っているか… 教えてやる。」

… 戦場の真っ只中だというのに、嬉しくて顔が熱いです。

今すぐにも、ターニヤを抱きしめたい衝動に駆られますが… 我慢です。

… 一旦冷静になれたせい、焦りも消え、明瞭な思考が戻ってきます。

「… ターニヤ、敵が私達を包囲してきたということは、奴らの目的は私達を殺すことの筈です。ですから…。」

「…。なぜ、このような簡単な答えに今まで気づかなかったのだ。」

… 上昇すれば、よいのです。

かつて、ライン戦線で共和国の魔導師にやったように。

一気に上昇し、上から消し去ってしまえばよいのです。

「… では行こうか、アレクシア。」

「はい、ターニヤ。どこまでも。」

―――― 連合王国軍 例の中佐

悪魔を包囲し、あとは全員で爆裂術式を撃ち込むだけだったのだが、奴らも状況を打開するために行動を起こしてきた。

二人の悪魔は、互いを守りあうかのように、螺旋を描くようにかなりの速度で飛んでいる。

モタモタしている間に、仲間が減ってゆく。

たった二人で、一個師団を相手に？

ありえん、と叫びたい衝動に駆られるが、現実には起きている…。
ようやく、悪魔の片割れに、傷を負わせることができたと思えば、奴らは上へ、上へと上昇してゆく。

「チツ…どこまで上がるつもりだ。」

現在、高度5000だ。

一般的な魔導師の限界である6000までもうすぐ。

しかし、あの悪魔どもが、それを知らない筈がない。

ならば、何を考えている？

共和国軍が記録として残した、高度12000まで行くつもりなのか？

だがあれは、目撃者ゼロだった筈。そんな信憑性の低い情報など…。

「…敵、高度…8000を突破。どう致しますか、中佐殿…。」

現在、我々の高度は6000。既に飛んでいるだけで辛そうな奴もいる。

だが、悪魔は8000を悠々と突破。追いかけるしかないのか…。

「…仕方がない、我々も8000まで上がるぞ！既にきつい奴はここで待ってる！」

…先ほどの情報、信じがたいとはいえ本当だったら困る、ということでも8000まで上がる訓練は皆施されている。

といっても、演算宝珠が生命維持にかなりのリソースを使用してしまうため、戦闘は非常に困難だ。

「敵…いい、12000…。ま、まだ上がっていきます!!」

「チツ！これ以上は危険だな。」

散開、と言おうとした途端に、悪魔共の方向から強烈な魔導エネルギーの反応だ?!?

「わ、我々の真上より、強大な魔導反応!!測定…計測不能!!」
「ただちに散開！散開せよツ!!」

…そう叫ぶと同時に、意識が遠のいていくのを感じた。

…ああ、奴らは悪魔などというチンケな可愛らしいものではない。

『死神』だ。

… こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフであります。連合王国攻略作戦は成功、ターニヤと私はその戦功から、帝国最高位勲章の一つ、『黄金柏葉付騎士鉄十字章』を戴きました。

… 嬉しいですが、ターニヤが負傷してしまったため複雑な気分です。

現在は、帝都に帰還し、ターニヤは一週間の絶対安静です。

私がつきつきりでずつと看病できるからいいもの…。

「ターニヤ、痛みはどうですか？」

「ああ、お前の顔を見ていれば平気だ。」

「… 茶化さないでください、本気で心配しているのです！」

「悪い悪い… あの時は何も痛みは無かったが… こうして安全なところで冷静になってみると、じくじくと痛むな。」

腹部を撃たれたターニヤですが、奇跡的に内臓をほとんど傷つけることなく貫通していたため、治りも早い、らしいです。

大事にならなくて、本当に良かったです…。

「… アレクシア、生きていたからこそ良かったが… あの時の事、まだ許していないからな。」

「… はい。ごめんなさい。」

「私は… お前の事を、大切な妹だと思っているが、それだけじゃない… お前のことを、私の半身のように感じている。生涯の伴侶、とは違うだろうが…。」

「は、伴侶だなんて… た、ターニヤは私を嫁にでもするつもりなのですかっ!？」

「… 成程、考えたことも無かったが… 確かに、アレクシアの作る料理は美味しいし、家事もある程度出来る。お前を、嫁に貰うのか…。(悪くないな…。)」

… 私は、ターニヤに貰われてしまいそうです。

「ど、どうして泣き出すんだ!？」

あれ、私、泣いてなんて…。なぜ、涙が流れるのでしょうか…。

ええと… その、ターニヤの気持ちは、とても嬉しいです。私だって、ターニヤと一生を添い遂げたいと想います。ずっとずっと、幼少の頃から想ってきましたから。

「あはは… 嬉し泣きですよ… ターニヤ、責任を持って、私を貰ってくださいね。」

「… 約束しよう… 同性愛が、許されるのは相当未来だろうが…。」

そうですね、西暦世界だって、同性愛が認められるようになったのはかなり未来ですから。

「… でも、ターニヤの魂は、前世は男、なんでしよう？なら、何も問題は無いと思います！」

「ぐっ… そう言われると、今の私と殆ど同じ姿をしたお前に恋をするのは、ロリコンだとか、ナルシストだとか…。んむっ!!」

そんなことで悩んでいるのですか…。

愛さえあれば、いいのです。誰かが言っていました。

「… ターニヤ、私とキスをして、どう思うのですか？」

私は、自分でしたくせに、心臓が張り裂けそうなくらいドキドキしています…。

「… そりゃあ、嬉しいに決まっているだろう… 欲を言えば、もっとしたくなる…。」

「… では、早くその傷を治してくださいっ！治ってから、私のことを好きにしてくださいすからっ!!」

な、も、もっど…!?

昼間から、面と向かって、1回するだけでこんなにも心拍数が跳ね上がるのに…。

もっど、なんてしたら、死んでしまいます!!

「… まあ、何をするにも今はこの傷を治すしかないがな。治った途端に、また参謀本部にお呼ばれるのだろうか…。」

「… 連合王国は、降伏とまではいきませんが… どうやら、国内世論が揺れているようですよ。首都を爆撃されるといふ失態を、武力で汚名返上するべきという派閥、さっさと降伏して、協商連

合国や共和国のように帝国の恩恵に与るほうが得だという派閥。真つ二つに割れているようです。」

「成程、どちらに転んでも、現連合王国政府は崩壊、帝国にとっては旨しくないな。できれば、さっさと降伏してもらいたいところだが……。」

また、連合王国に吹き込まれ、帝国と戦争に至った周辺諸国は、帝国を中心とした同盟を締結しました。

西暦世界で言えば、EUみたいなものでしょうか。ブリテンだけ除け者になっていますが。

ただ、この同盟をして連邦戦は厳しいでしょうね。

……おそらく、合衆国は利益のために連邦へ色々と支援してくるでしょうし。

「……とりあえず、その話は後にしましょう。今は、ターニヤの身体のほうが大切ですから。」

「……ありがとう、アレクシア。なあ……もう一度だけ……キスを、してくれないか?」

「……はい。」

ターニヤからされることはあっても、私からすることはあまりありません。

ですから……周囲も明るくて、恥ずかしいですが……ターニヤのお願いなのです、断るなどありません。

「……少し、眠くなってきた。寝ようと思うのだが……ここに居ても面白くないだろう。」

「いえ。私にとっては、ターニヤの寝顔を見ることも楽しいですし、一緒に寝ることも楽しいですから。一緒に……居させてください。」

少しでもいいですから、今は、一緒に居たいのです。

ターニヤの暖かさを、感じたいのです……。

「……一緒に、寝てもいいですか?」

「仕方ないな。風邪をひかせるわけにもいかない……ほら、私と一緒に昼寝でもしよう。」

ターニヤは怪我人ですので、なるべく患部を触らないようにしなけ

れば……。

「……ひやつ!? た、ターニヤ、ど、どうして私の身体をまさぐるのですか……。」

「……嫌だったか?」

「い、いえ……嫌ではないですけど……。」

「お前の身体にも傷がないか調べないとな? ほらほら。」

「ひやつ…… あっ…… だ、だめです、傷なんて無いですからあ!」

た、ターニヤの手つきが、なんだかえっちいのです……。

そ、それに…… まだそういうことをする年齢ではないのです!!

「……。」

「だ、黙ってむにむにしないでくださいっ! やめてくださいっ!」

「…… そう口で言っている割に、全然嫌がついていないじゃないか。」

……。

そ、そりやターニヤの傷を触っては……。

「うう、私の負けです……。 ですが…… く、くすぐったいのです、あんまり……。」

「…… しかしな…… この触り心地は……。」

…… と、むにむに、ぺたぺた、と触るのをやめてくれませんか……。

仕方ないのです、今くらいは、ターニヤのお人形さんになりましたよ
うか……。

…… 意識が戻ったのは、もう辺りも薄暗くなってきた頃。

むにむに、ぺたぺたされているうちにだんだんと眠くなってきまして……。

そのまま、寝てしまいました。

ターニヤも、私をむにむにしたまま寝てしまったようで、私の服装が……。

……療養ということで、私服……といっても、寝間着ですが。私服でよかったです。

もしこれが軍服だったら……シワになっていたかもしれない。

「……ん、起きたのか。おはよう、と言うにはもう夜だが……。」

「おはようございます……。」

「……アレクシアは、抱きしめていてとても落ち着く。なるべく、今日みたいに触ったりしないと約束するから、これからも一緒に寝てくれないか？」

「……仕方ないですね。」

絶対、私が寝ている間に触るのでしようが、仕方ありません。

それに、ターニヤに触られるのなら嫌ではありません……。

「……結局、昼食を抜いてしまったな。夕食は少し軽めのものにしようか。」

「そうですね、そんなに沢山食べたい気分でもありませんし。」

今日は、ターニヤの身体に良くて、軽いもの、ですか。そうですね……。

野菜を多めに入れて、シチューにでもしましょうか。

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導中佐であります。

一週間が経ち、完治ではありませんがターニヤが動けるようになりました。

… 治りきる前に、次の戦争とかにならなければよいのですが。

さて、私達は予想通り、参謀本部に呼ばれて、来ています。

「さて、先日の攻略作戦はご苦労だった。」

「誠に有難うございます。」

「で、だ。貴様らの功績を考慮し… 大佐へ昇進だ、喜べ。」

昇進は嬉しいのですが、今まで昇進するたびに部隊の編制やら戦争やらに突っ込まされていた身として、構えてしまいます…。

「… そう身構えなくてもいい、今回は本当に昇進だけだ。」

… 気を使わせてしまいましたか。

「… ありがとうございます、ゼートウアー閣下、ルーデルドルフ閣下。」

「して、昇進の話だけではないのであります。本日はどのような…。」

連合王国については、帝国軍がドードーバード港とその周辺を占領。

敵国首都目前まで戦線を拡大しています。

また、もともとあった敵の航空基地を修理し、使用していますから戦力的には何も問題ありません。

「… 貴様らの言っていた話は、残念なことに殆ど現実となった。であるならば、連邦との開戦も時間の問題だ。」

… 確かに、学生の頃の戦局予想と多少のイレギュラーはあったものの、概ね同じですね。

「現在の、東部軍はどのような？」

「今は、西方で地獄を味わった将校らが、叩き直している。貴官らも

知っているだろうが、東部軍の練度は酷いものでな……。多少は使い物になる程にはなったが……。」

「そういえば、魔導大隊編成の際に彼らの情報を一通り見ましたね。階級、服装だけは御立派でしたが、中身の伴っていない連中でしたね。」

「……できれば、君達二人に奴らを精鋭とまでは言わない、魔導大隊を編成した手腕を奮ってはくれまいか。」

「……これで東部へ行けば、そのまま開戦しそうな気がします……。」

「閣下、教導するのは構いませんが……。やるのならば、徹底的に。でありましょう?。」

「ターニヤがまるで、新しいオモチヤを得た子供……。よりも悪い笑顔をしていますね。」

「……そうだな。ならば……。とりあえずだ、5個歩兵大隊を貴官らに預ける、死傷者が出なければ構わん。」

「はっ、了解であります。必ずや精鋭に仕立ててみせましょう。」

—— | — | — | side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

「やっと、念願の後方勤務！」

「アレクシアも居ることだし、連邦の奴らが宣戦してこなければ最高だ。」

「頼むから、ずっと粛清していてくれ……。」

「ターニヤ、嬉しそうでしたが……。そんなに、教導をしたかったのです?。」

「ま、まあな。しかし歩兵か……。とにかく体力と、屈強な精神力をつけてやらねばならんな。」

「そうですね…魔導大隊編成の試験のように、雪山ピクニックはどうですか？」

成程…あの、西暦世界の精鋭を育てる為の地獄の訓練フルコースでいいだろう。

「そうだな、フルコースでいこう。見事すべての訓練を乗り切った者には…昇進を上に進言してやろうか。」

「それは…良案ですね。大抵の兵士ならば、喉から手が出る程欲しいでしょう。」

死の危険もあまり無く、昇進できるなど嬉しいだろう？

訓練中に死にたくなる、死んだ方がマシだとは思うかもしれないが。

「では、アレクシア、訓練プランを考えておいてくれないか。最初は基礎訓練、など大雑把なもので構わん。」

「はい、了解であります。」

ともあれ、まず最初にやることは、鍛えなおすにしても奴らの現状の能力がどれほど酷いのか、確認作業だな。

さて、アレクシアに訓練のプランを作成してもらっている間に、どれほど無能なのか確かめることにしよう。

先日言われた5個歩兵大隊を、『廃棄予定の宿舎前』に集めたはいいが、どうしたものか…。

「私は諸君の再教導をすることになった、ターニャ・フォン・デグレチャフだ。東部軍は無能の集まりだと記憶しているが…喜べ。そんな無能な諸君を、一端の精鋭に仕立ててやろう。」

現状確認をしたいのだが、どのような手段が有効だろうか？

とりあえず、今日のところは自己紹介程度にしておいて、明日でも本格的に確認すればいいか。

「ああ、再教導といっても何も難しいことではないから安心したまえ。少し、簡単な訓練をしてもらっただけだからな。では、明日から訓練を開始する。」

…… はあ、軍士官学校時代を思い出すな。

私のことをクソガキだとか思っついていそうな顔をしている奴が何人もいた。

まったく、吐き気がする。

いやなに、この年齢でこの見た目だ、仕方ないとは思うが。

それでも、帝国にプロパガンダに度々使われているし、『銀翼突撃章叙勲』『黄金柏葉付騎士鉄十字章叙勲』のニユースもあつたはずだが……。

私を、私とアレクシアのことを知らない？

少々自己愛が過ぎるかもしれないが、それは軍人ならばありえないと思うのだが。

私は数々の戦場で駆け回り、すべからず成功を収めてきた。

アレクシアは有効な作戦を幾度も立案し、失敗しそうな穴を埋めてきた。

戦場では私の方が目立つだろうが、士官学校の教官などは戦略においてアレクシアの名を出さないはずがない。

故に、私達を知らない軍人など、ありえない筈。

「はあ……。」

アレクシアにも訓練場所を伝えてあるが、ともかく宿舎に戻ってきて溜息が漏れる。

「入りますよターニャ。ふう、寒いですね…… どうしたのですか？叩き直す連中に何か問題が？」

…… やはり、私の不機嫌だと分かっってしまうのか……。

妹に気を遣わせるなど…。姉として失格だな。

「… そうだな。軍士官学校の時のように、未だに私を見てナメた顔をするやつがいた。」

「やはりそうでしたか…。私もプランを組み立てた後に、東部軍司令などにどのような状態なのかお話を伺ったのですが…。ひどいものだ。北方や西方が戦争していても、東部は平和。それをいいことに、起床もギリギリ、寝癖はある、服装もシワがついていたりヨレていたり…。」

… 想像よりも、深刻なようだな、これは。

本当に、殺さない程度に扱ってやる必要があるらしい。

「… 明日は、未明に無能共を叩き起こすことから始めようか。ともかく、その話からするに、基礎体力なども低下しているだろう。本訓練の前に、一週間ほど基礎訓練をやるうか…。」

「そうですね。身体も鈍っていることでしょうし…。明日は少しの休憩を挟みつつ、一日中運動させてあげましょうか。」

戦場では一日どころか三日間ぶっ続けで運動みたいなものだ。

それくらい体力も無ければ、弾除けにしかない。

弾除けに使う金も、食わせる飯もない。そんな無駄なことをしている余裕など帝国にはないのだ。

「はあ…。どうせ、キツすぎるだとかなんだとか、文句を垂れるのだからな…。」

「ターニヤ、そうなれば上官反抗になります。」

「それは分かっている。だが…。士官学校の時もそうだったが、面倒なことになりかねん…。」

「… そうですね。できれば、処刑などにならないければいいのですか…。」

身内のゴミ掃除のために銃弾を使うなど、資源の無駄だ。

はあ…。明日のことを考えると、今から頭が痛い。

「… ？なぜ、私を抱きしめているんだ…？」

明日について思案していると、アレクシアに抱きしめられている。

… 暖かな体温。服の上からでも分かる、少しずつ成長してきてい

る胸。私とは異なる、アレクシア独特の良い匂いだ。

かすかな、金木犀のような匂い。とても、心が落ち着く…。

「… ターニヤが言っていたんじゃないですか。私を抱きしめていると、落ち着く、って。今、焦っているような、困っているような表情をしていましたから…。」

… 私を想ってくれる、こんなにも優しい妹を持って、私は幸せ者だな。

その代わりの不幸が、戦災孤児から始まる今までの不幸、最前線へ突撃させられ続けている理由なのかもしれない…。

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフです。

先日、参謀本部より、東部軍の5個歩兵大隊を鍛え治す任務を与えられました。

今日は鍛え治す前に、どの程度の能力なのか、チェックです。

… まあ、東部軍司令のお話から察するに無能の集まりなのでしょうが。

ターニヤに対して嘗めた態度の顔をしていた？

許せませんね、本来なら即処刑にしてやりたいところです。

さて…。

「なんてことをしやがる、このクソガキ共が!!」

… このゴミ共をどうしましょうか…。

ええと、先日の夕飯の際に『未明、4:00より訓練を開始する』と伝えた筈なのですが…。

時間になって起きてきたのは、士官学校時代の私達を知っている人間が隊長を務める各小隊だけ。

… それでも、2個中隊よりも少ない数です。

もしかしたら、起きたものの準備をしているのかも、ということでも5分だけ待つてあげましたが変わらず。

仕方がないので、起こしてあげた、というわけです。

「… 貴様は、上官の命令を聞けないのか？ 時間通りに来ることも無く、起こしてやったというのに謝罪の言葉も無いとは。」

「言葉は分かりますか？ 言う事が聞けないクソガキは貴様では？ 上官への反抗は重罪です、処刑されたいのですか？ お望みならば、今すぐにもミンチにしてあげますよ？」

無能など、生きている価値などありません。

さっさと駆除するに限ります。

「ハッ、お国のプロパガンダの為に仕立て上げられたクソガキが。やれるものなら…。」

目の前で、何やらのたまっていた糞の頭が弾けます。

… ああ、すみません。どうも現実が見えていないようですし、殺してほしいとの言質も頂きましたので、お望み通りにしてあげました。

「ん… 弾がもったいなかったですね。すみません、ターニヤ。」

「いや、よくやってくれた。さて… 他に、死にたい奴はいるか？」

漸く、自分達の置かれている状況に気が付いたのででしょうか。

青い顔をしていますね、もう遅いですが。

「はあ、今回のことは上に報告しておこう… 4:30までに準備し、宿舎前に集合せよ。遅れた者は… 分かるな？」

「了解でありますツ!!」

「… ターニヤ、ゴミをひとつ処分してしまいました… 問題になるでしょうか？」

「いや、大丈夫だ。明らかかな上官反抗、暴言。本来なら裁判、良くて軍からの除名、悪くて最前線の弾除けだ。どうせ奴は死んでいたさ。」

まあそうなのですが、訓練初日から処刑したとあっては、印象が悪くなりかねませんし…。

「さて… 奴らを虐めるとしようか。この辺りは少し行けば丘陵になっっていたな、その頂上まで走らせるとするか。」

さて、再指定した時間になりました。

今度は、全員いるようですね。

「今日は死にたがっていた奴を一人お望み通りにしてやったが、貴様らも死にたくなったら言ってくれたまえ。また、明日から指定の時刻に遅れた者には相応の罰があると思え。」

当然ですよ、ここは軍隊ですから。

規律、命令を守れない者は戦場では必要ありません。

「では、今日の訓練ですが……あの丘の上に何本か木がありますよね、宿舎前からあそこまで走ってください。赤い布を木に巻いてありますので、その木に触ってここまで戻ってくる。これを……そうですね、とりあえず5往復してください?」

丘の上の木まで、だいたい6500フィートですかね。

これを往復させれば、結構な運動になるでしょう。

「ああ、途中で歩くのは構わんが、その分そいつだけ訓練が遅れていくからな。すべての訓練を完遂するまで、今日は貴様らは寝れないと思え。」

時間だけ過ぎるのを待つ、なんてことはさせませんよ。

きちんと全部の訓練を終わらせるまで、睡眠などありません。

「5往復した奴から、私達が次の訓練を指示するまで宿舎前の邪魔にならないところで休憩している。では、訓練を開始せよ。」

ぼちぼちと走り始めましたね。すごく嫌そうな顔をしています。

というか、こんな訓練、新兵教育の訓練に毛が生えた程度です。

全然たいしたことありません……。

「……今日は基礎訓練……ちよつとハードな体育の授業だな。」

「そうですね……これが終わったら腹筋背筋スクワットですかね?」

「そうしようか。まずはどの程度でへばってくるのか知らなければ。

昼までこの4種を繰り返してみよう。」

早く終わらせた人は、休憩できますからね。

遅い人は? 知りません、ノルマをクリアしてから文句を言ってください。

結局、彼らは昼までの訓練で誰も脱落せず、大幅に遅れた者もいませんでした。

正直、事前情報と比較しても予想外です。

「…想像していたよりも、マシだな。」

「ですね、もっと早い段階で音を上げると思っただけですが。」

「これなら、明日からでもアレクシアのプランで訓練を開始してもよさそうだな。今日のところは、午後は休みにしてやろうか。」

「はい、了解しました。… 蛆虫共、喜んでください。午後の訓練はありません、自由に休憩してください。明日からは本格的な訓練を開始します、準備しておくように。」

… 第203航空魔導大隊編成のときと同様に、今回はフロントム隊に手伝ってもらって宿舎を爆破するのですがね。

最も、今の時期は肌寒いとはいえ雪は積もっていませんから、大丈夫でしょう！

— — — side 再訓練歩兵大隊 一般歩兵

日も昇っていない早朝に叩き起こされたと思ったら、起こした本人に文句を言った奴が射殺された。

… 朝っぱらから賑やかだな。まったく。

… しかし、我々の再教導を任せられたという、新聞などでも見たことのある少女二人だが。

平然と人間を撃ち殺し、次に遅れた者も殺してやる、と言わんばかりの気迫だった。

あんなものが、本当に子供なのか？外見で判断してはいけない、と人生で最もそれを理解した。

その後、寒い中朝から片道6500フィート程の坂道を往復させられ。

新兵訓練でもやる、基礎的な体力づくりの訓練をさせられ。

これを昼まで何度も何度もやらされた。

いくら基礎的な訓練とはいえ、ここまで徹底的にやったことはな

かった。

… まあ、今までは適当にやっていたからだ。

あの少女達に逆らえば、本当に殺されてしまう。

なにせ、各地の最前線を飛び続け、スコア2000だったか？それくらいを稼ぐエース魔導師だ。

最初、新聞で見たときは帝国軍のふざけたプロパガンダだとばかり思っていたが…。

俺たちとは違い、本物の戦争を知っているのだろう。

『白銀』ターニャは、言わずもがな各地で困難な状況を塗り替えてきた英雄。

『白百合』アレクシアは、優秀な参謀として数々の作戦を練り上げ、『白銀』と共に実行せしめてきた英雄。

二人に共通して、現場での突然のトラブルにも対応可能ときたもんだ。

… ああ、これらは教官から聞いた話だがな。

真実かどうかは定かではないが、あの気迫を見た今ならば、真実だと言いつつ切れそう。

まだ、12歳くらいの少女だというのに、その表情、風格、雰囲気は歴戦の将校さえも霞む程だ。

そういえば、彼女達に選抜され訓練された部隊があったな。

第203航空魔導大隊、だったか。彼らもまた、このような厳しい訓練をさせられたのだろうか。

しかし彼らは、『双翼』と共に空を駆ける英雄の一員となった。

… ならば、我々も、もしかしたら陸上部隊の英雄になれるかもしれない？

戦功を、勲章を獲得し、英雄に？

… … 面白いじゃないか。

『双翼』は恐ろしい方達だが、各地の現場、司令部からは悪い噂はひとつも聞こえてこない。

ならば、ついていくほかあるまい？

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導大佐であります。

順調に歩兵の皆さんの再教育が進んでいます。

…最初の頃は、すごく嫌そうな態度だったり、表情だったりしたのですが。

今ではなんだか… 私達を見るたびに、興奮しているといえますか。

いえ、やる気に満ちていることは素晴らしいことなのですが、なんだか怖いのです。

…素直に言えば、気持ち悪いです…。

「はあ、どうしたのか…。奴らがやる気になってくれているのは喜ばしいが…。」

「…気持ち悪いです。まるで…変態ですよあの目つきは…。」

「…アレクシアがこうなってしまったてはなあ…。」
厳しくしすぎたのでしょうか。何かに目覚めさせてしまったのでしょうか…。

一体、何がいけなかったのかわかりませんが…後悔の念で胸が
いっぱいです。

— — — side ターニャ・フォン・デグレチャフ

東軍歩兵大隊どもの訓練を任せられ、言われた通りに精鋭に仕立てるべく訓練をしているのだが。

最初の基礎訓練、その後の登山や爆破など、様々な訓練を施してい

るうちに、奴らめ、快樂に目覚めてしまったらしい。

…まるで理解はできないが。

妹にはそのあたりの知識は流石に無いらしく、どうということかと困惑している…。

いや…そんな知識、無い方がいいな。知らぬが仏という言葉もある。

「…ターニヤ、男性というものは、あんな変態ばかりなのですか…？」

「いや、そんな訳がなからう！もしもそうなら…前世が男である私も、変態ということになる…。」

「…ターニヤは変態でもいいのです。」

…なんだろうな、嬉しいような、嬉しくないような…。

…まあ、妹に恋心を抱いている時点で、立派な変態かもしれないが。

ともかく、なるべく私達と会わなくて済むように、もう少し過酷な訓練にぶちこんでやるしかないか…。

「…とりあえず、別のルートでの登山をやらせるか…。それならば、私達があまり関わらなくていいだろう。」

「そうですね。私は大賛成です！」

まあ、アレクシアの気持ちはすごくよく分かる。

わざと遅れているようなふざけた奴に怒鳴りつけければ、口では「申し訳ありません！」と叫んではいても、顔は恍惚としていて気味が悪い。

あまりに気持ち悪いので、一度だけ術式で爆破…。いや、少しだけしぼいてやったことがあったが…。

…股間を濡らし、絶頂していたな…。

教育方針を間違った？

だが、第203航空魔導大隊編成で行った訓練を、歩兵用に修正したものをやっている。

殆ど内容は変わらないはずだが…。

…少し前から、俺の周りの奴らの頭がおかしくなっちゃった。あまりに過酷な訓練のせいなのか、奴らはだんだんと狂気に侵されていった。

俺は、大佐殿達を尊敬している。

多くの戦場で、困難な戦局を切り抜けて来た英雄だ。

さもなければ、プロパガンダだけでは大佐まで登り詰めることは不可能だろう。

周囲の奴らも、最初はナメていたようだが、基礎訓練終了後の地獄の登山で、基礎を固めることによる体力向上を実感したらしい。

それからは、皆が尊敬しているものと思っていたが…。

「ああ…。あのお二人は神の使い…。いや、神だ。美しい…。」

「なぜ、俺たちは最初、疑ってしまったんだろう…。罪深き我々を許したまえ！」

…だんだんと狂ってきたというか、宗教じみてきている…。

尊敬も、度を超せば偶像崇拜になるのか？見ていて気持ち悪いだけだが。

崇拜しているだけなら、まだマシだった。

最近では、訓練中にわざと遅れたりする奴までいる。

そんなことをすれば、間違いなく大佐殿に怒鳴られる。

しかし、当の本人はというと。

「ああ、神のお言葉を、声を聞くことができたぞー！」

「くっ…。羨ましい。だが今日は貴様の番だから…。」

……この始末だ。

『双翼』のお二人も、これはおかしいと気付いたのか、生ゴミを見るような目でゴミを見るようになった。

そして、ますます悦ぶ生ゴミ共。

…俺にはクソ共の思考は全く理解できないが、上官方の気苦労はとてもよくわかる…。

俺まで同列に見られるのも癪だな…。

「はあ… お前ら、ほどほどにしておけよ…。」

「あの方々の素晴らしさを、お前は理解できないのか… かわいそうに。」

… 本当に腹が立つな、こいつら…。

「大佐殿！再訓練第2歩兵大隊、第3中隊中隊長であります！入室致します！」

「… どうぞ。」

俺は奴らと同類ではない！という意味表明… と、流石に俺や、まだ宗教に染まっていない連中も奴らには苦労している。どうにかできないうものか。

「… どうした、中隊長。何か用か？」

「はっ… 最近、御存じの通り… 我々再訓練歩兵の一部… 一部の兵が訓練中にわざと遅れるなどしている事実があります。」

「… そうだな。全員ではない、と思っていたが、中隊長。貴様は、奴らと同類ではないよな？」

… 同類だったならば、殺されていたのか？

「当然でありますッ！小官を含め、奴らの思考を理解できない者が苦労しています…。」

「… それなら、貴方を信用しましょう。どうして、彼らは叱られて、あんなにも気持ち悪い表情をするのですか。」

やはり、気持ち悪い表情をしていたのか……。

上官とはいえ、まだ12歳の子供だ。あのような気持ち悪い人間を見れば、吐き気を催しても仕方ない。

実際、俺は奴らを見ていて吐き気がする。

「……それは……。」

「ああ、中隊長、少し待て。アレクシア、おそらく、聞いてしまえば本当に吐くぞ……。」

ターニヤ大佐殿が何か、耳打ちをするとアレクシア大佐殿は部屋を出て行かれた。

……おそらく、おおよその見当がついているからこそその配慮なのだろう。

「……では中隊長、話してみろ。だいたい予想はついているが……。」

「はっ。奴らは…… 厳しい訓練の中で、気が狂ったのかは定かではありませんが……。大佐殿。」

「……なんだ？」

「奴らは…… ターニヤ大佐殿、アレクシア大佐殿を神聖視し、崇めております……。」

と、見てきた事実を伝えたところ、想像以上だ、とでも言いたげな表情をされている。

……俺だって、こんなこと夢だったら…… と何度も思った。

ずっと、少なくとも仲間だと思ってきた奴らが、幼女に興奮する気持ち悪いクソ共だったなんて。

「また…… 叱られることに関しては、『神の声を聞いた!』などと言って悦んでいる始末です……。」

「…… はあ……。だが…… そうか。」

大佐殿は、少し疲れたような、諦めたような表情をしていたと思えば、突然悪魔的な笑みを浮かべておられる。

…… 恐ろしい方だ。

「大佐殿……?」

「いやなに……。奴らは、私達を崇拜しているのだな?」

「はい。」

「…では、再訓練が終了次第、再編成してやるとしよう。……ふ
ふっ。」

気持ち悪い崇拜者を、分けてくださるのか？それはありがたい
が…。

そんなことをしても、苦労は変わらない気がするが…。

まあ、英雄の考えることだ。俺には到底理解できないだろう。

それに、俺たちの苦労が減るのならば万々歳だ。

「中隊長、報告を有難う。明日からも訓練だ、戻って休め。」

「はっ！」

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導大佐であります。

忌々しい変態の集まり……いえ、東部軍の歩兵大隊を再教導し始めて2週間ほどが経ちました。

連合王国は未だ降伏せず、帝国は連合王国本土の南側をすべて掌握。

連合王国は北部に臨時で首都を移転し、未だ抵抗を続けていますが……無意味でしょう。

ですが、帝国軍にも少なからず被害が出ているようで、参謀本部より私達に後始末をしてほしいとの要望がありました。

……港の占領のための先鋒、首都強襲を行い、これ以上は無いと思っていました……。

このままでも、押しきれぬでしょうが、被害を考慮すると私達が臨時の首都へ浸透、同時に攻勢が被害が少なく済みます。

「さて……蛆虫共。私達はこれから一週間程、連合王国へ掃除をしに行く。貴様らは各大隊長に従い、訓練を続ける。以上だ。」

……相変わらず、半数ほどの変態共の視線が気持ち悪いです……。

ああ、この気持ち悪さを、連合王国の兵には悪いですが晴らさせてもらいましょう……。

「……アレクシア、大丈夫か？」

……ターニヤに、心配させてしまいました。

ダメですね……私は。

「はい、大丈夫です……。」

「そうか……？随分と青い顔をしているが……。何かあったら、すぐに私に言うんだぞ。」

「はい。」

ターニヤが、抱きしめてくれて、少し落ち着けました。

うう、変態共の視線……。もう見られているわけでもないのに、寒気がします……。

ターニヤは平気なのでしようか……。

「……ターニヤ、あの変態共の視線を集めて……。その、気持ち悪くないのですか？」

「ああ……。もちろん気持ち悪いさ。だがどうやら、奴らは私達の熱心なファンらしいぞ？」

「……そうなんですか。どうして、少し嬉しそうに……？」

「ああ、アレクシアには言っていないかったな……。あの気持ち悪い糞共を、私達直轄の歩兵大隊にしてくれるそうだ……。連邦戦が始まったら、英雄にしてやろう。」

……成程。確かに、一応、帝国の同胞ですが……。あれだけ気持ち悪いのであれば……。使い捨てても心は痛みません。

それに、半数とはいえおよそ2個大隊程度……。

……2個大隊規模で変態が？……。それはそれで、吐き気がしますが。

「……確かに、それなら私達の手を汚さず処理できますね。万が一生き残っても、問題はありませんし。素晴らしいです！」

ターニヤには敵いませんね……。

だからこそ、愛しているのですが。

「……さて、連合王国……。だった所へ行こうか。」

「はいー。」

連合王国本土、最前線から少し後方。

サラマンダー戦闘団の第203航空魔導大隊、第43戦術戦闘飛行隊を連れてきています。

「お久しぶりです、皆さん。久しぶりで悪いのですが…未だに無駄な抵抗をする連合王国を叩き潰しましょう。」

「我々が最先鋒だ、喜べ。我々が敵臨時首都へ強襲浸透、同時に帝国軍も攻勢する。我々がしくじれば、命は無いものと思え。」

失敗すれば、戦場で死ぬか、生き残って屈辱の中敵の砲弾などに塗れて死ぬか、です。

「… 発言を。」

「セレブリャコーフ中尉、許可しよう。」

どうしたのでしょうか、ヴィーシャが意見なんて珍しいですね。

「… 前回のよう、敵地の真ん中で包囲される前に撤退するべきかと愚考します。」

… 痛いことを。メアリーも、うんうんと頷いています…。

ですが、あの時はターニヤが負傷してしまいました。

二度と、あのような事は起こしてはいけません！

「そうですね。ですが、慎重になり過ぎて遅れる訳にもいきません。」

「… 今回は、さっさと撤退するさ。前回とは違い、今回は味方がすぐ近くにいますから。」

「了解であります！」

皆さん納得してくれたようです…。これだけ愛されているとは、思ってもいませんでした。

私は、私達は良き上官になれたのでしょうか。

「攻勢開始は明朝だ、準備しておけ…。いつも最前線で嬉しいのは分かるが、暴れすぎないように。」

… ターニヤも私も、人の事を言えませんが。

気を付けなければ…！

―― side ターニャ・フォン・デグレチャフ

気色悪い変態から久々に解放され、最前線。

後方勤務が良い！と考えていたが、あんなにもストレスが溜まり、あまつさえ妹にまで被害が出るとなれば最前線のほうがいくらかマシか？

… そういえば、最初の後方勤務も危険物の試験ということで何度も死にかけたな。

どうも私は、私達は後方勤務は向いていないらしい。
最前線にいるほうが、負傷のリスクはあるものの、後方よりもストレスが少ないとは。

大佐にまで昇進したというのに。レルゲン少将殿のように、中佐くらいから後方勤務の者もいるというのに…。

… 確かに、アレクシアと私で作戦を練り、穴を埋め、運用して勝ってきている。

いちいち指示を仰ぐよりは、勝手にやって勝手に勝ってくるほうが、参謀本部も仕事をしなくて済む… とでもいうのだろうか。

アレクシアが、私の妹がいるからこそ成り立っている。

軍人として、私は妹のことを誇りに思う。

姉として、私は妹のことを大切に想っている。

一人の人間として、愛している。

だからこそ、できれば後方のほうが良いのだが… 仕方あるまい。

「ターニャ…。ちゅっ…。」

「んっ…。」

布団に入りながら、考え事をしていたところを妹に唇を奪われる。

… お互いの想いを知った直後は、恥ずかしくて仕方が無かったが…。

今では、日課になってしまった。

「… ターニヤ。連合王国は正直… 被害が出ているとはいえ、私達が出るまでも無いと思います。参謀本部としては、さつさと終わらせて連邦の対策に注力したいのでしようが…。」

「そうだな。参謀本部の思惑通り、このままだったらと被害を出しては時間と資源の無駄だ、さつさと終わらせることには私も賛成だ。」

弾薬や人的資源を無駄に消費したところで、良いことは何も無い。さつさと終わらせ、平和になるのを祈るばかりだ。

「… 連邦戦は、帝国は、勝てるでしょうか…。」

「さて、な…。前世のドイツよりは、多少状況はマシだろうが…。連邦はとんでもなく広い、電撃戦が通用するのも最初だけだろう…。モスコーまで行けたとして、それ以上の侵攻は困難だろうな。」

ナチスドイツはバルバロッサ作戦で、有能な将校が粛清され指揮統制もぼろぼろなソ連軍を圧倒。

ソ連首都、モスクワを目前にして兵站限界、ソ連各地から集められたソ連兵による徹底抗戦など、様々な要因が重なり敗北。

その後、ベルリン陥落までずると敗走することになる…。

兵站が伸び切るとは、ゼートウアー閣下ならば必ず理解している筈。

無謀な突撃は避けるべきだろう。

ナチスドイツは、米英の脅威もあり失敗に終わったが、私達は英国の脅威は無い。

ヨセフグラード（ソビエト連邦におけるスターリングラード）を何としても最優先で占領し、南方を掌握。

その後、鉄道や道路整備など兵站を確保し、再侵攻…。

それまで、連邦軍からの攻撃を耐えなければならぬ。

レガドニア協商連合国、イルドニア王国から義勇兵が来ているし、我々の航空機は未来の技術… と言っても過言ではないだろう。

おそらく、両軍かなりの死傷者が出るだろうが……勝算はある。

「だが……そうだな。参謀本部と協力し、各国の義勇兵……皆が同じ方向へ進むことができるなら、勝てる……とは言い切れないが、勝算はある。」

「……ターニヤが言うのなら、きっと大丈夫です。今までも、そうでしたから……ちゅつ。」

……さつさと平和な世界が訪れ、アレクシアとゆつくりと過ごしたものだ……。

「戦闘団諸君ッ！これより我々は、我が帝国とアルビオン連合王国との戦争を終わらせる。敵は殆ど虫の息だが…油断して撃墜されるようなことがあるば…分かつているな？」

今日は、連合王国戦を終わらせます。

「了解でありますッ!!」

司令部と作戦開始の連絡を入れ、これよりアルビオン連合王国の臨時首都へ襲撃します。

「…アレクシア。この戦争…どう見る？」

どういう意図なのかは分かりませんが、ターニヤがそう聞いてきます。

ともかく、私の予想を話しておきましょうか。

「そうですね…工業地帯を失い、じわじわと後退し続けているとはいえ、ここまで持ちこたえていることを考慮すると…合衆国の援助、ですかね。」

「…やはりそう思うか。戦闘に関与など、直接介入はしてこないだろうが…厄介だな。」

合衆国は、物量にモノを言わせて世界の警察とでも呼べるほど強力になった国です。

これまでは、欧州には関与しない主義だったはずですが、トップが変わった影響でしょうか。

「合衆国にとつて、帝国の規格化された高品質低価格な工業製品は癪に障るのでしょね…しかし、私達のやることは変わりません。連合王国を倒す、任務を遂行しましょう。」

「… そうだな。すまない、こんな時に。」
「いえ、いいのですよ。」

「こちらサラマンダー01、ファントム隊へ！攻撃を開始せよ！」
「ファントム01了解！攻撃開始！」

国際条約に則り、避難勧告… もとい降伏勧告をしました。
流石にアレーヌ市のことを知っている連合王国は、既に一般市民を避難させていたようですね。

勧告終了と同時に攻撃してきました。

「フェアリー大隊！貴様らも攻撃開始だ！」

「了解であります!!」

今回は、空爆と魔導師による攻撃を織り交ぜて敵を撃滅します。

私達は、落下中の爆弾や敵味方の入り乱れる射撃に当たらない訓練を何度も行いました。

故に、何も気にすることなく攻撃しています。

… ツ、強力な魔導反応… まだ、エース級魔導師が残っていたのですか。

「サラマンダー01へ、こちらサラマンダー02！西方より強力な魔導反応！エース級魔導師だと思われます！」

「こちらサラマンダー01了解。直ちにそちらへ向かう、180だけ耐えろ！」

バラバラに散開して攻撃していましたが、エース級ともなると私だけでは…。

ターニャが来てくれるそうですが、それまで持ちこたえられるでしょうか。

「っ、エンゲージ、エンゲージ！」

充分に、高度12000ですが… 敵は12000まで上がってきました。驚きです。

… 演算宝珠だけでも改良したのでしょいか。

「ラインの悪魔め！せめて貴様だけでも地獄に送ってやるッ!!」

は、速い!?

ターニヤ同等、それほどの練度です！

特に強力なエース級は一人ですが… 彼の部下でしょいか、一個大隊規模の魔導師も攻撃してきます…。

彼らもまた、私や、敵の最も強いであろうエースに比べると劣りますが、エース級の魔導反応…。

そして彼らが一斉に、貫通術式？と爆裂術式をランダムに放ってきます、避けるので精一杯…！

「クソッ！なぜ当たらん！」

当たって怪我、最悪死んでしまえば… ターニヤに怒られてしまいますね。

私は、ターニヤにとって大切な存在ですから… 死ぬ訳にはいきません。

「… あと60ッ…。ぐっ…!？」

猛烈な弾幕、激しい戦闘の中… 貫通術式が一発、左脚を掠めています…。

即座に、回復術式によって応急的に止血しますが… 痛みは消えません。

「さっさとくたばれ！悪魔め！」

「そ、そういうわけには、いきません、よっ！」

痛いとかなんとか言っている場合ではありませんね…。

… また、ターニヤに心配させてしまいそうです。

「… うっ…。」

必死で攻撃を避け続けていますが… 右脇腹、腕、膝など… 次々に、被弾してしまいます。

デコイで攪乱しての戦闘は基本なのですが、これに対抗してか敵

は、私一人に対して飽和攻撃を続けていますから……。

「……アレクシアツ！」

……ターニヤの声が聞こえます。ああ……助かった、のでしょうか。

「チツ……よく一人でここまで持ちこたえてくれた……。……とにかく、回復に専念しろ……。私から離れるな。」

「……はい。ターニヤ……ごめんなさい。奴らを……お願いします。」

「……ああ。」

ターニヤの、私に掛けてくれた言葉は、すごく優しく……。同時に、怖かったです。

———— side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

ああ、忌々しい。

帝国を煩わせ、私達の手も煩わせ……。私の妹が単騎になったところで強襲？

成程、敵ながら見事な作戦だ。私が彼らだったならば、同じことをするだろう。

だが……戦争だから仕方ないかもしれないが、私の妹に傷をつけてくれたな。

その礼をしてやらねばなるまい。

「チツ、もう一人の悪魔が来ちゃった！だがこの数の差だ、このまま撃ち落とすぞ！」

「神よ、我らに勝利を！」

神？神だと？

……ああ、長らく忘れていたが、存在Xのことか。最近夢にも出てこなくなったな。

「ククク、笑わせてくれる！神は死んだ！神など存在しないッ！」
ふざけた事を。面白い事を言う連中だ。

ああ…この95式演算宝珠だが、最初こそ忌々しい存在Xの呪い
がついていたが…。

…アレクシアと想いを共有した時から、その力を感じなくなっ
た。

何を考えているか知らんが、気持ち悪いな、存在Xは。

故に安心して、四核同調という革命的な力を行使することができ
る！

「ああ…。私が信ずるは、我らが帝国、我が戦闘団、私の妹のみ！す
べてが健在である以上…敗北はありえないッ!!」

「ひっ…。あ、悪魔より高エネルギー反応…測定不能！ブレイク！
ブレイク！」

「退避！退避！」

「あ、悪魔…。」

…一人たりとも、逃がすはずが無いだろう？

帝国に、妹に仇なした存在は何であろうと、許しはしない。

「…では、な。良き来世を。」

「皮肉を言い、敵を殲滅。」

…アレクシアは、大丈夫だろうか…。

…私のすぐ後ろでどうにか飛んでいるが…。

「アレクシア、大丈夫かっ!？」

「…はい…と言いたいところですが…消耗が思ったよりも激し
かったみたいで…。飛んでいるだけで、やっつとです…。」

「…仕方ないな…。こちらサラマンダー01、戦闘団各位へ。脅威
は排除したが、サラマンダー02が負傷。隊長権限を第203航空魔
導大隊隊長、ヴァイス大尉に引き継ぐ。各位、任務を続行せよ。」

「ターニャっ…。わ、私は一人で戻れますから…。」

…心配させまいと、しているのだろうか。

本当に、優しくして私にはもつたいないくらいだ。

「馬鹿。そのような状態で、万が一、また敵に襲われたらどうする

?… 私が守ってやるから… 私の前でくらい、意地を張らなくていい。」

「…ごめんなさい、ターニヤ。また… 怪我をしてしまいました。」
生きていただけで、十分だというのに、何を心配しているのだろうか。

「… お前が生きていてくれれば… それでいい。私こそすまない… もっと早く、助けに来ることができれば…。」

180秒も待たせた結果が、これだ。

もっと早く、来ることができれば… 後悔してもしきれない。

「… 戻るまでの辛抱だが、飛べるか?」

「… ごめんなさい、もちそうにないです… って、ターニヤ!」

何を慌てているんだ?ただ、抱っこしてやっただけなのだが。

所謂、お姫様抱っこだが。

この身体でも抱っこできるように術式で軽量化しているため、重さを感じない。

「は、恥ずかしいですよ…。」

「何を今更… ちゅっ。」

… 先日 of 戦闘の際、連合王国のE級魔導師によって負傷させられてしまいました。

また、怪我をしてみました…。

… ターニヤが私を助けてくれたのですが、その… すごく美しかったです。

前回、私が負傷した際はなんだか神々しくて、女神かと思うほど綺麗でした。

ですが、今回はまったく逆で… その、悪魔のような雰囲気でした。

… 悪魔のようなターニヤも、美しく可愛かったです。私達の行った作戦は概ね成功しました。

浸透襲撃を決行した翌日、司令部が混乱した連合王国軍は瓦解。

帝国陸軍が連合王国臨時首都を包囲、同日、連合王国は降伏しました。

… フランソワ共和国やイルドア王国に戦争を起こすよう焚きつけた人間をすべて逮捕。

戦争犯罪人として、帝国によって裁かれるそうです。

帝国の『敵』は、あくまでもアルビオン連合王国『政府』でした。

国民には、罪はありません。

一時的に帝国が管理しますが、後に傀儡国になるでしょう。

… 西暦世界の、日本のように。

… 私はというと、現在は帝都ベルンにて療養中です…。

「… 入るぞ。」

あ、ターニヤが参謀本部への報告から戻ってきました。

結局、私は頭は無傷でしたが、胴体と四肢すべてに傷を負ってしまい、立つことさえままならない状態です…。

医師が言うには、医療での回復と人体の回復力、魔導による回復と全てを使っても歩けるようになるのに1か月、完治は2か月半… ほどでしょうか？

早くてもそれだけかかるそうです… 3か月は見ておいたほうが

いいのでしょうか。

「… すまない。私がつと早く、助けてやれば…。」

「いえ… ターニヤのせいではありません。私が避けきれなくて、被弾してしまっただけですから…。私の実力不足、ですから…。」

予測はしていましたが、それでもどうしようもないアクシデントでしたし…。

まあ… 連邦以外の、帝国周辺の脅威は無くなりましたし、2か月ほどゆつくり休めると考えれば…。

「… しばらく、ターニヤと一緒にゆつくりできますから… ね？」

「ああ… そう、だな…。まあ私は、例の変態共の訓練をしてやらねばならんがな。」

… そうでした。

ターニヤ一人に、押し付けてしまうようで罪悪感が…。

… さっさと治して、ターニヤのために尽くしたいのです。

ターニヤだけが、私にとっての生きる意味ですから。

— — — side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

… 妹に、また怪我をさせてしまった。戦闘団隊長であり、姉である私の責任だ。

だが同時に、生きていてくれて、安心もした。

… 二度と、戦場で妹を私の傍から離すことなどしない。

さて… 切り替えなくては。

「蛆虫諸君！… 私がいなかった間、サボタージュしていなかっただろうな？」

「「J a m a m m a ! ! !」」

「よろしい、では本日より貴様らの再教育を再開するとしよう。」

… 何だ？あの忌々しい、吐き気のするような視線を感じないだど？

私達がいなかった間に、何があったのだろうか…。

真面目になつてくれたのなら、喜ばしいことだが…。

深くは考えないようにしよう。

「蛆虫諸君。我々… 帝国の東に存在する強大な国家、ルーシー連邦。かつて彼の国は、我らと同じく帝国だった。だが彼の国は革命によつて… 共産主義などというふざけた妄想に憑りつかれた狂人共によつて、偉大なる皇帝を失つてしまった。」

共産主義は人類の理想だ。私もそう思う。

だが… 人類では到底、達成しえない、『ただの理想』でしかない。ただの理想、ただの夢。そんなものに縋つたところで、救われるものなど無い。

「そして… 彼の国に蔓延る『共産主義者』共は、帝国とは対極の思想だ。我々にとつて、奴らは大きな脅威だ。だが… それは奴らとて同じ事なのだ… 故に。『共産主義者』共は間違いなく、帝国を恐れ、我々に、再び戦争を齎すだろう。」

共産主義とは、すべての人間は平等であり、すべての財産はすべての人間に平等に行き渡らなくてはならない、という思想だ。

考え方自体は理解できないことではない。

だが、『すべての財産はすべての人間に平等に行き渡らなくてはならない』という点において…。

聖人でもないかぎり、誰が好き好んで自分の財産を他人に分けるのだろうか？

また、平等に分配するには… 一度、すべての財産を集め、再分配しなくてはならない。

誰が、どんな権限で、それを行う？すべての人間は、平等なのに？

… 結局、理想は理想。実現しえないものなのだ。

「いずれ、連邦と開戦するだろう…。その時、私達… 参謀本部直属戦闘団は戦場の最先鋒、最前線を戦うことになる。さて、蛆虫諸君…

君達にひとつ質問をしよう。」

本当に、帝国に自らの命さえも賭して尽くす覚悟のある奴はいるのか？

そうではなくては……私の直轄にはできない。

私に……私達にだけ、忠誠があっても仕方がないのだから。

……これで、私達の外見に踊らされていただけの、変態だったならば、最前線で敵もろとも……。

「諸君は……我々に……。我が帝国に。皇帝陛下に、その命を賭して尽くすことができるか!?」

「Ja m a m m a!!」

「よろしい！ならば貴様らは、現時刻をもつて、参謀本部直属戦闘団に編入となるツ！……ヴァルハラまで競争しようではないか!?」

———— side 再訓練歩兵大隊 一般歩兵

大佐殿が、連合王国への任務をされている間に、本当に……様々なことがあった。

理由は俺もよくわからないが……あの変態共、「サボらず訓練しろ！」と自らの神に言われたからか、普段の訓練よりも過酷なことを始めやがった。

最初は、明らかに度が過ぎていたために、やめるよう言っていたのだが……。

「なんだ、お前達は、俺たちができるこの程度のことでもできない軟弱者なのか!?」

などところちらの神経を逆なでしやがって……。

これに怒った大隊長が、「チツ！ならば我々も同じことを…もつと苦しい訓練を乗り切つてやる！」とムキになってしまつてな…。

結局… ナイフ一本パンツとシャツだけで48時間過ごすだとか、フル装備で山を登つては降り、登つては降りを繰り返したり。

訳の分からない訓練をひたすらにやっていた。

そんな中で、変態共も俺たちも、何かを悟つた… 極限状態になつたときに、幻聴だろうが、神…？のようなのが語り掛けてきた。

曰く、「ターニャ・フォン・デグレチャフを妄信するなかれ」

曰く、「ターニャ・フォン・デグレチャフは悪魔の生まれ変わりだ」

曰く、「汝らは奴にはなく、国に忠誠を誓え」

「さもなれば、汝らの祖国は滅亡せん」

ははは…。

数々の戦場で、無謀とも思える作戦の数々。

その全てを成功させ、彼女達の率いた部隊に損耗無し。

我々からすれば勝利の女神だが…。

敵からしてみれば、成程確かに悪魔だろうな。

皆同じことを考えたようだが、最後の… 国への忠誠、滅亡… ど

うせ幻聴だろうが、いやに記憶に残っている。

いや… 全員に、同じ幻聴が聞こえるなど、あるのだろうか？

これを機に、あの変態共が驚く程変わってしまった。

『白銀』『白百合』を信仰するのを、きっぱりとやめたのだ。

… 幻聴は、『白百合』については何も言っていなかったのだが。

… なんてせよ、奴らが変わつたのは良い事だろう… おそら

く。

そして、俺たちは彼女達の… 参謀本部直属戦闘団、帝国最精鋭の部隊に編入となった。

ああ、神よ。

貧弱な俺たちに、最前線へ行って死ねと申すのですか…。

… まったく、神とやらが本当にいるのならば、こんなにくそつたれな状況に追い込む神なのだろうか。

… こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフ魔導大佐であります。

ようやく、腕が動かせる程には回復しましたが… 歩いてトイレに行くだけで精一杯です。

いえ… 本当は、歩くのもかなりきついです。

「… ツー！アレクシア！無理をするなど、言っただろう！」

ターニヤに、見つかつてしまいました。

その… トイレに行きたくなってしまった。

なるべくターニヤの手を煩わせたくなくて、ですね…。

「ご、ごめんなさい…。」

「… もっと、私を頼ってくれ…。 仕事よりも、お前のほうが大切なだから。」

「… はい。」

… ターニヤが、私の事を想ってくれるのは嬉しいのです。ですが…。

… いえ、ターニヤの気持ちを、これ以上無碍にするのはいけませんね。

「では… ターニヤ。その… 部屋まで、支えて貰っても… いいですか？」

「ああ、当たり前だろう。」

「… 大佐殿！宣戦布告です！たった今、帝国に対して連邦が宣戦を布告しました!!」

… 私が回復しきる前に、宣戦ですか…。

まあ、いつもいつも私達に都合よくいきませんか…。

「報告ご苦労、戻れ…。 チツ、アカ共め、もう少し大人しくしていればいいものを…。」

「… ターニヤ。私は、しばらく前線に行きませんが…。 その…、んっ…。」

…。

「… っ、大丈夫だ。まずは… お前は焦らずに、傷を治せ…。 早く治して、私と…。」

「はい、分かっています。ターニヤ…。 どうか、無事で。」

きつと… この後、すぐさま参謀本部へ呼び出され、明日にでも最前線へ…。

… 本当は私が、ターニヤを補佐しなければならないのに…。

「ターニヤちゃん！アレクシアちゃん！」

「メアリー、どうした？」

突然、血相を変えてメアリーが飛び込んできました。何事でしょうか…。

「連邦が、帝国に対して宣戦布告しました!!」

「ああ…。 それはさつき、伝令が…。」

「… それと、レガドニア協商連合国に対しても、宣戦布告しましたッ！」

… 同盟国への宣戦？… 実質、二正面作戦ですか。

ですが… 協商連合国と連邦の国境は、どちらからも攻めづらい地形だったはずです。

… それに、アンソン殿ならば、防衛ならなんとかしてくれる… でしょう。

イルドア王国や共和国にも援助を求めれば、協商連合国はもつはずです。

帝国は元々、連邦戦を考慮していたため、準備は万端のはずです。

… 西暦世界の、ポーランド国境までが帝国の国境ですから。

「… 成程、連邦にも多少は賢いやつが残っていたようだが…。 メア

りー、祖国が心配だろうが…その程度ならば大丈夫だろう。安心しろ、アンソン殿なら上手く防衛できるはずだ。」

「はい、協商連合国には、帝国製の、型落ちですがZeppelin戦闘機を売り出していますから。航空優勢は間違いなく取れますし、地上支援も十分だと思いますよ。」

最新型のZeppelin製の航空機が連合王国戦終戦間際に大量生産が始まり、同時に型落ちになってしまう新品の航空機を協商連合国に売っています。

あれから、だいたい1か月くらい空きましたし、十分に使いこなせるはずです。

「そう、なんですか。二人がそう言うのなら…大丈夫ですね。」

「だが…帝国参謀本部が、どう動くだろうか。」

友好国が攻撃されているのですから、政治的にも援助しない訳にもいかないでしょうし。

帝国軍の派遣くらいは、するでしょうね。

現在の帝国は、今のところ、東側以外に戦線がありませんからしばらくは、大丈夫でしょうが…。

合衆国が本格的に参戦してくるまでに、どれだけ連邦を追いやれるか…でしょうか。

それに…降伏したとはいえ、連合王国は現在不安定な状態です、どうなることやら…。

「…考えていても仕方ありませんね…メアリー、私は、怪我で動けませんから…ターニヤを、お願いします。」

「…はい、アレクシアちゃんは安心して、ちゃんと怪我を治してくださいっ！」

「…では、どうせ参謀本部に呼ばれるだろう、こちらから先に行くでしょう。」

…連邦が戦争を吹っかけてくることは予想していましたが…こんな予想が当たっても、嬉しくないですね…。

―――― side ターニヤ・フォン・デグレチャフ
… さて、色々と思うことはあるが…。

アカ共め、予想はしていたが、やはり宣戦してきたか…。

連邦以外の周辺諸国はすべて降伏しているとはいえ、連合王国だけは未だ不安定な情勢だ。

もしも、新しく政権を握った奴がろくでもない奴で、帝国に受けた屈辱を晴らそう！などとならなければいいが…。

ともあれ、連邦と開戦してしまったのだ、参謀本部へ行かねばなるまい。

「… ターニヤ大佐殿。」

「ん？どうした、メアリー少尉？」

「いえ… 何か、悩まれているようでしたので…。」

「ああ、大したことではない。心配させてしまいすまない。」

… いくらここまで帝国が順調に勝っているとはいえ…。

今まで敵に強いてきた、大量の出血。

連邦と戦うのならば、今までとは比べ物にならないくらい帝国も消耗するだろう。

… と、考え事をしているうちに、参謀本部へ到着したようだ。

「… メアリーは、ここで待っていてくれ。ターニヤ・フォン・デグレチャフ大佐であります。入室致します。」

今まで以上に、各参謀長官殿は苦虫を噛み潰したような、険しい顔をしておられる。

… あまりにも無理難題でなければいいが。

「… デグレチャフ大佐。貴官の予想通り… というべきか。先程、連邦が我が国に宣戦してきた。」

「まずは、『白銀』の意見を聞きたいが… 異論はあるか？」

… 異論は無い、らしいな。

参謀本部としても、いくつか案はあるのだろうか…。なぜ、いつも私に?とは思う。

「はっ…。数々の戦争で勝利を収めてきましたが…。それらに酔いしれている暇は無いようです…。これまで、前線の兵士たちは休む間もなく…。戦場へ駆り出されています。」

「… 貴官の事だ、前置きは性に合わんだらう? 連邦との戦争がどうなるか…。率直に言ってみよ。」

… はあ、ゼートウアー閣下には本当に、頭が下がる。

「… 了解であります。連邦の脅威は、まず国土の広さであります。モスコイまでは比較的帝国有利に進めると愚考致しますが…。奴らは、共産主義者は首都を後方へ移転し続け、徹底的に抗うでありますよ。」

「… 自国の領土、都市などを失っても抗戦する、とはにわかには信じがたいが…。」

ルーデルドルフ閣下の仰る事は、もつともだと思ふ。

だが、ありえないと思うことでも成す、それが共産主義者だ。

… でなければ、ポルポトのような悪魔は生まれないのだから。

「ルーデルドルフ…。デグレチャフ大佐の予想が、外れた事があったか?…。今回の予想が外れた方が嬉しいのは確かだが、な。」

「… むう…。確かに、多少突飛な予想とて、考慮しておく必要はありそうだな…。」

「して、デグレチャフ大佐…。勝算は、あると思うか?」

… 多くの帝国軍幹部からの視線が痛い。

「… 恐れながら…。『勝利できる』とは思えません。ですが…。『敗北しない』ことは可能かと。」

どう考えても、大陸横断など国力がもつとは思えない。

… 劣悪なインフラ、冬の恐ろしい寒さ。それらに、前線の兵が耐えられるとは…。

勝てない、と言ったようなものだ、何かしらの罰を受けるかもしれない。

だが、ここで事実を言わねば、本当に敗北してしまう。

「…ふむ。貴官の思う『勝利』とは、何だ？」

「小官の考える、帝国の勝利、でありますか…。軍隊の質では、我が帝国軍に勝てる軍など、存在しないと確信します。ですが、どれだけ質が良くとも…。圧倒的な数には敵わないと愚考致します。故に…。連邦には、モスコーまでを占領した後…。敵の攻撃に対し耐え、反撃を、一撃を加えるだけの余力を残すことこそが、生き残る道であると確信致します。そして、世界に、国民に、帝国は被害者だと、訴えるべきでありましょう。帝国国民が、安心して暮らせるようになることこそ、勝利である、と小官は定義するべきであると愚考致します。」

「…合衆国の介入は避けられない、と思う。

だが、揚陸さえさせなければ帝国本土は安全だ。

それに、共和国などの周辺国へ合衆国が宣戦するとは…。合衆国民が黙っていないだろう。

故に、合衆国が帝国へ宣戦したとしても、連合王国が降伏した今、連邦へ援助するほかない筈。

沿岸の警戒は強化するべきだが、それだけだ。

連邦首都を占領し、連邦の国民にプロパガンダを流せばいいだろう。

大粛清、戦争。好き勝手やってきた政府への不満がある筈だ、今一度…。

帝国国民を第一に。人的資源の確保を。

「…デグレチャフ大佐の案に、異論のある者は？」

「…ざわざわと、何かを言いたそうにしているな。

そりゃあ、そうだろうが。何せ、一介の将校が、『勝利することは難しい』などと発言したのだ。

「…今までの功績があるからこそ、許されているが…。それが無ければ、大問題だろう。

「…よろしい。ともかくしばらくは、例の消耗抑制ドクトリンを用いて防衛に徹する。協商連合国側の戦線の状況次第で、攻勢を開始、

デグレチャフ大佐の案を採用するでしょう。」

… ああ、私だ、ターニャ・フォン・デグレチャフだ。
ルーシー連邦が我らが帝国へ宣戦、同時に同盟国である協商連合
国へも宣戦。

「どれだけの戦力を蓄えているのか、と私も参謀本部も震えていたの
だが…。」

「蓋を開けてみれば、数は多いものの共和国軍よりも弱いではない
か。」

「航空機は一世代前のもの、魔導師の姿は確認できず。」

… 一部を捕虜として捕らえたところ、「助かった！俺はこのまま
捕虜でもなんでもいい、知っている限り話す！」だと。

… どれだけ酷い内政をすればこうなるのだ。

「捕虜によれば、帝国時代から国へ仕える政治家、将軍など有能な人
物を次々に処刑。」

「指導者… ヨセフのお気に入りばかりが国のトップへ。」

「魔導師は、大昔の魔女だとかなんだとか、とにかく古い遺物だとし
て迫害しているらしい。」

「粛清に忙しかつたからか、軍の装備などの全てが、帝国から見れば
旧式もいいところだ。」

… これでは、さっさとモスコウを攻め落としてもいいくらいだ
が… 合衆国の参戦が懸念される以上、油断は禁物か？

「… はあ。」

「おや、今日は一人かい。小さな軍人さん。」

「考え事に耽っていると、喫茶店の女将さんが話しかけてきた。」

「ああ… 女将さん。先日連合王国の件でね… 妹が怪我をしてし
まってな。」

「なんだって!? そりゃあ大変だ。軍人さん、妹さんにこれを飲ませて
やりな。」

… そう言って、お店の自慢のコーヒー豆を一袋、手渡してくれた
が…。」

「… いけませんよ女将さん。最近はコーヒー豆も安くはないのですから…。」

「いいんだよ… 軍人さんのおかげで、私らは安心して、こうして店をやってられるんだ。」

「… では、有難く貰っておきます。」

「その代わり、また妹さんとうちに来ておくれよ！」

「大佐殿！こちらにいらしたのですか！」

喫茶店を丁度出たところで、メアリーに呼び止められる。

「… どうした？現在は連邦軍に対し防衛に努め、膠着させているはずだが…。」

「… ゼートウーア閣下より、呼び出しであります！至急、ゼートウーア閣下の執務室へ来るように、とのことですよ！」

… 連邦と帝国の戦線では、まるでこれ以上の進撃はできないと言わんばかりに膠着させ、じりじりと後退している。

もつとも、後退した後には連邦軍が踏み入るであろう場所はすべて地雷原だが。

… 帝国―連邦戦線の全体の指揮をしているのは、南方でお世話になったロメル閣下だそうさ。

これらの作戦の効果と、連邦も有能な将校が少ないことも相まって、連邦軍の士気も下がっているようだ。

残りの帝国軍は予備として控えているものと、協商連合国へ遠征に行っているものに分かれている。

今のところ、特に問題は無いはずだが… 何故私が呼ばれるのだら

う。

「… 考えても仕方がないか。行くでしょう。」

… ゼートウーア閣下は数少ない、アレクシアと私と、話の合う素
晴らしい方だ。

私達は気に入られているのだろう。嬉しい限りだが… 一抹の不
安はある。

参謀本部として呼ばれなかったということは、あまり公にはできな
いことだろうか？

「… ターニャ・フォン・デグレチャフ魔導大佐であります。入室致し
ます。」

… さて、どんな無理難題… もとい、どんな素晴らしい任務を与
えられるのだろうか。

『白銀』… 貴官の妹… アレクシア大佐については、我々も痛まし
く思っている。」

「ありがとうございます、閣下… して、御用件をお伺いしても？」

「… 大佐。貴官には連邦の都市… 具体的には、ヨセフグラード侵
攻を行ってもらいたい。」

「… 市街戦、でありますか…。」

アレーヌとは違い、一般市民の避難は連邦が行っているだろう、倫
理観などの問題はないが…。

前世の世界でいえば… スターリンググラード攻防戦か。

だがそこに至るまでに、枢軸軍はナチスドイツ主導でソビエト連邦

首都攻略作戦… 通称、タイフーン作戦を実施。

作戦は失敗に終わり、これを過大評価したソ連が全戦線で攻勢に出るが、兵站限界を超えており多数の死者を出す。

ぼろぼろの赤軍に枢軸軍が襲い掛かった。

言うのは簡単だが、連邦が過大評価するというのは不確定要素だ。

ならば… 情報戦しかあるまい。

「… 閣下。現状で、ヨセフグラードへの侵攻は困難を極めるかと。… そこで、連邦軍をある程度弱らせる必要があると愚考致します。」

「ふむ… 貴官の言いたい事は分かるぞ。共和国戦のように… 我々の領内へ誘引し、撃滅を図る… だろうか？」

「しかし、連邦との戦線は非常に長く、我が軍も包囲される危険性があります。連邦側へ突出する戦線はかなり… 厳しい状況になるでありません。」

敵をこちらへ誘引し、包囲殲滅。だがこれは、帝国軍も半包囲されてしまうということでもある。

「ふむ…。」

「故に… 全戦線で撤退… 敵を誘引するべきかと。3段階に分けて現在の戦線後方に塹壕などを掘り、少しずつ撤退するべきであるかと。塹壕から塹壕までの区間に、地雷などを埋めればかなり効果が期待できるかと。」

… 砂漠の狐が、ロンメル将軍が行った作戦を参考に考案してみたが…。

いかんせん、アレクシアほど細部まで詰めることができない。問題点はかなりあるだろう。

「ふむ… 貴様も、ロメール将軍と似たような事を言うのだな。」

… こちらの狐も、同じ事を考えていたか。ならば、東部戦線は大丈夫だろう。

「よろしい、消耗抑制ドクトリン同様… 敵に、出血を強要するとしてどうか。さて… デグレチャフ大佐？ 貴官にはロメール将軍と共に東部戦線で戦ってもらいたい。」

… 参謀として使われないのだが、どうしても前線へ行かねばならぬらしい。

「… 貴官が妹想いであることは、私もよく知っている。できれば貴官のその想いの通りにさせてやりたいが… 我々は軍人だ。」

「承知しております。個人的な事情で、戦場から逃げるなどあつてはならぬことであります。」

… 仮に私が拒否したとしても、アレクシアのことだ、仕事を優先しろと言うに決まっている。

… チツ、連邦がこの時期に宣戦してこなければよかつたものを…。

この鬱憤は戦場で晴らすとしようか…。

— — — side ハンス・フォン・ゼートウアー

ああ、嫌な大人にはなるまいと思っていたが…。

彼女、『白銀』ことターニャ・フォン・デグレチャフ大佐はその銀翼突撃章を身に着けるに相応しい能力を有している軍人だ。

だがそんな彼女も、まだ齡12の子供だ。

… まして、共和国戦において双子の妹… 『白百合』アレクシア・フォン・デグレチャフが怪我を負わされた際、独断で敵魔導師部隊を文字通り、「消滅」させた程だ。

どれだけ彼女が、妹を大切に想っているかが分かる事例だろう。

… そんな彼女を、療養中故に仕方ないとはいえ、妹と引き離し戦場へ送る？

帝国軍人ゆえ、仕方がないことだが…。

… 勘か、本能か。

今までの長い人生で経験したことのない… 胸中がざわつくこの
感じは何だ？

… 何事も無ければいいが。

何だろうな、しばらくアレクシアと会話していないせいかな…イライラしてしまう。

ロメール将軍と共に東部戦線を任されてから2週間ほど経った。

…明日は、敵を我らの陣地へ誘引し、包囲殲滅を図る作戦の決行日だ。

共和国の時と同様、我々、参謀本部直属戦闘団が囫として攻勢を行う。

私達が引き付けている間に、撤退する、というものだ。

「ああ、『白銀』。南方ぶりだな。」

「ああ…ロメール閣下。今回も、厄介な仕事ですね。」

「はっはっは、まったくだ…君も大概だがな。」

…この2週間、撤退の準備とともに、敵側に嘘の情報を流していた。

曰く、帝国は度重なる戦争によって疲弊していて、これ以上戦線維持するのは困難。後方へ撤退するしかない…。

共和国の時と同様だが、有能な将校を粛清してしまった連邦では、な。

おそらく、簡単に信じるだろうな。

上層部が信じなくとも、実際に撤退していく様を見る連邦側の前線司令はこれを好機とし、進軍してくるだろう。

…敵陣地が空いているのに、進まないなどすれば…NKVDに粛清されてしまうだろう。この世界にもNKVDのような組織があるのか不明だが。

「…さて、戦闘団諸君。我々は、これまで経験したことのない戦場へ、戦争へ赴く。だがやる事は今までと同じだ。…では改めて聞こう、我々の任務は何だ!？」

「敵軍の殲滅でありますッ!!」

「よろしいッ!!我々の任務は、書面上は殿軍、四、となっているが…敵軍を殲滅するな、とは書いていないッ!!貴様ら、我々の任務は殲滅だ!敵を、一人残らず殺し尽くせ!」

「Ja Mama!!」

…帝国に仇成す存在は、断じて許してはならない。

…本当なら、私は今頃はアレクシアとゆっくりできていたはず…。

連邦め!徹底的に、叩き潰してやる…!

「…連邦の阿呆共に、領土的、数的有利に慢心する阿呆共に、奴らが思いもよらない戦争を見せてやろうではないか?」

「大佐殿!戦闘団長殿!指揮官殿!」

「よろしい、ならば戦争だ!戦闘団各員、戦闘団隊長命令だ。…連邦の、コミーのクソ共に本当の地獄を教えてやれッ!!」

「Ja Mama!!」

「…では戦闘団諸君、明朝より作戦開始だ。各員、準備をしておけ。」
ああ… さっさと作戦を遂行し、帝都へ帰りたい。

「… なんだか今のターニヤちゃんからは、いつも以上に… アレクシアちゃんが居る時に比べて、圧倒的な… 威圧感を感じます。アレクシアちゃんの怪我が治るまで、ずっと看病してしまう程に心底大切にしていらっしゃいますから… ストレスも大きいのでしょうか。」

「どうした、メアリー少尉？心配事でも？」

「… はっ！いい、いえ… なんでもありません！」

「… メアリー、私達の仲だ… 無理には聞かないが、いつでも相談に乗るぞ。」

「… うん、ありがとう、ターニヤちゃん…。」

最前線の野営地、魔導師、特に女性が優遇されているとはいえ… 寝床も多くありません。

「… ですので、私はターニヤちゃんと同じテントなのですが…。」

「… アレクシアちゃんが居てくれれば、こんなにもピリピリしていないのですが…。」

ターニヤちゃんから、アレクシアちゃんを引き剥がしてしまうのは、とても良くない事かもしれないです…。」

「私では、ターニヤちゃんの支えにはなれないでしょうが…。」

「む、メアリー？」

「… ターニヤちゃん。ターニヤちゃんが、何か悩んでいるのはわかりますよ？」

「… 抱きしめるとよく分かりますが… こんなにも小さな身体で、帝国の最前線を駆け続けているターニヤちゃんを知ると… 本当に、戦争は嫌ですね。」

「… すまない。どうにもアレクシアがいないと… 調子が狂う。私的な想いを持ち込んでほならないのだが… 帝国軍人として、まだまだだな。」

「今までずっと、一緒だったのですから… 仕方ないと思います。」

「… メアリー、ありがとう。明日も激戦だろう… そろそろ寝ようか。」

——— アレクシア・フォン・デグレチャフ
ターニヤが戦場へ行ってしまったて、2週間が経ちました。寂しいで
す……。

ですが、ターニヤのためにも、早く傷を癒して、また一緒に戦場
を……。

ええと、今の私は順調に回復し、松葉杖が必要ですが…… 歩くこと
ができます。

腕の回復のほうが早く、脚がまだ痛みますが。

「…… エミリアです、入ります…… アレクシア殿、本日の診察をして
も？」

「はい、お願いします。」

…… 今入ってきた人は、以前怪我をしたときにもお世話になった、
軍医さんです。

本名は、エミリア・リーゼンヴェルトさんです。

「…… お姉さんがいなくて、寂しいのでしょうか。」

「…… はい。私が、不甲斐ないばかりに、姉には苦勞をさせてばかり
です……。ですから、さっさとこの傷を治して、姉と共に戦場へ行かな
ければなりません。」

あまり感情を表に出す人ではありませんが…… 良い人です。

「…… おそらく、もう一週間もすれば、杖無しでも歩けるようになると思
います。痛みが完全に消えるのは、もう少し先でしょうが……。」

「はい、ありがとうございます。」

… 軍医さんが、「ではまた。」と部屋を出ようと立ち上がった時、聞いていたラジオから、『速報です！秋津島皇国が”周辺諸国の解放”を目的に… 合衆国へ、宣戦布告しました！』
…と。

「!?…っ…。」

「アレクシア殿！… 無理をしてはいけません、治りかけている傷が、また酷くなつてしまいます！」

「ですが… この宣戦を機に、合衆国が連邦側に着き、秋津島皇国攻略を狙えば… 参謀本部へ、行かなくてはいいけません…。」

合衆国としては、連邦と手を組み秋津島皇国を二正面に追い込み、叩き潰したいはずですよ。

そうなつてしまえば、秋津島皇国が倒された後に、帝国へ…。

それだけは、何としても阻止しなくてはいいけません…。

「… 仕方ありません。ですが… 参謀本部の手前まで、私が同行します。宜しいですか？」

「はい… ごめんなさい、参謀課程を修了しているからには、やらなくてはならないのです…。」

参謀将校として、ゼートウアー閣下に期待されている人間として…。

期待を、裏切るわけにはいきません。

それに、合衆国ともやりあうとなると、ターニヤも私も… 死んでしまうかもしれないですから。

… 道がないわけではありません。

合衆国としても、欧州を平定した帝国に背後を突かれることは避けたいでしょう。

これを盾に… 帝国が連邦を制圧した暁には、何らかの形で秋津島皇国を倒す手助けをする、などのおまけをつければ、不可侵条約の締結も…。

やることは、山積みですね。

さて…今日は北部戦線の撤退、同時に南部より私達、サラマンダー戦闘団が囷として攻勢をかけることになっている。

共和国に対して行った、回転ドア作戦そのままだな。

あの時と異なる点といえば…敵の数が尋常ではないこと、撤退し敵に踏み入らせる場所すべてに地雷を撒いたこと…くらいか。

今回撒いた地雷は、不発弾にならないよう、クラスター爆弾の応用で魔導師の特殊な魔力に反応して誘爆するようになっている。

勿論、踏んでも爆発する。

…不発弾問題は、前世でも大変なことになっていたからな。この世界に魔法があつて良かったと思う。

「…サラマンダー戦闘団諸君。これより、北部戦線の大規模撤退に伴い、南部戦線の維持…単刀直入に言おうか。我々が、殿軍だ。」

これまでの戦争の賜物か？誰も動揺することはない……しつかりと教導してやった甲斐がある。

「さて…諸君。私と共に、これまで地獄を潜り抜けてきたのだ。もう地獄には慣れただろう？思う存分、戦争を楽しんでくれ！」

「Ja mama！」

…連邦め、よくも私の大切な時間を邪魔してくれたな。

そう考えると、今までになく、暴れたい気分だ。

…ああ、これから存分にストレスの発散ができると思うと…クク…。

… 最早、いつもの事だが… 胃が痛い。

偶々だろうか、参謀本部より南部戦線の兵站部門への連絡などの雑務で、此処に来ていたのだが…。

しばらく参謀本部でさえ会っていなかった、『白銀』が何故…。

奴の妹、『白百合』が負傷し、療養中だと聞いていた。

ならば、奴は妹の看病に付きつきりになると思っていたのだが…
ゼートウーア閣下め…。

怖いもの見たさ、とでも言おうか… 奴とその妹が、戦場で一緒に居ない光景など想像できない。

それ故に… 奴の、戦闘団員への激励を見に行ったわけだが…。

なんだ、あの邪悪な笑みは？

… 参謀本部で、数々の幹部の方々に睨まれるよりも寒気を感じた。

… 奴から妹を引き剥がすことは、やってはいけない事なのだろうな。

二人で一人、なのだろう。片方がいなければ… あの『白銀』を見るに、精神的ストレスが尋常ではないようだ。

… 私から参謀本部に進言しておくか。

私は『白銀』『白百合』ともに、士官学校時代のアレを見て以来嫌いだが… 奴ら程、戦争に長けている将校は他にいないだろう。

帝国が戦争に勝つには… 奴らが必要だろう。

「… おや、これはこれはレルゲン少将殿！」

チツ… 厄介なことに、『白銀』に見つかってしまった。

… 胃に穴が開きそうだ。

「ああ… デグレチャフ大佐… 貴官の、任務成功を祈っている。」

「はっ。お任せください、大きな戦果を、参謀本部への土産と致しましょう。」

… なんとという覇気、いや… 狂気か？

撤退戦の殿軍、友軍の支援など無し、敵地のご真ん中へ突っ込むというのに… 何故、笑っていられる!?

悍ましい…。

「申し訳ありません、これより作戦開始でありまして……。では、小官はこれにて。」

ほんの二言三言、話しただけなのだが……。『白銀』は、あんなにも恐ろしかっただろうか。

明らかに、普段の奴に比べて……。深淵を思わせる、深く暗い眼をしていたな……。

……。やはり、奴は妹と一緒にしておかなければならないな。

―――― side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

まさか、このような前線にレルゲン少将殿がいらつしやるとは予想外だった……。――

一応、私は参謀本部所属の将校であるため、レルゲン少将殿の部下にもあたる。

……。部下の、危険な作戦へ赴くのをわざわざ見に来て下さり、激励までしてくださるとは……。

つい、嬉しくてレルゲン少将殿に見栄を張ってしまったが……。問題ないだろう。

さて……。出撃するのでしょうか。時間も余り無い。

「諸君、戦争の時間だ。喜べ、今日は、勲章の稼ぎ時だ！好きなだけ敵兵をヴァルハラへ送ってやれ！」

「Ja mama！」

再び、地獄へ行くのでしょうか。

… 作戦開始、もとい戦闘開始からそろそろ1時間か？
戦局は…。

我らが帝国軍、サラマンダー戦闘団が敵軍を圧倒している状況である。

前線より後方に配置されていた敵砲兵隊を、航空隊の爆撃で掃除し。

残りを私を含めた魔導師で掃討しつつ、塹壕に籠る歩兵などを罫り。

サラマンダー戦闘団地上部隊が制圧する。

まさに蹂躪、これぞ地獄。

響く轟音、悲鳴、敵兵の怒号。

血飛沫と肉片が飛び交い、儂く散ってゆく敵兵の命。

だが。

連邦軍前線司令部は何を考えている？

このような地獄へ、奥から新兵も同然な増援が送られてくる。

それらは、既に戦意喪失したような顔つきで、進軍してくる。

… やはり後方に督戦隊のようなものがあるのだろうか。

それを知ってか知らずか… 弾薬などもまだある筈だが、皆の士気が落ち始めている。

「… はあ。サラマンダー戦闘団各員へ、命令だ… 貴様ら、敵兵が哀れに思うか？ならば躊躇なく、殺してやれ。奴らはこの戦場に来た以上… 引き返せぬ哀れな存在だ。さっさと始末してやるのが、奴らにとって少しは救いになるだろう。」

コミーの事だ、敵前逃亡などすれば… よくて、督戦隊によって射殺されることだ。

悪ければ、何らかの罪に問われ拷問、そいつの家族は収容所送りか…… 処刑か。

どちらにせよ、地獄しか待っていないのだ。

「ファントム01了解！ 戦闘を継続致しますッ！」

「……こちらファントム02。了解しました。」

…… つらい命令だろうが、殺らねばこちらが死ぬまでだ。

ルーデル大尉は相変わらずだが。

…… ん？ 敵後方から、対空砲に囲まれた見慣れぬ野戦砲…… ツ、あれは100mm野砲と、76mm野砲か！？

対戦車砲も兼ねた化け物め！

「地上部隊！……こちらサラマンダー01だ、敵後方に対戦車を想定したものと思われる野砲を確認した！ 下がりつつ、野砲による砲撃を継続！」

「了解ッ！！」

「ファントム隊、敵後方へ浸透、野砲を中心に破壊せよ。フェアリー大隊、ファントム隊の援護…… 対空砲を破壊せよ。」

「了解であります！！」

チツ…… 歩兵の装備や練度が酷いものであったため油断していたが…… あんなものを既に開発していたとはな。

「ファントム隊、追加命令だ！…… 無理にとは言わん、できればいい。野砲をいくつか、鹵獲可能な物を残せ。」

アレが出てきたならば…… 現在の連邦前線に存在していた旧式の使い捨て戦車などよりも……。

もつと、性能が良い戦車が控えていてもおかしくはないだろう。

…… 前世の100mm野砲は、ティーガーなどの装甲を貫けず、大したことはなかったと記憶しているが……。

76mm野砲は、対戦車砲として非常に高い性能を有していた筈、十分に脅威だろう。

前世とは大きく異なるこの世界だ、鹵獲し研究しておいて損はない。

それに、現在の帝国の戦車はティガーほどの装甲は無い。
今回、この戦場では見ることは無いだろうが……貫かれる可能性がある。
ある。

……それにしても、戦場を見通し作戦を練り、命令を出すというのは……中々難しい。

普段ならば……私のアレクシアがやってくれるのだが……。

やはりどうにも、調子が乗らないな。

「サラマンダー01へ、こちらファントム01！敵砲兵の無力化に成功、地上部隊による支援を！」

「こちらサラマンダー01、了解だ。サラマンダー地上部隊へ、前進し、敵を殲滅、可能な限り装備を鹵獲せよ！」

… 戦闘開始から2時間が経過した。

私達の弾薬も切れ始めているが… 敵は次から次へと増援を後方から送り込んでくる。

… かなりの数の人間をミンチにしたが… 私が言えることではないが、敵司令部には、人の心は無いのか。

戦線を維持するのに、装備の質を上げて耐えるのではなく、人間を肉壁として使い倒すとはな。

連邦にしかできない戦い方だろう…。

さて、どうしたものか… と思案していると、司令部より通信。

「サラマンダー戦闘団へ、北部戦線の大規模撤退は完了した。現時刻を以てサラマンダー戦闘団の離脱を許可する。」

… 離脱を許可されたが… 未だ我々は優勢とはいえ無限に湧き出る敵兵と交戦中。

「HQへ、こちらサラマンダー戦闘団、離脱を了解。しかし敵兵が一向に減る気配無し、現在継戦中。離脱に際し、南方戦線部隊による掩護を乞う。」

「こちらHQ、南方戦線部隊による掩護を行わせよう。オーバー」

「… 了解。オーバー」

流星は、ロメール閣下、話が早くて助かるな。

帝国軍、連邦軍の両軍がお互いに半包囲状態となった。

連邦の参謀将校に、有能な者がいれば、おそらくは気づかれるだろうが… 粛清されてなければ、な。

しかし、今回の戦闘は、なんとも…。

「… つまらん。連邦が数を出してきているから戦争のようなものになっっているが… 実情を見ればこちらの損害は軽微… ただの虫退治と変わらんな…。」

群がる虫… 連邦兵を、爆弾で、爆裂術式で、砲弾で。

おおよそ全ての方法でミンチにしてやった… なんだこれは、演習か？

「あの… ターニャ大佐殿…。南方戦線部隊が、援軍に駆けつけてくれましたが…。」

… そういえば、ヴィーシャと話すのは、久しぶりに感じるな。

「ああ、報告ご苦労、セレブリャコーフ中尉…。帰るとするか。」

ここまで連邦兵だけで死体の山を積み上げてやったのだ、続々と送り込まれているとはいえ、奴らの士気は最悪だろう。

— — — side ヴィーシャ

第203航空魔導大隊… フェアリー大隊が結成されて以来、ずっと、ターニャ大佐殿、アレクシア大佐殿と共に戦場を巡って来ました…。

… こんなにも、ターニャ大佐殿を、恐ろしく感じたのは初めてです…。

… アレクシアちゃんがないことが、原因だと思えますが…。戦闘団の皆さんも薄々思っていそうですが…。

普段はアレクシアちゃんが戦場全体を把握して、お二人で戦術を練られるのですが…。今回はそれが無いせいか、らしくない…。とても言いましょうか。

「… どうしたヴィーシャ、私の顔に何かついてるか？」

「い、いえ！少し考え事をしていただけであります！」

「… はあ。ヴィーシャ、このテントには貴官と私しかいないのだ。何かあれば、何でも言ってくれ。」

… サラマンダー戦闘団の女性は、ターニャ大佐殿、アレクシア大佐殿、メアリー少尉、私とクリスタちゃんだけです。

クリスタちゃんとかメアリー少尉も、このテントで寝泊まりしているのですが……今は戦闘後の航空機の整備に行っています。

「ええと……やっぱり、アレクシアちゃんがないから、でしょうか……？」

「……何の話だ？」

「そ、その……今日の作戦のことで……。」

「……ああ、成程……『らしくない作戦』だったか？ 普段の私……私達ならば今日のような作戦行動はしない……私が苛々していて、少々冷静さを欠いていたようだ。損耗が無かったからいいものの……。」

……本当は、作戦のこともありますが……普段と違って、大佐殿が敵兵を屠る際に、ものすごく、恐ろしい笑顔を浮かべておられるのを見てしまって……。

……ターニヤちゃんもアレクシアちゃんも、お互いを必要と、求めているようでしたし……。

やはり、フラストレーションが溜まるのでしょうか……。

「……ヴィーシャ、少しだけ、いいか？」

「はい、何でしょう……。」

返事をした直後、わ、私の胸に顔を埋めるようにして……ターニヤちゃんが飛び込んできました。

え、ええと……か、かわいすぎませんか!?

「……すまない、少しだけ、こうさせてくれ……。」

「はっ……はいっ……。」

突然の事で、心臓が張り裂けそうな程に鼓動が……!

わ、私はこの幸せをどうしたらいいのでしょうか……!?

…結局、ターニャちゃんに抱き着かれてどのくらい時間が経ったのか…。

精神的、肉体的、両方の疲れが出てしまったのでしょうか、寝てしまわれました。

…寝顔だけ見れば、歳相応の可愛い少女ですが…。

「…んんっ…。ふああ…。ん…。？す、すまないヴィーシャ！」
疲れが少しは取れてくれていれば嬉しいですが…。起きてしまわれました。

「いえ、私なんかで大佐殿の疲れが和らぐのであれば…。」

「い、いや…。そういうことでは…。うむ、礼を言うぞヴィーシャ…。」

「はいー！」

— — — side ターニャ・フォン・デグレチャフ

疲れていたせいとか？何も考えずに、ヴィーシャに抱き着いて寝てしまったらしい…。

非常に、恥ずかしい。

それに、上官としての威厳が…はあ。

…ともかく、撤退作戦は完了したのだ、共和国戦のように…我々の後退した戦線に敵が到着するまでは、休憩だな。

もつとも、私達が殿を務めたこちら側の戦線は、このまま防衛戦に

なるのだが。

「… 敵をおびき寄せると同時に、我々も半包囲下になっている。殲滅されてしまうリスクは多少あるが… 連邦兵はあの貧弱な装備、低い士気だ。」

「おそらく、大丈夫だろう。」

「だが万が一、ということがある。念には念を、サラマンダー戦闘団の飛行隊から数機、毎日偵察に出すでしょう。」

「撤退作戦完了から数日が経った。」

「大量に撒いた地雷原、砲兵による制圧射撃、飛行隊による爆撃。これらの甲斐あってか、敵軍に出血を強要できているようだ。」

「だが… 偵察の情報によれば、地雷原の突破が予想以上に早い。どうなっている？」

「… 連邦軍め、旧式もいいところの装備のくせに、帝国最新式の地雷の突破が早すぎる。」

「砂漠の狐と呼ばれる程の、ロメール閣下でさえこの調子だ。「それにつきましては、小官の部下に原因究明をさせておりますが…。」」

「帝国の技術力が誇る、最新作の地雷が、こつとも簡単に突破されることは大問題だ。」

「早急に原因を突き止めなければなるまい。」

「… 敵兵を誘引し、友軍が背後へ突破浸透、殲滅…。」

「ロメール閣下、いかがされましたか？」

「いやなに、共和国戦で大戦果を挙げたと聞いているこの作戦だが……果たして、連邦相手にどれ程の効果があるものか、と思つてな。」

……共和国戦では、彼らの主力軍を包囲撃滅したことが大きかったが……。

連邦の兵達は、敵ながら悲惨、としか言いようのない程酷い有様だ。

正直に言えば、前線にいる敵兵が弱すぎて、後方に巨大な主力軍が控えているのではないかと疑う程だ。

……具体的には、ドニエプル河川あたりか？

「……小官も同意見であります。ですが……参謀本部の決定です、逆らう訳にはいきませんまい。」

「……そうだな。貴官と初めて共に行つた南方での掃討作戦のような、『予想外の出来事』が起こらなければいいがな？」

「……………」

……良い意味での予想外ならいいのだがな。

こんにちは、お久しぶりです、アレクシア・フォン・デグレチャフです。

毎日のようにリハビリに励んでいた成果か、未だ多少の痛みはありますが普通に生活を送ることができくらいに回復しました。

…ターニャから、最前線の状況が事細かく記された文書と、…その、私宛の個人的な手紙がほとんど毎日送られてきています。

どうやら今のところ帝国軍は、連邦軍に対して圧倒的に優勢らしいですが。

ターニャも感じているのでしょうか、いくら肅清直後の連邦とはいえ…これほどまでに弱いはずがない、と。

「…すべての作戦は殆ど帝国の思惑通り、ですか…。地雷原の突破が予想以上に早い…?」

地雷がいくつ埋まっているかもわからない場所に戦車をつっ込ませない程度には賢いはずですが…。

地雷撤去、となれば埋めた際の偽装を見破り、丁寧にひとつひとつ掘り返し、処理していく必要があるはずです。

空爆で吹き飛ばせないこともないでしょうが、制空権は完全に帝国の支配下でしょうし…。

…通常の、撤去作業ではないのでしょうか。

「…ここまで迅速に地雷原を突破する方法…そうせざるを得ない必要…?」

…合衆国の、援助?

ですが、合衆国は今、極東の皇国と戦争状態です。

このような状況下で、連邦が合衆国へ援助を求めるならば…連邦はさらに戦線を抱えることに…?

「どうして、帝国側の戦線に、主力軍がないのか…成程。」

このまま連邦が帝国と戦争しても、勝ち目は薄いでしょう。

ですが…合衆国と共同なら?

…だから、先に皇国を倒して、合衆国に恩を売る…?

「ですが… イデオロギー… 思想的に相容れぬはずです…。 帝国と合衆国の関係はそう悪くはないはずですが…。」

生き残るには… 連邦を倒し…。

ターニヤの、前世の故郷… 皇国を、倒すしかないでしょう…。

「…と、以上であります。」

私が辿り着いた考えを、参謀将校の皆さん、帝国官僚の皆さんにプレゼンテーションしました。

… うまく伝わっていれば、いいのですが。

「… 外交官が失敗すれば、連邦はともかく、合衆国とも皇国とも戦争になるが…。」

「何もしなければ、合衆国が連邦へ援助する可能性… か。」

… どちらにせよ、皇国を救うことはできません。

彼の国の、兵士の持つ精神力は列強各国に比べてずば抜けているでしょう。

海軍も、連合王国のロイヤルネイビーに引けを取らない程だと聞きます。

ですが… 圧倒的に、資源が足りないのです。

「… 発言、よろしいでしょうか。」

皆さんが決めかねているようですから… ダメ押しですかね。

「言ってみたまえ。」

「はっ。合衆国さえ説き伏せれば… 東方戦線の情報では、連邦は今、本軍をどこか別のところに置いている、との現地司令官の予想であり

ます。おそらくは… 皇国戦を予想し、後方に隠しているのでしょう。そうでなくば… 無謀な地雷原突破など、しないでありますう。」

… 戦車で地雷をすべて爆破させている、とも考えましたが、主力武装に当たる戦車をそんなことには使わないでしょう。

であれば… 共産主義者の考えそうな策…。

「… 連邦は、我々に無謀な攻勢を二日前よりし続けていると聞きました。これは… 連邦主力軍が皇国を倒すまでの時間稼ぎ、でありましょうか… 現在皇国は、合衆国相手に海戦において圧倒的勝利を収めております、皇国が連邦と開戦しても防衛だけなら問題は無いでしょう。」

「… だが彼らが合衆国に勝利できるかは分からない、いずれ敗北するかもしれない… ということか？」

「はい、ゼートウアー閣下。ですから… 皇国は切り捨てるしかありません。合衆国と連邦を、同時に敵に回して勝利できるとは…。」

… 将校として、敗北を匂わすことを言うのは立場が危うくなりかねませんが…。

想定されることは全て言わなければ、誰かが歯止めにならなくてはいけませんから。

それは… 歴史が証明していますから。

「祖国のため… 致し方あるまい。」

「貴官の話、検討しよう。」

「は、ありがとうございます… では、小官は失礼致します。」

改めて、帝国の参謀が、冷静に物事を判断できる集団で良かった… と、本当に思います。

ともかく、動けるようになったとはいえ、まだまだこれから身体を治さなければなりません。

「はあ……。」

悩んでも仕方ないです、そんなことは、わかっているのですが。どうにも……ターニャについていけなかった自分が……恨めしいのです。

……連邦がどのようにして、地雷原の突破をあんなにも早くできるのか、でも考えましようか……。

———— side ハンス・フォン・ゼートウーア

……重苦しい空気だ。

普段にも増して、珍しく誰も言葉を発しないとは。

「……アレクシア大佐の発言内容は、我々では想定していなかったことだ。だが……十分に納得できるだけの話だった。」

彼女は、いや。彼女達は我々が考えているよりも遙か先を見越している。

「世界大戦……か。ゼートウーア殿、貴方の持ってきた論文を読んだときは……こんな恐ろしいことが起きる筈がないと思っていた。あれを書いたのは……。」

「外交官殿、貴方の思っている通り、アレクシア大佐が書いたものだ。」
「はは……。ならば先程の話も、我々がこのまま何もしなければ起こりうる……のだろうな。」

だが、彼女が話をしてくれなければ、誰もそんな未来を想定できなかったかもしれないのは確かだ。

そのまま敗戦……帝国は、守るべき祖国は無くなってしまったかもしれない。

しかし、実際は彼女達……『白銀』『白百合』の活躍によって、周辺諸国との戦争に勝利し、戦後の関係も良好である。

さらに、それぞれの戦争が早期決着したこともあり、余裕をもって連邦と渡り合うことができている。

……もし準備不足のまま、連邦と開戦していれば……いや、今はやめておこう。

「……『銀翼突撃章』保持者とはいえ、ただの一将校が……自分の立場が危うくなるかもしれないことを承知で、我々に忠告してくれたのだ。ならば我々は、彼女の意思を汲むべきであろう？」

……ふ、ルーデルドルフめ。

貴様が、協商連合国戦以来……彼女達を孫のように可愛がっていることはお見通しだぞ？

「我々は軍人だ、戦うことならば任せてくれ。だが……外交や世界情勢については……貴方方、官僚の力がなくてはならない。普段ならば経費がどうだのと、文句を言い合っている我々だが……。」

「……そうだな。喧嘩は戦争が終わってからにしよう、その時は貴様ら軍人にも、馬車馬の如く働いてもらおうからな……我々も最善を尽くそう……だが、もしものときは。」

犬猿の仲の、軍と政治家達が、今だけであるとしても……協力できるとはな。

こんにちは、アレクシア・フォン・デグレチャフであります。

… ターニヤが調べていた、異様な速さの連邦軍による地雷原突破について、ターニヤから報告がありました…。

どうも、兵士を地雷原へ突撃させ、地雷を踏ませている… らしいです。

おそらくは、肅清によって極東送りにされた者が大半でしょうが… 悍ましいです。

あ、それと私も漸く完治… ではないですが、戦闘をしても大丈夫なくらいには回復しました。

ですから… 前線へ、行かなくては。

「… なんだか、これから嫌なことが起こりそうな気がします…。」

… 朝に帝都を発ち、東方方面軍司令部に着いたのが夕方。

そこからさらに東へ…。

最前線… から少し後方、前線司令部に着いた時にはもう日はとつくに沈んでいました。

「… おお、ターニヤ大佐殿… ではないな。アレクシア大佐殿か、すまない。」

「お久しぶりです、ロメール閣下。よく間違われますから、大丈夫ですよ。」

南方での掃討作戦以来、ですネ。

… 何やらやつれているようにも見えますが。

「本当はコーヒーでも出して歓迎したいところだが… 多忙なものでな。」

「いえいえ…。それは、帝都に戻った時にでも。」

「ははは、そうするとしよう。貴官の隊のテントは…。」

ロメール閣下にテントの場所を教えてもらい、向かいます。

… ターニヤに会うのが、すごく、すごく… 待ち遠しかったです。

— — — side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

「… ターニヤ!」

… 私が求めてやまない、聞き覚えのある声に呼ばれた気がした。

「… アレクシア…。なのか?」

そして、唐突に、抱擁される。

感触、声、匂い。その全てが… 紛れもなく、私の妹のものだ。

「… ずっと、会いたかったです…。」

「私もだよ…。」

どれだけの時間、抱き合っていただろうか。

「…アレクシアが来てくれて、心強い限りだ。」

「…何か、悩みでもあるのですか？」

やはり、気づかれてしまうか…。

「撤退作戦が成功し、今は包囲の気を伺っている…のは知っているだろう？」

「はい。共和国戦と同様に、ですよね？」

「そうだ。そこまでは良かったんだが…半包囲下に置かれている南部戦線だが…コミー共め、大量突撃を繰り返してきてな…装備も練度もたいしたことがない、ダキア軍に毛が生えた程度なのだが…数が数だ、こちらがもたない。」

…
撤退戦完了後、しばらくしてから延々と突撃を繰り返していた連邦共だったのだが、航空優勢を取り続けていたこともあり、しばらくは大丈夫だったのだが…。

「お前も知っての通り、現在私達がいるこの場所は、もともとは連邦領だ。連邦と、帝国の鉄道の規格が違うのも知っているな？」

「…ああ、成程です。確か…このあたりで大きな都市は…ヨセフグラードでしたね。そこまで帝国軍が確保していたはずですよ…？」

当初、攻勢によってヨセフグラードに隣接するドニエプル川に沿って、河川以西は我々が押さえ替えていた。

だが、どうにも渡河できず、しかたなく共和国戦と同様の作戦を敢行。

それ自体は、あと包囲するだけのところまでできている。

「だが先も言った通り、奴らは無停止攻撃を繰り返してきている。私達もしばらくはどうかになっていたが…補給がな。」

「それで…ヨセフグラードはどうなつたのですか。」

「…つい昨日の話だ。ヨセフグラードは…東方方面軍歩兵連隊、魔導大隊、機甲大隊が取り残され、包囲されてしまった…。」

「…ですから、ロメール閣下はあんなに…。」

―― side アレクシア・フォン・デグレチャフ

「市街戦…ですか。アレーヌ市の時とは違い、今回はかなり大規模ですね…。」

「アレクシア。怪我が治って早々で悪いが…明日、救出作戦を行う…。」

… その後も状況を確認しましたが、連邦の歩兵、軽戦車によって包囲されているとのこと。

火砲の改良をしていなかったのか、そちらはまだ到着していないらしいです。

ですが、到着してしまえばこちらが一気に不利になってしまうことは明白です。

「ですが… 救出できたとして、補給が…。」

「そう、それが根本的な問題だ。いくら鉄道がある、とは…。」

「… ターニャ?」

地図にあるヨセフグラードを指し示し、思案し始めてしまいました。

… 真剣な表情のターニャ… 美しいです。

「鉄道… 規格… ダキア…?」

「それだ、アレクシア!」

ひゃっ!?

きゅ、急に大きな声で言いながら、私を抱きしめて…。

「ど、どういうことですか?」

「連邦の鉄道と帝国の鉄道の違い… レールの幅が、帝国とは異なるらしい。だが、かつて私達が倒したダキアは連邦… いや、かつての

ルーシー帝国だった頃に作られた鉄道が、今も機能している。そこま
で帝国の鉄道を引けば……。」

……ダキアを経由して、ヨセフグラードから補給の確保……が可能
になりますね。

そしてさらに突き進むと同時に、帝国からヨセフグラードまで鉄道を
を引く……。

「……では、ヨセフグラードを取り返すことが重要ですね。」

「ああ…… 幸い、暗号通信が生きている、市内の友軍と連携が可能
だ。」

「もしかしたら…… この戦争の勝敗を、分けるかもしれませんね……。」
…… ここでヨセフグラードを奪還し、補給を確立できれば。

「…さて、皆も知つての通り…ヨセフグラードにて包囲されてしまった我々の朋友を救い出す日だ。敵は我々ほど強い訳ではない…が、その圧倒的な数は侮ることはできない…諸君。我らが祖国に、勝利を、土産としようではないか！」

統一歴1926年2月2日。

奇しくも、西暦世界のスターリンググラード攻防戦と、同じ日に、状況は違えどヨセフグラード攻略なんて。

…先日此処に来たばかりで突然ですが、先程ロメール閣下が演説されたように、ヨセフグラードに包囲された友軍を救い、占領を目的とした作戦決行の日です。

…もしも成功しなければ、私達は、
いえ、やめておきましょうか。

「ロメール閣下、私達に話したい事とは、なんでありましょうか？」

方面軍全体への激励の後、ロメール閣下に個人的に話があると、私とターニヤが呼び出されましたが。

「ああ、明朝に参謀本部よりの通達があつてな。」
…。

「…それは、良いニュースで？」

協商連合国戦線が突破された、合衆国が参戦した、などのニュース

じやなければいいのですが。

「なに、今回は良いニュースだ。…まず、極東の皇国と、合衆国についてはどうにかなりそうだということだ。」

「…それは非常に喜ばしいことですね。特に、合衆国については…。」

参戦は無い、と考えていいのでしょうか。

連邦以外の各国と早期決着できたことが、良かったのでしょうか？

「次に、今日の作戦に合わせて、協商連合国戦線では陽動として攻勢し、あわよくばかつてのサンクトペテルブルクまで占領するつもりらしい。この作戦は、未明より既に始まっているらしいがな。」

「成程、陽動作戦… 協商連合国戦線ならば、浸透突破できずとも、大きな被害を受けることはなさそうですね。」

今では友好国となった、協商連合国。

戦後復興の際に、帝国から協商連合国首都まで鉄道を引き、復興に役立てた、と聞いた覚えがあります。

現在ではそれが、補給を担っているのでしょうか。

「さらに、南東の帝国——オスマーン帝国——が、我々と同盟を締結したらしい。彼らは既に、衰退したかつての大国だが… コーカサス地方を含む、ダキア以外の黒海沿岸諸地域の割譲で再興を目指すらしい。」

「あの帝国が、でありますか？それは非常に良いニュースでありますか…。」

「…では、コーカサス地方からも、援軍が来る、ということでしょうか。」

「察しがいいな、その通りだ。連邦は、同時に3方向から攻撃されることになる。いかに兵士の数が莫大とはいえ、これには耐えられまい。」

コーカサス地方は、山岳が多く、守る側に非常に有利な地形です。

ですが、航空機はともかく、魔導師に力を入れていなかった連邦では、衰退したオスマーン帝国軍でもかなり優勢に戦えるのではないのでしょうか。

しかし、帝国からは特にアプローチしてはいないはずのオスマーン帝国が、何故？

「…アレクシア殿の疑問は、我々も、参謀本部も抱いたらしい。」
顔に出てしまいましたか。将校として、まだまだですね。

「どうやら彼の帝国は、我々と戦つても勝ち目がないことは理解しているようだ。その上で、かつての栄華を取り戻す為…なのかは知らんが、得をする側につくことにしたらしい。」

「成程。彼らの首都は、国境からすぐですから、裏切ることもなさそうでありますね。」

… 協商連合国戦線、帝国東方戦線、そしてコーカサス戦線の三正面ですか。

いかに連邦といえど、これなら戦争も終わりそうでしょうか。

そういえば、連邦軍には督戦隊が組織されていて、前線に立つ兵士たちの士気はかなり低い、筈。

「… ロメール閣下、作戦開始直前で申し訳ないですが… 一度、連邦最前線に立つ兵士たちに、投降すれば助けてやる、等と勧告するのはどうでしょうか？」

「… 成程。ロメール閣下、捕虜の話では… 後方に、督戦隊が組織されているらしいであります。故に、投降勧告をすれば… 敵軍は迷い、投降すれば僥倖、あわよくば同士討ちを始めるであります。」

… ターニャは私の考える事をすべて理解してくれます。

やっぱり、ターニャと一緒に何かを成すというのは、私にとってとても、幸せなことです。

「帝国参謀本部を唸らせる二人が言うのだ、間違いないのだろう。やって損は無いだろうしな。」

「有難うございます。」

… 前線指揮官の中で、ロメール閣下が一番仕事しやすいです。
「だが実際に投降してきたとして、連邦の督戦隊に撃たれるのだろうか…。」

「それは、私達魔導師が守ります…。督戦隊を潰すことができれば…。」

最前線の多くの連邦兵士が、投降するのでしょうか。

一部の民衆の意思で共産革命をし、一部の人間の意思で戦争を起したとはいえ。

誰だって、死にたくはないでしょうから。

——ヨセフグラード侵攻作戦が開始。

予定通り、降伏勧告、投降勧告をしたところですが。

「…これは、予想以上だったな…。」

勧告からしばらくは、迷っているのか、様子見をしていたのですが、最前線の塹壕に籠っていたのであろう、連邦兵士達が次々に投降してきました。

投降してきた彼らを撃つ意味もなく、受け入れていますが。

「助かった！本当は皆、戦いたくなんてないんだ…。」

「祖国を守りたい気持ちはあるが、あんな身勝手な政府のためになど、死ねん！」

「俺は…これ以上、後ろから味方を撃つなんて仕事、耐えられなかった。」

どうやら急造で組織された督戦隊の人間でさえ、裏切ってきたらしいです。

…これによって、ヨセフグラードに配備されていた連邦兵の半数以上が投降。

残りの連邦軍も、最初こそ抗戦していましたが、南方限定ですがドニエプル川を越え、ヨセフグラードを包囲した数時間後に降伏しました。

結局、この作戦での帝国軍の損害は軽微で済みました。

あ、ちなみに勧告については、ターニャにやらせようとしたのですが……。

ものすごく怖い顔で嫌だったので、私が代わりに行いました……。

——ヨセフグライド攻略から一週間が経過しました。

現代戦にも関わらず、今次大戦に於いて最も死傷者が少なかったのではないのでしょうか？

あれから何度かヨセフグライド周辺で小規模な戦闘があったものの、問題なく防衛に成功、列車での補給路を確保しました。

工兵達の働きは素晴らしいですね、敵に破壊されていた線路もすぐに直し、我々の拠点となりそうな建物も修理してしまつたのですから。

戦局は我々が圧倒的優勢。

極東では、意外な事に皇国が太平洋に於いて全面的に勝利したと聞いています。

合衆国とはお互い中立、となつたはずですが、どうも合衆国は帝国を信用していないようで、海軍の一部を東海岸に残しているらしいです。

まあ、合衆国の自業自得、ですね。

「ターニヤ、今日は私が担当のはずですよ？どうして執務室にいるのですか」

ヨセフグライド攻略後、この街を私達の拠点とすべく直したのですが、その際に帝都と迅速な連絡を行いつつ、前線指揮もしなくてはならないので軍施設を建てて頂いたのです。

此方が現状では有利に進めているので、ロメール閣下から休暇を言い渡されたのですが。

何も仕事が無い訳では無いので、私とターニヤが交代で仕事を行う、ということにしたはずなのですが。

「ああ、参謀本部から連絡があつてだな……。アレクシア、良いニュースだ」

「はあ、何ですか？」

「極東の皇国が、合衆国相手に連戦連勝、極めつけはパールハーバーを彼らが占領したらしい。合衆国が私達を信用していなかったのが……

ククク」

悪い笑みを浮かべるターニヤも、良いですね…。

んん、失礼しました。

皇国が、パールハーバーを占領したというなら、合衆国の西海岸の海軍はほぼ全滅したのでしよう。

どうやら、私達が欧州で圧倒的優勢に事を進めているせいなのでしょうが、運命が変わっているのでしょうか。

「しかし、そのニュースは私達にはあまり関係がないのでは？」

「まだ続きがある。皇国は昔から、大陸の利権を巡って列強諸国に干渉されていただろう？特に、アジアに於いては連邦と、だろうな。しかし現状はどうだ、欧州は帝国によって平定された。合衆国には連戦連勝、太平洋の安全を確保したと言ってもいい。そして、長年皇国を悩ませてきた連邦も、帝国によって敗走している」

帝国の平和の為戦ってきましたが、まさか、遠い、皇国にとっても大きなチャンスを与えていたのでですね。

「皇国が侵略、もとい解放したアジア諸国は、何処の国も皇国の味方をしている。戦後政策が上手くいっているのだろうな。そのような状況になり、彼らはアジア最大の宿敵とも言うべきか、連邦へ宣戦布告した」

最後の言葉だけ聞けば、気が狂ったのかと思ってしまうが、この状況を顧みるにそうなるでしょうね。

東西から挟み撃ち、ですか。

「…ターニヤ。漸く、私達の戦争が、終わるのでしようか」

「ああ… だといいな。だが、連邦が未だ降伏していない以上、今まで通り戦うだけだ」

油断大敵、勝利の目前こそが最大の隙となりやすいのですから。

…ターニヤとボードゲームをしたり、大隊の皆さんとカードをしたり。

私が勝ちを確信して油断したところを、いつも皆に足元を掬われて負けていますから…。

「はあ、どうせ私は、戦争は得意でもゲームは苦手ですよ。」
「どうして拗ねるんだ…？」

「ああ、まさか帝都以外で、いつものコーヒーモドキじゃない、コーヒーを飲めるとはな…。」

「ターニヤ、おかわりはまだありますからね」

ダキアを経由した、帝都との補給線が繋がったことで、様々な物資が送られてきてこの街も潤ってきました。

もちろん、通常よりは割高になってしまいましたが、頼めばコーヒーなどの嗜好品も送ってもらうことができます。兵士の士気のためにも、嗜好品も必要ですからね。

「そういえば、投降して捕虜になった連邦兵の方々ですが、一時的にですがこの街に住むそうですよ」

「そもそもこの戦争は、連邦の首脳…コミー共が勝手に帝国に怯えて引き起こした戦争だからな、彼らとて折角拾った命を、帝国に反逆して捨てたくはないだろう？それに連邦は敗走している、このままおとなしく私達とは友好的な関係を築いていけるだろう」

「そうですね、この街もこのまま発展していけば、彼らにも利益となるはずですよ」

捕虜だった彼らも、この街で働いてくれるなら私達にとっても、嬉しいことです。

なにせ、帝国兵だけで此処を拠点とするのは、非常に大変ですから。「そうそう、此の軍事基地の近くに、近々喫茶店がオープンするらしいですよ？」

「それは素晴らしい、是非とも飲みに行かなくてはな。まあ、アレクシ

アが淹れてくれるコーヒーに及ぶ訳もないだろうが」

「ターニヤ、私を褒めても何も出ませんよー」

ふ、不意打ちでそういう嬉しい事を言ってくるターニヤは本当に……ずるいです。

———— side 帝国捕虜：連邦兵

帝国側が投降しろと勧告してきたのだが、投降すれば督戦隊に撃ち殺される。

そう思い、誰もが沈黙した瞬間、督戦隊の奴が、

「……クソ、なぜ政府の我儘に俺たちが付き合わねばならん！味方を撃ち殺すのもウンザリだ！俺は投降するぞ！撃ちたければ撃ち殺せ！どうせ、帝国に抵抗したところで死ぬだけだ！」

と言い出したのがきっかけだったな。

その発言の直後、同じく督戦隊から我も我もと銃を捨て、呆然としていた俺たちも同じく投降した。

最初の奴の発言は、皆が思っていた事だ。

どうせ、帝国と戦おうが逃げようが、結局は死ぬのだ。

抗ったところで、自分が生き残る可能性が少しはあるかもしれないが、ここで生き延びたところで次の戦場に行かされるだけだ。

捕虜になってしまえば、命は助かるかもしれないが過酷な労働や酷

い生活を覚悟していたのだがな。

「…店主、此処のコーヒー豆は何処の物だ？帝都では味わえない、独特だが良いコーヒーだ」

「本当ですね、とても美味しいです。このコーヒーですと、ブツターブロートに合いそうです」

…なぜ俺は、帝国軍に占領された街で、軍服を着た少女にコーヒーを出しているのだろうか。

しかもこの少女、見た目にそぐわない迫力というか、何か恐ろしいものを感じる。

さてよ、この二人が胸元に付けている勲章は、確か…。

連邦でも噂程度にはなっていたが、まさか本当だったとはな、『ラインの悪魔』が。

もしあのまま戦闘になっていれば、俺は今頃…。

「いえ、コーヒー豆は帝国の物ですよ。ただ、淹れる方法が通常とは少し違っております…」

本当に、投降してよかったな…。

モスコー目前まで帝国軍到達。

しかし、首都目前ということもあってか、敵は今まで以上に激しい抵抗をしており、攻略は難航中。

モスコー目前50kmより戦線が動いていないらしいです。

…情報によれば、合衆国産の戦闘機が空を飛んでいるとか。

おそらく合衆国からのレンドリース品でしょうが、迷惑ですね。

「それで、戦闘団の突破力を以てして戦線を押し上げたいと」

戦線が膠着し始めてから20日程、しびれを切らした参謀本部：

もとい、ロメール將軍に司令部へと呼び出されています。

「流石は『白銀』、理解が早くて助かる」

おそらくは、私達が赴けばどうとでもなるでしょう。

「仕方あるまい。アレクシア、異論はあるか？」

「いいえ、ありません」

私がターニヤに異論なんて、ありえませんよ。

「では明後日よりモスコー攻略作戦、頼んだぞ」

「拝命致しました」

「戦闘団諸君、喜べ！我々は再び戦場へ… 最前線へと赴く事になった。作戦概要を説明しよう」

まず、守りを固めているモスコーに対して、愚直に正面から突撃し、帝国軍人を捨て駒にし続けければ攻略はできるでしょう。

当然それは、損害が大きすぎるため却下です。

ではどうするべきなのでしょう？

今までのようにモスコ―後方へ浸透し包囲、殲滅ができればいいのですが…。

「簡潔に言おう、我々は空からの、空挺降下による奇襲によってモスコ―に立て籠もる敵軍司令部を叩く」

モスコ―はルーシー帝国時代以前から、東欧の大都市であり続けた歴史ある都市です。

そんなところを、再建不可能になるまで破壊しつくせば、たとえ帝国の勝利で終わったとしても、後世に遺恨を残すことになりません。

そこで、敵の司令部を潰し、降伏勧告をすれば一定の効果がある…と思われず。

雑兵は所詮、政府によって戦わされているに過ぎないのですから。「我々の奇襲、敵軍に混乱が生じたと見なされ次第、ロメール將軍率いる東方方面軍歩兵連隊、機甲師団がモスコ―市街へ突入する手筈になっている。我々に、この戦争が終わるかどうかが懸かっている」

ヨセフグラード市街戦の勝利後、モスコ―直前まで進軍した帝国軍。

太平洋では連戦連勝、連邦に宣戦布告後、すみやかに連邦東部の各重要都市の占領を成した皇国軍。

混乱に乗じてかつての栄華を取り戻さんと、コーカサス地方を狙うオスマーン軍。

対して、帝国に不信感を抱き大西洋に海軍を割り当てていたせいで太平洋で大敗を喫した合衆国。

無闇な大粛清、無謀な帝国への宣戦布告、敗走を繰り返す連邦。

「…勝利は目前、ですか」

「そうだな。想像以上に良い状況で、な」

「漸く、漸く平和が、私とターニヤの、…うう」

…とても長かった、ように、感じられます。

「…私のせいで、お前まで…アレクシアまで、こんな危険な場所に連れてきてしまつて、すまなかつた。」

優しい抱擁。ターニヤの、柔らかな感触…濃い血と硝煙の香り。

「ふふつ、それこそ今更、ですよ？だって…私達は唯一の家族、ですから」

— — — side ターニヤ・フォン・デグレチャフ

ああ、私の妹は本当に、可愛くて、優しく、素直で。

…こんな私には勿体ない。

将来を見据えての事だったのは確かだが、私の我儘で、妹を連れて軍人に。

後方勤務の筈が、有能な妹と、それに見合うだけの大隊を準備され、気づけばいつも最前線。

いつの間にか大佐にまで昇進したはいいものの、大隊から戦闘団へランクアップ、結局最前線だ。

私は妹に、アレクシアに、姉としてちゃんと出来ているのだろうか？

何時も私の傍で支え続けてくれた妹に。

前世では何もかも、合理的に取捨選択してきた筈なのだがな。

何故、この腐った世界で得た、妹に対してだけは、感情的になってしまうのだろうか？